

古事記と言霊

言霊原理より見た日本と世界の歴史とその将来

島田 正路

言霊の会

はしがき

「古事記と言靈ことたま」という題でお話をします。古事記は奈良時代に書かれた日本で最も古い書物の一つであります。また言靈と言いますのは、先に刊行された「コトタマ学入門」五で説明しましたように、これも日本の大昔の言葉である大和言葉やまとの語源となったアイウエオ五十音に關します人間の心と言葉の法則であります。

この古い古事記と言靈の双方がどんな關係にあるのか、「コトタマ学入門」の中では取り分けて詳しい説明はしませんでした。余りに話が難しく専門的になるのを避けたためであります。とは言いましても日本人と日本語の原点であり、そして長い年月日本人の意識から忘れ去られていた言靈の学問がどうして現代に甦よみがえって來ることが出来たか、古事記を抜きにしては考えられない問題なのです。実に古事記なくして言靈学はなく、言靈の原理なくして、古事記を語ることは出来ません。この切つても切れない、古事記と言靈との關係についてお話するのがこの

書物の目的であります。

古事記、特にその中の神代の巻と言霊との關係を調べて行きますと、現在の心理学や言語学等の学問ではまだ解明することが出来ないでいる人間の心の全構造とか、私達日本人が日常使っている日本語の起源、その他古代から現代に至る日本や人類の文明の歴史の筋道等々が手に取るように鮮明に分つて來ます。

以上お話ししました問題については、著者の言霊学の師でありました小笠原孝次氏が、この道の諸先輩の研究を受け継ぎ、御自身の一生をかけた思索と研究の成果を發表された「古事記解義言霊百神」という名著（一九六九年東洋出版社刊）があります。氏はその著述の中で、豊富な宗教的・哲学的知識を駆使して古事記神代の巻の神話と言霊との關係の謎を正確に解き明かしたのです。歴史の上で約二千年の間、人間の潜在意識の底に眠っていた言霊の原理が現代に不死鳥の如く甦りました。

「古事記解義言霊百神」が刊行されてから二十数年の歳月が過ぎました。この間、著書の内容を心の中に噛みしめ、その宗教的・哲学的な言葉や咀嚼し、消化して、人間の心と言葉というものに関心を持つ方ならば誰にでも理解出来るよう解説を試みたのが本書であります。

古事記と言霊との關係物語をするに當つて、本書では先ず、古事記という書物の内容についてあらましの解説をし、次に言霊とは何か、を簡単に説明して読者の御理解を頂き、その上で

両者の關係を詳細にお話することとしました。この物語の中で読者が、人間の心とはどんな構造を持つているのか、心の構造の法則を基礎として私達の日本語がどのようなようにして作られたのか等々、また更に日本人や世界の悠久の歴史の心躍るような壮大なロマンを感じ取って頂く事が出来れば著者の希望は達せられたと言うべきでありましょう。

当初の御挨拶はこの位にして古事記と言霊の話を始めることにしませう。

一九九三年春 東京田園調布の小舎にて 著者識

(付言)

本書の文章には成るべく私達がしゃべり考える時のような日常語を使うことを心掛けました。しかし話が人間の心の奥の奥の部分や、日常では全然触れることのない、事柄等に関係して来ますと、それでは説明が不正確になったり、誤解を招き易い事にもなり兼ねません。そうなることを避けるために、詳しい説明を必要とする処ではその章の終りに【注一】【注二】という形で専門用語による説明を付け加える事としました。本文と併せてお読み頂きますと御理解は更に深まる事と思えます。

【注一】「コトタマの話」一九九三年一月創栄出版社刊は絶版↓「コトタマ学入門」

古事記とは

古事記、日本古代の言葉で「ふることぶみ」と読みます。奈良朝初代の天皇であった元明天皇の時（七一二年）、天皇の命令により撰上された日本古代の歴史書であります。その序文には稗田阿礼ひえだのあれという人が暗誦していた天皇・国家に関する歴史を太安万侶おのおのやしまろが選録した、と書かれています。

古事記の原文は全て漢字で書かれました。と言つても漢文で書かれたものではありません。日本語の文章に、その一語一語の音に当る漢字やその意味を表わす漢字を当てて書き綴つた、というわけです。私達は現在読めない漢字に振り仮名（ルビ）を付けますが、それとは逆に日本語に漢字のルビを使って文章にした、ということなのです。その読みづらい漢字の文章は後世（一七七八年）本居宣長もとぢのりながによつて「古事記伝」として普通の日本文訳の本となり、誰でも読めるようになりました。

古事記は上中下の三巻から成っています。上巻は天あめの御中主みなかぬしの神より鵜草葺不合うがやみきあはずの尊みことまでの神代の物語です。中巻は神倭伊波礼毘古かむやまといわれひこの天皇すめらみこと（神武天皇）より十五代応神天皇までの歴史、次に下巻には仁徳天皇より三十三代推古天皇までの歴史的記録が記されています。

この古事記という歴史書の特徴としては、先ず第一にその歴史が中巻以下天皇の年代別に区切つて書かれていることが挙げられます。後世古事記が天皇制中心の歴史書だ、といわれる所以ゆゑんであります。第二にその天皇制中心の歴史に先立つて、上巻に神代の神話が述べられていることです。これが最も大きな特徴と言えるでしょう。

古事記の上巻の最初の文章は次のように始まります。

天地あめつちの初発はじめの時、高天たかまの原はらに成なりませる神の名みなは、天あめの御中主みなかぬしの神。次に高御産巢日たかみむすびの神。次に神産巢日かみむすびの神。……

そして以上の文章の後に次から次にと数十、数百という神様の名前が出て来るのです。それから神様の名前には日頃聞いたことのあるものや全く聞いたことのない名前が記されていて、その神の名前を読むだけでは中巻以後の現実の歴史とどのように関わつて来るのか見当もつかなくなります。日本の神道は多神教だといわれるのはこの事からでありましよう。

この最大の特徴であります現実の歴史の前置きとして神々の物語を記しました太安万侶の意図は何だつたのでしょうか。当時の天皇の命令による国家的事業として編纂された歴史書なのですから、最初の上巻に単なる神代の空想物語やおとぎ話を載せるはずはありません。撰者太安万侶は重要な意味をこめて古事記の上巻の神話を書いたに違いないのです。としたらその意図は何か、神話は現実の歴史とどんな関係を持つているのでしょうか。

それら大勢の神々と現実の歴史とは實際にどんな関係にあるのか、の検討に當つて代表的な二つの考え方を先ず挙げて見ることにします。その一つは先の大戦の時まで、日本の思想界の大勢を占めていた日本神道に基づく天皇制の神秘的国体思想であり、他の一つは大戦後の天皇制否定の上に成り立っている実証主義的歴史研究の態度だ、ということが出来ましょう。

以上の古事記の神話に対する二つの考え方を検討することによつて古事記の撰者であつた太安万侶の真意に迫ることにします。先ずは神道思想を基とした神秘的国体論から始めます。

先の戦争が敗戦で終るまで、日本の歴史の中心のテーマは何と言つても「天皇とは」の問題に尽きると言うことが出来ます。そして天皇とは、日本国とは何か、の意義を決定づけるものとして古事記の神話が挙げられたのです。神話という私達の現実の生活とは直接には結び付くことのない超越的な事柄を裏付けとした天皇存在であり、国体論でありますから、その主張は厳密な証明の不可能な神秘思想ということが出来ます。それはただ、そう信じることによつてのみ成立する考え方であります。

極めて手短かに要約してその主張を説明することにしましょう。

前に書きましたように、古事記の神話は最初の天の御中主の神から次々と神様の名前が出て来るのですが、十六・十七番目に現われる伊耶那岐の命、伊耶那美の命という二柱の神が大勢の御子神を生みます。そして最後に神様の世界（高天原）で最も徳の高い、私達の太陽系

宇宙の太陽にたとえられる天照大神あまてらすおおかみという神様が誕生します。

ある時、この神様は孫の邇々芸にぎぎの尊みことに次のように命令しました。「この豊葦原よあしはらの水穗みずほの国(日本国)は、汝いましの知らさむ国なりとことよさしたまふ。かれ命のまにまに天降りますべし。」この日本国は汝が治めるべき国であるから命令に従って日本の国へ降って行って治めなさい、という訳です。また天照大神は自分の表徴であります八咫やたの鏡かがみに八尺やさかの曲玉まがたまと草薙くさなぎの劍つるぎの二つを添えて(三種の神器)邇々芸の命に与え、こうも命じました。「この鏡は、もはら我が御魂みたまとして、吾が御前いづかみを拜いくがごと齋いきまつれ。」この八咫の鏡を私だと思ってお祭りし、政まつりごとをやりなさい、という意味であります。こうして邇々芸の命は紫むらさの日向ひむかの高千穂たかちほの奇振峰くしふるのねにお降りになった、というのです。

以上が古事記の神代の巻の中の天孫降臨という神話の一節です。先の戦争の時までの神道思想による天皇の地位はこの神話によって裏付けられておりました。天照大神の御魂みたまである八咫の鏡を邇々芸の命以来代々受け継ぎ、その徳の光によって天皇は日本民族を統治する人なのである、という考え方です。八咫の鏡(三種の神器)は日本国天皇の皇位のしるしであり、その徳の恵みによって日本天皇の皇統と日本民族は永遠に栄えるのだ、という天皇観、歴史観でありました。これが神道思想による日本の歴史観であります。

日本という国家の中での天皇の地位が、人間の信仰の対象であります超越的な神の世界の物

語に基礎を置いておりましたので、その天皇の地位と日本国の国柄くにがらは学問的に真偽を実証する、という範圍を超えています。それはただ信じるより他に方法がない世界のことには属していません。その上この考え方が国家の法律（憲法）で定められずと、天皇の尊厳や、それを中心とした国家の歴史等はただ信じることだけが許されて疑うことが出来ない絶対的な權威を持つこととなります。これは神秘的な歴史觀の当然の結論と言う事が出来ましよう。

このようにして先の戦争が終るまでの歴史觀では、古事記神代の巻の神話はその超現実的な神様の物語そのまま日本天皇の權威の基礎として考えられて来たのでした。

次に戦争後の日本の歴史觀について考えてみましょう。

神道信仰による神懸りの天皇觀・国家觀で戦争し、そして完敗しました。外国の攻撃による国家の危機が迫った時には、神風が吹いて国難を切り抜けることが出来ると信仰上信じて来たその神風も吹くことなく、日本中が焦土と化しました。神秘的な天皇觀・国家觀は衰退しました。その上昭和天皇の人間天皇宣言、日本の天皇と古事記の神話とは無関係である、との宣言が出されて、日本人の歴史觀は全く百八十度の転換をすることとなりました。

古事記上巻を土台とした神道信仰による神懸りの歴史觀に代って科学的・実証的な歴史觀が登場しました。「神様が天皇の權威を定めた」などということは、科学的・実証的な歴史研究からは承認出来るものではありません。古事記の神話はどんな意味においても日本の歴史とは

無関係であり、古代のおとぎ話か民話程の意味のものと見なされることとなりました。遺跡の発掘や外国の文献等によつてその存在を確認されていない事物は従来の日本の歴史の中から全部否定されました。

天皇制中心の歴史は民衆の生活中心の歴史に書換えられました。民主主義国家の歴史の主人公は天皇皇室ではなく、民衆である、ということがその理由です。天皇は従来の日本国の神聖なる統治者の地位から「日本国民統合のシンボル」という民主主義政治体制の中の一地位、一種の役職の立場に変わったのでした。神話に基づいて定められて来た宮中の数々の伝統行事は、単なる天皇個人御一家の慣習行事として遺され、国民との関係は一切否定されました。

かくて現実の歴史の前置きとして書かれた古事記上巻の神話は、戦後の歴史観からは百パーセントその意義を無視される結果となつたのです。

以上太安万侶が古事記を書くに当つて、その上巻に膨大な神様の物語を書いた意義について、戦前の神道の神秘思想と戦後の科学的事実主義の歴史の二つの見方を検討して来ました。

さて、ではどちらの見解が正しいのでしょうか。勿論現代の歴史学者の大部分は後者の実証的歴史学の見解を支持するでしょう。しかし日本国民の心の奥底に前者の神秘的歴史観が消えてしまつた訳でもないようです。その証拠には天照大神をお祭りしてある伊勢神宮の参拝者は

毎年増える一方と聞いていますし、日本国家の建国記念日の是非をめぐる論争も絶えることがありません。読者の皆様はこの問題をどうお考えでしょうか。

この問題に対する著者の考えをお話する前に一つ検討して置きたいことがあります。歴史とは何なのでしょう。過ぎ去った出来事の真相は唯一つしかないはず。にも拘らず今迄の日本の歴史について全く違う二つの見解が生れて来るといふ事自体何とも奇妙な事ではありませんか。歴史とは何なのでしょう。

歴史とは過去の出来事についての記述です。とは言っても起った出来事を順序に従って綴って行けば歴史書が出来上るといふわけでもありません。一人の人の歴史にしても、その人が毎日行つた事柄を起つた順序通り全部書き記せばよい、というものではありません。一人の間でも、社会や国家・世界の動きにも意図・目的があり、習慣・風俗等全てのことに関係して来ます。ですからそれらの出来事をどう表現し、どう記述するか、は多分に歴史を書く人の主観に左右されて来るでしょう。歴史を書く人の人生観に関係して来ます。そこに問題があります。人生は金なり、と信じている人が歴史を書いたらどんな歴史が出来るでしょうか。科学者が、芸術至上主義者が、宗教家を書いたらどうでしょうか。それぞれ違つた歴史になることは間違ありません。

歴史がそれを書く人の人生観に左右されることが避けられないとすれば、その歴史が正しい

か、否かは何処で判断したら良いのでしょうか。突き詰めて考えて行きますと、人間そのものが問題となつて来ます。人間というものの持つ全ての性能を理解した立場から歴史を書くことが要求されて来るでしょう。そうでない歴史は何処か偏つた、ねじれた歴史となつてしまします。歴史とは何か、の問題は人間とは何かの事に帰着して来ます。

歴史書としての古事記、特にその上巻である古事記の神話の取り扱いについて考えている内に、歴史とは何か、の問題が考えられました。そして歴史を考えると結局人間の営みいとなとは、人間とは何かの問題が浮び上つて来ました。人間とはそもそも如何なるものなのでしょう。これは人間社会が始つて以来、繰り返し繰り返し問いつつて来た永遠のテーマと思われて来ました。「人生不可解なり」と言つて若き生命を日光の華嚴の滝に投じた藤村操の絶叫に今現在でも答えることが出来たとは言えないのです。

それでは現代の人々が未解決だと思ひ、永遠のテーマだと思ひ込んでいる「人間とは」「人生とは」という問題に対して人類はその長い歴史の中で完全な答えを一つも出していないのか、というところではありません。人間の心はどんな構造をしているのか、どんな活動をしてどのような結果を生むのか、の問題に人類は已にはつきりと然も完全な答えを出しているのです。それが日本古来の学問であります言靈の原理です。大昔の言葉で布斗麻邇ふとまにと呼ばれました。

この学問は二千年もの長い年月、日本人の脳裏の底に眠っていたのですが、今世紀に入つて徐々に潜在意識から発掘され、今や昔にあったと同様な完全な姿で復活されて来たものです。この学問は人間とは何か、に必要にして十分な解答を与えてくれます。そしてそれが示す人間の性能の全局の立場に立つて過去を振り返つて見る時、日本と世界の歴史が整然とした真実の姿で理解されて来ることになります。

初めて言霊の学問に接する方には「そんなことがあるのか」と一切を疑う事にもなりませんが、この本のテーマである古事記神代巻と言霊との関係をお読み下されば「成るほど」と納得して頂けるものと思つています。さて次に言霊とは何かを簡単に解説することにしましょう。

言霊とは

眼を開けて眼前のものを見ましよう。部屋の中に机が、椅子が、カーテン、窓があります。窓の外に緑の木々が見え、その上空には青空が広がっています。大空の広い宇宙、太陽系・銀河系・星雲等々のマクロの世界から物質の分子・原子・原子核内の数々の要素があるミクロの世界まで、近代科学は物質の構造や色々の仕組みを発見して来ました。私達人間の対象として現われる世界を科学は詳細に研究し、物質とは何であるか、の完全な答えを出す日は間近い事

でしょう。

この科学の研究とは逆に、それら外界の事物を見、研究観察し、考えている自分の心とは何なのだろうか。心はどんな構造を持っていて、どのような活動をしているのか、数千年前の大昔、私達日本人の祖先は考えたのでした。そして長い年月の研究の末、「心とは何か」の問題に完全な解答を発見したのです。その答えは次の様な事でありませう。

人間の心は五十個の要素から成っています。その内訳は心の先天要素（現象として現われる以前の心の活動の要素）十七個、後天要素（現象として現われた最初の最小の要素）三十三個、合計五十個の要素です。私達の祖先はその五十個の要素に、現在私達が使っているアイウエオ五十音の清音の単音をそれぞれ当てはめて、その一つ一つを言霊ことたまと呼びました。また霊ひとか麻邇まにとも呼びました注二。言霊とは言葉の最小単位であると同時に心の最小要素でもあるもの、心であると同時に言葉であり、言葉であつて心であるもの、即ち言霊であります。

私達の祖先は更に心の研究を進めました。そして人間の心を構成している五十個の言霊はどのように動くか、の問題をも余すことなく解明しました。その基本的な動き方も丁度五十通りあることが分かりました。五十個の言霊が五十通りに活動します。五十と五十、合計百の原理とすることがなります。この原理法則を布斗麻邇ふとまにと呼びます。現代の科学が「物質とは何か」の結論を目指して研究が進められている、とするならば、この言霊の学問は「人間の精神とは何

か」の問題に対する究極の完全な解答を与えている、ということが出来ませ^き。

私達の祖先が次にやった仕事は以上の言霊の百の原理法則に基づいて五十個の言霊を組み合すことによつて物事や事柄に名前を付けたことです。日本語の始まりです。心と言葉のそれぞれの究極の要素を、事柄の真実の姿に則して組み合せてつけた名前でありますから、その名前さえ聞けば、その物や事の姿は紛れもなく理解出来ます。名前さえ聞けば真相が分り、その他に概念的な説明を要しません。日本語とはそういう言語であります。

次の仕事はこのようにして付けられた物や事の名前がそれぞれにお互い調和して矛盾することのない社会を作ることです。文明社会・国家の建設です。こうして日本の国家と日本語が出来上りました。世の中に存在する物や事、言換えますとそれぞれの名前がお互いに矛盾しない社会、それはとりも直さず精神的な理想調和の世界と云うことが出来ましよう。古代の日本の姿はこのようなものであつた、と推察されるのです。そしてその時代が存在したのは今から数千年以前のことであつたでありましよう。

本書の主題であります「古事記と言霊」との関係をお話するに当り、先ず「古事記とは」「言霊とは」の両方を以上手短かに説明しました。余りに手短かな説明で十分な御理解は得られないかも知れません。それは本文の詳しい解説で補わさせて頂きます。

古事記と言靈の学問との関係が明らかにされるに従って、古事記の撰上者であります太安万侶が何故古事記上巻に幾多の神様の名前が登場する神話を冠として載せたか、の真意が了解されて来ます。すると必然的に現代の歴史家が夢にも思つたことのない日本の歴史の隠された筋道が事実として浮び上つて来ることとなります。そしてその歴史の筋道の当然の帰結として、日本人が日本人であることの意味、日本人のアイデンティティーが呼び起こされても来ます。以上、古事記と言靈との双方の簡単な解説をふまえながら、「古事記と言靈」の本文に入ることといたします。

【注一】麻邇は古代に於ては世界語であつた。仏教では摩尼と呼ばれている。摩尼珠・摩尼宝珠の言葉がある。キリスト教ではマナと言う。「神の口より出ずる言葉」と聖書に記されている。またヒンズー教ではマヌと言われている。麻邇が世界語であることの証明によつて、日本の歴史と世界の歴史との古代よりの深い関わりが浮び上る。

【注二】言靈の学問についての予備知識として先に刊行されました「コトタマ学入門」を参照のこと。

古事記と言靈との関係というテーマでお話するに当つて、先ず古事記とは、言靈とは、とそ

れぞれに簡単な解説をして来ました。さてこれから双方の關係についての話に進むこととなるのですが、単刀直入結論を先に申し上げることにしましょう。それは言靈の話を初めて聞かれる方、また古事記の従来の研究に慣れた方には少々信じ難い事かも知れないのですが、しばらくの間虚心坦懐、私の話に耳を傾けて頂きたいと思ひます。

古事記の上巻である神代の物語は、日本古代の伝統の学問であります言靈布斗麻邇の原理のわが国唯一の教科書なのであります。これが結論です。

蟹は甲羅に似せて穴を掘る、と言ひます。人間はその甲羅に似せて歴史を創造します。そして人間の甲羅と言うべき「人間精神とは何か」の問いに必要にして充分な解答を与えたのが、日本伝統の学問である言靈の原理なのです。私たち日本人の祖先はこの学問の中で、現代人が超実証的なものとして忌避した神話の世界の物語を、人間の思考の先天と後天という精神構造の問題として、いとも合理的に説明してあります。古事記の著者、太安万侶は、この日本古来の学問を古事記の神話という謎々のかたちで後世に残し、その上つ巻に於て、神話の形で言靈の学問を説き、そこで明らかとなる「人間の心とは何か」の全貌と理念の自己發展としての現実の日本歴史を中つ巻以下に示そうとしたのです。

古事記の上巻には最初の天の御中主の神に始まり数十数百の神様の名前が次から次へと出て来ます。それらの名前を見ただけではまるで何の事か分らないのですが、ひと度古事記上巻が

言靈の学問の教科書として書かれたものなのだ、と気付いてみますと、それぞれの神様の名前が驚くほど真実味を帯びて私達に語りかけて来ます。

禪に指月の指という言葉があります。「あの月を見てごらん」と指さす指のことです。その指だけ見ていたのでは何の役にも立ちません。指さすその先を見ることが肝腎です。それと同様、古事記の神様の名前は人間の心の構成要素である言靈の一つ一つを、またその法則をいわば謎々の形で指し示したもののなのです。

太安万侶は何故そんな廻りくどい謎の物語など書いたのでしょうか。古事記の文章の一節々々を詳しく検討し、更に私達の現実に生活する心の動きと照らし合ってみますと、途方もなく大きな意味を持っている事に気付くのです。さあ、古事記の文章の検討に入ることにしませう。

● 目 次 ●

古事記と言霊

はしがき	2
天地の初発	2
父 韻	29
親 音	42
島 生 み (その一)	50
「思う」と「考える」ということ	61
創造へ、そして失敗	72
島 生 み (その二)	87
神々の生成 (子音創生)	100

歴史編

五十音の整理・運用

神代文字の原理

黄泉国

言戸度し

身 禊（その一）

身 禊（その二）

三貴子

後日譚

歴史とは

歴史の黎明（言霊原理の発見）

295 292

278 261 230 203 190 172 165 135

文明社会創造への出発（天孫降臨）	298
日本の歴史（一）	301
外国の歴史（一）	305
歴史創造の方針の転換	308
外国の歴史（二）	310
日本の歴史（二）	322
外国の歴史（三）	332
二十世紀	334
現在の世界	337
新世界の夜明け	340
歴史創造の心	344
将来の展望	348
日本皇室の将来について	352
第三文明時代に入るための三つの会議	357

古事記と言靈

天地の初発はじめ

古事記の上巻は次の文章で始まります。文章を区切つて順を追つて説明して行きましょう。

天地あめつちの初発はじめの時、高天たかまの原はらに成りませる神かみの名なは、天あめの御中主みなかぬしの神かみ。次に神産巢日かみむすびの神かみ。この三柱みはしらの神かみは独神ひとりがみに成りまして、身みみを隠したまひき。

天地あめつちの初発はじめの時

古事記だけでなく古代の世界の神話のほとんどは、最初の文章がこの「天地あめつちの初発はじめ」の事から書き出されています。例えばキリスト教の旧約聖書の最初の文章は「元始はじめに神かみ天地てんちを創造つくり

たまへり」です。

「天地のはじめ」の天地とは何を指して言うのでしょうか。「そんな事は言うまでもなく、我々の眼前に広がっている大きな宇宙、その中にある星雲や銀河系や太陽・地球といった天体のことを言っているのだ」と大方の人は思われることでしょう。果してすぐにそう断定してよいものなのか、もう少し考えて見ることにしましょう。

眼を開いて大空を見上げたとしましょう。そこには無限に広い宇宙が広がっています。夜ともなればそこには無数の星が瞬いているのが見えることでしょう。この眼に見える宇宙、天地のはじめと言えば、当然に幾百億年か知れない大昔、宇宙物理学が主張するように、混沌とした宇宙の内部が活動を始めて次から次へと天体が生成出現した時を指していることとなります。このように考えるのが現代の常識と言うことが出来ましようが、それならそう考えることしか解釈の仕様がいないのか、といたしますと、そうとも言い切れない事に気付くのです。

先に眼を開いて大空を仰ぎました。今度は眼を閉じて静かに坐ってみましよう。初めの内はつい先程まで仰いでいた大空の記憶の余韻が続きます。空は青かった。木々の緑がさわやかだった、という記憶です。その内に「そろそろ腹が空いて来たな」とか、「午後に会う約束のA氏とはどんな人なのか」等々、様々な思いが心をよぎります。このように色々な思いが現われては消え、消えては現われる心、その心の広がりや心を宇宙と呼ぶことが出来ます。眼を開

けて仰ぎ見た外の宇宙が果てしなく無限であるように、内に返り見た心の宇宙も果てしない広がりを持っていきます。人間にとつて大空や太陽・地球・大地など外の世界は厳然と存在しているものでありますが、色々な思い、感じが起つて来る心の世界も否定し去ることの出来ないものであることも確かなのです。

そして古事記を始め世界の各宗教書の最初に掲げている「天地のはじめ」の天地とは外に見える太陽や地球のある宇宙のことではなく、正にこの心の宇宙のことを指して言っているのです。この事をはつきりと心に留めまさんと、古事記や世界の神話や各宗教書の内容が途方もなく間違つた方向に解釈されてしまいます。

現代は科学の時代です。現代人は物事を自分の外、向こうに置いて考えることが得意です。それとは逆に古代は精神の時代でした。物事を見たり、聞いたりしている自分自身の心の内容に重きを置く時代でありました。そして古代には物事を表現するための哲学的概念の言葉がありませんでした。ですから心の中の出来事を表現するのに、眼に見える外界の事物を借りて表現したのです。例えば心の中に起る出来事の全て、ということを表現するのに外界に見える全部、即ち天と地、天地あめつちという言葉を使ったのです。古事記のはじめの言葉「天地」とは人間の心の中に現われ出て来るもの全部という意味なのであります。

「天地」が心の中に現われて来るもの全部という事であるなら「天地のはじめ」とは何を指

すのでしょうか。心に現われて来るもの、たとえば眼や耳・鼻・舌・身体などの感覚、好奇心やアイデア、感情、命令……等々いろいろあります。それらのものの「はじめ」といえば、それらが心の内に現われ出ようとする瞬間のこと、と思つていいでしょう。心の内に何かが現われようとする兆しきざしの瞬間、それが物事の「はじめ」です。

外界に見える「天地のはじめ」といえば、物理学や天文学が研究している広い宇宙の中の天体が現われ出ようとする数百億年か前の大昔のことを言つていふことになりまふ。それとは逆にそれらの出来事を見たり聞いたり、思つたりしている人間の心の世界の「はじめ」とは、人間の思いや考えが今にも現われ出ようとする瞬間々々のことを指した言葉なのだ、ということ御理解頂けることと思ひます。古事記の「天地の初発の時」とは正にその心の世界のはじめの事を言つてゐるのです。

そして心の中に一つの思いの芽が兆しはじめ、それが発展して具体的な一つの思いとして心の内に現われ、言葉として表現され、発音され、その声が人の耳によつて聞かれ、了解されて行く、という一連の出来事の成り立ちや活動の内容が明らかにされるとしたら、それが取りも直さず私達人間の心の構造と活動の様式を解明することになる、ということが出来ましよう。そうです。古事記の上巻である神話は神様のおとぎ話でも民話でもなく、永遠に変わることのない私達人間の心とは何か、を説明してゐるのです。

高天の原に

「天地の初発の時」が天体や大地がこの宇宙の中に形成された大昔ということではなく、心の中に色々な現象が現われようとする瞬間の時ということが了解されました。ですからそれに続く「高天の原に」とは宇宙の中の何処かの場所ということではなく、ここでは単に「心の世界」という程の意味にとる事が適当でありましょう。何か起ろうとしてまだ何も起っていない真新しい心の宇宙のことです。一つの塵もない透明な広い心の世界のことです。仏教ではこれを法界と呼び、禅では「空」と名付けました。

この高天の原という言葉は古事記の文章の中に度々出て来るのですが、その使われる時と場所によって意味内容に相違があります。その都度説明することに致しますが、今は代表的なもう三つの意味についてお話しておきましょう。「天地のはじめ」の次の高天の原は何の出来事も起っていない清浄無垢な心の宇宙のことです。その何もない心の内に活動が起り、思いが具体化して言葉となり、その結果として心の全構造が人間によって完全に認識・自覚されます。この認識された理路整然たる心の世界、これを高天の原と呼びます。更にもう一つの高天の原とは、心の構造をはっきりと自らの心の内に理解した人が集まり、その原理に基づいて文明を

創造し、人々を教化する政治の場のことを指して言う場合です。このような政庁を昔は百敷の大宮とも呼びました。

高天の原という言葉についてももう一つの話を付け加えておきましょう。高天の原という名の由来です。この本の話が進行して人間の心とはどんな構造をしているか、が次第に明らかにされ、結論として理想的創造精神の構造が五十音の言靈ことたまの図として把握されることとなります。この図表を天津太祝詞音図あまつひのりことと言うのですが、その音図の上段の十音が向って右からアタカマハラナヤサワと並びます。その十音の中の棒線を引いた部分の五字タカマハラ（高天原）を取って名付けたものです。でありますから高天の原は正しくはタカアマハラ、またはタカマハラと呼ぶのが適当と言えます。

成なりませる種かみの名みなは、

何事も起つていなかっただ高天原という心の宇宙に、ある時、ある処で何か起ろうとする気配が始まります。心の中に一つの思いや考えが起ろうとして来ます。心の活動の始まりです。

普通私達は何かを思い、感じた時、それが心の活動の始まりだと思つています。「喉のどが乾いたな」と思うのが始めて、次に「お茶が欲しい」と続く、と思つていきます。けれど自分の心の

内をよくよく考えてみますと、「喉が……」と頭で具体的な言葉として思う以前に、頭脳の中で複雑な経緯があることが分ります。物事を（それがどんなに簡単な出来事であっても）それを思い、感じる以前に、頭の中では目まぐるしい動きがあつて、その後「あゝ、喉が乾いた」という具体的感じが出て来るのです。

具体的に「喉が乾いたな」と感じた時は已に心の出来事です。その出来事が起る以前の心の働き、まだ形として現われない働きを心の先天活動と呼びます。経験する以前ということで先験活動とも言われます。それに対し具体的に思い、感じた事を後天活動と呼んでいます。そして今お話をしています「天地のはじめの時」というのは、出来事として分る以前の心の先天活動について言っているのです。

さて頭の中に何かの思いの兆が動き始めました。勿論具体的な思いになる以前の動きですから、人はそれを何だと表現するまでに到っていません。けれど何かが成立し始めようとしています。その成立し始めようとするを、古事記は「成りませる」と表現しました。また具体的に出来事として起った時は言葉として成立しますから、言葉である音が「鳴る」という字を当てて考えることも出来ます。くどくどしくお話するようですが、人間の思いが初めて動き始める瞬間の様相は以上のように考えられるのです。

何も無い広い心の宇宙に何か動き始めました。それはどんな事なのでしょう。話は次に

移ります。

天の御中主の神

言靈ウ・心の内に具体的な事柄として言葉で表現される以前の、意識されない頭脳内の先天の構造の中のお話であることを心に留めてお聞き下さい。何も無い広い心の宇宙の中に何かが動き出します。何かは分らないけれど広い宇宙の一点に動き出したもの、そしてやがては「私」という意識に発展して行く最も原始的な意識の姿です。

宇宙の中に初めて意識が動き出す一点、それはよくよく考えて見ますと、その動き出す瞬間が今であり、此処である、ということですが、心の息吹が芽を吹き萌え出ようとする瞬間こそ現実の今であり、此処であると言うことが出来るでしょう。これ以外に今という時と此処という処はありません^き。私達の心の活動はいつでもこの今・此処から出発しています。人間万事全ての活動が始まる出発点です。古事記の編纂者太安万侶はこの人間の原始的な意識に天の御中主の神という神名を当てて表現したのでした。その実体を言靈の学問で言靈ウ^{ことたま}と言います。

何故太安万侶は今・此処に始まる意識の元の姿に天の御中主の神という名前を当てたのでしょうか。天の御中主の神の「天の」は心の宇宙の、という意味です。「御中主」とはその宇宙

の中心にあつて、すべての意識活動の元（主人公）としての、の意味。神はそういう実体の事。広い心の宇宙に、ある時ある処で、やがて發展して私という自覚となる原始的な意識が芽生えます^三。その意識がどんなに小さい、ささやかなものであつても、無限大の宇宙がその今・此処の一点から活動を開始するのですから、その瞬間の一点こそ宇宙の中心ということができます。そしてその一点がやがて「我あり」の自覚に發展して行くのですから、宇宙の主人公というわけです。私達日本人の祖先はこの一点の原始的な自覚体に言靈ウ、と名付けたのでした。そして太安万侶は古事記神代卷の編纂に當つて言靈ウを指し示す「指月の指」として天の御中主の神という神名を使つたのです^三。

【注一】心の宇宙の中に活動が始まる一点、今・此処を古代の日本人は「中今^{なかいま}」と名付けた（続日本紀）。誠に當を得た言葉と言える。

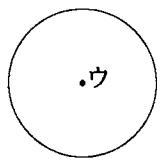
【注二】宇宙が活動を起し、中心の一点が動き出し（言靈ウ）、次々と活動が進展して、一つの出来事（現象）となつて現われる、その活動を「宇宙剖判^{ぼうはん}」と呼びます。剖は分れる。判は分る。剖れて行く活動が人間に理解されて言葉として分る、^{わか}と云うことである。分ける、^{わか}から分る、日本語の言葉はこのように巧みに出来ている。

【注三】心の最初の活動について古事記は「成りませる神……」と表現した。これは心の構

造を明らかにすることを目的とした書き方である。同じ事を表現するのに聖書創世記は「神、天地を創造りたまへり」と記している。神を本意とした書き方である。聖書が古事記と違い、人間の信仰の書として書かれたからである。

古事記と言霊との関係の話はまだ始ったばかりです。けれどこの両者の関係について賢明な読者はもうお分りになられているか、と思います。古事記が編纂される以前から人間の心の内容を解明した言霊の原理なるものが已に日本人の所産として世の中に用いられており、その原理がある理由から呪示・比喩の形式で書き表わされることになったのが太安万侶による古事記神代巻である、ということなのです。言霊の原理が先ずあり、その後で謎々としての古事記が作られた、というわけです。今後古事記と言霊との関係が明らかになるにつれて、読者はこの事実を確認することとなりましょう。

心の宇宙の中に活動の第一歩が始まりました。天の御中主の神・言霊ウの誕生です。これを図で表現しますと下のようになります。宇宙の中心に「我あり」の自覚の最も原始的な意識の芽が萌え出しました。言霊ウです。宇宙の始りです。この言霊ウの内容を表わす漢字を拾ってみますと有・生・動・蠢等が考えられます。



言靈ウについて更に考えてみましょう。私達は今迄お話しましたように、眼に見える外の世界から一転して、それを見ている自分の内なる心の世界を考えて来ました。そして色々な心の現象が無限に広い心の宇宙から現われ出ようとする瞬間の一点を考えることとなりました。この一点の何か分らないが何かが始まる存在として言靈ウに思いが到達しました。正しく心の活動の最初の一点です。この一点を了解した心で更に思いを先に進めて見ましょう。

思いを内に向けて自らの心を顧みて広い宇宙の存在と、そこから心の活動が始まる最初の一点である言靈ウを確認しました。この事実は次のように考えることも出来ます。外界の宇宙ではなく、その外界を見ている内なる心の存在に気付きました。その心の中には種々雑多な心の現象が現れては消えて行きます。そして人はそれらの現象がそこから現れ、そこに消えて行く内なる広い広い無限の宇宙の存在に行き当たります。そして人間の思考はもうそれより先には進むことが出来ない事に気付きます。宇宙は無限です。時間的にも空間的にも無限です。人間の心はこれより先には遡さかのぼることは出来ません。いわば人間の思考には無限という限界がある、と言うことが出来ます。

私達人間の心はこれ以上遡る事が出来ないのですから、引き返すことしか方法はありません。何処へ引き返したらよいのでしょうか。それは無限の宇宙から、有限である心の活動が始まる一点へ引き返すことです。活動が始まる一点、それは現実的に言えば今・此処ということです。

こう考えて来ますと、人間の心が活動する最初の点である無限から有限が始まるという関係を了解することが出来ましょう。無限の宇宙を天あめといい、最初の有限を中主なかぬしといいます。今・此処である中今の自覚者（主）ということであります。最初に生れた一つの存在である言靈ウに対して太安万侶が天の御中主の神という神の名を当てて表わしたのも誠にものな事ではありませんか。

人間の心の活動が始まる瞬間に、心の中でどんな事が起るのかをお話して来ました。話がややもすると難かしく煩雑になつて恐縮なのですが、これも心の出来事として人間が意識する以前の頭脳内の作用についての話ですので已やむを得ない事なのだ、と御了承下さい。難解についてこの初めの瞬間である言靈ウについても少しお話したいと思ひます。

最初の心の活動の一点に何故言靈ウと名付けたのでしょうか。それは活動の最初の一点がどんな精神内容であるか、に合わせて五十音の中から最も適ふきわしい音として「ウ」を選んで名付けたのです。音声学という学問がありますが、それによりますと母音のウが五十音の中で人間が発する言葉の最初の音である、といひます。また人間の精神構造が全部明らかにされ、その構成要素にアイウエオ五十音の単音をそれぞれ結びつけた時、最初の原始的な意識にウの一言を当てはめると全部が合理的に整頓されることから言靈ウと名付けるのが妥当である、という

ことが証明されて来ます^{注一}。

意識の萌芽とも言える言靈ウ^{注二}は現実の人間の生活とどんな関係にあるのでしょうか。それは人間だけでなく、全ての生き物（動物・植物）の持っている最初の最も単純・直接で衝動的・本能的な「感覚」という精神活動となつて発現して来ます。人間にあつては眼耳鼻舌身の五官感覚です。

【注一】心の内容に適合した言葉を選んで名を付けることを古語で「うら合えまかなはず」と言う。「うら」は裏で心の意。悲しい事をうら悲しと言う。「合え」は合致させる意。「ま」は真のこと。「かな」は神名^{かな}で言葉のこと。

【注二】何の現象もない宇宙が活動を開始して何だか知れないが何か動き出す。古人はこの原始の意識の一点に言靈ウと名付けた。梅の木は冬まだ去りやらぬ白一色の野に、春に先駆けて生命の息吹とも言える花を咲かせる。言靈ウの芽の意で、その花を「うめ」と名付けた。梅の語源である。「梅一輪 一輪ほどのあたたかさ」は有名な句である。

次に高御産菜日^{たかみひすび}の神。次に神産菜日^{かみひすび}の神。

言靈ア・ワ…広い心の宇宙に何か動き出しました。言靈ウです。次に先天の頭脳構造に何が起きるのでしょうか。

秋か冬によく晴れた日、高いビルの屋上の上って、仰向けに横になった事がありますか。経験のない方は想像して見て下さい。目に見えるものはただ一面の透き通った青い空、一点の雲もありません。その青い空を緊張せず、ただ漫然と見ていますと、何時の間にか空が下がって来て自分を包み込んでしまうような、または自分がだんだん空に向かって昇って行って空の中に吸い込まれてしまうような気持になります。誠に奇妙な気持です。それでもめげずにじっと空を見ていると、一瞬自己意識が消えて、自分が空か、空が自分か、分らなくなってしまう。

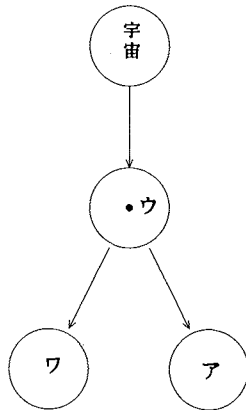
人間は相対するものを見たり聞いたりする時、自我を意識します。仰向けに横になって一面の青空を眺めて、視点としての対象となるものを失ってしまいますと、自我意識も薄れて、終にはなくなってしまう。

以上のことを逆に考えてみましょう。澄んだ青一色の空をじっと見つめて、見る対象を失って自分が空か、空が自分か分らなくなりました。それは自分は空を見ているのでもないけれど、見ていないのでもありません。そんな状態です。心の世界で何か見ているが、何か分らない状態、正しくそれは前にお話しました広い心の宇宙から何か意識が生まれ、動き出した状態と同

じではありませんか。言靈学はこれを言靈ウと呼んだことは已にお話しました。

それなら言靈ウの次に心の世界に何が起るか、もうお分りでしょう。心の宇宙の中に一点言靈ウが生まれ、次に宇宙は主体と客体、見るものと見られるもの、私と貴方に分れる事となります。見る主体を言靈ア、見られる客体を言靈ワといいます。古事記の編者はそれら言靈の意義・内容を指さす指月の指として高御産巢日の神・神産巢日の神という神名を当てたのです。

心の宇宙から言靈ウが生れ、次に言靈アとワに分れた、といいますが、これ等はまだ意識の自覚に至る以前の先天構造の内部のことであり、見えますから、見ている側が何の誰べえとか、見られる客体が何々のものとか、という具体的な事ではありません。飽くまで先天の構造についてお話しているのだ、ということをお承知下さい。この何も無い宇宙から言靈ウ、ア・ワと分れて来る状況を図で示しますと、下の様になります。



言靈アとワについて太安万侶が高御産巢日の神・神産巢日の神という名を当てた意図は何だったのでしょうか。両方の神名を仮名で書いてみましょう。タカミムスビノカミ、カミムスビ

ノカミとなります。両方を比べて見ますと、漢字で書いた時には気が付かないのですが、主体を表わす高御産巢日の神の方の頭に夕の一字が多いという他は全く同じであることに気付くでしょう。先ずその夕の一字を除いたカミムスビノカミについて考えてみましょう。

カミムスビのカミは嘯むの意です。嘯み合わさる、ことです。ムスはうまれる・はえる・生じる、という意。ピは靈で言靈特に子音のことです。むしろ出来た子を息子（むすこ）と言います。カミムスビの全部では「嘯み合わさつて現象である子音を生じる」となります。嘯み合わさることを現代語で感応同交といいます。主体と客体がお互いに感応同交して現象が生まれる、ということ。男と女が感応同交すれば子が出来ます。そのお互いに嘯み合わさるもの、それは主体と客体であり、我と汝であり^{註二}、また男と女・出発点と目的点・積極と消極等々色々なことに当てはまります。

次に主体の方にただ一字夕の字の冠がついているのは何故か、を考えてみましょう。音声学では夕行の夕チツテトの音は陽性で積極的な音だと言います。剣道で刀を大上段から真つ向に振り下ろす時の掛け声が夕行の音です。純粹の主体と客体が感応して現象を生み出そうとする時、イニシアチブを取るのには常に主体からであつて、客体はただ受け身となるだけです。ですから主体である高御産巢日の神の方に夕の字が頭に付いている、と説明出来ます。

それだけではありません。言靈学の講義はまだ始つたばかりですが、話が先に進みますと、

人間の心の要素が全部で五十個の言霊で構成されていて、それら五十個の言霊で心の構造を表わすと縦五個、横十個の言霊が並ぶ五十音図が出来上ります。現在私達が使っているアイウエオ五十音図もその一つです。それは自覚された人間性の内容を示しています。またその形は丁度稲を作る田んぼの形でもあります。後の話に出て来ます言霊学の総結論に与えられた神様の名前である天照大神は田を耕していると古事記に書かれています。夕という言霊の一音は田の字に通じ、それは自覚された人間性を表わします。主体の側である高御産巢日の神の冠に夕の一字が付く理由となります。主体と客体が感応同交する時、主体側だけが人間性の自覚に裏打ちされた働きかけが許されており、客体側はただその働きかけに答えるだけに過ぎません。

話が少し難しくなつて来たかも知れませんが、もう少し説明しましょう。人が何か一つの物について調べるとしましょう。その人の研究が色彩に関したものである場合、その物の色が問題となり、その他の性質である堅いか柔らかいか、金属製か木製か、などの問題は一切ネグレクトされるでしょう。客体は現象としては主体の問いかけにのみ答える、ということをお分かり頂けることと思います。

何も無い心の宇宙からある一点が動き出します。言霊ウです。この時はまだ主体と客体に剖れていません。主客未剖と哲学で呼びます。そこに人間の何かの思考が加わる時、一瞬にして「何かあるもの」は主体と客体に分れます。ウからア・ワに分れます。主客未剖の一者が思考

が加わると主と客の二者に分れる。この一見当り前のように思える動きですが、人間の心の働きのとつて重要な事柄なのです。初めの一者が二者に分れること、これが人間の知性の第一の法則であり、また人間の宿命である、ということが出来ます^{注三}。

また次のようにも言えます。宇宙から先ず一者が生れ、それが二者に分れ、それぞれにウ、ア・ワと名が付けられました。生れて来ると同時にそれに名が付くこと、これが人間の創造の始まりです。名が付かなければ何も始まらないのと同じです。これも人間の心の営みの大原則ということが出来ましよう^{注三}。

ではこの言靈アである世界は人間心理とどんな関わりを持つのでしょうか。言靈アから出て来る人間心理それは感情です。また主体である言靈アの内容に当る漢字を拾って見ますと、天・吾・明などが考えられるでしょう。そして客体である言靈ワには我・和・輪が考えられます。

【注一】昔は「私」のことを「吾^{われ}」、「貴方」のことを「我^{われ}」と呼んだ。現代でも「お前」のことを「われ」と呼ぶ地方がある。

【注二】宇宙から先ず一者が生れ、それが二者に分れる。宇宙がこの三つに分れたということ、それが人間の知性で理解したということは同時で分けることが出来ない事柄である。そしてその事が人間の全ての始まりである。この三者、言靈ウアワ即ち天之御中主の神、高御産

巢日の神、神産巢日の神の三神を神道で造化三神と呼ぶ。中国の老子はこの事を「一、二を生じ、二、三を生じ、三、万物を生ず」と説明している。

【注三】この事を「老子」には「無名は天地の始め、有名は万物の母」と説いている。

この三柱の神は、みな独神に成りまして、身を隠したまひき。

独神とは独立している神ということ。独立でありますから、それ自体だけで存在していて、他に依存しないこと、というわけです。どういう事か例を挙げて説明しましょう。言霊アと言えば、そこから人間の感情が迸り出て来る元の宇宙です。そして人間の感情というものはそれだけで人間心理の一世界を形成していて、人間心理の他の出来事であります欲望とか、経験知などに依存することなしに働きます。そのような一つの独立した心の世界（次元とも言いま

す）を独神といいます。

身を隠したまひき、とは眼で見、耳で聞かれるような現われた出来事（現象）ではなく、心の先天構造の中でのだけの実在であるから、「身を隠している」ということであります。例えば「私」というものは、色々な出来事を創り出し、その出来事は見聞きすることが出来ますが、私自身そのものは現象として現われることはありません。それは抽象的な概念として、または

宗教的な自覚の内容としては存在しているけれど、具体的に「これですよ」と人に示すことは出来ません。先天構造の内部にだけ存在して、後天的な具体性を持ったものではありません。これが「身を隠したまひき」という意味です。

【注一】古事記の「独神」を日本書紀では「純男」と記している。「ひたをとこ」または「をとこのかぎり」と読む。洒落れた表現ではなからうか。

次に国稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる時に、葦牙のごと萌え騰る物に因りて成りませる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲の神。次に天の常立の神。この二柱の神もみな独神に成りまして、身を隠したまひき。

国稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる時に、

心の先天構造の中に初めて生れて来るウアワの三つの言霊の宇宙が確認出来ました。次に宇宙はどう分れて来るのでしょうか。話を先に進めることにしましょう。

「国稚く」の国とは組んで似せる、または区切って似せる、の意。分つたものに名を付ける、

ということ、広い宇宙の一部を区切つて他と区別して言葉としてそのもの内容を表現することです。現代使われている国という言葉も、世界の中から日本という国を区別して付けた名前、ということが出来ます。何も無い宇宙からウアワの三つの宇宙が分れて来て、それに名が付いたけれど、まだそれだけでは心の宇宙の区分けは始つたばかりで、はつきりとしていない。そのことを「稚い」と表現しました。「浮かべる脂の如くして」とはその状態は水の上に漂つている油のように不安定であつて、の意。「水母なす漂へる時に」の水母は暗気の意、混沌として暗黒に包まれていて、まだはつきりと分別が出来ていない、ということ、心の宇宙に意識の芽が生れ、それが主体と客体に分れた、というだけでは整理確認の作業は混沌としてゐる、ということでありませう。

「葦牙のごと」とは葦の芽の如く、の意。「萌え騰る物に因りて」とは、葦の芽が次から次へと連鎖反応を起すように吹き出て来る様子に喩えている。では何が出て来るか、といえは：

宇摩志阿斯訶備比古遲の神。次に天の常立の神。

言靈ヲ・オ・宇摩志は靈妙な意。阿斯訶備比古遲の阿斯訶備は葦の芽、比古遲とは男の

事。男は音の子で言葉の意味する。全部で靈妙な葦の芽のように次から次へと萌え出て来る言葉の实体、ということになります。心の中で次々に吹き出るように現われるもの、といえば、それは直ぐに人間の記憶であることがお分りのことでしょう。宇摩志阿斯訶備比古遲の神とは人間の記憶、経験した出来事の記憶のことでもあります。その記憶はただ一つポツンとあるものではなく、他の記憶と連結していて、次々と果てしなく関係が広がります。その経験の記憶が存在する宇宙のことを言霊ヲといいます。そのヲに漢字を当てはめますと尾・緒などが考えられるであります。

記憶の連鎖のことを生命いのちの玉たまの緒おなどと呼びます。この緒が途切れてしまうのが人間のポケです。また記憶というのは、経験そのものは過去のものとなっても、何時までも尾を引いて残ります。それは動物の尾のようなもので、窓の前を動物は過ぎて行っても、尾っぽが一番後まで残るようなものです。

天の常立の神とは大自然あめ(天)が恒常にとこ(常)成立するたち(立)主体、といった意味であります。阿斯訶備比古遲が記憶そのものの世界(言霊ヲ)とすれば、天の常立の神とは記憶し、その記憶それぞれの関連を考える主体の世界(言霊オ)ということが出来ましょう。記憶とその関連を考える世界といえ、そこからやがて学問が成立して来る世界であります。それはまた「自然界とは何か」の思考を成立させる心の世界のことでもありましょう。

以上の記憶とか学問的な思考を成立させる宇宙も、それだけで十分独立していて他に頼ることなく存在する世界です。またそれは先天構造の中の存在であつて、それ自体は現象となつて姿を現わすことは決してありません。ですからこの言靈オ・ヲも「ひとりがみ独神に成りまして、みみ身を隠したまひき」なのであります。

次に成りませる神の名は、くに国の常立とこたちの神。次にとよくもの豊雲野の神。この二柱の神も、ひとり独神に成りまして、みみ身を隠したまひき。

国の常立の神、豊雲野の神

言靈工・エ…国の常立の神とは国家（国）が恒常に（常）成立する（立）ための実体（神）という意味であります。この実体が言靈工です。この宇宙の広がりから現われて来る人間の働きは実践智です。言靈工に漢字を当てはめると選えの字が最も適当でしょう。言靈工に「選えらぶ」を当てるのが何故よいか、もう少し詳しく説明することにしませう。

広く何もない宇宙の中に意識の芽とも言われる言靈ウがう生まれます。まだ主客未剖で、何かあるがそれが何であるか分らない状態です。言靈ウは五官感覚作用が現われて来る世界です。

次にその何だか分らないものに人間の「何かな」という思考が加わった瞬間、言靈ウの宇宙は分れて主体（吾）と客体（汝）である言靈アとワの宇宙となります。言靈アの宇宙から現われる人間性能は感情です。「何かな」の思考の次に、人はそれを今迄に経験した過去の出来事の中に求めようとしています。記憶と結びつけようとしています。言靈オとヲの経験知の世界が生れます。そしてその何かが分つたら、人間は次にそれをどう取扱うか、の選択に迫られます。言靈工とエが現われます。言靈工（エ）とは人間の選択する知恵即ち実践智が現われて来る宇宙のことなのです。言靈工に「選らぶ」の字が適当だ、とお話しました理由です。

豊雲野とよぐものの神の「豊」は十四の数を示す謎です。解説は後章にゆずりますが、十四は先天構造を構成している言靈の基本数なのです。豊葦原とよあしはらの瑞穂みずほの国の豊も同じ意味であります。「雲」は組むという言葉を示す謎です。「野」は分野という程の意。豊雲野の神で先天構造の言靈をどのように組んで行くか、を考える分野の実体と言った意味に取れます。それは実践智によって表わされた道理とか道徳とかという意味となりましょう。言靈エに当る漢字を拾いますと慧え、絵等えが考えられます注二。

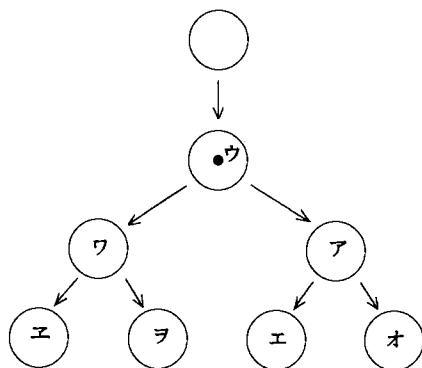
ここまでの話で、広い何もない宇宙からウ、アワ、オヲ、エエの宇宙が分れ生まれて来ることが確認されました。言靈ウから五官感覚作用が、言靈ア（ワ）からは感情が、言靈オ（ヲ）から経験知が、言靈工（エ）からは実践智が現われて来るそれぞれ独立した宇宙であり、その

一つ一つは先天構造内部のもので、それ自体は現象として姿を現わすことがない実体であることが分りました。そして母音で表わします言靈アオエが主体の側であり、半母音である言靈ワエが客体の側である事も分りました。これを図で示しますと左のようになります。

先に、宇宙に意識の芽とも言える一点言靈

ウが生まれ、そこに何かの思考が加わると主体と客体言靈アとワに分れること、それが心の働きの第一の法則であり、また人間の宿命とも言えるものだ、ということをお話しました。更に今、言靈オの経験知と言靈エの実践知という二つの知恵が現われて来ました。言靈ウ、ア・ワの宿命的な法則と経験知と実践智の区別との間には密接な関係があり、今後幾度となく解説することとなります。今後は簡単に説明することといたします。

現代人は知恵という主として学問的知識の事を思い浮べ、物事に処する「機転」とい



う実践智の方を見落とし勝ちです。または知恵といえは両者を混同して思いがちです。けれど両者は全く次元も成り立ちも違う別のものなのです。ではどのように違うのでしょうか。

或る物事を見て、見る主体と見られる客体が分れた処から思考が始まる時、言い換えますと、ある出来事を見て、それを頭の中に思い浮べて、「これは何故かな」と思考が始まる時、学問的な知恵、言霊才の世界からの働きの現われま^{注二}す。

これとは別に、「何、何故」の思考を傍らに置いて、思考の始めである宇宙の初発に帰り、「さて私はどうしようかな」と思う時、実践智である言霊工からの知恵が働き出す、ということになります^{注三}。詳しい説明は後に譲ることにしましょう。

【注一】豊雲野神を日本書紀では「豊斟^{トヨクミ}傍尊、豊組野尊、豊香節野尊、浮経野^{ウキノ}豊買尊、葉子国^{ハコクニ}野尊」などと書いている。浮経野とは浮船^{ウキふね}の謎。葉子国とは箱国の意。私から貴方に心を渡す言葉^{ハコクニ}を船に喩える。また言霊五十音図は方形のため箱と呼ぶことがある。日本書紀の種々の神名の内容は非常に興味深いものがある。

【注二】言霊才から現われる経験知の構造を図示すると△三角形で表わすことが出来る。正反合の弁証法的思考と哲学と呼ぶ。△は形而上学、▽は形而下学、二つ合わせて☆のカゴメのマークで示す。西洋的思考の代表形である。

【注三】言靈工から現われる知恵の基本形は □ 四角形である。田 ⊠ ⊡ ⊢ で表わされている。東洋的思考の代表形である。

父 韻

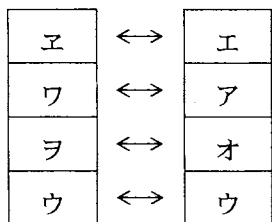
次に成りませる神の名は、う宇比ひ地ぢ邇にの神。次にい妹須す比ひ智ぢ邇にの神。次につ角かく杵ひの神。次にい妹活いく杵ひの神。次にお意お富ほ斗と能の地ぢの神。次にい妹大おほ斗ほ乃との辨べの神。次にい於お母も陀だ疏るの神。次にあ妹阿あ夜や訶か志し古こ泥ねの神。次にい伊耶いざ那な岐ぎの神。次にい伊耶いざ那な美みの神。

母音・半母音

広い宇宙の一点が活動を始めて、言靈ウアワオヲエエという宇宙が次々に剖判して来た処までお話が進みました。それらの言靈はそれぞれ頭腦の先天構造の中の実在であつて、それ自体は決して現象としては姿を現わすことがないものであります。試しに母音であるウアオエを

それぞれ発音して見て下さい。息の続く限り「アー」と同じ声が続きます。それは時間の上でも空間でも宇宙が無限であることを表わしています。

さて、今迄に確認されました先天構造内の言霊ウ・アワ・オヲ・エエを主体と客体（私と貴方）に分けてみましょう。主体側アオエの母音と、客体側にワヲエの半母音とが区別されます。言霊ウは主客未剖ですから主客の区別はありません。今、便宜上^キ主客に分けられない言霊ウを主も客もウと考えると、主体側をウオアエ、客体側をウヲワエとして対立させますと上のような図となります。



主体

客体

そこでウ⇄ウ、ア⇄ワ、オ⇄ヲ、エ⇄エの対立について考えてみましょう。そのそれぞれは対立している、とは言っても、ウアオエ・ウヲヲエの一つ一つは「独り神で、身を隠している」実在です。それ自体はじつと静まりかえっているばかりで、自分から何らの行動も起すことがない存在です。ウ⇄ウ・ア⇄ワ・オ⇄ヲ・エ⇄エの対立と言っても、私と貴方の両方共互いに後ろ向きに立って、眼を閉じ、耳を塞ぎ、互いに相手に全然気が付いて

いない時と同じ状態と言ってもよいでしょう。これでは私と貴方との間で何の交渉も起りようがありません。交渉がなければ何の出来事も起りません。私と貴方が互いに向き合い、眼を開

け、耳を澄まして相手に注意を払うようにするには何かお互い以外のものが必要です。私と貴方に働きかける仕掛人の役目をするものが要ることになります。そこに人間の思考構造の中の父韻が登場することになります。

【注一】この便宜上という言葉は適當ではない。実は難しい説明を省くためである。物の見方に二つある。相對觀と絶對觀である。主と客が対立し、その対立から物事の現象を考える立場を相對觀という。これに対し、主と客の対立はそのままに、その主と客が一体となっている立場（主と客統合の立場）を絶對觀という。この場合、主客未剖のウをウとウの対立図として示すことは間違ひとは言えない。例えば東と西が対立する冷戦の時代が長く続いた。これを東と西を一つと考える世界全体として捉える時、絶對觀の立場が成立する。

父韻

古事記は豊雲野の神の次に宇比地邇の神から妹阿夜訶志古泥の神までの八神を挙げています。チ^{Ti}イ^{Yi}キ^{Ki}ミ^{Mi}シ^{Si}リ^{Ri}ヒ^{Hi}ニ^{Ni}の八音の言霊のことです。この八音の言霊がウウ・アワ・オヲ・エエと主客に対立している母音・半母音の宇宙に働きかけ、母音と半母音が噛み結ぶ、感応同交

する事を可能にします。ウオアエ・ウヲワエの母音・半母音は人間の心がその中に生れて来る大自然宇宙です。大自然だけでは「独り神で身を隠して」何の活動も起りません。そこに働きかけ母音と半母音を噛み合わせ結ばせる八つの音は大自然ではなく、大自然を見、聞き、考え、感じ、生活を創造して行く人間の知性の根本律動とも言ったらよいものです。この八つの音を父韻と呼びます。

この父韻の力動の型に八種類があります。チイキミシリヒニの八音で示します。この八音は古事記に「字比地邇の神・妹須比智邇の神……」と書かれていますように妹背即ち夫婦・陰陽といった二音一組の四組の型から成っているのです^ま。科学的に表現しますと作用・反作用の關係と言ったらよいでしょうか。この作用・反作用の關係は八音の力動の内容の説明のところでも明らかにされます。

この純粹の主体と客体とを結び合わせて、現象を生んで行く八つの父韻の存在は大昔から宗教・哲学書によって知らされて来ました。例えば日本の神道では「天之御柱（純粹主体）」と国之御柱（純粹客体）との間を渡す天之浮橋^{あめのうきはし}と言ひ、仏教では「此岸より彼岸に渡す石橋^{いしききょう}」と喩えられています。また易经では乾兌離震巽坎艮坤の八卦で示しておりますし、キリスト教では「我わが虹を雲の内に起さん。是我と世との間の契約の徴なるべし（創世記九章）」とエホバの虹という言葉で伝えています。このように聖書も伝えますように、黙ってお互いに後

るを向いている主体と客体に働きかけて、正面に向き合い、互いに気持を交換し合うように仕向ける人間の創造知性の働きは、神から与えられた即ち生来人間が持っている八つの父韻以外にはありません。

【注一】八父韻を示す古事記の八神は妹背の二神一組の四組の神であるので「くろせいの綱生の八神」と呼ばれている。

ではこれら八つの父韻の言霊は、それぞれどんな働きをして主体と客体とを噛み結ばせるのでしょうか。八つの父韻を指し示す指月の指である古事記の神名の説明に入ることになります。実を言つて主と客を結ぶ力動パターンなどと言いますが、心の中の奥の方で一瞬に閃めく火花のようなものですので、言葉で説明・表現することは至難の業なのです。けれど一度父韻の力動を知つてしまうと、古事記の太安万侶が実にうまい名前であつた父韻という月を指さした事か、と感心させられるのです。

宇比地遁の神

言靈子…宇比地邇という漢字から宇（いえ）は地と比べて似て近いものだ、という意味が読み取れます。これだけでは神名が如何なる父韻の働きを表現しているか明らかではありません。宇比地邇の字は「いえ」とか宇宙の宇の事です。ここで「いえ」と言えば勿論人間の心の家のことです。心の家は宇宙全体です。体や物には障壁がありますが心にはそれがありません。思ったら直ぐに何処へでも何時の時代にでも飛んで行けます。ですから心の家は宇宙全体です。その宇宙が地と比べて邇ちかい、と言うのです。天が地と比べて近い、とはどんな意味なのでしょう。

もう少し突っ込んで考えて見ましょう。心の宇宙といえば心全体ということです。それはまた一人の人間の人格全部ということにもなります。それでは地とは何でしょうか。心の宇宙が眼に見えないものとすれば、地とは眼に見えるもの、現実的なもの、という意味に取れます。そこで「心全体が地に近い」とは心全体人格全体がそのまま現象となって現われ出て来ること、の意味に取れます。言靈子とは宇宙全体がそのまま現象となって現われ出ようとする力動韻ということです。

喩えば明日大切な出来事を処理しなければならぬ、とします。どう対処したら良いか、仲々考えがまとまりません。「あゝでもない、こうでもない」とうとう夜中も過ぎてしまいました。その時ふと諦めの心が湧いて来ました。「自分の力ではどうすることも出来ないのかも知

れない。それなら、その場で当って砕ける」そう心が決まります。この「当って砕ける」は決して投げやりの気持ではありません。成功することを念願しながら、その場に臨んで自分の持つている力全部を総動員して事に当ろうと決心することです。このように何らの先入観も持たずに、全身全霊を以て事に当ろうとする瞬時の人間の創造意志の力動、これが父韻言靈子なのです。

妹須比智邇の神

言靈イ…この言靈イのイはアイウエオのイではなく、ヤイユエヨのイであります。さて須比智邇の神には冠に妹いもの字が付いています。前の宇比地邇の神と妹背いもせ、陰陽・作用反作用の関係にあることを示しています。宇比地邇が宇宙全体がそのまま現象界に姿を現わす韻というなら、それと陰陽・作用反作用の関係となる動きとはどんなものなのでしょう。それは言靈子の宇宙が一瞬に現象化する力動であるのに対し、言靈イは「現われ出て来た動きの持続する働きの韻」ということが出来ます。パツと現われたものが弥栄いよさかに延び続く姿、と言ったら良いでしょうか。

神名を見ましよう。須比智邇すひちには「須すべからく智ちかに比ぶるに邇ちかかるべし」と読めます。宇比地邇

が地に比べているのに対し須比智邇は智に比べています。その違いは次の通りでしょう。先の例にありますように、どう対処したら良いか思いあぐんで、「下手な考え休むに似たり」と先入観を振り切つて、清水の舞台から飛び下りるつもりで立ち向かう時は、一瞬大地を呑み込む勢でぶつかりますが、一旦飛び下りてしまえば、後の相手との交渉は自分の持つている経験的知識をどう使うか、に掛つて来ます。決意して飛び出す時が言霊子とすれば、飛び出した後は言霊イです。それは否応なく自分の知恵に頼らざるを得ません。「須らく智に比べるに邇よか」の神名はその事を指しています。太刀を振り落す瞬間が言霊子なら、振り落された太刀を持つ手がどこまでも相手に向つて延びて行く様が言霊イということです。

以上言霊子・イの二つの父韻の内容についてお話しました。御理解を頂けたでありましょうか。先に古事記の神名はすべて言霊の内容を指し示す指月の指であると申しました。ですから指し示す指だけを見ても、それが指し示す実際の物事の内容は決して理解することが出来ません。と同様に言霊子・イについてお話しましたこの文章もまた指月の指なのです。文章について御理解頂けた読者は更にそれを参考になさり、読者御自身の生活や心理の中でその父韻の実際の姿を自覚なさつて下さることを希望します。続いて言霊子・イ以外の父韻のお話を進めることにします。

角杖の神、妹活杖の神

言靈キ・ミ・言靈キ・ミを指差すこの二神の名前は比較的容易に理解出来ます。人間が生れた時から授かっている天与の判断力・知恵のことを各宗教書では剣とか杖とか、または杖・柱などと呼んでいます。人がこの世の中に一人生きて行くための頼りになる抛り代と言った意味を持っています。この判断力で人が生きるために必要な知識・信条・習慣等々を、角を出すように掻き繰って自分の方に引き寄せて来る働きの力が父韻キであります。その働きとは反対に、自らの判断力によって（杖）、生活を更に発展させようと世の中の種々の物に結び付こうとする力動、これが活杖の神である言靈ミです。手蔓・物蔓・金蔓・人蔓手当たり次第に結び付こうとする当今の政治家氣質を思えば理解は早いでしょう。けれどこの力動は何も政治家だけのものではありません。人間にとつてこの世に生きて行くのに最も必要な創造意志のパターンなのです。

意富斗能地の神、妹大斗乃弁の神

言靈シ・リ…この二つの神名から推理して言靈の内容に到達することはほとんど不可能に近

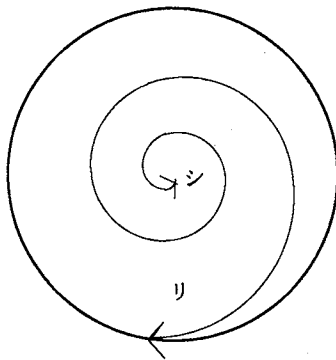
いように思われます。けれどもこの神名を基にして人が自分自身の心の内の動きを見つめて行きますと、言霊の内容に行き着くのもそれ程難しいことではありません。

意富斗能地とは大いなる量はかりの働きの地と読めます。人は物事がうまく識別出来ない時、あゝかこうかと試行錯誤します。迷い努力した末にやっと理解納得して、事は終り、事態はここで一段落します。静まります。静まったのは何もかもなくなってしまった事ではなく、経験知識として物事の識別の土台となつて残ることです。

その土台が地です。意富斗能地とは大きな識別（斗）の働き（能）が土台となるように静まること、と受け取れるでしょう。言霊シとは人の心の動きが心の中心に向つて静まり収まる働きの韻はかりなのです。

大斗乃弁とは大いなる量はかりのわきまえ、と読めます。

言霊シとリは陰陽・作用反作用の関係にあることから考えますと、人間の識別の力（斗）が心の宇宙の広がりに向つて何処までも活用されるよう発展伸長して行く力動韻と見る事が出来ます。また言霊リの行であるラリルレロが渦巻状・螺旋状の動きを表わすことから、言霊シ・リの内容を図示しますと、下の様に画かれます。



於母陀琉の神、妹阿夜訶志古泥の神

言靈ヒ・二…この二つの神名からは容易に言靈の内容を推察できません。於母陀琉の神を日本書紀では面足尊おもたるとのみことと書いてありますように、表面（面）に完成する韻ということが出来ます。何が完成することなのか。人はその人の前で起っている物事を的確に把握することが出来ず、思い悩むことがあります。それが何かの瞬間、事情が呑み込め、どういふ事かの表現が頭の中ではつきりと出来る事があります。このように物事の事態をしつかり把握してその言葉としての表現が心の表面に完成する働きの韻、これが言靈ヒであります。

この言靈ヒと妹背の關係にあります妹阿夜訶志古泥あやかしこねの神が指差す言靈二の内容は自ずと明らかであります。阿夜訶志古泥とは「あやにかしこき音ね」の意味です。阿夜あやと夜よるの字が使われている事から、心の表面とは反対に心の中心部分を暗示しています。心の底の部分に物事の原因となる音ねが煮詰り成る韻、それが言靈二であります。

例を引いて見ましょう。物事の実際の内容が理解出来、それをどう表現したら良いか、が言葉として完成し、「分った」と思つて心が晴れやかになつた、その時、同時に心の中心には已に次の事態の発生する根つことなるものが、何か知らないが煮詰り成っていることです。その

動きに於て前者が言靈ヒであり、後者が言靈ニの父韻であるわけです。

以上八つの父韻チイキミシリヒ二の内容とその指月の指となる古事記の神名についてお話ししてきました。お分り頂けたでしょうか。この父韻については、先にお話ししましたように易で八卦といい、仏教で石橋と呼び、キリスト教で神と人との間の契約の虹と表徴して、その存在に言及はしているものの、その表現は飽くまで概念的・比喩的なもので、父韻の実体はここ数千年の謎とされて来たものなのです。またここにお話してきます言靈の学の中でも奥義と言つてよい部分でありますので、読者におかれましても種々比喩で表現されます文章を参考に自分の心の中に踏み入つて父韻の実際の姿を確認して頂き度いものであります^註。八つの父韻が理解されて来ますと、人間の心の全構造の輪郭が略々見えて来ることになります。

また次のように言うことも出来ます。古事記の中に出て来る幾多の神様の名前は全て言靈の原理の内容を表徴する所謂「指月の指」でありますので、それら神様を担ぎ廻り、やれ御利益だ、崇敬せよ、と叫びましても、個人的に心を慰めるのに多少の役に立つかも知れませんが、それ以外何らの意味もないことであります。「あれが月ですよ」と指差すその指を云々しても何も始まるものではありません。

それなら古事記神代の巻にある神名は、古事記の編纂者である太安万侶が言靈を表徴するた

めに創作した名前なのか、と言うとそうではありません。日本史の年表に「六四五年、天皇記・国記消失」とあります。その時代までの古代の天皇家や国家の歴史の記録が消失してしまつたのですが、その写しであると言われて民間に伝わる竹内古文獻・大伴文獻やその他上うへつみ記等を見ますと、古事記の神代巻にある神名と同じ名前なまえの天皇名や人の名前が多勢発見されることです。この事から太安万侶は言靈の一つ一つに、その内容を表徴する所謂指月の指となるのに適当な名前を選び神名として用いたに違いありません。現代に生きる私達が自らの心の中に踏み入つて一つ一つの言靈を確認する時、その表徴である神名が「成るほど」と首肯されることから、太安万侶の意図の正確さが証明されます。

古事記の編者は何故そのようなまどろこしい謎々で言靈の原理を後世に伝えようとしたか、その解説は後章に譲り、ひとまず八父韻の説明を終えます。

【注一】八つの父韻の確認についての参考のため、今迄の説明の他に著者の言靈学の師であつた小笠原孝次氏、そのまた師であつた山腰明将氏（共に故人）の発表された父韻の説明を付け加える（下図参照）。

	チ	イ	キ	ミ	シ	リ	ヒ	ニ
小笠原氏	創造	繁栄	収納	整理	調和	滲透	開顯	成熟
山腰氏	陽出力	飛至力	陰攝力	旋回力	透刺力	螺旋力	開發力	吸引力

親音

伊耶那岐の神、伊耶那美^{いざなみ}の神

言靈イ・ヰ…先天宇宙の剖判が意識の原点である天乃御中主の神・言靈ウから始まり、主体側の言靈アオエの母音、客体であるワヲエの半母音、それに母音・半母音を結んで目に見える現象を生むキツカケとなる八つの父韻チイキミシリヒ二が確認されました。先天を構成する十七の言靈のうち十五個が出揃ったこととなります。残りの二個の言靈が伊耶那岐・美の二神である言靈イ・ヰであります。

ここで今迄に出て来た言靈を振り返って考えて見ましょう。初め何も無い宇宙が剖判を開始して次々と母音ウアオエと半母音ワヲエが確認され、次にその双方を結ぶ八つの父韻チイキミシリヒ二の働きが出て来ました。この事について次のような疑問が出て来るのではないでしょうか。言靈ウアオエ、ワヲエの母音・半母音は宇宙の実在ですから、それが永久に存在する、

ということとは分る。けれどその双方に働きかけて現象を生む八つの父韻は、何故そのような働きかけの力を持つているのか。その原動力は何処から来るのか、です。宇宙の实在に働きかける人間知性の原律といわれる八父韻の力の出所は何か、ということとです。そしてその疑問に根底から答えるのが言霊イ・イなのです。

人間の心の先天構造の宇宙剖判はこの十六・十七番目の伊耶那岐・美の言霊イいざまで来て、人間の創造意志が「いざ」と発動されます註。言霊イ・イは創造意志の宇宙です。そしてこの創造意志の働きの父韻チイキミシリヒ二なのであります。

【注一】今は使われなくなりましたが、昔は「いざ」を去来と書いた。また去来を「こころ」とも読んだ。伊耶那岐は心の名の氣であり、伊耶那美は心の名の身ということである。心の名とはつまりは言霊のことを指す。

伊耶那岐の神の出現で出揃った五つの母音について考えて見ましょう。言霊ウは人間の五官感覚の意識が出て来る元の宇宙です。やがてこの意識から人間の欲望が、産業経済活動が起つて来ます。言霊オは経験知の元の宇宙であり、言霊アは感情、言霊エは実践智、言霊イは創造意志の宇宙です。

五つの母音宇宙から現出して来る現象のうち、言霊イの創造意志というものは現象としてそのものが現われることがない事にお気づきになると思います。創造意志は縁の下の力持ちで、他の四つの母音から出て来る現象の原動力になるものです。五官感覚に基づく欲望が起きるのも創造意志が底に働くからです。経験知も感情も実践智もその底で生きようとする意志があるからです。言霊イは他の四つの母音ウオアエを支え、統合する立場にあります。

言霊イ（イ）はチイキミシリヒ二の八つの父韻に展開して、この八父韻がウオアエ、ウヲワエの母音半母音をそれぞれ結び合わせ、現象を生み出します。

同時にこの言霊イは、生み出されました現象の一つ一つに、それに適ふわしい名前を付ける根本原理でもあります。日本語の名とは一音一音の言霊の結合で付けられています。その言霊とは実は物事を人間の創造意志（言霊イ）の見地に立つて見た時の根本要素のことに他ならないのです。

以上お話しました言霊イの働き、内容をまとめてみましょう。それは三つあります。

第一は人間の創造意志・生きようとする意志となつて、他の四つの母音ウオアエを支えます。
第二は人間の創造知性の根元律である八つの父韻チイキミシリヒ二に展開して、父韻は四母

八 父 音

親音	キ	ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	イ	親音
	エ	3 2 の 現 象 子 音								エ	
	ワ									ア	
	ヲ									オ	
	ウ									ウ	

五母音

(主体)

音・四半母音を結び付け、現象である子音を生みます。
 第三は生み出された現象に相応しい名前を付ける根本の原理となります。

五半母音

(客体)

これら言霊イの三つの働きを分り易くするために、上の図を挙げてみました。言霊イは他の四つの母音の統轄力として縦に五つの母音の頂点にあり、横にチイキミシリヒ二の八つの父韻に展開して、その父韻が各母音と半母音同志を結び付けて、 $8 \times 4 \parallel 32$ で目に見える現象の要素である三十二個の子音を生み、更にそこに確認された合計五十の言霊によって物事の真実の姿に最も相応しい名前を付けることを可能にします。この世の出来事の全てを創造する主人公であると同時にそれらのすべての名前を付ける原理であるもの、そのために言霊イ(キ)は他の四つの母音や八つの父韻と区別して特に親音と呼びます。言霊イである伊耶那岐の神を神道で創造主神、または各宗教で造物主と呼ぶ所以なのであります。

次に言靈イ・斗の内容を表わす漢字を拾って見ましょう。
生・意・胃・石・五・居・井・稻等が挙げられます。

以上で人間の精神の先天構造を構成している十七個の言靈ウ・アワ・オヲエエ・チイキミシリヒニ・イ斗が全部出揃いました。この先天の十七音の言靈の活動によって、後天である人間の色々な現象が生み出されて行くことになります。その後天現象の最小の単位を言靈子音と呼びます。その数は先にお話しましたように四つの母音掛ける八つの父韻で計三十二個の子音となります。この子音を生む作業を「子生み」と呼びます。この世の現実の現象で言えば、父と母が結ばれて子を生むことです。

子生みのお話に入る前に、今迄お話ししました先天構造について更に詳しくお話をして置きたいと思えます。心の先天構造といいますが、人間が人間である限り誰しもが天性与えられている精神の基本構造でありますので、この先天構造の内容を詳しく知り、それを自らの心の内に確認すればする程、目の前に起る人間の心の営みについて、その成り立ちや将来の動向に的確な判断が下せるようになるからであります。それは丁度物質の原子核内の構造が正確に分れば、物質現象の研究の飛躍的な進歩が可能になると同様であります。

先ず宇宙剖判のお話で確認されました先天十七言靈が過去の文献でどんな名称で呼ばれてい

たか、を明らかにしましょう。五母音五半母音を左図の様に縦に並べます。アオウエイを神道で天之御柱、ワヲウエヰを国之御柱と呼びます。そして母音と半母音を結ぶ八つの父韻のつながりを天之浮橋と言います。五つの母音は仏教では地水風火空の五大、儒教で木火土金水の五行、キリスト教では五大天使と言つて表徴してあります^{注二}。皆その実体はアオウエイの五母音のことです。そして人間に自覚されたこの五母音の並びを神道で心柱（忌柱・天の御量柱）と呼びます。伊勢神宮の正殿の中央、床下に五尺の白木の柱が安置されていますのが、その表徴です。

人の心はこの五つの母音の覺たなわりを住家としています。こ

ワヲウエ・ヰ（国之御柱）

二	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ
└──────────────────┘							
八父韻							
天之浮橋							

アオウエ・イ（天之御柱）

れ以外の場所はありません。心の住家である五重いえの界層、それが人の住家であるいえ（家）の語源です。また伊耶那岐・美の神である言靈イ・ヰが交流して森羅万象を生む道いのちを生命いのち（イの道）と言います。その生命いのちが発動する瞬間が今（いの間）です。

昔の神道ではアオウエイ注三五母音を天之御柱として心の中に立て、自覚することを「いつ（齋き）」と言いました。五作いっく（五作いっく）または五次いっまの意味であります。母音と半母音が結ばれて現象を生む父韻イ・チイキシシリヒニ・ヰの十音の活動を「とつぎ（嫁ぎ）」と言います。

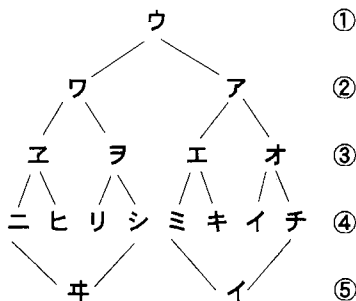
十作とつぎまたは十次とつぎの意味であります。

話は変りますが、宇宙の真理としての神に対する人間の態度に三種類があるのを御存じでしょうか。それは「いつき」「とつぎ」と「おろがむ」態度であります。「いつき」は自己の心中にアオウエイの五母音宇宙を確認・自覚することです。「とつぎ」とはイ・チイキミシリヒ二・卍の十音を運用して文明社会を創造し経営して行く道であります。最後の「おろがむ」とは愚か者が神に対する態度です。昔の日本人の神道は斎き嫁ぐ事のみで、おろがむ態度はありませんでした。神や仏を自分とは違う対象として、客体として拝む態度は、幼稚な魂を教育するために仏教やキリスト教が用いました方便としての方法です。それを後になつて興つた日本の神社神道が信仰としてのやり方を真似たものであります。

【注一】仏教の五大、儒教の五行と言霊五母音との関係は次の図の通りである。また江戸初期天台僧上なる天台宗の僧侶が江戸城の守護として目黄、目赤……など五つの目の色の不動尊を城の廻りに祀っていた。参考のためその不動と言霊との関係を併せて掲載する。因に仏教の不動明王とは言霊で言えばアオウエイ五母音が心の中にスックと自覚・樹立された姿である。この時心は如何なることにも動じない事を不動尊と表徴したものである。

【注二】ここに五母音の縦の順序をアオウエイとする理由は次の通りである。言霊の学が進むにつれて、五十音が全て確認されることになる。その自覚された五十音で人間の心を表わすよう並べると、心の持ち方によつて種々の五十音表を得ることが出来る。母音がアオウエイと並ぶ音図を古代「天津菅麻」と呼んでいた。スガスガしい心の衣の意で、人間が生れた時から与えられた真^{*}つさらな心の構造を示している。生れたままの人間が持つ判断力は母音アオウエイの縦の順序で表わされる。

以上で先天十七言霊についての復習を一応終えることとして、宇宙剖判の順序に従つて十七個の言霊を並べると下の図のようになります。昔、古神道はこの先天の構造を天津磐境と呼びました。天津は先天の意、磐境は五葉坂^{いばさか}という意味で、五段階の言葉の階層ということであり、天津磐境につきましては後程再び検討することとなります。



①	不動	方角	五行	五大	言霊
②	青	東	木	風	ア
③	黒	北	水	水	オ
④	白	西	金	空	ウ
⑤	赤	南	火	火	エ
	黄	中	土	地	イ

島生み(その一)

ここに天津神あむもろ諸の命みこと以らて、伊耶那岐の命伊耶那美の命の二柱の神に詔ことよりたまひて、この漂える国を修理をさめ固め成せと、天あめの沼矛ぬぼこを賜ひて、言依ことよさしたまひき。かれ二柱の神、天あめの浮橋うきはしに立たして、その沼矛を指さし下おろして画かきたまひ、塩しほころころに画き鳴らして、引き上げたまひし時に、その矛この末さきより滴したたる塩の積りて成れる島は、淤能碁呂島おのごろしまなり。その島に天降あちりまして、天あめの御柱みはしらを見立て八尋殿やひろどのを見立てたまひき。

心の先天構造を構成している十七個の言霊が出揃つて、その十六・七番目に当る伊耶那岐・美の二神、言霊イ・杵が「いざ」と立上がり、いよいよ二神の子供である三十二の子音を生む

ことになります。「島生み」と名付けられましたこの章は、実際に岐・美二神が子である子音を生む前にどんな事が行われたか、という言わば子を生む前の前奏曲とでも名付けたらよい章であります。文章の一節々々を追って説明して行きましょう。

ここに天津神請の命以して、

天津神とは先天の十七神のことです。けれどこの文章を文字通りに「先天の十七神の命令によつて」と解釈したのでは言霊の意味が出て来ません。古事記神代の巻が言霊原理の教科書であることを頭において考える必要があります。古事記の神々の名前が言霊を表わす指月の指であることの見地に立ちますと、神様の物語がすぐ生きた人間の心の活動の話として了解出来るようになります。「神様の命令で」ということは「人間の心の先天構造である十七の言霊が活動を開始して」という人間の心の働きの話となります。

伊耶那岐の命伊耶那美の命の二柱の神に詔りたまひて、

「詔りたまひて」を命令して、と解釈せず、先天十七の言霊が動き出し、その十六・七番目の言霊イ・牟の創造意志が「いぎ」と立ち上つて、と生きた人間の行為として考えますと意味が

明瞭になります。ここに伊耶那岐・美の神ではなく伊耶那岐・美の命みことという言葉が出て来ました。伊耶那岐の神といえは、原理法則であり、原理法則としての存在という意味であり、命みことといえは原理法則を表現した言葉またはその実行者である人間を示すこととなります。^{註一}

【注一】古事記の神（かみ）と命（みこと）との関係は仏教の仏（ほとけ）と菩薩（ぼさつ）とのそれと似ている。修行により自己の本性が空（宇宙）であることを知り、更に発心して全人格の完成である仏に向つて精進する人を因位の菩薩という。仏道を完成した後、この世の底にあつて苦悩に沈む人々を救う為にこの世の中に身を現じ、人間として理想世界（仏国土）の建設に励む者を果位の菩薩という。神と命、仏と果位の菩薩は同じ関係である。

この漂える国と修理の国の成せと、

先天の構造要素は全部出揃つたけれど、それは目に見えない先天のことで、現象としてはまだ何も生れて来ない渾沌（漂える）とした状態であります。この状態を日本書紀には「滄海」^{あまのうみ}「天霧」^{あまぎり}などと記し、また「我が生める国、ただ朝霧のみありて、薫り満てるかも」と述べられています。現象が生まれて来る以前の状態の美しい表現です。

修理め固め成せ、というのは、人間に与えられている天与の性能を働かせて、宇宙の中で人間に関係する一切のものを創造し、確認して、それぞれに名を付け、人間の生活に相応しい文明社会を建設して行く事でありませぬ。それは渾沌として何だか分らない現象の世界の物や事を、人間の天与の能力によって確認し、応用し、その内容に依じて適当な名を付け、その事物の意義を決定して行く事だという事が出来るでしょう。

何だか難しい表現になつたようです。物事や社会を創造する、と言いますと、直に工場で物を生産したり、農業で米や野菜を作り、または道路やダム、そして近代的な社会を創つて行くことである、と思ひます。勿論それに違ひはないのですが、それは物質という立場、客体という立場から見た言い方です。心の側、主体の側から見て表現したらどうなるでしょうか。

以前に「無名は天地の始め、有名は万物の母」という老子の言葉を取り上げたことがあります。そこに物があつても、見る人が居なければ何も始まりませぬ。名前がないこと、それが物が始まる以前、全てのものの始まりです。人が居て、物を確認し、それに名前を付けること、それが物があるということになります。名前がなければ、それが何であるかが分らず、渾沌ということです。

「修理め固め成せ」というのは、先天の十七個の言霊を働かせて、子音である現象の要素を生み、その子音を結合させることによつて一切の現象に名前を付け、その名前自体が指し示す

道理を実現するような人間社会を創造して行く、ということなのです。言葉が一切のものの母であり、人間の社会の実体は言葉であり、言葉が次々に発展して行くことが文明の発展ということになります。人間の社会において「創造する」ということを心の側から見ると以上の様に言うことが出来ます。

天の沼矛と賜ひて、言依りたまひき。

矛ほことは古代の武器で、両刃の太刀に長い柄がついたものと、辞書にあります。古代の神々の物語としてはそのままの説明で済みますが、言靈の教科書としては何を意味するのでしょうか。それが言葉に関係するものとなりますと人間の言葉を発する器官即ち舌のこととなりますでしょう。舌は矛の形をしています。舌を動かして言葉を発します。けれど舌だけで言葉は出ません。舌を動かすのは心です。心である靈たまに言葉という音こと(言)を合わせて言靈(ことたま)とする器官が舌です。この舌で宇宙の実在を表わすと縦にアオウエイの五母音となり、現象を生む人間の創造知性の律を表わすと横にチイキシリヒニの八父韻が現われます。沼矛ぬぼこの沼ぬは貫ぬ(横)の意味であり、矛は靈凝ほこの意であります。父韻チイキシリヒニを発音してみて下さい。特に舌の微妙な働きを必要とすることが分るでしょう。

天の浮橋に立たして、

吾と汝、私と貴方、主体と客体は母音と半母音で示されます。その主と客は、唯それだけでは独り神で何の現象も生むことはありません。その黙っている実在と実在との間を取り持ち、そこに現象を生んで行くキツカケとなるのがチイキミシリヒ二の八つの父韻です。この主と客の間に懸ける橋、これを天の浮橋といひます。「天」は先天の意、「浮橋」とは先天の宇宙の中で主体と客体をわたす橋ということです。「天の浮橋に立たして」を人間の心の働きとして表現しますと、「伊耶那岐・美の二神である言霊イ・牟の創造意志が、その実際の働きである八つの父韻となつて活動して」ということになります。心の先天構造が活動を開始して、いよいよ後天の実相の言葉を生み出す瞬間です。「立たして」といふのは伊耶那岐・美の二神が天の浮橋である八父韻の両端に立つて向き合うことでもあります。

その沼矛と指し下して画きたまひ、

「画きたまひ」は攪きの謎、かき廻すことでもあります^{註二}。人間が舌を使って音を色々に出して見ることです。八つの父韻の作用で種々の現象（言葉）が現われ出て来ます。

【注一】古事記の他の訳本には「画き」を「攪き」と書いてあるものも見受けられる。攪き廻す意である。

塩ころころころろに画き鳴らしして、

塩（シホ）は四穂ほの意で、四つの母音言霊を指します。アオウエの四音です。「しほ」は他に機（しほ）の意味もあり、物事の変化のキツカケを言い、それは八つの父韻のことでもあります。「汝は地の塩なり」という新約聖書マタイ伝の言葉はこの意味です。けれど今は「塩」は四母音の事でありましょう。八父韻を以て四つの母音アオウエを舌を使ってかき廻して音を出して見ることをいいます。父韻と母音の結合で子音が生まれます。例えば $k + a \parallel k a$ 、 $t + u \parallel t u$ 等でカ・ツ等の子音が出て来ます。その子音の数は父韻の八、母音四で $8 \times 4 \parallel 32$ 即ち三十二個の子音が生まれます。

引き上げたまひし時に、その矛の末より滴る塩の積りて成れる鳥は、舌を使って八つの父韻で四つの母音をかき廻し、引き上げて、さてどんな事が起るか。舌の

先から音が出て来ます。島しまとは宇宙の「縮まり」の意。一個の言靈は広い宇宙のある一部分を占有（しめ）その内容を分担しています。島とは広い海の一部を占め、その特徴を表わしています。父韻Sで母音Aをかき廻せばサという心の縮まりとなります。サという一音は、宇宙中のサと名付けるべき全ての物事を締めくくって表現します。この様に締めくくられた宇宙の部分々々を島といいます注一。

【注一】現代社会ではこの世に存在する物事を限定して分類・締めくくる規準として哲学的・論理的な概念を用いる。古代日本語の如く、概念を一切使わず直接の単音を以てそのもの実相ズバリを表現する方法は他に見ることが出来ない。言靈布斗麻邇の特筆すべき能力である。

おのじろしま
漢能恭呂島

己おのれの心の縮まり、という意。舌を使い父韻で母音をかきくって見ると音が出ました。その音の一つ一つが人の心の部分々々をそれぞれ締めくくって表現している、という事が分つて来た、という意味です。

この事を日本書紀には次の様に美しく表現しています。

「二神（伊邪那岐・美）天霧の中に立たして曰はく、吾れ国を得んとしたまひて、乃ち天瓊あめのひ矛を以て指し垂して探りしかは礫馭おのこ盧島を得たまひき。則ち矛を抜きあげて喜びて曰はく、善きかな国のありけること」これは人類が初めて言葉でもって自分の見・聞き・触れた事を表現することが出来た喜びである、ということが出来ましょう。言葉という人間の芸術の始まりです。

イの島に天降りまして、天之御柱を見立て八尋殿を見立てたまひき。

天之御柱とは主体であるアオウエイ確立の姿を言います。これに対し客体であるワヲウエキを国之御柱と呼びます。この柱は主客合一の絶対の実在として心の中心に一本となつて立つている場合と、相対的に主と客として二本立つ場合とがあります。この絶対と相対との立場については言霊ウの章で詳説しました。宇宙の中の一切のものはこの柱より現われ出て、またこの柱に帰って行く宇宙の根本実在であります。註一。

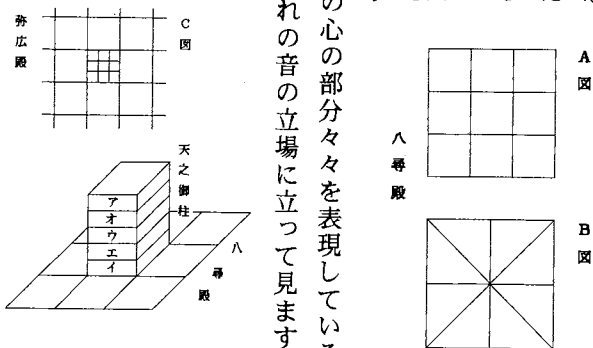
八尋殿やひろどのとは文字通り八つを尋ねる神殿という意です。神殿とはこの場合心の中に画かれる図形といったらよいでしょう。図で示しますとA図またはB図の如くなります。この八つの間に

チイキミシリヒ二の八父韻が入ります。この図形は基本となる八数の原理を何処までも保つて二乗・三乗……と次元的に限りなく発展して行きますので「弥広殿やひろどの」とも書きます（C図）。

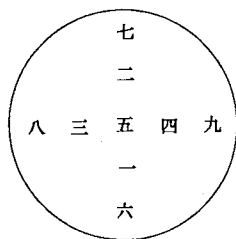
そこで文章の意味する所をまとめますと次のようになりま
す。「人間が舌を使って八父韻を活動させ、四つの母音の字

宙をかきまわすと音が生れました。その音の一つ一つが自らの心の部分々々を表現していることが確かめられました。そこでその自らの心を表わすそれぞれの音の立場に立って見ますと、自分の心の中心にアオウエイ・ワヲウエヰの柱が立っており、その柱を中心にして八つの父韻が入る間が展開していることが分つて来ました。」

【注一】天之御柱のことを日本神道は「一心の靈台、諸神交通の本基」と神道五部書で言う。伊勢神宮ではこの天之御柱を長さ五尺の白木の柱で象り、本殿中央の床下に安置している。心柱または忌柱と呼ぶ。また易経に河図・洛書かとらくしょといわれるものがあるが、河図と



は天之御柱を数の図形で、洛書とは八尋殿を数学の魔方陣の形で表わしたものである（D・E
図）。



D 図 河図

四	九	二
三	五	七
八	一	六

E 図 洛書

「思う」と「考える」とどう違うか

人間の心の先天構造を形成している十七の言霊が活動を開始して、目に見える現象子音を生む前の前奏曲の一つとして、人間の心の「思考」ということについて確かめておきたいと思えます。

思考とは思うことと考えることです。思う、と考える、とはどう違うのでしょうか。一見同じ様に見える二つのものが、よく見ると大変違っている、ということがよくありますが、「思う」と「考える」もその例の一つであります。「思う」とはその漢字が示しているように「田の心」です。田の心って何だ、とお分りにならない方が多いことでしょうが、後程詳しくお話することにしませう。一方「考える」とは「神返る」が語源です。先ずこの「考える」の方から検討を始めることにします。

人が考える、という時、何時もついて廻るものは「何時」「何処」「どうやって」という疑

問符です。ある出来事を思い出して「あれは何時・何処で起った事だったか」と考えることから、多数の似通にかよった経験の記憶を思い起こして、それらの出来事の共通の面は何か、共通の原因は何からか、等々考えます。一つ一つの経験から、それらの経験が起って来る初めの原因、法則・原理を求めようとする事です。多から一（神）へ帰ろうとすることです。このような心の働きのパターンを哲学的には帰納法と呼びます。「考える」の語源が「神返かみかえる」であることとお分り頂けることと思います。そしてこの「考える」という心の働きのパターンは過去三千年の間、主として西洋文明の精神の基礎となつて来ました。現在隆盛を誇る物質科学文明はこの心の働きの所産です。

経験まかから遡まかつてその原因・法則を求めて行く「考える」心の働きを更に深く検討して見ましょう。経験から法則へ、と言いますが、経験を沢山集めれば法則が発見出来るか、というと、そうは行きません。経験・出来事は法則を求めるための材料ではありませんが、主人公にはなれません。では法則を求めるのは何か、といえば、それは人間の心です。法則を発見するには「どんな経験をどの位集めたら良いか」「どう取り扱ったら良いか」「どの見地に立つて調べるか」等々を定めるのは人間の心なのです。

更に検討しましょう。経験を集め、そこから法則を求めて行く主体が人間の心だ、と言っても、人間の心の感じ方は個々まちまちです。思い思いの観察からでは信頼出来るデータは集ま

らず、正確な原理・法則を発見することは出来ません。観察する人々の心はまちまちでも、科学の正確な法則は何故発見が可能なのでしょう。それは個々の人々の考え方・見方は違うことがあつても、人間なら誰しもが生れながらに与えられている心の基本の働き（心の先天構造）が同じだからであります。発見された原理・法則が正確であり、客観的に真理だと言う事が出来るのは、唯ただ人間に与えられている心の先天構造が唯一・真実である、ということに拠つていふと言ふことが出来ましよう^{注一}。

【注一】知識の客観性についてのカント哲学の一節を挙げておく。「知識が経験と共に始まるのは、それが経験から生ずるという意味ではない。知識の材料は経験によつて与えられるが、その本質である客観性は経験からは派生されない。このような先天的要素を認識の形式と名付けると、先天とは要するに認識の形式を意味する。従つてそれは第一にそれ自体が絶対に確實であり普遍的に妥当なものでなければならぬ。第二にそれは如何なる経験にも基づかず、自ら独立の根源を持たねばならない。形式の根源は純粹な主観にあつて経験にはない。この純粹主観は先験的統覚である。」（岩波哲学辞典）経験知から出発して人間の心の中に活動している先天構造の内容を模索することが、西洋哲学の仕事であつた。

話が大幅屈ツポクなつて来ました。けれど、ここの所は人間の心の働きというテーマにとつては大変重要なことでありますから、続けて検討して見たいと思います。物事の正しいか、誤りかを決定するものが結局のところ心の先天構造である、ということが分りますと、そこから色々な事柄が展開して来ます。

西洋文明はこの「考える」ということを基本の精神として物質科学を發展させて来ました。色々な出来事を冷静に観察し、データを集め、推理して、それらの現象が起つて来る共通の法則や原理を探究して行くこと、言換えますと現象を観察することから出発して、その元であり一である神に帰ろうとする努力によつて、今日見るような華やかで便利な物質科学文化を創り上げたのです。

しかし、多くの経験とそのデータから素晴らしい精密な原理・法則を発見することを可能にしている人間の「考える」という心の働きの根本精神であります。「心の先天構造とは何か」の問題に關しましては、西洋の哲学は今尚確乎かたがたとした研究の成果を得られないままなのです。客観的物質世界の法則を次から次へと発見して来た西洋は、その真理の発見を可能にしている人間の心の主観的原理については、そのほとんどを発見してはいません。物質科学のもたらした輝かしい成果の半面である原水爆戦争の恐怖や大規模な公害の危険が起り、それを防止し解決する根本対策を打ち出すことが出来ない人間の精神の研究の立ち遅れに對して、「西洋のたそ

がれ」「科学の暴走」とか「哲学の貧困」などと叫ばれていますのも故なしとは言いい切れません。すべての原理・法則が真理であることを可能にしている唯一の拠り所である人間の心の先天構造の内容が確認されなかったための当然の結果と言えましょう。

以上検討して来ました人間の「考える」という働きに対し「思う」という働きはどのようなものなのでしょうか。「考える」ことが昔から西洋文明の基盤であったのと反対に、「思う」は東洋の文明の基礎であったと言えましょう。東洋には昔から一である神とは何か、という問題を暗中模索する「神返る」思考は発達しませんでした。その反対に心の先天構造の内容が遠い昔から人類に伝わる伝統であり、明らかに知られたものであるという立場に立ち、その先天の内容から出発して、その原理・法則を人間の実際の生活にどのように適用し、国家や社会の文化を造って行くか、という営みが東洋文明の基本心理でありました。その心の働きは「考える」ではなく「思う」ことです。哲学的に言えばその働きは演繹えんえきです。東洋で発生した各宗教や東洋哲学は全てこの心の働きの現われであります^{注二}。

【注一】東洋に於ける各宗教の中で心の先天構造がどのように説かれているかを下に簡単に示して置く。それぞれの宗教・哲学の研究者の方々の参考にして頂きたい。

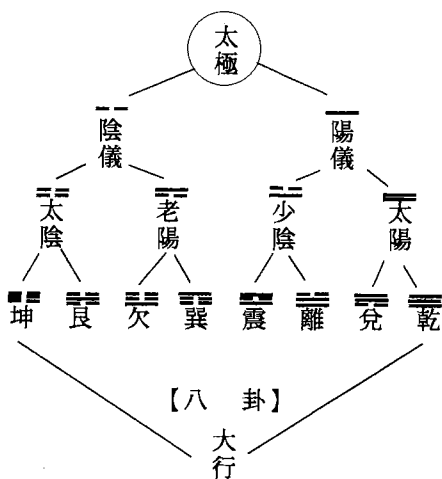
イ、中国において大昔伏羲が始め、孔子が注釈を施したと言われる易経は、先天構造を先

章に示した河図・洛書の他に、数や概念を以て次のように教えている。これはその内容の意味において天津磐境の原理と全く同じである。

口、 仏教典の中で先天構造を表徴しているのは法華經第十一品にある多宝仏であり、その仏の精神構造を表わす多宝仏塔である（法華經、見宝塔品第十一を参照）。現

在、古い寺院には多宝塔があり、その外側の壁が円形または六角形であるのですぐ識別出来る。多宝仏は日本古神道の布斗麻邇

の神である伊耶那岐の大神に当る。釈迦仏の法華經説法は、多宝仏と多宝仏塔が出現し、それと同座する時にのみ行われる。そして釈迦仏が法華經を説き、その説法に誤りがないかどうか、を多宝仏塔の構造（先天構造）によって審判し、誤りがない時「善哉」と賛辞を与え、承認するのが多宝仏の役目である。仏説では以上お話ししたように、一切の原理・法則の発見を可能にする人間精神の先天構造の意義を、釈迦仏の説法を多宝塔の

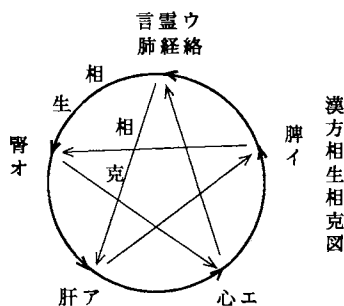


原理構造に照らした多宝仏の承認という関係で表現しているのである。

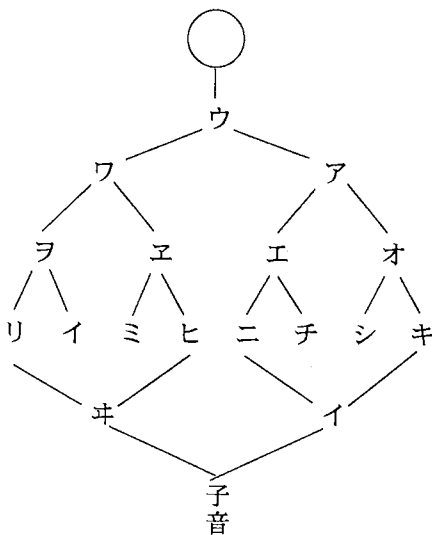
八、心の先天構造の原理を医学に応用したものとして東洋本草学^{ほんぞうがく}または漢方医学がある。特に漢方医学に於ける「経絡^{けいらく}」と「つば」による診断法には先天構造原理の応用がはつきり見られる(図参照)。

人間の心の先天構造を已に明らかになっているものとして受取り、その根本原理を社会の文化創造のために適用して行こうとするのが東洋の精神であります。東洋の宗教や哲学によつて「自明の理」とされた先天構造の捉え方も、厳密に言えばその理解は比喩^{たとえ}とか象徴とか、

または概念等による理解に留まっている、ということが言えます。譬^{たと}え話や象徴・概念によつて理解することとは、物事をそのものズバリ把握することではありません。饅頭^{まんじゅう}の中の餡^{あん}を「甘いもの」とか「小豆を煮てつぶしたもの」と表現しても餡そのものを理解出来ない、というのと同じです。比喩や概念による理解は薄ぼんやりしていて、真の認識にはならないのです。



その点全く他に比べるものがない、世界で唯一つそのものズバリの把握を完成・実現したのが日本古来の言葉の原理であります言靈ことたま布斗麻邇ふとまにです。言靈によって人間精神の先天構造いはいさか（天津磐境）を下に再び図示しましょう。全部で十七個の言靈によって把握された心の先天構造は、それを構成している十七個の言靈のそれぞれを自分の心の中で認識してしまいますと、人間が人間という種を保つ限り、人種・国家・社会の相違に関係なく、一つの完全な真理として、如何なる時と場所に応じてても、人間の文化活動に適用して誤ることがありません。それは神といい、一といい、事実そのものというものを把握認識し、そこから出発して一切の文化活動を展開することが出来る真理そのものなのです。正ただに言靈原理にのみ許された独壇場ということが出来ます。



以上の事柄を頭に入れますと、西洋の「考える」に対する東洋の「思う」という漢字の成り立ちが日本の言靈原理から来ている事が了解されて来るでしょう。「そんな事が……」と訝いぶか

る方もいらつしやるでしょうが、本当のことなのです。それは「おもう」ことを「思う」即ち「田の心」と漢字で書きますが、その田の意味を知れば納得が行くこととなります。

言霊十七個で把握された心の先天構造から出発して、人間誰しもが持っている四つの次元の性能、即ち欲望・経験知・感情・選択知の典型的な構造を求めて行きますと（この作業が実はこのお話の全体のテーマであるのですが）、最終の結論としてどの次元についても言霊五十個によつて形造られた五十音図表が得られることとなります。五十音図表は稲を作る田んぼの形をしています。また言霊とは言霊イの次元から見た心の要素のことであり、言霊のことをイの音で「いね」となります。いの音である言霊の稔る処で五十音図表を田と喩えます。「思う」という漢字は、已に人間に自覚されている基本的な精神の構造から出発して、国家・社会・家庭・個人が生きて行く為にどう対処して行くか、の心の活動の意味を良く内容に忠実に表現しているではありませんか。中国の「思」という漢字の起源が日本の言霊原理である、ということの真实性を了解願えた事と思います。

以上、人間の「思考」即ち「思う」と「考える」という二つの心の働きのパターンについて検討して来ました。勿論、現代に於て考える人も思う人も全てがその心理の動きの内容を知つて考えたり思つたりしているわけではありません。けれど「思と考」という二字のそれぞれの持つ働きの相違が人類の数千年という長い歴史を彩あやなす重要な内容であることをお分り頂ける

【注一】先天構造の中身である父韻と母音の産靈わすびによつて子音を生むことを「子生み」とい
い、易経では大行という。

【注二】言靈学においての先天構造の内容である母音・父韻並びにその産靈によつて生まれ
る言靈子音を総称して、仏教ではこれ等を「種智しゅち・一切種智・種子識しゅしき」などと呼ぶ。

創造へ、そして失敗

先天十七個の言靈が活動を開始し、言靈イ・キである伊耶那岐・美の二神が婚いして子（子音）を生む行為が始まることとなりますが、古事記では先ず最初に子生みの失敗談が披露（ひろう）されます。人間精神の原理の話がよいよ佳境に入ろうとする時、何故失敗した事などが語られるのでしょうか。それは古事記神代の巻が人類の文明の歴史を深く洞察した上で書かれた事の証明ともなることなのですが、それは話が進むにつれて明らかになり、著者太安万侶の深謀遠慮に驚かされることとなります。さあ、古事記の文章に帰りましょう。

ここにその妹伊耶那美の命に問ひたまひしく、「汝が身はいかに成れる」と問ひたまへば、答へたまはく、「吾が身は成り成りて、成り合はねところ一処あり」とまをしたまひき。ここに伊耶那岐の命詔りたまひしく、

「我が身は成り成りて、成り余れるところ一処あり。故この吾が身の成り余れる処を、汝が身の成り合はぬ処に刺し塞ぎて、国土生み成さむと思ほすはいかに」とのりたまへば、伊耶那美の命答へたまはく、「しか善けむ」とまをしたまひき。ここに伊耶那岐の命詔りたまひしく、「然らば吾と汝と、この天の御柱を行き廻りあひて、美斗の麻具波比せむ」とのりたまひき。かく期りて、すなはち詔りたまひしく、「汝は右より廻り達へ、我は左より廻り達はむ」とのりたまひて、約り竟へて廻りたまふ時に、伊耶那美の命まづ「あなによし、え娘子を」とのりたまひき。おのもおのものりたまひ竟へて後に、その妹に告りたまひしく、「女人先立ち言へるはふさはず」とのりたまひき。然れども隠処に興して子水蛭子を生みたまひき。この子は葦船に入れて流し去りつ。次に淡島を生みたまひき。こも子の数に入らず。

吾が身は成り成りて、成り合はぬところ一処あり

古事記の最初の文章「天地の初発はじめの時、高天の原に成りませる神の名は……」にありますのと同様に、「成り成りて」の成りは「鳴る」の謎なぞであります。そうでないと古事記が言霊原理の教科書であることから離れます。母音であるアオウエイのそれぞれを発音してみて下さい。同じ音がズウーと続いて変化がありません。このような音を仏教で梵音ぼんおんと呼ぶ大自然・大宇宙の音なのです。それは音が続いている限り開いたままで合うことがありませんので、「鳴り合わざる音」と表わしたのです。鳴り合わぬ状態を女性の成り合わぬ陰部に譬たとえたわけでありま

我が身は成り成りて、成り余れるところ一処あり。

古事記のこの文章の「我」とは伊耶那岐いざなぎの命です。けれど「我が身」とは伊耶那岐の命である言霊イそのものではなく、伊耶那岐の命の実際働きである八つの父韻キシチニヒミイリのことです。この八つの父韻を発音してみますと、音が二段階となっていて、イという音が余音となつて続く事に気付かれるでしょう。これが鳴り（成り）余れる音（一処）というわけです。イ言霊は五つの母音の一つであり、同時に八つの父韻に展開して創造の韻ひびきとなつて活動して父母音の両方の性質を持つていることから、言霊イを親音と呼んで単なる母音と區別

しているのです^{註二}。この鳴り余れる音であります父韻を男根の成り余っている姿に譬えて示したのであります。伊耶那岐・美の両命の婚よはいによつて言靈子音を生む子生みは、巧たくみに男と女の生殖の行為に譬えて説かれています。言語の発音も男女の生殖も共に人間生命の唯一の道理の発現でありますから、比喩が誠にぴつたりと当てはまることとなります^{註二}。

【注一】父韻とは読んで字の如く韻ひびきであつて音ではない。心の最奥部に瞬間にひらめく精神の火花と言つたらよからうか。古代の文字即ち神代文字を見れば容易に分ることであるが、父韻の姿はローマ字を以て表わすと理解し易い。八父韻キシチニヒミイリは k s t n h m y r と表わされる。韻だけでは発音することが出来ない故、末尾に母音イ（i）を付けてキシチニヒミイリと発音する。創造知性の韻にイ音を付けて発音すること、更に父韻の発音に他のアオウエの四段を用いず、イ段を採用したことの二つの事柄は言靈布斗麻邇の原理の最も重要な特徴である。それは五十音言靈による人間精神の理想的構造図が完成する時、明らかにその正当性が証明される。

【注二】伊耶那岐の命・言靈イと伊耶那美の命・言靈エの婚よはいによる子生みは、実際には八つの父韻と四つの母音の結合として述べられることに不審を感じる読者も多いかと思われる。それはこの文章のすぐ後に出て来る「天の御柱を廻る」段で詳しく合理的に説明される。

この吾が身の成り余れる處を、汝が身の成り合はぬ處に刺し塞ぎて、

この文章は勿論男女の身体の結合に事寄せて言葉の発声の事を述べているのである。父韻を母音の中に刺し塞ぐようにして発声すること。父韻キと母音アでキア(k+a) || 力となります。同様にしてキエ(k+e) || ケ、キオ(k+o) || コ、キウ(k+u) || クとなり、カケクコと力行の音が生れます。五十音図の他の七行も同じようにして発現して来ます。

国土生み成らし

国土を造ることではなく、言語を生むことであります。此処では特に子音を創ること。「くに」とは前に説明した事がありますが、「組んで似せる」ことです。何に似せるか、というところ、物事の真実の姿に似せて、そのものズバリの言葉の要素を造ることです。今迄の処は心の先天構造のことばかりを説明して来ましたが、先天のことですから、五官感覚で接触することが出来ない、姿を持たない世界のことでした。日本書紀の言葉を借りますと「兆しを含み、薫が満ちている」先天の要素が漂っていて、目に見える何物も発現していない先天宇宙の中から初めて後天現象の要素である子音が生れ出ようとするのです。この時、先天の要素を天名と言ひ、後

天の要素を真名または真奈と呼びます。子音である真名は先天父母音で組まれた国土ということとなります。

日本書紀に「善きかな国のありけること」とありますように、言葉は文明の始まりであり、人間の集団としての国の始まりです。この時、その言葉がどのような言葉であるか、によつて国柄が定まつて来ます。人間誰しもが生来授かつている心の先天構造の原理に則つて言葉が造られ、その造られた言葉が示す真実の実現として肇められた国家が世界で唯一つあります。その国の名は「靈の本」即ち日本であります。靈の本とは人間の生命法則そのままの言葉を保持している国、という意味であります。

日本や世界が今後困難な事態に遭遇し、絶望の淵に沈もうとする時があつても、それを乗り越えて人類の生きる新しい道を発見することは可能なのです。それは「いざ」という時、心を虚しくして人間の創造意志が働く瞬間の時点（中今）に帰り、そこから発動する創造意志そのままに発せられる言語の指し示す道に気付く事です。日本語とはそういう言語なのであります。

伊耶那岐の命詔りたまひしく、「然らば吾と汝と、この天の御柱を行き廻りあひて、美斗の麻具波比せむ」とのりたまひき。

天の御柱とは先に説明しましたように、母音アオウエイの縦の並び、これに対し国の御柱とは半母音ワヲウエヰのことです。この御柱とは古事記の大方の注釈にありますような「家屋の中心となる神聖な柱」という現実的な家の柱のことではありません。心の柱です。心はアオウエイ五母音言霊という五段界層の構造の宇宙を住家としています。これが天与の人間の生命の拠り所でありますので、家屋の大黒柱にたとえたわけであります。天の御柱・国の御柱と並べて言う時は、天の御柱とは純粹の主観、国の御柱とは純粹客観を意味しています。

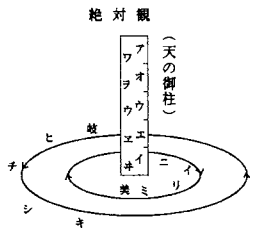
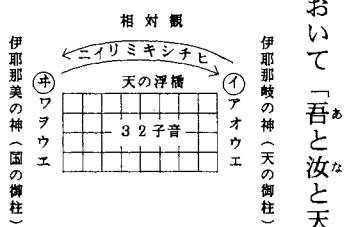
ではこの天の御柱を岐美二神が廻みつて美斗との麻具波比まぐはひ（結婚）をする、とはどんな事を言うのでしょうか。ここで先の【注】で指摘しておきました岐（イ）・美（ヰ）二命の結婚が何故父韻と母音との結合となるか、の疑問に答える時となります。またこれも先にお話した事ですが、物事には全て相對観と絶対観という二つの見方があります。夫と妻と対立していると見る立場と、夫と妻が一体となり夫婦として行動する立場との二つです。話が理屈っぽくなつて恐縮なのですが、ここは我慢してお読み下さい。分り易くするために左に図で相對観と絶対観の立場を示しておきましょう。

相對観とは伊耶那岐の命イ（ウオアエ）と伊耶那美の命ヰ（ウヲワエ）とが対立している状態です。図の上がそれを示しています。それに対し絶対観の立場では岐の命と美の命が一体となった状態です。下の図で示されます。この場合、岐の命イ（ウオアエ）と美の命ヰ（ウヲワ

(エ) は一体となり、陰陽の陽、能動と受動の能動、主と客の主である岐の命の側のイ（ウオアエ）を以て表わす事となります^{註二}。その場合の天の御柱というのは単なる天の御柱ではなく、その中に国の御柱をも含んでいる、ということなのです。

以上の相対観と絶対観という立場を頭に入れておいて「吾と汝と天の御柱を行き廻りあいて」という事を考えますと、次のようになります。

即ち相対観の立場では「イ・アオウエ（天の御柱）」と「ワヲウエ（国の御柱）」が創造意志の火花（律）の媒介によってお互いに感応同交することであり、絶対観の立場からすれば「宇宙の實在であるアオウエ・イに岐の命と美の命との間に閃く創造意志の火花が働きかけて、實在である子音を現象として現わす^{註三}」ということになります。「吾と汝と天の御柱を行き廻り合いて」という古事記の表現は主として右の説明の内の絶対観の立場を頭に置いたものでありましよう。



【注一】古事記は後章に於て伊耶那岐・伊耶那美二柱の命が一体となった状態を伊耶那岐の

大神と言つて単なる伊耶那岐の命（神）と區別している（古事記「身禊」の章参照）。

【注二】言靈イの展開であるヒチシキミリイニの八つの父韻は妹背、陰陽、作用・反作用という一対・四組の韻律であることは已に説明した。絶対観の場合、天の御柱を廻る八父韻のうち、能動であるヒチシキの四韻が岐の命の側であり、ミリイニの四韻が受動の美の命の側である。

「美斗みとの麻具まく波は比ひせん」とは現代語で言えば「結婚しよう」ということでもあります。日本書紀には「遵みと合あ為な夫婦ふうふ」「交とつぎの道みち」と書かれています。遵合は交合のこと、夫婦のまじわりの意です。麻具波比は「招まぎ合あい」の意でしょう。交は十作とつぎでイ・キシチニヒミイリ・杵きねの交流を言います。竹内古文獻には「ミトルツナマグハヒ」と記されています。陰陽の綱つなを招まぎ合あつてメ繩しめなは（七五三繩）を編あんで行く精神の法則に通じます。このことについては後章にてお話します。

汝みづりは右みぎより廻まり違ちがへ、我わがは左ひだりより廻まり違ちがはむ

「伊耶那美の命は右より廻れ」と言った。右は身切りの意で女陰の形であります。天の御柱

を右廻りに廻り、父韻ミリイ二の役目を負え、という意味です。それとは反対に伊耶那岐の命は左より廻つて父韻ヒチシキの役目をする、ということ。左（ひたり）は靈足ひたりまたは靈垂ひたりの意味で男根を示し、能動・積極性を表わします。岐美二神がそれぞれ成り余れる処と成り合わざる処の役目を負うことによつて物事の現象が生じます。

女人先立ち言えるはふさやわす

女が男より先に発言した事は適當でない、の意。これは何も男女の優劣・順序を言つてゐるわけではありません。現象である子音を生もうとして母音を先に発言して父韻を後にしたのは、子音は生まれません。だから適當ではない、ということでありませぬ。例えば父韻kを先に、母音aを後にすればカKaという子音が生れるが、母音を先にしたのはa・kで子音は生れて来ないことになります。

右の例は言靈学の子音を生む事に関する説明ですが、これを人間の創造行為について検討してみましよう。人が何かをしようとする場合、「人間とはそも何者か」などという本来宗教・哲学が扱ふべき心の先天構造の中の母音である生命の宇宙實在などの問題を第一に考え、実践創造意志である父韻の発現を無視したのでは、人は創造の第一歩を踏み出せない事になります。

自我の本性を見定めようとする小乗信仰の立場からは真相である文明創造の意欲は湧いて来ないこととなります。これも「女人先立ち言えるはふさわず」ということです。

然れども隠処に興して子水蛭子を生みたまひき。

「隠処」とは組む所の謎であります。言葉が頭脳内で組まれる所のこと、そこは隠り神の居る所でありますから、「隠」の字が使われています。水蛭子の蛭は骨（霊音）のない動物。水蛭子はまた霊流子とも読めます。霊である父韻が流れてしまつて真相の子音が生れて来ない、ということを示します。何故なら母音を先に発音し、母音である個人の心の内部の悟りばかりに拘泥るからです。

この文章の初めに「然れども」とあります。「女人先立ち言えるはふさわず」、適當ではないと言つて尚且つ水蛭子を生んだのは何故なのでしょう。母音である小乗的な悟りに拘泥しては真相は生れて来ない、とは知つていても、しかし人間にはそういう状態もあり得ることでありますから、取敢えずは水蛭子も生むことにしようというわけであります。

事実、世界はここ三千年間、日本に於ては二千年の間、物質文明創造の時代であり、弱肉強食・生存競争の社会が続きました。弱者である一般民衆は戦乱怒濤の唯中であつて、せめても

の心の平安を求めて、小乗的な信仰や思索の中に身を投ずるより方法がありませんでした。長い人類の歴史の中では、人間のそういう態度も必要であつたわけでありませぬ^{注三}。

【注一】くみど 隠処とは頭脳内で言葉が組まれる所、と書いたが、それは実際には何処か。後章、古事記の子音創生の中で明瞭に指摘される。古事記上つ巻の神話は人間の心をすべて、残す所なく解明しているのである。

【注二】生存競争社会の唯中にあつて、平安を求めて心の真の实在を探究する宗教に仏教の禅や念仏等がある。それらの信仰からは「安心」は得られても、この世の政治・経済の仕組みを転換して理想社会を建設しようという積極策は生れて来ない。このことを水蛭子の状態と言うのである。法華経を奉じて日蓮宗を興した日蓮上人は「念仏無間、むげん 禅天魔」と叫んで、実相実現の法華経を宣伝した。その消息は法華経第七化城喩品等に見られる。(無間とは無間地獄のこと)

この子は葦船あしぶねに入れて流ながしまりつ。

「女人先立ち言へる」実相を生むことのない心の持ち方ではあるけれど、場合によってはそ

れも人間に有り得ることであるから、成り行きのままに、自然のままに世界に流布させた、という意味であります。「葦船に入れて」の葦船とは言霊五十音図のことでありませう。「葦船に入れて流し去りつ」とは言霊図に照らし合わせて、それも人類全体の歴史としては必要なことである、と承認して世界に流布・教伝させた、の意となります。この事を日本書紀には「故、天磐櫛樟船あめのいはくすふねに載せて、風の順かぜのまにまに放ち棄つ」と書かれています。天磐櫛樟船とは五十音言霊あめのいはくすふね（磐）を組んで澄ました図形の謎であり、言霊図のこととなります。言葉は心を運ぶもの、ということ船に喩えます。

事実、水蛭子の思想が世界に「流し去つた」結果が、「母音を先に発音する」ことよって発生した東洋に於ける五行・五大の考え方、また禅の空の悟り、念仏やキリスト教に見られる個人の魂の救われを求める各種宗教の発生等であります。これらの心の持ち方が三千年の暗黒の世を支えて来たとも言えるであります。

【注一】葦船あしふねが何故言霊五十音図を示すことになるのか、は後記「五種類の言霊図」の中で明らかにされる。我が国の古い名前である豊葦原瑞穂国とよあしはらのみずほのくにの葦あしも同様な意味である。

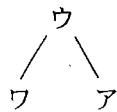
次に淡島と生みたまひませ。こも子の数に入らず。

水蛭子の次に淡島を生みました。これも心の先天構造の活動から正統に生れて来たものではないので「子の数に入らず」となります。さて淡島とはアとワの締まり、ということですか。アとワ、主体と客体との対立から生れて来る心の現象とは何なのでしょうか。普通の心の先天構造である天津磐境では、宇宙が分れて下図のようになります。このこ

とは今迄何度となく説明しました。初めに意識の萌芽とも言える言靈ウが生ま

れ、これに何かの思考作用が加わると、その瞬間に主体と客体、アとワに分れる、ということでありました。淡島とはウ・ア・ワの剖判ではなく、已にアとワに分れた所から思考が始まる心の持ち方の事を言っているのです。

こうお話ししますと、読者は前章の「思」と「考」の違いについての話を思い出すのではないでしょう。そうです。アとワ、私と貴方との対立した所から心の作業が始まると、「神返る」の考える、という働きとなります。哲学的に言う、正反合の弁証法思考です。私を「正」とします。貴方がそれとは違った立場に立っています。これが「反」です。この正と反との対立が起れば、当然この二つのものを統合して双方が容認出来る立場が要求として心の中に出て来ます。その終着点が「合」というわけです。



学問の立場からは正と反の対立から合の結論を導き出すことは出来ません。けれど実際の生命現象や社会現象では、その終着点に行き着く道程は時の経過に委ねられることになります。マルクスの唯物弁証法は労働階級と資本階級との対立が闘争の結果、労働者の勝利に帰すと宣言し、その闘争は已に百年の歳月が過ぎました。にも拘わらずまだ決着がつかぬどころか、共産主義国家の崩壊が次々と起っているのが実情です。弁証法的な考え方には学問上の推理はあつても、その結果を招来する手段・経過の道即ち原因と結果を結ぶ懸け橋である八つの父韻の原理の自覚が備わっていない為であります。「淡島」の物の考え方に淡い望みの「淡」が使われている理由なのです。淡島が先天構造の原理から正統に生れた心の持ち方でない事がお分かり頂けたことでありますよう。

島生み(その二)

ここに二柱の神議りたまひて、「今、吾が生ぬる子ふさはず。なほうべ
天つ神の御所に白さな」とのりたまひて、すなはち共に参み上りて、天つ
神の命を請ひたまひき。ここに天つ神の命以らて、太玉に托へてのりたま
ひしく、「女の先立ち言ひしに困りてふさはず、また選り降りて改め言へし
とのりたまひき。

右の古事記の文章は、正統な子生みに失敗した岐・美二柱の命の反省の文章であります。「神様でも失敗するのか」などと思つたら、古事記の真意から外れてしまいます。人類が初めて心の先天構造の原理を発見し、その先天構造から正系の言語を作り出そうとする時の苦心談

なのだと思えば納得出来ることであります。

神話の言葉通りを解釈すれば、「岐・美二神は相談して『生まれた子は正統な子ではなかった。天上の神の所へ行つて申し上げよう』と言つて、二人して天上の神に新しい命令を下さい、とお願ひした。天上の神は太占ふとまにのうらないをして「女が先立つて言つたのがいけなかつたのだ。改めて下つて行つて、順序を間違えずに言え」と命令した、となります。毎度お話することですが、古事記神代巻が言霊学の教科書であることを頭に置けば、意味は大分違つて来ます。真意は次の通りです。

現象である子音を生もうとして、母音を先に発音して、後に父韻を付けたのでは適當でなかつた。再び心の先天構造である十七個の言霊からなる天津磐境の原理に立ち返つて、基本の原理から再検討をしてみよう。そして先天十七言霊の原理である布斗麻邇ふとまにに照らし合わせてみると、^生母音を先にして父韻を後に発音したのがいけなかつたのだ。再びやり直して、父韻を先に母音を後に発音するよう改めることだ、と気付いたのであつた。

【注一】古代、アイウエオ五十音の言霊とその原理・法則を布斗麻邇ふとまにと呼んだ。二千年前、この原理が社会の表面から隠されることとなり、「大道すた廃れて仁義あり」とあるように、布斗麻邇といえは鹿の肩骨や亀の甲羅こうらを焼いて、浮かび出た紋様によつて吉凶を占ううらな占術せんじゆつと思わ

れるようになった。そのため布斗麻邇の言葉に「太占」の字を当てた。また「占へて」という古語は「うら合へて」とも言った。「うら」は裏・こころのことで、表面の目に見える事柄を裏の心の方から検討する、という意味である。今の「うらない」の意味とは異なるのである。

かれここに降りまして、更にその天の御柱を往き廻りたまふこと、先の如くなりき。ここに伊耶那岐の命、まづ「あなにやし、えをとめを」とのりたまひ、後に妹伊耶那美の命、「あなにやし、えをとめを」とのりたまひき。かくのりたまひ竟へて、御合いまして、子みこ淡道あわじの穂ほの狭さ別わけの鳥とを生なみたまひき。

この文章は、子生みに失敗して反省し、先天の構造に照らし合わせて子音を生む正統なやり方である、父韻を先にし母音を後に発音する方法の実行に取りかかる項であります。文章自体の意味は説明を要しない事でありましょうが、ここに注目しなければならぬ二つの事柄があります。それをお話ししましょう。

先ず第一に子音を生む前に何故「あなにやし、えをとめを」という感動・愛情の表現を入れ

たか、であります。男女が結合する時にはお互いの愛情が大切です。それなら実相である子音を生む時の感情の役割とは何なのでしようか。創造意志の発動で現象を生む時には、特に愛とか慈悲という純粹の感情の世界、言靈アの立場に立つ事が必要であることをこの文章は教えているのです。昔の言葉でそれを「明かき心」といいます。言靈アの心に立つ時、人は物事の真相を最もよく見ることが出来、最もよく表現することが出来るものなのです。

次に岐美二神はこの文章以後次々と十四の島を生んで行く事になるのですが、三十三の子音を生む前に何故島を生んだのでしようか。これが第二の問題です。島とは以前にも話に出ましたが「縮まり」の意です。事務所夕方帳簿等を「縮めた」と言えば、閉店となり、金銭の出納を今日一日分としてまとめ、昨日までの、そして明日からの出納と区別した、という意味であります。それなら岐美二神の子生みに先立つて生まれた島とは何の区別をするのでしようか。

古事記はこの本の初め、「天地の初発の時」以来次々と神が生まれました。その神々は言靈のことでありました。そして今迄に先天の十七神、十七個の言靈が生まれています。これより後三十三個の言靈も生まれて来ます。島とはこれらの言靈が心の宇宙のどの位置空間を占有しているか、それらの言靈を示す神々の宝座は何処か、を示すものなのです。先にお話しましたように、心の宇宙は全部で先天十七個、後天三十三個、合計五十個の言靈で構成されています。

が、それらの言靈は全て宇宙の中の時・処・位を持っています。その占有の座を示すのが島というわけなのです。^{注一}

岐美二神の子生みに先立つ「島生み」には全部で十四の島が生まれます。そのうち、五島が今迄出て来ました先天十七言靈の座であり、次の三島がこれから生まれる三十三個の後天子音の座、残りの六島が五十音言靈を操作・運用する作業が占める座ということになります。

これより既に出ました淡道の穂の狭別の島を含めて、先ず先天十七神の占める五つの島について説明し、続く島々につきましては子音創生とその運用の話の区切りの都度説明を入れて行く事に致します。

【注一】この言靈の占める島と同様な意味を持つものに、仏教の曼荼羅図がある。仏や菩薩の絵姿の配置によつて精神宇宙図を表わしたものである。しかし、言靈学に於ける言靈の島は曼荼羅図と違い時処位を持った極めて立体的なものである。

次に伊豫の二名の島を生みたまひき。この島は身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。かれ伊豫の国と愛比売といひ、讃岐の国と飯依比古といひ。

ハ、粟の国を大宜都比売といひ、土左の国を建依別といふ。次に隠岐の三つ子の島を生みたまひき。またの名は天の忍許呂別。次に竺紫の島を生みたまひき。この島も身一つにして面四つあり。面ごとくに名あり。かれ竺紫の国を白日別といひ、豊の国を豊日別といひ、肥の国を建日向日豊久士比泥別といひ、熊曾の国を建日別といふ。次に伊岐の島を生みたまひき。またの名は天比登都柱といふ。

先天十七言靈の島の説明に入ります。先天十七言靈の構造を天津磐境と呼びます。天津は先天、磐境は五葉坂の意で、全部で先天は五段階の言靈から成っている意味でありました。その五段階の一つ一つの位置が島の名で説明されるように命名されています。各島の説明の参考に次頁の図で示すことにします。

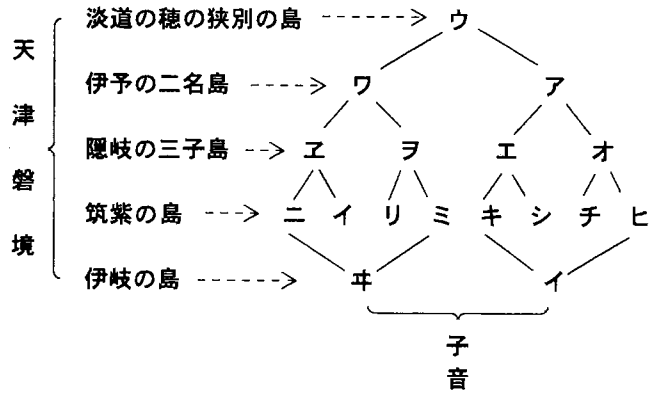
淡道の徳の狭別の島

言靈ウの区分、神名で言えば天の御中主の神の宝座であります。アとワ（淡道）の言靈（徳）が別れて出て来る（別）狭い（狭）区分（島）という事を示しています。言靈ウは主客未剖、

アワはそこから分れます。古事記の初めにあります天御中主の神・言靈ウの説明の文章を参照して頂くとこの島の名前の意味がよく御理解頂けます。

伊豫の二名島

言靈アとワの宇宙区分のことです。高御産巢日の神、神産巢日の神の座。二名とはアとワの二音言靈のことです。伊豫とは伊即ちイ言靈の豫めと読みます。一物もない宇宙の一点に意識の芽とも言える言靈ウが生まれ、それがアとワ、主体と客体に分れます。この主と客に分れる事が全ての自覚の始まりです。そして先天構造の五段階の宇宙剖判を経て創造意志のイ・ワの働きで子音（現象）創生となります。でありますから、アとワはイとワの現象を創造する働きの予めの区分ということになります。



この伊豫の二名島については「身一つにして面四つあり」と説明されています。「身一つ」とは言霊ウの一音のこと、「面四つ」とはオエヲエの四音の事を言います。また「伊豫の国を愛比売といひ、讃岐の国を飯依比古といひ、粟の国を大宜都比売といひ、土左の国を建依別といふ」とあります。愛比売とは言霊工を秘めているの意で、言霊工とは経験知オの中から選ぶこととありますから、工秘めとは言霊オであります。飯依比古とは、飯はイの霊で言霊のこと、依は選るの意、比古は男であり、主体であります。言霊を選る主体ですから言霊工です。大宜都比売とは、大いに宜しい都（宮子）を秘めている、ということ。都とは言霊によつて組織された完成体という程の意味であり、言霊ヲであります。建依別とは、建は田の気で言霊のこととあり、建依別全部で言霊を選り分けたもの、となり言霊エとなります。

伊豫・讃岐・粟・土左の四国の名と言霊との関係はまだ分つていませんが、多分四つの面の表現を四つの国に掛けたものと見て間違いないものと思われれます。

次に隠岐の三つ子の鳥と生みたまひき。またの名は天の忍許呂別。

言霊オ・エ・ヲ・エの精神宇宙に於ける区分。隠岐とは隠り神、三つ子とは三段階目に現われる言霊という意味です（前頁図参照）。天の忍許呂別とは先天構造における（天）大いなる

(忍)心(許呂)の部分(別)ということ。言靈オ・ヲ(経験知)と言靈工・エ(実践智)とは文明創造の上で最も重要な精神性能であります。

次に竺紫の島と生みたまひます。この島も身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。かれ竺紫の国と白日別といひ、豊の国と豊日別といひ、肥の国と建日向日豊久士比泥別といひ、熊曾の国と建日別といふ。

父韻である言靈チイキミシリヒ二の占める位置を竺紫の島といいます。竺紫は尽しの謎、八つの父韻は現象を生む人間の創造知性の基本である律を尽しています。古事記神名で言えは、宇比地邇神・妹須比智邇神・角杵神・妹活杵神・意富斗能地神・妹大斗乃弁神・於母陀琉神・妹阿夜訶志古泥神の宝座ということでした。

八つの父韻は言靈イ(伊耶那岐神)の實際活動のリズムです。それでこの島は「身一つ」と言われます。「面四つ」とは八つの父韻は、実は作用・反作用の関係にあるチイ・キミ・シリ・ヒ二の一对四組の知性の律であることを示しています。「身一つにして面四つあり」の意味をお分かり頂ける事と思えます。

「かれ竺紫の国を白日別といひ、豊の国を豊日別といひ、……」という四つの国の区別を並

べて見ますと次のようになります。

竺紫 <small>つくし</small> の国	白日 <small>しらひわけ</small> 別	言靈 <small>ことだま</small> シリ
豊 <small>とよ</small> の国	豊日 <small>とよひわけ</small> 別	言靈 <small>ことだま</small> チイ
肥 <small>ひ</small> の国	建日向日 <small>たけひむかひ</small> 豊久士 <small>とよくじ</small> 比泥 <small>ひねわけ</small> 別	言靈 <small>ことだま</small> ヒニ
熊曾 <small>くまそ</small> の国	建日 <small>たけひわけ</small> 別	言靈 <small>ことだま</small> キミ

さて並べて書きました四列のそれぞれの国の名または別の名と父韻言靈との関係に御注目下さい。白日しらひわけ別の「しら」と父韻シリ、豊日とよひの「とよ」と父韻チイ、熊曾くまその「くま」と父韻キミ、これら三組の二字同志が共に五十音図の同じ行であることにお気付きになることと思います。古事記の著者太安麻呂はこの様にして国名くにまたは別名わけの名によつて、それが指示する父韻言靈を暗示したのです。そしてその暗示が余りにも露骨で直ぐに分る謎に過ぎる、と感じたのであります。父韻ヒニに対してだけは肥ひの国・建日向日たけひむかひ豊久士とよくじ比泥ひねわけ別という長い名前を使いました。

しかしこの長い名前も、父韻ヒニを示す古事記の神名である於母陀琉神おもたると・妹阿夜珂志古泥神いもあやかしこねの謎が解けてしまった今では、容易にその暗示を解くことが出来ます。於母陀琉おもたるととは面足おもたるとで

「心の内容の表現が心の表面いづばいに完成する韻」であります。その意志の動きは「建日向」として言霊が日に向って行く、という表現で示されています。また日豊久士比泥とは奇しき言霊の音の意味で、「阿夜珂志古泥」即ちあやにかしこねに畏き音と符合してはありませんか。以上竺紫の島の「身一つにして面四つ」の四つの面について説明しました。

伊岐の島またの名は天比登都柱

言霊イ・牟の精神宇宙における位置区分、伊耶那岐・美二神の宝座。伊岐とは伊の気でイ言霊のことであります。天比登都柱とは天の一つ柱のこと。言霊イと牟は絶対観の立場では二霊が一体となつて、人の心の宇宙であるアオウエイの五段階の宇宙を縦の一つの柱として統一しています。アオウエイとワヲウエ牟は一つになつて天之御柱となります。この天之御柱（天の一つ柱）は五段階の宇宙構造を人間が自覚した姿として、精神宇宙の今・此処（中今）にスツクと立っているのです。心のすべての現象はここから現われ出て、また此処に帰って行くのであります。

次に津島を生みたまひき。またの名は天の狭手依比売といふ。次に佐渡の島を生みたまひき。次に大倭豊秋津島を生みたまひき。またの名は天つ

御虚空豊秋津根別といふ。かれこの八島のまづ生まれしに因りて、大八島
国といふ。

然ありて後選ります時に、吉備の児島を生みたまひき。またの名は建日
方別といふ。次に小豆島を生みたまひき。またの名は大野手比売といふ。
次に大島を生みたまひき。またの名は大多麻流別といふ。次に女島を生み
たまひき。またの名は天の一根といふ。次に知訶の島を生みたまひき。ま
たの名は天の忍男といふ。次に両児の島を生みたまひき。またの名は天の
両屋といふ。

天津磐境と呼ばれる心の先天構造の五段階層の区分を示す五つの島々の誕生に続いて、古事
記の島生みの章では津島・佐渡の島・大倭豊秋津島、次に吉備の児島・小豆島・大島・女島・
知訶の島・両児の島等々の島々を生みます。これらの島のうち大倭豊秋津島までの三島はこれ
より生まれます三十二子音の区分であり、次に続く六島はそれまでに現出した合計五十音霊
の整理・運用法を示す区分のことです。これらの島々についての説明はそれぞれの言霊

・ 整理法の区切の処で一つ一つ説明することに致します。

神々の生成(子音創生)

既に国を生み竟へて、更に神を生みたまひき。かれ生みたまふ神の名は、
大事忍男の神。次に石土毘古の神を生みたまひ、次に石葉比売の神を生み
たまひ、次に大戸日別の神を生みたまひ、次に天の吹男の神を生みたまひ、
次に大屋毘古の神を生みたまひ、次に風木津別の忍男の神を生みたまひ、
次に海の神名は大綿津見の神を生みたまひ、次に水戸の神名は速秋津日子
の神、次に妹速秋津比売の神を生みたまふ。

先天である十七個の言靈が活動を開始して、現象の単位である子音を生もうとするに当って、
先ずそれぞれの子音が心の宇宙の中に占める位置・区分を確定するために島(国)を生みまし

た。そして「既に国を生み竟へて、更に神を生みたまひき」とありますように、後天現象の単位である子音言霊を示す神々を生むこととなります。そして三十二の神々が生まれます。そこでこれよりそれぞれの神の名の示す子音について説明して行く事になるのですが、その子音の説明を分かり易くするために島々の示す心の区分と、人間の言葉がどのような経路で生まれ発音されて来るか、という事の関連についてお話することにしましょう。

一〇七頁に人間の言葉の循環の順序を示す図を画きました。この図を参照しながらお読み下さい。人が口に出す言葉はどのように生まれ、言葉として発音され、その結末はどうなるのでしょうか。

先ず人間の頭脳の中枢に何かの力動が起ります。先天十七言霊の活動です。しかしこの先天構造の活動は「先天」と名付けられていますように、それだけでは何かが起ったとも何が起ったかとも意識出来ないものです。それが具体的に何を意図し、どんな言葉として発音されるか、また発音された言葉はどう処置され、意図はどう結末に行き着くか、ということがは後天として現象の世界のことに属している、ということが出来ましょう。

それなら人間が発言する言葉は現象（出来事）としてどんな経過をたどるのでしょうか。それは先にお話しましたように古事記は三つの段階がある、と教えています。津島・佐渡の島・大倭豊秋津島という三つの区分です。三段階は次のように示されます。

先ず第一の段階では頭脳中枢に始まった力動が実際にはどんな内容の事柄なのか、という具体的な考えをまとめる段階です。頭の中で何かが起った。それが何なのだろう。「そうだお茶が呑みたい」のだ、と考えがまとまって行く行程です。この行程は一見単純で簡単な現象のように思われますが、精密に順を追ってみますと十の現象の行程がある、と古事記は教えてくれます。それを言霊で表わしますと、「タトヨツテヤユエケメ」の十言霊となります。この十言霊の区分が津島だ、と古事記は教えます。また言葉の循環という立場から見ますと、この十言霊のことを未鳴^{まな}または真名^{まな}と呼びます。未鳴とは考えがまとまって行く段階で、まだ有音の言葉とはなっていない、という意味であります。これに対し先天の十七言霊を天名^{あな}と呼ぶことがあります。

次の第二の段階は一つの考え・アイディアとしてまとめたものを、具体的な言葉として組んで行く行程です。「お茶が呑みたくなった。どんな言葉で誰に頼んで持って来て貰うかな」と考えを言葉に組んで行きます。そして有音の言葉として発音されます。これに八つの行程があります。言霊で表わしますと、「クムスルソセホへ」の八言霊です。この八言霊を真名^{まな}と呼びます。またこの区分を古事記は佐渡^{さど}の島と名付けました。

そして最後の第三段階です。言葉は一度発せられてしまつたら、働きはそれで終りという訳ではありません。「誰々さん、お茶を持って来て下さい」と発音されますと、その音声は空中

を飛び（現代の通信・テレビ等に見られるように、電波や光波となつて飛ぶ場合も同じです）、他人の耳で聞かれ、その人によつて言葉が頭脳内で反唱され、「あゝ、こういう事をあの人は言つたのだな」と了解され、行動によつて処理されます。その後、言葉は先宇宙に帰り、記憶として印画され、言葉の循環は此処で終ります。

以上の第三段階の行程は正確には十四あります。そのそれぞれの現象を表わす言霊は「フモハヌ・ラサロレノネカマナコ」の十四言霊です。この十四言霊のうち、フモハヌの四言霊が、発音された言葉が空中を飛ぶ状態です。これを神名と呼びます。

次の十音ラサロレノネカマナコは有音の神名が他人（または自分）の耳の鼓膜を叩き、検討され、意味を了解され、一個の現象として終結する行程です。この十音はまた真名と呼ばれます。そして言葉の一循環が終り、元の天名あなに帰着します。そしてこの十四音言霊の区分を古事記は大倭豊秋津島おほやまととよあきつしまと名付けました。

以上、言葉の循環の場と、言霊とその区分である古事記の島の名との関連についてお話ししました。ここで読者の中にはちよつと奇妙・不思議に感じられた方もいらっしゃるか、と思ひますが、言葉が生れ、人に聞かれ、検討・了解される言葉の循環の順序を表わす言霊の三十二個が、同時に生れて来る後天子言霊三十二個そのものである、ということであり、古事記はこの言霊が生れて来る順序と生れて来る言霊全部とを同時に説いていることに気がきます。タト

ヨツテヤユエケメ・クムスルソセホへ・フモハヌラサロレノネカマナコの三十二子音は同時にその言靈が生れて来る創生の過程をも示しているのです。このような不思議とも思えることも、人間の心と共に言葉の最終要素である言靈ことたまにして初めて成し得る処でありまして、こういう奇妙さを「言靈ことたまの幸倍さちばへ」と呼んでいます。

さて個々の子音とそれを示す神名の説明に入る前に、もう一つ前置きの必要なことがあります。今迄母音と父韻について度々解説して来ましたが、またそれについて言靈学ならずとも宗教や東洋の哲学でいろいろな説明もなされて来ましたが、けれど子音については各宗教でその存在を指摘されて来ただけで、その実態については何一つ説明がありません。子音とは何なのでしようか。

言靈子音とは現象の最小の単位だと言うことです。物理学で言えば物質の原子に当る、ということが出来ましょう。子音は父母音の交合によって生れるのですが、父母音がそれぞれ分れば、それによって生れる子音はすべて説明されるか、というところという訳でもありません。人間の場合も父母の結婚によって子が生れます。その子は父と母の性質を合わせ持っていますが、それだけで子の性質の全てとは言えません。子は父母から生れ、そして父母から離れて独立した存在なのです。子は父母からだけでは説明出来ない何か、を持った第三者です。

更に心の事で言えば、母音は實在、父韻は知性のリズム、共に先天構造の要素ですが、子音は後天的な現象です。現象とは一瞬々々変化して止むことのないものです。その現象の単位をどう人間が捉え、自覚し、説明すればよいか、難しい事となります。例を挙げましょう。善哉ぜんざい汁粉は小豆と砂糖と少々の塩で作ります。原料の小豆やその他のものは説明出来ず。作り方の説明も比較的簡単です。けれどその善哉ぜんざいの味を説明せよ、と言われたら正確にはどう答えたらよいでしょうか。それに似て現象である子音を捉えることは難しい仕事です。

とは言いましても、子音説明のよすがとして古事記にそれぞれの子音を示す神様の名前が挙げられています。またその宇宙区分として島の名もあります。それらを頼りにすれば子音を自らの心中にはつきりと捉えることは不可能なことではありません。さあ、この二千年間、全く説かれることのなかった言霊子音の内容に探索の歩を進めることにしましょう。それはまた古事記と言霊学の奥の殿堂に入ることになります。古事記「神々の生成」の本文に戻ることになります。

既に国と生み竟へて、更に神と生みたまひき。

生まれて来る言霊が精神宇宙の中に占める位置・区分(国)を確定したので、次に言霊子音

(神)を生んだ、という事です。そして次々に子音を表わす三十二の神々の名前が出現して来ます。その一つ一つについて順々に解説して行くこととなります。

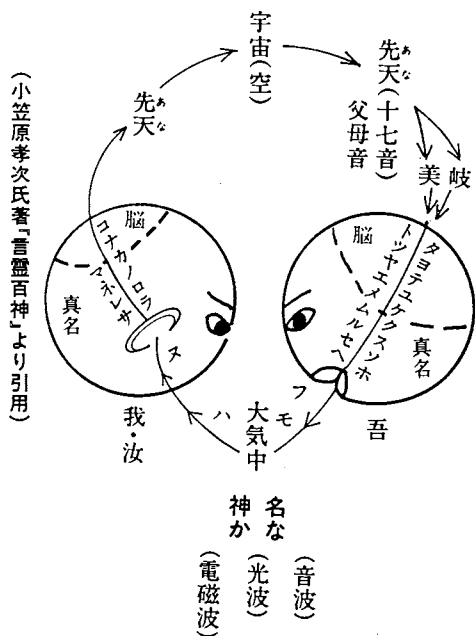
大事おほことおし忍男しのぶの神

言靈タ…それを指し示す神名の大事忍男の神とは、大いなる現象として(大事)押し出て来た(忍)言靈(男)という意味です。前に父韻の説明の章で、父韻子とは「精神宇宙全体がそのまま現象となつて現われる力動韻」と申しました。子音タは父韻子の力動韻をそのまま受け継いで現われた現象、ということが出来ましょう。

自覚している、いないに関係なく、人間が一つの言葉を発するには先天構造の宇宙の十七個の天名あな言靈の力動がなければなりません。日常の生活の中では人はそのことを意識しません。けれど一度、人が絶体絶命の場面に立たされて、「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」と決意した時など、この言靈タという現象そのものになるのではないでしょうか。大昔の人は大空に鳴り響く雷かみなりと同様に、人間の言葉も「神鳴りかみなり」である事を知っていたようです。正しく言葉は神鳴かみなりであり、大宇宙の振動なのです。注二。

先天宇宙が力動を開始して、先ず自らがそのまま現象子音タとして現われ出ます。心理学的

に言えば、その言靈々は人間の「人格の全て」と言う程の意味にとれます。古事記や言靈学では、それを田と表現します。何故田なのか、といいますと、次の通りです。人間の精神宇宙は五十個の言靈で構成されています。この五十個の言靈を以て人間の天与の性能を表わしますと、縦五個、横十個に並ぶ五十音表が出来上ります。人間の全人格はこの五十音言靈図で表わされます。五十音図は田んぼの形をしています。五十音言靈によって表現された人間の全人格を田というわけであり、古事記で「天照大神の耕していらっしやる田」などと言えばその事を指しています。



【注一】万葉集二三五に柿本人麻呂の作った「皇は神にしませば天雲の雷の上に慮するかも」の歌が載っている。天皇がお出ましになった雷の岡の地名と言霊の自覚の神鳴（雷）とを掛けた歌である。

石土毘古の神、石巢比売の神

言霊ト・ヨ…石土毘古の石は五十葉で五十音言霊のこと、土は培うの意、毘古は主体のこと、石土毘古とは五十音言霊を育てるチイキミシリヒニの八父韻の実際の働きのことであります。八父韻の両側に言霊イとキがついて、五十音言霊図の横の十音を形づくります。言霊トは十に通じます。言霊タとして発現した人間の全人格が一つの行動として言葉になつて行く為、先ず人間の創造の根本知性であるイ・チイキミシリヒニ・キのドア（戸）を通ること、とも解釈することが出来ます。

石巢比売の神の石は五十葉で五十音言霊、巢は住家のこと、比売は秘めるの意で、石巢比売の全部で五十音言霊を秘めている住家という意味を示しています。ウオアエの四母音の宇宙から全てのこの世の中の現象は現出して来ます。言霊ヨは四であり、また世の中の世にも通じます。人間の行為としての現象はウオアエの四つの次元から出て来る以外のものはあり得ません。

先天宇宙が震動して、自らが言靈タと現象として現われたら、次にその言靈タの全人格を表わす五十音言靈図の横の列であるイ・チイキミシリヒニ・キの創造知性が働き、次にその知性の働きを言靈ウオアエの四つの宇宙次元が受け入れる、というメカニズムで先天構造の實際現象としての働きの始まります。タートーヨと続く子音誕生の最初の動きは以上のように解釈出来る来ましよう。

石土毘古・石巢比売の言靈トヨは日本の古い国名であります豊葦原瑞穗国の豊とよであります。日本は言靈五十音の原理によって肇国された国であり、その原理の基本は言靈図の横の十音（ト）と縦の列の四音（ヨ）です。日本の古名の語源の一つともなっています。

おほとひわけ 大戸日別の神

言靈ツ・人間の言葉の循環の立場から見ますと、大戸日別の神の大戸おほとひわけとは大いなる十の創造知性（父韻）の意で、日は靈ひで働きのこと、別わけは元の場所から離れて現われ出て来ること、となりません。実際には創造知性の働きの言靈トが婚よほいとして言靈ヨである四つの次元宇宙に「ツ」と近づき進む様子を表わします。

天あめの吹男ふきをの神かみ

言靈テ…天の吹男ふきをの神の天は先天宇宙、吹ふきは吹きつけること、男は主体でここでは父韻のことであります。実際には先天活動により父韻を四つの母音に向って吹きつける様子です。言靈テは人の手てに通じます。言靈テは工次元の言靈であり、選ぶ働きを持っています。父韻をウオアエのどの母音に手を指し延べて吹きつけるか、によつて八つの父韻の配列も変つて来ます。この次元による八父韻の配列の相違については後章詳しくお話いたします注一。

【注一】ここでは次元による八父韻の配列を簡単に示す。ウ次元「イ・キシチニヒミイリ・
ヰ」、オ次元「イ・キチミヒシニイリ・ヰ」、ア次元「イ・チキリヒシニイミ・ヰ」、工次元
「イ・チキミヒリニイシ・ヰ」

大屋おほや毘古ひこの神かみ

言靈ヤ…大屋おほや毘古ひこの神の大屋おほやは大きな構造物、という意です。吹き出した父韻が母音と結び付いて、心の中に一つのイメージとしての形を形成して行く様子であります。

風木津別の忍男の神

言靈ユ…風木津別の忍男の風木津別とは靈と体、主観と客観に別れる、の意。忍男は押し出す言靈ということ。神名全体で、心の中で次第に一つの考え・イメージとなつてまとまつて来た形が、矢張りその内容として靈と体、主観と客観という區別を失うことなく分け持つており、それが湯の如くに湧き出して行く現象という意味です。

海わたの神名なは大綿津見おほわたつみの神

言靈エ…大綿津見とは海うみ(綿わた)に渡して(津つ)明らかになる(見)という意。心中にイメージが細かい処を通つて次第にまとまつて来る。それは川の流れに喩えられます。まとまつたイメージは言葉として組まれて広い所(口腔)に出て行く。出て行く先は海に喩えられています。川から海への境の線が江です。

水戸みなとの神名なは速秋津日子はやあきつひこの神かみ、妹速秋津比売いもはやあきつひめの神

言靈ケ・メ…水戸みなとは港です。速秋津はやあきつとは速すみやかに明らかに渡す、の意。頭脳中の細かい川のような処を通つて先天の力動から次第に一つのイメージに考えがまとまり、集約されて来て、い

よいよ海である口腔に行き着きました。そこが港です。そこからは考えが言葉に組まれます。言霊ケ・メは言葉に組まれる直前のイメージとして一つに集約される現象であります。ここでも言霊ケは気であり、霊であり、主体であり、言霊メは芽であり、眼であり、客体であり、霊と体を分け持っています。

津島またの名は天の狭手依比売

以上お話しました大事忍男の神より妹速秋津比売の神までの十神、タトヨツテヤユエケメの十言霊の宇宙に占める位置・区分を津島と言います。津とは渡し場の意。先天の力動が現実の一つの考えにまとまって行くが、まだ言葉としては組まれぬ未鳴の期間であります。先天が言語に渡って行くまでの期間のことです。それはまた天の狭手依比売とも言います。先天から細い処を通って、手さぐりするようになつて一つの考えにまとめられるが、まだ言葉としては組まれていない、即ち秘め（比売）られている区分、という意味であります。

なお此処で大変ユニークで興味ある事柄があります。詳しいことは他の機会にゆづりますが、簡単に触れておきましょう。それは私達が見る夢のことであります。私達は眠っている時夢を見ます。また覚めている時でも、将来ちよつと実現しそうな大きな希望として心の

中に夢を画きます。この夢とは何なのでしようか。日本語のそれぞれを造つてゐる一音一音の言靈がそれを明らかに教えて呉ます。

古事記で津島つしまと呼ばれる心の宇宙の区分、そこにはタトヨツテヤウエケメという十個の言靈が展開していることをお話して来ました。これら十個の言靈で示される行程を通して、先天活動が現実の考えにまとめられて行きます。けれど言葉としてはまだ組まれていません。この十個の言靈のうち、終りの方のウエケメのユメの二つの言靈が私達の見る夢を作ることと深く関係しているのです。今は簡単にそう指摘するだけに留めることに致します。

古事記の文章に戻りましょう。島の区分から言いますと津島より佐渡の島に移つて行きます。

この速秋津日子はやあきつひこ、速秋津比売はやあきつひめの二神、河海によりて持ち別けて生みたまふ神の名は、沫那芸あわなぎの神。次に沫那美あわなみの神。次に頬那芸つらなぎの神。次に頬那美つらなみの神。次に天あめの水みくまり分の神。次に国くにの水みくまり分の神。次に天あめの久比奢母智くひさもちの神。次に国くにの久比奢母智くひさもちの神。

この速秋津日子・速秋津比売の二神、河海によりて持ち別けて生みたま

小神の名は、

意識されない先天の力動が、現実にタトヨツ……と十個の未鳴の現象を経て細い通路を一つ一つのイメージにまとまって行きます。ここまでが川に喩えられます。そして速秋津日子、速秋津比売の言霊ケ・メに来て一つの考えにまとまります。次にこのまとまった考えが言葉と結ばれ、発声されて行く段階・過程が海です。頭脳内の細い通路（川）を通過して、いよいよ広い海（人間の口の中）に出ようとしています。速秋津日子・速秋津比売、言霊ケ・メまでが河に喩えられ、これから生れて来る沫那芸の神以下が海というわけです。

沫那芸の神、沫那美の神

言霊ク・ム先に先天構造の説明で、伊耶那岐・伊耶那美の二神、言霊イ・牟の婚い（呼び合）によつて現象が生れる、と申しました。しかしそれは先天構造の内部のことで意識することの出来ないものです。沫那芸・沫那美の二神の活動は、先天の伊耶那岐・伊耶那美の二神の目に見えない活動を受けて、後天界である現実に於て吾と汝、霊と体、心と言葉を結びつける働きです。

沫那芸の沫はア（吾）とワ（汝）であり、またアオウエイとワヲウエヰであります。沫那芸の芸は氣であり、靈であります。沫那美の美は身であり、体であり、音（言）です。沫那芸の神・沫那美の神、言靈ク・ムは吾と汝を、心と身を、そして靈と音を組み結ぶ働きと云うことが出来ます。まとまつた心のイメージを實際に言葉に結び組んで行く活動です。

沫那芸の神・沫那美の神

言靈ス・ル・前の沫那芸・沫那美、言靈ク・ムで靈と言が組まれたものが、この沫那芸・沫那美、言靈ス・ルで實際に発音される。實際の発音の働きであるを示すために類（ほお）の字が使われています。沫那芸・沫那美と同じように沫那芸は靈を沫那美は体を受け持っています。言靈スは澄む・巢・住むで動作のない状態。それに対し言靈ルは流・垣塙等で動く状態を示します。

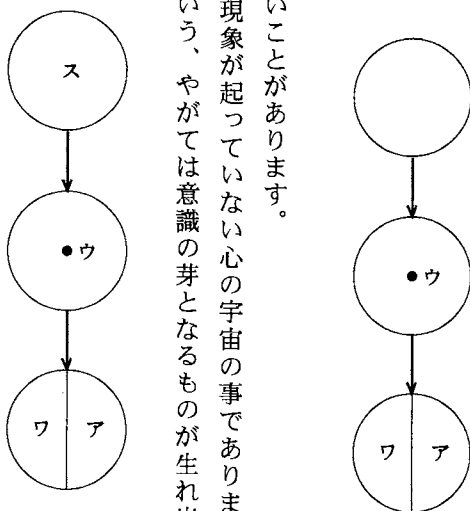
沫那芸・沫那美の働きがうまく調和すれば物事はスルスルと運びます。沫那芸・スに片寄れば物事は停滞しますし、沫那美・ルに片寄れば事は性急に過ぎてしまうことになります。「立て板に水」の弁舌も言葉の節々に「間」がありませんと、言っている事の意味が聞く者によく理解出来ない事となります。よい話術とは弁舌が滑らかであると同時に間の取り方が上手であ

ることを条件とします。言霊ス・ルの御理解に役立つことが出来たでありましょうか。

さて此処に言霊スが出現いたしました。

この言霊スの御理解を頂けた事として、「古事記と言霊」という題でお話を始めました古事記の冒頭の文章「天地の初発はじめの時、高天原に成りませる神の名は天のあめ御中主みなかぬしの神。……」の解説に一言付け加え度いことがあります。

古事記の「天地の初発の時」とは、何一つ現象が起っていない心の宇宙の事でありました。その宇宙の一点に天の御中主の神・言霊ウという、やがては意識の芽となるものが生れ出て来ます。そして言霊ウから言霊ア・ワが分れて来ますその状況を図で示しますと下のようになりました。言霊ス（巢・澄）が明らかにされた今では、「天地の初発の時」とは正しくそれが言霊スであることを確認出来ることとなります。そこで右の宇宙剖判の最初の図は次の図に改めることが適当ということが出来ましょう。言霊スは何もない、ので



はなく、そこから一切のものが生れ出るエネルギーで充滿していながら、静かに澄んで動かない状態です。

天の水分の神、国の水分の神

言霊ソ・セ…水分とは水配りの意です。心を言葉と組み結んで発音するためには水の補給が必要となります。天の水分の天は靈、国の水分の国とは体の事を指す謎であります。そこで天の水分とは発音する時に必要とする靈的・心的なエネルギーの補給と言った意味であります。これに対し国の水分というのは体的エネルギーの補給の事です。具体的には発声時の口腔内の唾液なども一つの例でありましょう。実際に心の内容と言葉とを結んで、それを他人に伝えようと発音・発声するためには、それなりの心的・体的なエネルギーを必要とすることは、日常の生活の上で素直に理解出来ることであります。

言霊ソは注ぐ・削ぐ・添える等の言葉で、また言霊セは瀬・急・堰・責める等でそれぞれの内容の見当がつけられます。

天の久比耜母智の神、国の久比耜母智の神

言靈ホ・へ…久比奢母智とは久しく（久）その内容（比・靈）が豊かに（奢）持ち（母智）続く、という意味であります。ここでも天は靈で、国は体を示します。言葉は心と音の双方が結ばれて出来ます。発音された言葉は、その言葉の内容を何処までも持続し発展する、の意味です。言靈ホは穂・火・秀など、言靈へは山の辺・船・凹等に見られます。双方共に先へ行つて開く姿であります。

佐渡の島

以上、お話して来ました沫那芸の神より国の久比奢母智の神までの八神、言靈クムスルソセホへの八個の区分を佐渡の島といます。先に述べました津島という区分で先天の活動が実際に一つの考えとしてまとまり、次にそのまとまった考えが言葉に組み結ばれる行程が佐渡の島であります。その行程を詳しく調べますと合計八個の言靈クムスルソセホへの八行程である、というわけです。これによつて心が肉体の発声器官によつて実際に発音されることとなります。佐渡の島の佐は助ける、渡は渡すの意であり、佐渡の島とは靈と体の双方の働きを実際の言葉として、実相として実現・創造する働きの区分、という意味であります。この区分の働きによつてアイデアとしての真名が音声としての神名となつて口腔より空中に飛び出して行くこ

とになります。

【注一】靈と言を結んで言葉にすることを渡わたすというが、これは宗教上でも用いられる。仏教では八苦の娑婆しゃはであるこの世（此岸）から極楽浄土（彼岸）へ導くことを度ど（わたす）と言う。人間は本来生れながらに仏の子であり、救われているのであるがその自覚がない。この自覚を仏の教えに従って実現し、更にただ自覚するだけでなく言葉で表現することによつて初めて救われた、という証明になる。古事記の佐渡の島の内容と仏教の度どとの意味が同じであることは興味深いことである。尚仏教では救われた自覚の表現として詩を用いる。これを頌しよまたは偈げと言う。

古事記の本文にもどりましょう。

次に風かぜの神かみ名は志那都しなつ比古ひこの神かみを生なみたまひ、次に木きの神かみ名は久久能智くくのかみの神かみを生なみたまひ、次に山やまの神かみ名は大山津見おほやまつみの神かみを生なみたまひ、次に野のの神かみ名は鹿屋野比売かやのひめの神かみを生なみたまひ。またの名は野椎のづちの神かみといふ。……

事であります。またその十四個の言霊のうち、初めの四言霊は発音された言葉が空中を飛んでいる間の姿・内容を表わしております。順を追って説明して行きます。尚、最後に誕生しました火の夜芸速男の神については後述いたします。

風の神名は志那都比古の神

言霊フ…発音されて空中に飛び出した言葉は、もうそれで発声した人と関係がなくなるわけではありません。志那都とは志の内容である言霊（真名）がことごとく（那）言葉（都・霊屋子）として活動しています。風の神の風とは息のことでありましょう。言霊フはその心です。吹く・伏す・踏む……等に見られます。

木の神名は久久能智の神

言霊モ…久久能智とは久しく久しく能く智を保っている、という意。木の神の木は気であり霊を表わしています。言霊モは茂・盛る・森等に見られるように、茂り発展する形。発音されて空中を飛んでいる言葉は人間の気持を何時までもよく保持し伝えます。

山の神名は大山津見の神

言靈ハ・山津見の山の語源は八間であります。創造意志である八つの父韻チイキミシリヒ二が発現する形を図示しますと ☒ となります。この図の八つの間にそれぞれの父韻が入ります。その図の中心の点を上に引き上げた立体図は山の形となるでしょう。山津見の津見は渡し現われる、の意。八間の中の父韻の働きが佐渡の島の区分の働きの渡され、現われたものが言葉です。

言靈ハは葉であり、言の葉と言うように言葉のことです。また言靈ハは端・橋・齒・肌・裸・這う等々に見られます。父韻ヒが「言葉の表現が宇宙の表面に完成する韻」であることを思い浮かべますと理解出来ましょう。

山の神、名は大山津見の神と初めに山とあるのは、言葉に靈波・音波の起伏があることを示しているのでしょう。その場合、波の高い所は父韻であり、低い所は母音である、ということが出来ます。中国の「老子」という本に「谷神は死なず」という文句があります。谷とは山の低い所のこと、母音を表わし、母音は先天宇宙の音であり、永遠の実在であり、変ることがありません。

野の神名は鹿屋野比売の神またの名は野椎の神

言靈又・鹿屋野の鹿屋とは神の家である言葉の意で神名であります。真名が口で発声されて神名となります。その神名が空中を飛んで大山津見である言葉となり、山が終つて鹿屋野の野に下りて来た、という洒落れた表現であります。山から野に下つて、そこで人に聞かれることとなります。耳の鼓膜を叩くので野椎の神とも言つています。言靈又は貫・抜く・縫う・温くもり等の言葉に見られます。

以上お話ししましたフモハ又の四音の言靈は発声された言葉が口腔を離れて空中を飛んでいる時の状態を表わしています。人の身体とは離れた外界のことでありますので、風・木・山・野の神として自然物の名が付いているわけです。この発声されて空中を飛ぶ時の言靈を神名と呼びます。そして耳で聞かれ、復唱され了解される過程で再び真名に帰ることとなります。

言葉は人の口を離れば、その生命が失われるという訳ではありません。空中を飛んでいる時もちゃんとその内容・エネルギーは維持され、人に聞かれて影響を与えます。でありますから人間の精神生命の範囲とは言葉の影響が及ぶ全ての処ということが出来、結局人間生命の存在領域は宇宙である、ということになります。決して一個の肉体だけに限定されているわけで

はありません。それでありますから宇宙の中に起る現象の全ては、言霊という観点にまで集約しますと、この話の中で述べております五十音言霊に還元して表現することが出来、残す所がないのです。

大山津見の神・野椎の神の二神、山野によりて持ち別けて生みたまふ神

の名は、

発声された言葉は空中を飛び、大山津見の神で山を越え、野椎の神となつて野に下つて来ました。そこで言葉が自分または他人の耳に入ります。聞かれた言葉はそこで次々に現象を生みます。それを言霊で表わしますと、ラサロレノネカマナコの十言霊となります。

天の狭土の神、国の狭土の神

言霊ラ・サ・狭土とは耳孔のせまい所の椎（槌）の意。天は霊を、国は音を分担していることを示しています。言葉が耳孔の狭い所を入れて行く様を言います。言霊ラは螺の字が示すように螺旋運動のことです。言霊サは刺す・指す・差すが示すように一定の方向に向つての浸透状態であります。

天の狹霧の神、国の狹霧の神

言靈口・レ…天の狹霧・国の狹霧の狹霧とは、言葉の靈と言とが霧のようなパイプレーションとなつて耳の孔の奥へぐるぐる廻りながら入り込んで行く様であります。言靈口・レは共に螺旋回転の状態です。

天の闇戸の神、国の闇戸の神

言靈ノ・ネ…細い耳の孔の奥に入り込んだ言葉は、その靈と言の波動が闇がりの戸（闇戸）に突き当たります。聴覚器官の事です。そこで言葉は更めて復誦されます。言靈ノ・ネは宣る・音に通じます。有音の神名である言葉が頭脳内で真名に還元されるために、先ず音が宣られる事となります。言靈ノは宣る・乗る・退く等の言葉に、言靈ネは音・値・根・願う等に見られます。

大戸惑子の神、大戸惑女の神

言靈力・マ…古事記神代の巻の文章の中に著者太安万侶の頭脳の冴えは随所に見られますが、

この言靈力・マを指す指月の指として大戸惑おほとまどひという神名を当てた事などは、その冴えの一つでありましょう。正に絶妙と言えます。言靈力は掻かき・掛かく・借かりる・貸かす等に見られ、言靈マは巻まく・混まざる・丸まるめる等で考えられます。有音の神名かが耳で聞かれ、復誦され、入いつて来た言葉がどんな意味を持っているか、と頭の中で掻かき混まぜられ、煮かつめられます。カマ即ち釜は物を煮かつめる道具です。その事によつて言葉の内容が次第にはつきりして来て、有音の神名かが再び真名まに還元されて行きます。そして大戸惑子おほとまどひこの神は言葉の靈を、大戸惑女おほとまどひめの神は言葉の言ことば（音）を受け持っています。

耳に入つて来た言葉が言靈ノ・ネの（宣音の）で復誦され、次に言靈力・マでその内容・意味を「こうかな、あゝかな」と大いに戸惑とまどひしながら了解されて行く働きに対して、大戸惑おほとまどひという男神の名を当てた事など誠に洒落しやれているではありませんか。

鳥とりの石楠船いはくすふねの神・またの名は天あめの鳥船とりふね

言靈ナ・言葉が頭の中で煮かつめられ、「あゝ、こういう事なのだ」とその内容が了解されます。了解された内容が「ナ」であり、名なであります。「名なは体をあらわす」などと申します。了解された内容がその事物の実相です。言靈ナは名前な・成なす・馴なれ・委なえる等に見られます。

鳥とりの石楠船いはくすねふねの鳥とりは十理とりのの意です。ア（我）とワ（汝）との間に双方を結ぶ八つの父韻が入つて現象子音を生みます。父韻は私と貴方との間を飛び交いますので、昔の人は鳥に喩えました。アとワと父韻で十数となり、現象を生む理りとなります。石楠いはくすは五十葉はである五十個の言霊を組くんで澄すますの意、すると五十音図が出来上ります。船ふねとは五十音で出来た言葉ことばを運ぶもの、御み船代ふねしろと呼びます。神社では神様を乗せる船と言います。鳥とりの石楠船いはくすふねの神全部で「言霊の原理に基もとづいて五十音言霊図上で確かめられた物事の内容」ということとなります。またの名天なまめの鳥とり船ふねも同様な意味です。発言され、人の耳で聞かれた言葉の内容がここで確定・確認されます。このように発声され、人に聞かれ、その内容（ナ）が確認される時、初めて私と貴方との交渉で生み出された現象が、私と貴方とを離れた第三者である「子こ」としてその存在が確立されることとなります。その「子」が次に生まれます大宜都比売おほいづつひめの神即ち言霊ことばコであります。父と母の間に生まれた子が父母とは違う第三者としての存在となります。甲と乙との間で一つの契約が取り決められますと、その契約がかえって甲と乙とを縛る存在となりますのも、その契約が甲と乙とを離れた第三者になったからであります。

大宜都比売の神

言靈コ…大宜都比売とは大いに宜しき言葉（靈屋子）を秘めて（比売）いる、という意。言靈子音のことであります。物事の実相であり、またその最小の単位のことです。

伊耶那岐・伊耶那美の二神、言靈イ・牟の呼び合い（婚い）によって私と貴方との間に交流が起り、現象を生みます。その現象の最小の単位となるのが言靈子音です。母音と半母音の交流は、その橋渡しの役割である父韻が母音に働きかける形となり、結局八つの父韻と四つの母音、八と四との相乗積で合計三十二個の子音が誕生します。父と母が呼び合つて子が生れます。前にもお話ししましたように、子音は父と母との結合によつて創生され、父と母との双方の性質を受け持つておりますが、それでいて父と母とから独立した第三者としての存在です。主体と客体、心と体の双方から生れ、そのいずれとも違つた実相（現象の姿）の単位であります。大宜都比売の神・言靈コは現象子音であり子であります。その前に誕生しました鳥の石楠船の神言靈ナは子の内容といつた意味を持つています。

伊耶那岐・美の神の子生みによつて誕生して来る三十二の神々、即ち三十二の子音についてお話をして来ました。これ等三十二の言靈子音については数理的・概念的・比喩的な説明ならともかく、そのものズバリの指摘が行われますのは世界の歴史上ここに挙げます古事記ともう一つ日本書紀があるに過ぎません。誇張でも何でもなくこの二千年の間、日本と世界の人々

が物事の現象の最小の単位である言靈子音の説明に接することが出来ますのは、古事記（と日本書紀）の「子生み」の文章以外には見られない重要な事でありますので、「子生み」の文章の要点をもう一度おさらいしておきたいと思ひます。言靈子音の解明は世界中の宗教書・東洋哲学の奥義・秘伝なのですから。

【注一】従来現象の単位の説明として概念・比喩的にはあるが中国の易経えいききょうがあげられている。易の成立に関して、昔から伏羲ふくぎ（五千年前の王と謂われている）が初めて八卦を画し、文王が象辞てんじを作り、周公が爻辞こうじを作り、孔子が十翼じゅうよくを作つた、と称せられている。その象辞・爻辞というのが現象の単位を説明したものである。十翼は易の哲理や組織について説明したものの（岩波文庫「易経」参照）。

古事記で「天あまつ神かみ 諸もろの命みこと」といわれます先天十七神、十七言靈の活動が起り、それが一つの考えにまとまり（津島）、その考えが言葉に組まれて口で音声として発音され（佐渡の島）、その声こゑが空中を飛び、人の耳で聞かれ、復誦検討された後、「こういう事だつたのだな」と了解され、心と言葉の循環が一段落して、言葉としての真名まなが再び最初の先天に帰ります。

以上のように一つの発想が言葉となつて発声され、それが耳で聞かれ確認・納得されて初め

て一つの出来事が決定されます。子である現象の実相が生れます。人間の心はこのように循環して現象を生みますが、この心の一循環を詳しく正確に観察しますと全部で三十二の行程があり、その一つ一つの行程が以上説明して来ました三十二の子音で示されるのです。

人間の頭脳中に起った一つの発想が事実となつて生れるまでに三十二の子音で示される行程を辿る事はお分り頂けた事と思いますが、その生れる事実（出来事）を構成する最小単位がまたその三十二の子音である、ということですが、これは何とも奇妙で巧妙な事でありますが、全くの事実です。この奇妙であるが事実としてあること、これも心の最小単位である言霊にして初めてあり得ることであつて、前にも申しましたように「言霊の幸倍へ」と呼んでいきます。この言霊の原理の「妙」はしつかり御記憶願いたいと思います。

大倭豊秋津島またの名は天つ御虚空豊秋津根別

以上発声された言葉が空中を飛び、耳で聞かれて確認され現象が確定するまでの心の区分、志那都比古の神より大宜都比売の神まで、フモハヌ・ラサロレノネカマナコの十四言霊の位置を大倭豊秋津島と呼びます。ここままで五十音の言霊が全部勢揃いしますので大和（大倭）であり、それがすべて豊かに明らかに明らかに現われる（豊秋津）区分（島）というわけでありませう。

それはまた先天から（天つ御虚空）豊かに（豊）明らかに（秋）現われた（津）音（根）の区分（別）でもありますので、天つ御虚空豊秋津根別とも呼ばれます。

【注一】心の一循環は文章で説明すると長くかかることになるが、人の発想から確認まで実際には一瞬の間であることが多い。この心の循環を仏教の天台宗では一念と呼ぶ。その一念の内容は説明せず、ただ数理で示し一念三千と言う。

言靈の幸倍へ 三題

「言靈の幸倍へ」という言葉が出て来ましたので、それに因んだ三つの事を列挙しておきます。

先ず第一には今迄説明して来ました、タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホへ・フモハヌ・ラサロレノネカマナコの三十二音であります。物事の実相を構成する三十二の子音言靈の生れ出て来る心の過程を、その生れ出る三十二の子音の配列によって示した言靈の妙であります。第二は世にいろは歌として知られています「いろは四十七文字」のことです。

イロハニホヘト・チリヌルヲ・ワカヨタレソツネナラム・ウヰノオクヤマケフコエテ・アサ

キユメミシエヒモセス

このいろは歌は物事の実相の意味を考えることによつて、その実相が生れる以前の宇宙（空）に帰る方法を明らかにしたものです。四十七の言霊を重複することなく全部並べることによつて、その言霊が生れる以前の心の宇宙に帰る方法を示しました。麻邇（まに言霊）を以て麻邇以前に帰る途を示すという言霊運用の妙であります。

第三は石上神宮（奈良県）に伝わる「ふる布留の言本」と呼ばれる言霊の運用法です。

ヒフミヨイムナヤコトモチ・ロラネシキル・ユキツワヌ・ソヨタハクメ・カ・ウオエニサリ
ヘテノマス・アセエホレケ

この歌は言霊四十七個を重複することなく並べることによつて、古神道で言う禊祓（みそぎはらい）即ち文明創造の政治の方法を説いたものです。言霊の原理の運用による歴史創造の心構えを言霊全部の配列によつて示すという、言霊の幸倍へであります。

以上言霊運用の妙を三題書きました。言霊の原理に通じて来ますと、現代の常識を超えた靈妙な力が言霊布斗麻邇には備わっている、ということにお氣付き頂けると思う次第であります。それぞれの詳しい説明は他の機会に譲ります。

火の夜芸速男の神、またの名は火の炫毘古の神、またの名は火の迦具土の神

言靈ン…古事記神代の巻の天の御中主の神に始まる神名がこの火の夜芸速男の神に来て丁度五十番目となります。五十音言靈を示す最後の神名です。火の夜芸速男の神とは、火は言靈のこと、夜芸の夜は夜の国、夜見または読みのことであり、芸は芸術のこととなります。全体で言靈の読みの芸術が早く示されている存在、という程の意味となります。これは正しく文字のことでありましょう。文字は言葉が眠っている夜の芸術です。

またの名である火の炫毘古とは、文字を読みますと言葉となつて脳裏に意味が蘇つて来て、言靈が炫かがやいているのが分りますから、その名があります。

またの名の火の迦具土の神の火は言靈、迦具土とは書く土の謎です。昔五十音を粘土板に書き刻きざみましたので火の迦具土の神と名付けました。この書き刻んだ粘土板を窯かまで焼いた素焼きの clay tablet を獲みかていました。鹿島神宮の御祭神である武甕槌たけみかづちの神の獲みかも同じ意味です。獲みかの神は獲みか神で御鏡みかがみに通じることになります。大和三山の一つ、天の迦具山の名は迦具土と同様、文字の意味を持たした象徴的な名前です。古事記にある「常世の国の香久の果」とは橘たちばな即ち蜜柑みかんの古名と思われていますが、実は香久は迦具かぐと同じで文字のことであり、常世とこよの

文字ですから漢字のことを指したものです。

火の夜芸速男の神と示された神代表音文字には数多くのものが作られました。そのそれぞれの解説は後章取り上げられます。

火の夜芸速男の神・言靈ンの出現によつて五十音言靈のすべてが出揃いました^注。伊耶那岐・美二神の子生みの仕事はここに終り、次に生まれた五十音を整理運用して、人間の行為の規準となる精神構造を作る作業が始まることとなります。

【注一】五十音言靈とは先天十七音、後天三十二音、それに神代表音文字一音計五十音である。この事情を中国の易経では単に数理で示して「大衍の数五十、その用四十九」と言つてゐる。大衍の訓読みが「ふとしく」であるから、布斗麻邇言靈五十音を宣べ広げる即ち敷衍することの意味に通じる。大祓の祝詞の中の「下津磐根に宮柱太敷立て」という言葉も同様の観点から見る事が出来る。

五十音の整理・運用

古事記の上つ巻には初めの天あめの御中主みななかぬしの神より三みはしらのちすみこ貴たかみ子こと呼ばれる天照大神あまてらすおほかみ・月読命つきよみのみこと・須佐男すさのをの命まで丁度百の神名が出て来ます。この百の神名は人間の心に関する根本の道理百個を謎々の形で表現したものです。この道理を形の上で神社神道が表徴したのが鏡餅であります。人間の心の鏡となる百の道もちという意味です。

鏡餅は御承知のように上下二段のお供え餅から成っています。上は心の構成要素である五十個の言霊を表わします。下の段はその五十個の言霊の運用法五十を示したものです。上段は天の御中主の神・言霊ウより火ほの夜芸速男やぎはやをの神・言霊ンまで五十の神名で表わされました。下段は五十一番目の金山かなやま毘古ひこの神より百番目の須佐男すさのをの命みことまでの五十神の神名で示されています。前章までのお話で五十番目の火の夜芸速男の神・言霊ンまでが出揃いました。鏡餅の上段が出来上がった事になります。そこで今度は鏡餅の下の段のお話が始まることになります。五十

個の言霊をどう操作・運用して人間精神の究極の行動規範（鏡）を作つて行くか、の問題です。そこでこれより五十一番目の金山毘古の神、五十二番目の金山毘売（かなやまひめ）の神……と話を進めることに致しますが、その話に入る前に重要な二つの事について申し述べておき度いと思います。

人間の心が全部で五十個の言霊から成り立っていることは分りました。今その五十個の言霊をもつて人間の行動の鏡となる精神構造を作ろうとしているわけですが、ところがここでよく考えてみますと、言霊をもつて鏡を作る道筋は、そのまま私達人間が日常に営む創造行為や世界的な人類文明創造の政治の方法ともなるものなのです。古事記の後章に出て来る「禊祓（みそぎはらひ）」とは言霊の立場からする創造行為なのであることがお分り頂けることと思ひます。これが挿入したい第一の事でありませう。

もう一つの事を申し上げましよう。前章「子生み」のお話で三十二の言霊子音の一つ一つについて出来る限りその言霊に即して説明して来ました。子音言霊という現象の最小単位の内容に限りなく近づく努力をしました。けれど現象の姿を描写する形容詞や比喩の言葉・文章は現象の真相そのものではありません。矢張り種々の概念的説明と同様に「あれがお月様だよ」と指さす指月の指なのです。

では現象の最小単位三十二の子音をはつきりと把握する方法はないのか、というところでありません。唯一つだけあるのです。これから検討を始めようとする五十音言霊の操作・運用

による行為の規範（鏡）を作る作業（禊 祓）の中に、心の中に鮮明に言霊子音の一つ一つが眼に焼きつく如く自覚されて来ます。人間の創造行為の言霊による鏡を作る作業の内に、個人が言霊を自覚する可能性が秘められています。これが是非前もってお話しておきたい第二の事柄です。詳しいことは後章「禊 祓」の章で申し上げることに致します。

古事記の本文にもどります。

この子を生みたまひしによりて、御陰やかえて病み臥せり。たぐりに生りませる神の名は金山毘古の神。次に金山毘売の神。次に尿に成りませる神の名は波邇夜須毘古の神。次に波邇夜須毘売の神。次に尿に成りませる神の名は弥都波能売の神。次に和久産栗日の神。この神の子は豊宇氣毘売の神といふ。かれ伊耶那美神は、火の神を生みたまひしに因りて、遂に神避りたまひき。

この子を生みたまひしによりて、御陰やかえて病み臥せり。

この子とは火の夜芸速男の神のことです。御陰の陰は靈止で子の出来る所。伊耶那岐・美の二神の婚ひによつて已に三十二の子（子音）が生れ、それを火の夜芸速男の神・言靈ンで表音神代文字で表わし、全部で五十個の言靈が出揃いました。もうこれ以上の言靈は存在しません。もう子は生れませんが、伊耶那美の命は子を生めなくなつたのです。この事を最後に火の夜芸速男の神即ち火の神を生んだので、子の出来る所が焼けてしまつて病氣になつた、と洒落た表現をしたのであります。

五十個の言靈が揃いましたから、今からその整理が行なわれることとなります。

たぐりに生りまざる神の名は金山毘古の神。次に金山毘売の神。

たぐりとは今の言葉で嘔吐のことです。けれどここではたぐり即ち手繰りという謎。金山毘古・毘売の金は神名の事を指しています。言靈を粘土板に刻んだ迦具土を手で手繰り集めますと神名文字の山（金山）が出来ます。五十音言靈を整理するために、先ず五十音神名文字を全部集めた、ということ。金山毘古は音であり、金山毘売は文字のことです。神社・寺院で備える鐘・鉦はすべてこの神名・神音を意味する謎です。

尿くそに成なりませる神の名は、波は通に夜や須す毘ひ古この神。次はに波は通に夜や須す毘ひ売めの神。

尿くそとは組く素そという謎であります。五十音を刻んだ粘土板（埴土・波は通に）を集めて、それをつ一つ点検して行くと、どの音も文字も正確で安定（夜や須す）している事が分つた、ということです。この場合も毘ひ古こは音を、毘ひ売めは文字を意味します。

神道で神主が唱となえる大祓祝詞おほはらいのりごとや古事記の「天の岩戸」の章には「くそへ」「糞くそまり」という言葉が出て来ますが、ここに出ました「組く素そ」の意味にとるとよく文章が通じます。大祓祝詞の内容は極めて難解に見えますが、言霊の見地に立つて見ますと、全編の意味内容が明らかになりました。

尿ゆまりに成なりませる神の名は弥み都つ波は能の売めの神。

尿ゆまりとは「いうまり」で「五埋まり」という謎です。五埋いいうまりの五いとはアオウエイと並ぶ五母音のことです。先ず五十音を手繰り集め、一つ一つを点検し、次に整理のためにすることと言えば、五つの母音を並べる事です。即ち「五埋いいうまり」です。すると言霊アは天位として上に行き、言霊イは地の位で下にあり、その二つに挟まれた形で言霊オウエの三音が並びます。

神名の弥都波能売とは「三つの葉（言霊）の目」という意の謎です。三つの葉とは天地に挟まれたオウエの三音のことを指します。日本書紀には弥都波能売を罔象目と書いてあります。罔は網のことで、母音を縦に五つ並べてみますと、丁度網の象の目（罔象目）のようになっていることが分ります。

和久産巢日の神

和久産巢日とは杵結びということの謎。五十音を集め、一つ一つ点検し、次に五つの母音を並べてみて、網の目になっていることが分った。その網の目に合う様に五十音全部を整理して並べてみると、五十音が一つの杵の中に結ばれるように並ぶのが分った、ということであります。但しその結ばれ方の意味内容はまだはつきりとは分らない状態です。「和久」は「湧く」ともとれ、まだ杵結びの内容が確定されない混沌さを持っている、の意を示しています。

この神の子は豊字気毘売の神といふ。

豊字気毘売の豊とは前に度々出て来ましたように先天宇宙のアオウエの四母音とイ・キシチニヒミイリ・キのイ・キとそれに挟まれた八つの父韻を表わします。豊で先天構造の意です。

宇氣はその先天（宇）の性質（氣）の意。和久産巢日は五十音言靈図としては内容がまだしっかり確認されてはいないけれど、それをそのまま活用しても（子とはその働きの意）先天宇宙の性質は秘め（毘売）られてゐるから充分通用する、という意味であります。宇氣は盃（入れ物）の意でもあり、和久産巢日（杵結び）の内容は確認されてはいませんが、その整理は先天の内容を受け入れている、の意とも取れます。

吉備の児島

以上五十一番目の金山毘古の神より和久産巢日の神までの座を吉備の児島といます。五十音言靈の整理が始まり、全内容を確認したわけではないけれど、兎に角五十音を一つの杵の中に結んだ段階、ということですよ。吉備の児島とは「よく備わった締り」の意です。島に見がついているのが初歩の締めくりであることを示しています。

さて初歩的にはあるが、豊宇氣として先天の性質を受け持っているこの五十音の杵結びを天津菅曾（音図）と呼びます。菅曾は菅麻とも書き、先天・大自然そのままの性質の音図（すがすがしい衣の意）のことです。

古事記の天の御中主の神より火の夜芸速男の神までの五十神が示す言靈五十音を、金山毘古の神から和久産巢日の神までの六神の区分である吉備の児島と呼ばれる整理作用で天津菅曾という音図が出来上りました。それは初歩的ではありませんが、人間が自らの心を構成する要素である五十個の言靈を整理して作った最初の五十音図です。これ以後の五十音の整理検討の作業はこの音図によつて行われることとなります。この音図即ち天津菅曾という音図は大自然そのままの人間の心、例えばこの世に生れたばかりの赤ちゃんに与えられている心の性能の構造と言つたらよろしいでしょうか。

伊耶那美神の神は、火の神を生みたまひしに因りて、遂に神遊りたまひぬ。

この文章を文字通り神話として擬人法として見ますと、伊耶那美の神は火の夜芸速男の神（火の炫毘古の神・火の迦具土の神）という頭に火の字が付いている神を生んだので、「御陰やかえて病み臥せり」と病氣になり、遂におなくなりになった、という意味になります。けれどもその神話が示す原理として見るとどうなるでしょうか。それは、三十二の子音が生れ、その子音を火の神である神代表音文字で表わして麻邇字が出来たので、伊耶那美の神の仕事はこ

で一応終つたために、高天原という精神創造の世界の中の役目から去つて行つた、ということになります。

この所をもう少し詳しく説明してみましよう。伊耶那岐の神（主体）と伊耶那美の神（客体）が感応同交して、その協力作業によつて現象の実相である言霊子音を生みましました。その子音は伊耶那岐・美の二神、父と母から生れ、父と母の性質を合わせ持つてはいますが、父と母とは別の第三者です。この第三者としての現象が生れてしまうと、そこで客体である伊耶那美の神の仕事は終り、その子音を整理・吟味する仕事は専ら主体である伊耶那岐の神のものとなります。

卑近な例を挙げましよう。ゆで小豆を作るとしましよう。作る主体は人間、材料である客体は小豆・砂糖・塩などです。さて料理が終り、ゆで小豆が出来上りました。出来てしまえば客體としての材料の小豆などの役目はそれまでで終り、その後の吟味である「うまいか、どうか」の判断はもつぱら主体である人間の役目です。当らずとも遠からずの説明だと思ひますが、御理解頂けたでありますか。

このようにして初歩の音図である天津菅曾の整理は主体側である伊耶那岐の神によつて進められて行きます。そしてこの整理作業は、後章でお話します禊祓の所でクライマックスに達する事になります。他方、伊耶那岐の神との協同による創造の仕事を終えた伊耶那美の神は高

天原を去つて、本来の自らの世界である客観世界（予母都國）の主宰者となつて美神独自の仕事を開始することとなります。即ち物事を自分の外側に見る分野、客観的物質科学文明の創造の世界の事であります。

古事記の文章に戻ります。

かれここに伊耶那岐の命の詔りたまはく、「愛しき我が汝妹の命を、子の
一木に易へつるかも」とのりたまひて、御枕方に匍匐ひ御足方に匍匐ひ
て、哭きたまふ時に、御波に成りませる神は、香山の敵尾の木のもとにま
す、名は泣沢女の神。かれその神避りたまひし伊耶那美の神は、出雲の國
と伯伎の國との塚なる比婆の山に葬のまつりき。

伊耶那岐の命の詔りたまはく、「愛しき我が汝妹の命を、子の一木に易へつるかも」とのりたまひて、

伊耶那岐の命は、それまでの創造のパートナーであつた妻伊耶那美の神を失つて、悲しんで

言いました「愛するわが妻、伊耶那美の命を一連の子と代えてしまった」と。伊耶那美の命を失つて、その代りに三十二の子音が生れました。その三十二の子音を表音神代文字に表わした火の夜芸速男の神・言靈ンを得ました。ですから子の一木とは言靈ンである神代文字の事を指します。

御枕方に匍匐ひ御足方に匍匐ひて、哭きたまふ時に、

先の五十一番目の神である金山毘古の神から五十音言靈の整理作業が始つています。この愛妻を失つて悲しむ伊耶那岐の命の行爲も、実はその整理作業を謎で示したもののなのです。整理作業は初めて手にした天津菅曾音図に基づいて行われていきます。御枕方とは音図を人間の寝ている姿に喩えますとア行に当ります。御足方はワ行を指します。御枕方と御足方を匍匐うといふのは、音図のア行とワ行の間を行つたり来たりすること、です。

哭きたまふ時に、とは声を出して見ることで、ア行とワ行の間を往来して、発声して見ると、どんな事が起るでしょうか。

御涙に成りませる神は、香山の畝尾の木のもとにます、名は泣沢女の神。

香山かぐやまとは書く山の謎。先に言靈ことだまの火はの迦久土かぐつちの神と同様です。言靈五十音を粘土板に書き刻んで焼いた埴土はにの集り、それが今は最初に確認された天津菅あまつすが曾そという音図うねになっています。その音図の畝尾うねと言えはアからワ、オからヨ……に到る横の列（アオウエイの各段）のことで

す。
悲しんでア行とワ行の間を往き来して、泣いた涙は畝尾うねの一番下のイ段に落ちます。するとそこに母音イと半母音ヰの間に展開している八つの父韻チイキミシリヒニが存在していること、そしてその父韻というのは泣き騒な騒さわ（沢）ぐ神（言靈）であることが確認されます。泣き騒ぎ、かしましいといえは普通女性を連想します。そこで泣沢女と女の字が附けられたのであります。よう。

小豆島あづきしままたの名は大野手比売おほのてひめ

この泣沢女の神の座、即ち音図上に初めて確認された八つの父韻の締めくくりの区分を小豆島と言います。八父韻は音図上で小豆あづき即ち明あきらかに続くつづききの区分であります。別名の大野手比売めとは大いなる横（野・貫ぬ）に並んだ働き（手）を秘めている（比売ひめ）の意味であります。八父韻は音図に於ては横に一列に展開しています注一。

【注一】音図に於ける横に並んだ八父韻は現象が現われ出て来る時間的判断力の基本となる。それに対し音図の縦に並んだ五つの母音の配列は現象の空間的・次元相違の判断力の基礎となるのである。

音図上の八父韻の確認を泣沢女の神と呼んだのは何故か、もう少し詳しく説明して見ましょう。

泣沢女なみさわめの神なみさわの泣沢とは泣き騒ぐ、の意味だと申しました。また鳴き騒ぐ、ととつてもよいでしょう。その鳴き騒ぐ音とは図で示されます天津すがそ菅音図のイと卍の間に展開するチイキミシリヒ二の八つの父韻です。父韻が鳴き騒ぐ音であるのに対し、それ自身決して騒がない音がアオウエイの五母音です。仏教でこれを梵音ぼんおんと呼ぶように大自然宇宙の音です。この大自然の宇宙は、自らは決して鳴らないがそれに何かの刺激が加えられると、無限に現象の音を出すエネルギーに満ちておりますので、宇宙の音を「無音むおんの音おと」などと呼ぶ事があります。

この大自然の無音むおんの音を言霊でアオウエイの五母音で表わしました。宇宙にはこの五母音し

ワ	天 津 菅 曾 3 2 子 音							ア	
ヲ								オ	
ウ								ウ	
エ								エ	
卍	ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	イ

か存在しません。お寺の鐘を撞くとゴーンと聞えます。でも実際には鐘は無音の振動の音波を出しているだけなのです。雨あがりの空に七色の虹が見えます。けれど実際には虹は七種の波長の異なる光波を出しているだけです。それが何故鐘がゴーンと聞こえ、虹が七色に見えるのでしょうか。同様にピアノは鳴つてはいません。唯空気の振動の波を出しているだけです。それが妙なる音楽として聞こえるのは何故なのでしょう。

鐘をゴーンと聞き、虹を七色と見、ピアノをボンと聞く現象の仕掛人、それが八つの父韻です。人間の創造知性の根本のヒビキなのです。音波とか光波とかいう大自然の無音の音が、人間の創造知性であります。森の緑に心を癒す物事の現象を創り出す知性のヒビキは飽くまで主体の側の活動なのであります。客体の側にはないものです。泣き沢ぐのは父韻であり、人間の創造知性の側の仕事であつて、その働きの刺激によつて宇宙である五つの母音から現象が出て来る、ということなのです。

八つの父韻の確認を泣沢女の神と呼ぶ理由を御理解頂けたでありますでしょうか。

八つの神遊りたまひし伊耶那美の神は、出雲の国と伯伎の国との塚な

る比婆の山に葬りまつりま。

頭腦の先天構造のことを昔の言葉で真奈井と呼びます。真奈（真名）である言靈がこんこんと湧き出る井戸という意味です。その言靈が現われる原因である父韻（泣き沢ぐ神）の働きは頭腦から雲の如く出て来る様に感じます。出雲は出る雲の謎です。出雲の国とは父韻を表わします。伯伎とは母の木のことです。アオウエイの五母音の謎です。聖書では生命の樹と呼びます。比婆とは靈の葉の謎です。言靈のことを指します。言靈の中でも特に三十二の言靈子音を靈または光の言葉と呼びます。

夫神である伊耶那岐の神と協同で三十二個の子音を産み、仕事を終えた伊耶那美の神は何処へ葬られているか、というところ、父韻と母音で作られている三十二個の子音の中に隠され、葬られていますよ、という訳であります。言靈子音が客観世界に去って行った伊耶那美の神の活動の名残なのだという意味です。

古事記の文章を先に進みましょう。

ここに伊耶那岐の命、御佩の十拳の劍と抜きて、その子邊具土の神の頸

と斬りたまひき。ここにその御刀の前に著ける血、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、石折の神。次に根折の神。次に石筒の男の神。次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、甕連日の神。次に樋速日の神。次に建御雷の男の神。またの名は建布都の神、またの名は豊布都の神。次に御刀の手上に集まる血、手候より漏き出て成りませる神の名は、間添加美の神。次に間御津羽の神。

菅曾音図を基として五十音言靈の検討は更に進められます。一節ずつ説明して行きますよう。

伊耶那岐の命、御佩の十拳の剣と抜き、その子迦具土の神の頸と斬りたまひき。

迦具土の神とは言靈ン（表音神代文字）を示す火の夜芸速男の神の別名、火の迦具土の神の事です。その頸とは組靈の謎で、靈である言靈を組んだもの、の事。ここでは菅曾音図を意味します。今迄五十音言靈の一つ一つの検討が続けられて来て、これからはその五十音によって

組まれた人間の精神構造全体についての検討が始まることになります。

ここに古事記で初めて十拳の劍と言つて、劍という言葉が出て来ました。古事記に於ても同様ですが、一般に神話や宗教書にある劍つるぎというのは、物体を斬る刀のことではなく、頭の中で物事の性質を検討するための天与の判断力の事を言いますまじ。この判断力は大きく分けて三種の種類があります。十拳劍とつかのつるぎ・九拳劍ここのつつか・八拳劍やつかですまじ。

ではここに出て来た十拳劍とはどんな判断力のことを言うのでしょうか。十拳とつかとは握り拳こぶしを十個連ねた長さの劍という事ですが、勿論それは謎の言葉です。精神上的の劍の場合、十拳とつかとは十という数を示します。十拳劍とは物事を十数を以て検討する判断力のことです。十数で判断する、と言つても見当がつかないかも知れません。十数とはア・タカマハラナヤサ・ワと横に十個の言霊が並ぶ天津太祝詞あまつふとのりごとと呼ばれる五十音図が後章登場しますが、その音図に示される精神構造に基づいた判断、ということなのです。後程詳しく説明されるでしょう。そして十拳劍は主として天照大神または伊耶那岐の神が用いる判断力です。

十拳劍で迦具土かぐつちの神の頸くびを斬つた、ということは、表音神代文字で表わされた五十音図を十拳劍と呼ばれる人間の精神構造の判断力を以て、分析・検討を開始した、ということになります。

【注一】古代には概念的な用語がなかった。そのため精神的なものを表わすのに物質的に意味を同じくする器物でそれを示した。剣もその例である。剣は刀（片名）と違って両刃である。断ち（分析）と連気（総合）の両面の判断力を意味する。物事の性質を調べるには分析と総合の両面が必要である。剣の他に杖と言う場合も判断力のことである。聖書にアロンの杖がある。

【注二】九拳ここのつかのつるま 剣とは九数を以てする判断力であり、その実体はア・タカラハサナヤマの九言霊であり、月読命が使う判断力のことである。八拳やつかのつるま 剣とは八数を以てする判断力であり、その実体はカサタナハマヤラの八言霊で、須佐男の命すさのを みことがこれを用いる。十九八の数の違いは何処から来るか、というと八つの父韻の両側にある母音ア（私）と半母音ワ（汝）の完全な自覚が備わっているか、否かにかかっている。九拳剣は宗教哲学の判断力であり、八拳剣は科学的判断力である。詳しくは後章。

その御刀みはかしの前まへに著つける血ち、湯津石村ゆついはむらに走たはしりつゝて

迦具土の神の頸である五十音言霊の集まりを十拳剣で分析・検討して人間の心の構造がどうなっているか、を調べる作業が始まります。御刀みはかしに著ついた血ちとは分析して分った道理（血）と

いうこと。御刀の前さきというの、次の文章で「前さき」の次に御刀の「本もと」、御刀の「手たがみ上」と分析・検討が進展して行く様子を示すためです。

湯津石村ゆついはむらの湯津ゆつは五百個いほつの謎です。アオウエイの五母音を基調とし、五十音を上下にとつて作つた百音図のことです注。石村は五十葉叢いほむらで五十音図のこと。湯津石村全部で五十音図を指します。

文章全体で、五十音の一つ一つの集まりを分析・検討する主体側の心の構造とその動きが五十音図の構造と結び付きたはし（走りつきて）、その関連で分析・整理・運用の道理が次第に明らかになって行く、ということであります。

【注一】湯津ゆつ（五百個いほつ）と書かれた場合の百音図は五母音を基調として作られた五十音図を上下にとつた百音図を想定している。この場合、上の五十音図は心の構成要素である五十音言霊の配列を、下の五十音図は上の五十音言霊の整理・運用法五十を意味している。上下で百個の道理という事である。

成りませる神の名は石折いはさくの神。

石拆いはさくは五葉裂いはさくの意。分析の結果、先ず五十音言靈がアオウエイの五つの段階に分割されることが分った、ということ。言い換えますと、人間の精神宇宙とは五つの次元がたなわっている構造をしていることが分った事であり。人間の精神に關する一切のものはこの五つの次元宇宙から現出して来るものであつて、それ以外のものはありません。この「五葉裂いはさく」の道理は世界の哲学・宗教の基本であります。^{注一}

この「五葉裂いはさく」の道理は人々が会話をする言葉に注目しているとよく分ります。心が言靈ウの次元に住む人同志の会話は各自自分が経験した事柄をその体験の順序通りに一部始終しゃべります。いきおい会話は長くなります。若い同志の電話の会話はその典型です。才次元に住む人の会話には抽象的概念的言葉がやたらと出て来ます。社会主義新聞の論説などはその見本と言えます。言靈アの次元では詩や歌が、言靈エの次元では「かくすべし」の至上命令がその典型的言葉となります。言靈イの次元からは言靈が、そして他のウオアエの次元に住む人々の心に合せた自由自在の言葉が出て来ます。

【注一】社会の用語のいくつかを石拆いはさくの道理によつて分類した表を掲げて置く。(小笠原孝次氏「言靈百神」より)

次に根拵の神。

根拵ねさく、は音裂ねくまたは根裂ねくの意味。音ねととれば泣沢なきさわぐ音のこことなります。現在検討している音図は母音がアオウエイと並び、その根とは最下段の言靈イであり、音図全体で言

黄中地土	脾(胃)	天菩卑命	伊邪那岐神	布斗麻邇	総持	生命意志	仏陀	イ	五
赤南火火	心(小腸)	天津日子根命	国之常立神	至上命令	道德的実践	理性(実践智)	菩薩	エ	四
青東風木	肝(胆)	熊野奇靈命	高御産巢日神	詩歌	芸術・宗教	感情	縁覚	ア	三
黒北水水	腎(膀胱)	天之忍穗耳命	天之常立神	抽象的概念	自然社会科学	悟性(經驗智)	声聞	オ	二
白西空金	肺(大腸)	活津彦根命	天之御中主神	感觉の直接的表現	産業	五官感觉	衆生	ウ	一
		(命名)	(神名)	(使用言語)	(職業)	(精神内容)	(五乘)	(母音)	(次元)
		(東洋医学)	(神名)	(使用言語)	(職業)	(精神内容)	(五乘)	(母音)	(次元)
		(五行)	(神名)	(使用言語)	(職業)	(精神内容)	(五乘)	(母音)	(次元)
		(五大)	(神名)	(使用言語)	(職業)	(精神内容)	(五乘)	(母音)	(次元)
		(方位)	(神名)	(使用言語)	(職業)	(精神内容)	(五乘)	(母音)	(次元)
		(色相)	(神名)	(使用言語)	(職業)	(精神内容)	(五乘)	(母音)	(次元)

えば八つの父韻のことです。現象を生む創造意志の原律である八つの父韻がどの様な順序で並んでいるか、が検討・確認される事であります。

次に石筒の男の神。

石筒は五葉筒または五十葉筒の意味。五十音言靈図は縦にも横にもそれぞれの列が一本の筒のように、人間の心が動く通路のように連続して変化・進展しているのだ、という事が確認された、ということ。天津金木音図を例にとりますと、五母音アイウエオも横の上段ア・カサタナハマヤラ・ワも一本の通路のように一定の内容を持つて連続して変化・発展しています。石筒の神と書かずに石筒の男の神と男の字が付けられているには理由があります。この事はすぐ後に出て来る建御雷の男の神の項で説明致します。

次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に走りつゝ成りませる神の名は、
覺速日の神。

人間の心を構成している五十個の言靈を検討して、先ず初歩的なまとめ方としての和久産巢日の神（天津菅首音図）を得ました。次にその初歩的に確認された音図を分析することによつ

て伊耶那岐の命自身の心の有り方を確認して行く事になります。

「御刀の前」の次に「御刀の本」と分析・検討が進展して行く度合いを示します。そこで分った事柄が五十音言靈図（湯津石村）と比較・参照されて、心の構造の道理（血）が更に深く甕速日の神と確認されました。甕速日の神の甕はアイウエオ五十音を粘土板に掘り刻んで素焼にしたもので言靈図を指します。速日の日は言靈の靈のこと、速日とはその言靈が言靈図の上でどの様な内容を表わしているか、が一目で（速）分るようになっていたことが確認された事があります。

五十音言靈図を見るのに二通りの方法があります。その一つである甕速日とは言靈図全般の上で一つ一つの言靈の集りが何を表わしているかが一目で理解出来るように整理検討されたのであります。いわば言靈図を静的な状態に於て検討した事、とすることが出来ます。静的な言靈図の検討といえ、天津金木、天津菅曾……等の五十音言靈図表もその例であります。

次に甕速日の神。

甕速日の甕は水を流す道具です。ですから甕速日の神とは言靈図の上で言靈がどの様に連続しながら変化・進展して行くか、が一目で分るように観察し、確認した事であり、甕速日

の静に対し、樋速日は動的状態変化の確認ということが出来ましよう。人間の心を見るにも、心の全貌がどの様な状態になつてゐるか、という見方と、心がどう変化・連続してゐるか、を調べる、という二つの見方がある事と同様であります。言靈の動的状態の検討といへば、先の「子生み」の章で見ました「タトヨツテヤユエケメ……」の子音が生み出るまでの心の働きの順序や石上神宮に伝わる布留の言本「ひふみよいむなやこと……（既刊『言靈』参照）」等が例として挙げられます。

ここに鹽速日、樋速日と速日という言葉が出て来ました。速日と同じ意味の言葉に早振りがあります。言靈の立場で見ると、物事の性状・進展の内容が一目で分ることを言います。この事をまた「言靈の幸倍へ」ともいいます。

次に建御雷の男の神。またの名は建布都の神、またの名は豊布都の神。

建御雷の建は田気の意であります。田とは人間の人格全体を五十音言靈で表わした言靈図の事です。また言靈図は田の形に似ているので、言靈図の譬えに用いられます。田の気とは五十音図の気ですから言靈を指します。雷とは五十神土の謎で五十音を粘土板に書いたものです。雷は天がどよめき轟く自然現象です。ところが人間の言葉も心の先天（天）が活動する

こと（神鳴り）によって現われる現象であります。この神鳴り（雷）に五十個の要素と五十の基本的変化があります。この要素である五十個の言霊とその変化を点検して先ず初步的な和久産巢日という五十音言霊図（天津菅曾）にまとめました。その音図を主体の判断力の十拳剣で分析・検討して行き、心の静的な構造（瓊速日）と動的な構造（樋速日）が明らかに確認されたのでした。その結果、五十音言霊によって組織された人間の理想の精神構造が主体である伊耶那岐の命の心に完成・確認されました。この構造を建御雷の男の神と呼びます。先に出生した石筒の男の神もそうですが、建御雷の男の神と共に「男」という字がついているのは何故か、ここで説明しましょう。初めに伊耶那岐の命は妻神伊耶那美の命と共同で三十の子音を生みました。それを粘土板に書いて火の迦具土の神という神代表音文字を作りました。言霊を文字に表わした処で伊耶那美の命である客体の役目は終ります。美の命は客観世界に去り、五十音を点検・確認する仕事は専ら岐の命（主体）の役目となります。そこで最初に手にした五十音図天津菅曾を主体の判断力である十拳剣によって分析・検討し、精神の理想構造として建御雷の男の神を得ました。この原理はやがて言霊学の総結論である「三貴子」の大原理を生み、また天孫降臨に際して大國主命に國譲りを説得する原理ともなったものであります。

但し、理想の精神構造が完成確認された、とは言いません、それは飽くまで伊耶那岐の命

という主体の心の中だけで完成・確認されたのであって、それがどんな場合に適用・応用しても妥当である、という証明は得てはいません。そこで主体の中でのみの確認・完成された真理だ、という事を強調して主体を表わす「男」の字が付けられているという訳であります。

この主観の中での真理が客観的・絶対的真理となるためには、その真理を客観世界に投影・適用して、それが真理として通用するか、否か、を確かめなければなりません。その作業は後章「黄泉の国」と「身褻」のところで詳細にお話することとなります。

建布都とは田気である五十音図を構成する言霊を運用して、都即ち理想の精神構造図を組織（布）したことの意。都とは言霊によつて組織された理想の精神構造を意味すると同時に、その原理を運用する政治の府をも指します。豊布都の豊は十四で母音と父韻の先天構造の原理の事、豊布都はその原理によつて言霊を組織することの意であります。建布都・豊布都は共に奈良県天理市布留にある石上神宮の十種の神宝の中の神剣の名前でもあります。

【注一】学生が心理学の講義を聞く。これは耳学問である。自分の心を反省し、自分の心が確かに講義の学問の通りに構成され、活動している、と確かめて初めて自分にとつての真理となる。これを自証という。しかしこれは未だ主観的真理の域を出ない。この主観的真理を客観的に幾多の人間や社会に適用して、そこに誤りがない時、客観的な真理として認められる。こ

れを他証という。自証と他証が共に成立する時、その真理は絶対的真理である。

次に御刀の手上に集まる血、手俣より漏き出て成りませる神の名は、
關於加美の神。次に關御津羽の神。

心の中に建御雷の男の神という主観的大原理を確立した伊耶那岐の命は、その原理を物事に適用して真偽を判断する方法の検討に入ります。その方法に二通りあり、一つは關於加美であり、他の一つが關御津羽であります。

十拳劍による分析・総合の検討が「御刀の前」「御刀の本」に続いて「御刀の手上」と進出して来ました。この時、血が「手俣より漏き出て」という一風変つた表現を使いましたのは、人間は宇宙の中に現出するあらゆる現象や、現象と現象との間の關係を調べる手段として数を使います。その実体は先に伊耶那岐の命が迦具土の神の頸を斬つた十拳劍といわれる十個の言靈です。主体アと客体ワとその間を結ぶ八つの父韻合計十個の言靈です。でありませんが、数としての十の操作は手の十本の指を曲げたり伸ばしたりする動作によって行われます。この指の屈伸の動作を御手繰と呼びました。建御雷の男の神という大原理を基本として、この

御手繰の動作によつて物事の道理が現われ出て来ることを「血（道理）が手俣より漏き出て」と古事記は洒落た表現を使つたのでした。

御手繰には二通りの方法があります。一つは十本の指を曲げて行くことです。これが關於加美です。指を一つ一つ順に繰り（闇）噛み合せる（於加美）の意であります。十本の指を次々に一二三四五……と折り曲げて行つて最後に十本全部握り終つた時、物事の内容の全てを十数によつて把握・理解した事になります。この形を昔幣（握手）と言いました。物事の全部を掌握した和の形ですから和幣とも書きました。

迦具土の神の頸を十拳剣で斬り、その構造を分析・総合して建御雷の男の神という理想の精神構造を心の中に完成しました。この理想の構造を示す言靈図を基準として、宇宙の間の一切の現象の道理を掌握しようとする事が關於加美の神であります。事物・現象の実態である言靈と、それを操作運用する法を表わす数の理（この数の理を数霊と呼びます）の二つで事物を掌握する時、物事を最も簡単に、そして正確に把握することが出来た事になります。この事を古代神道は和幣と言いました。注一。

神社に紙や布で作つた電光形のもものが飾つてあるのを御覧になりました。これを幣または御幣と呼びます。關於加美の神の内容を示した謎であります。昔の子供はお金のことを「握々」と呼びました。お金とは世の中の生産物の価値を掌握したものの、という意味を表わし

ています。神前にお供えする社会の生産物を「みてぐら」（饌）と呼びますのも、それが勤勞の結果を表わしているからであります。

【注一】大和の石いそのかみ上神宮の教えに「一二三四五六七八九十と唱えて、これに玉を結べ」とあります。玉とは言靈のこと。言靈ことたまと数靈かずたまとで事物の内容を把握することが最良の理法であることの教えである。

御手繰みてくりのもう一つの方法は關御津羽くらみつはであります。指を繰くつて（關くら）生命の知性の權威（恵み）である御稜威いづつ（御津みつ）を鳥の羽の広がるように現わし示す（羽は）ということですが、その操作は關く於加美かみとは反対に握にぎつている十本の指を一二三四五……と順に伸ばし起おこして行く事です。この操作を起き手と言いました。建御雷たけみかづちの男をとこの神かみという言靈ことたまの原理を色々な現象に適用してその時処位ときぢゐに応じて処理して行く事であります。

起き手は掟の語源です。關於加美で掌握した生命の原理・法則を實際に「第一条和を以て尊しとなす。第二条……」（聖徳太子の十七条憲法）の如く社会の法律として制定し、これを世の中の定めとして社会を運営して行くことでもあります。

以上説明して来ました石拆いはさくの神かみから關御津羽くらみつはの神かみまでの八神の名前が示している検討・操作

によつて主観内に於てではあります。建御雷の男の神という理想の精神構造図を完成し、その構造図を基として事物の原理の掌握とその活用の方法（關於加美・閻御津羽）が確認されたのであります。

大島またの名は大多麻流別

石拆の神より閻御津羽の神までの八神の操作が心の中に占る区分を大島といひます。大きな価値・權威を持つた心の締りという意味です。またの名前は大いなる（大）言靈（多麻）が流露・発揚（流）する心の区分、ということ。繰返して強調させて頂きますが、古事記の初発の天の御中主の神よりこの章の閻御津羽の神までが示す五十音言靈とその操作によつて、飽くまで主体内の自覚としてではあります。言靈布斗麻邇の原理が建御雷の男の神として一応の完成を見た事となります。この主観的に確立された言靈原理が、客観世界に投影・適用されて、その原理が主観的であると同時に客観的にも真理であることを確認する言靈原理の最終的行程は後章より始まることとなります。

神代文字の原理

古事記の文章を先に進めましょう。

殺されたまひし迦かくつち具土の神の頭かしらに成りませる神の名は、正鹿山津見まさかやまつみの神。
次に胸に成りませる神の名は、淡おど滕山津見やまつみの神。次に腹に成りませる神の名は、奥山津見おくやまつみの神。次に陰ほとに成りませる神の名は、開山津見くわの神。次に左の手に成りませる神の名は、志し芸山津見ぎの神。次に右の手に成りませる神の名は、羽山津見の神。次に左の足に成りませる神の名は、原山津見はらの神。次に右の足に成りませる神の名は、戸山津見との神。かれ斬りたまへる刀の名は、天あめの尾羽張おはばりといひ、またの名は伊都いづの尾羽張おはばりといふ。

殺されたまひし迦具土の神の

石拆いはさくの神より闇御津羽くらみつはの神までの八神は、言靈五十音を粘土板に書いた表音神代文字である。迦具土かぐつちの神を斬る主体である十拳劍の働きを言靈図（湯津石村）に結んで現われた道理について述べたものです。今度は十拳劍によって斬られる客体である迦具土の神を検討する段階に入つて行きます。

迦具土かぐつちの神とは言靈五十音を粘土板に書いた表音神代文字の事でありますから、斬られた迦具土の神から現われ、確認される道理とは文字の原理ということになります。言靈五十音がどんな法則に基づいて文字として表わされるかが検討されます。「子生み」の章に出て来る大山津見おほやまの神・言靈八は言葉のことであることは已にお話しました。山津見の山（やま）というのは凶形図で示される八つの父韻の間（八間）のことで、この八間の原理から言葉として現わしたのが大山津見の神であり、文字として作ったものがこれから出て来る八柱はしちの山津見の神であります。

著者の言靈学の師であつた小笠原孝次氏は八山津見の神の説明に當つて、そのまた師である山腰明将氏の説をそのまま踏襲とうしゅうしました。八間の法則から作られた神代文字は現在に伝わる

だけでも数十種あると言われていますが、それ等の文字がこれから説明する文字の原則のどれに相当しているか、の研究が進んでいません。それ故八つの山津見の概説をお話するに留めます。

頭に成りませる神の名は正鹿山津見の神。

頭は神知の謎。正鹿は真性の意。言霊の原理とその本性があるのままに表わされるような正系の文字の原理ということで、この原理から作られた文字は竜形文字である、と言われます。

胸に成りませる神の名は淤藤山津見の神。

淤藤は音の謎。胸は息を出す所と解けば、言葉を発声する法則に基づいた文字の作り方の意。

腹に成りませる神の名は奥山津見の神。

腹は原の意で、「竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原」などと古事記にありますように、五音図表の図面のことです。奥は言霊才を繰る、の意で、それぞれの文字の関連を考える意。故に音図全体の文字が調和するような文字の作り方、ということ。

陰に成りまぜる神の名は開山津見の神。

陰は子の生れ出る処。開は繰るの謎。言葉が文字として作られる原理・法則がよく分るような文字の構成法。

左の手に成りまぜる神の名は志芸山津見の神。

左は靈足り、で全体の意の謎。志芸は五十城または磯城・敷で五十音言靈のこと。手は文字の書き方の意。五十音全体の文字の書き方に主眼を置いた文字の構成法。

右の手に成りまぜる神の名は羽山津見の神。

右は身切りで、全体に対して部分の意。羽は言葉。全体の調和というよりは、むしろ言葉の一つ一つの内容を強調する文字の作り方。

左の足に成りまぜる神の名は原山津見の神。

足は歩く用を意味し、運用法のこと。原は言靈図面。言靈図全体の運用法に基づいた文字構

成法。

右の足に成りませる神の名は戸山津見の神。

右は部分の意、戸は十で五十音図の横の段の十個の言霊の事で、母音、八父韻、半母音の別があります。五十音図の縦の十列の区別がよく分るような文字の運用・構成法。

以上古事記が挙げる神代文字の八つの作り方について大雑把に説明しました。これら八種の文字の手法が実際にどんな神代文字と符合しているのか、は今後の研究に期待したいと思います。古代に用いられていた神代文字は数十種にのぼることが伝えられています。その中で奈良県天理市にある石上神宮に伝えられる「十種の神宝」の「蛇の比礼・百足の比礼・蜂の比礼・種々物の比礼」と名付けられた四種類の神代文字を一七一頁に掲げておきます（小笠原孝次氏著「言霊百神」より引用）。比礼とは枚とも言い、また靈頭とも書きます。文字のことです。

ひめしま
女島またの名は天一根

正鹿山津見の神より戸山津見の神までの八神の神代文字の原理の人間の心の中に占める区分を女島といひます。女島の女は音名であり、文字を示していますし、また文字には言葉が秘め（女）られています。神代文字はすべて火の迦具土の神という一つの言靈（天）から現われますので、天の一根とも呼ばれます。

伊耶新いたまへる刀の名は天の尾羽張といひ、またの名は伊都の尾羽張といふ。

伊耶那岐の命が迦具土の頸を斬った十拳剣の働きである分析・総合・整理・運用の作用が五十音言靈図の上で検討された結果、主体の側に理想の精神構造（建御雷の男の神）が完成・確認され、客体の側に文字の原理が現われました。尾羽張とは鳥の尾の羽が末広がり（すまひろ）に広がる姿で、十拳剣の分析・総合の働きを活用して行けば、文明の創造が次から次へ末広がり（すまひろ）に現われ発展して行くことが出来ます。人間精神の判断力（分析と総合）は文明創造の根本の力であることです。そこで十拳剣に天の尾羽張、また伊都の尾羽張の名がつけられました。天は先天・天与の意、伊都は御威稜で恵み・權威と言った意であります。

【注一】尾羽張おはばりの名とその内容は外国の神話・宗教書にも見られる。分析・総合の刀を象徴として天空の星に求めたのが、ギリシヤ神話のオリオン（参宿、Orion, Oharion）である。十字の形のオリオン星座は時間・空間を縦横に斬る十拳劍の活用を象つた謎であつた。旧約聖書ヨブ記に「なんじ昴宿ぼしやく（スバル）の鍵索くわさきを結びうるや、参宿（オリオン）の繫繩つなぎを解とくうるや、……」（ヨブ記三十八章）と記される文章もこの人間天与の劍の活用を呪示したものである。

五十音（アイウエオ・アカサタナハマヤラワ）

蛇の比禮

之	井	邑	百	目	ひ	は	氏	上	邪
し	32	12	4	4	88	2	2	3	3
之	3	3	3	3	3	3	3	3	3
又	2	30	2	2	2	2	2	2	30
3	2	32	3	3	3	3	3	3	3

百足の比禮

十	水	舟	水	十	水	十	水	ス	出
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十

蜂の比禮

0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1

種々物の比禮

0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	1	1	1	1	1	1	1	1	1

黄泉国

古事記の本文を先に進めます。

ここにその妹伊耶那美の命と相見まくおもほして黄泉国に追ひ往てまじき。ここに殿の藤戸より出で向へたまふ時に、伊耶那岐の命語り詔りたまひしく、「愛しき我が汝妹の命、吾と汝と作れる国、いまだ作り竟へずあれば、還りませぬ」と詔りたまひき。ここに伊耶那美の命の答へたまはく、「悔しかも、速く来ませず。吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛しき我が汝兄の命、入り来ませること恐し。かれ還りなむを。しまらく黄泉神と論はむ。我とな視たまひ」と、かく白して、その殿内に還り入りませる

ほど、いと久しく待たねたまひき。かれ左の御髻に刺させる湯津爪櫛の男柱一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見たまふ時に、蛆たかれころろむて、頭には大雷居り、胸には火の雷居り、腹には黒雷居り、陰には折雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて入くさの雷神成り居りき。

はじめに伊耶那岐・美の命は協同で三十二の実相子音を生み、それを迦具土として表音神代文字に表わしました。そこで客体である伊耶那美の命の高天原精神界での仕事は終り、精神要素である五十音言霊の整理・運用の確認の仕事は専ら主体である伊耶那岐の命の責任に於て行われ、遂に主体側内部に建御雷の男の神という理想の精神構造を確立しました。先に触れましたように、この段階を真理の自証と申します。またその真理の運用法として闕淤加美（握手）と聞御津羽（起手）の二つがあることと、この運用を進めることよって限りなく人類文明を創造して行く事が出来る天の尾羽張の剣の活用とを確認出来たのでした。

さて伊耶那岐の命の仕事は、自らの心中に自証された真理をふまえながら、この真理が何時如何なる場合に於ても真理である絶対的な真理として確立させるために、自証から他証に移る

作業を開始することです。自証を他証に移すためには、自らの心に確かめられた原理を他の世界に適用して見ることから始まります。

ここにその妹伊耶那美の命と相見まくおもほして、黄泉国に追ひ往てま

この文章そのままの意味を言えば「いとしい妻に会いたくなつて、伊耶那岐の命は美の命の住む黄泉国に追いかけて行つた」となります。古事記神代巻は言霊原理の書でありますから、勿論単なる岐美二神の恋物語ではありません。主体的な真理を確立した岐の命が、協同の仕事の役目を果して去つて行つた美の命の本来の領域である客観世界へ行つて、その世界が如何なる内容、価値があるのか、自らの真理を適用して見る事が可能であるかどうか調べようと、追いかけて行つた事であります。

ここに黄泉国という言葉が出ました。古事記の種々の注釈書を見ますと「地下にある空想の国」とか「死後の世界」など書かれています。それはこの文章が言霊の教科書であることを知らない為の誤りです。黄泉国はまた予母都国や四方津国なども書きます。予母都国とは種々の文化の予めの母なる都の国という意。言霊原理に則つて洗練されてはいない文化が始ま

る国、と言つた意味です。四方津国とは言靈の幸倍さちばう日本以外の、日本から見て四方の国、即ち外国のことを指します。靈ひの本日本は言靈の幸倍さちばう高天原、それに比べて外国は洗練された言靈原理のない種々の文化が興廃を繰り返す国ということです。何故ならそれは精神の理想の構造原理の備わっていない、客観世界の観察を重視しようとする地方であるからです。

伊耶那岐の命は心の内に理想の精神構造の自覚を持ちながら、更に未完成の混沌とした客観世界へ出て行つたのであります。

この、に殿の騰戸より出て向へたまふ時に、

殿とのとは「みあらか」と読み、神の家のことで、言靈図を指します。騰戸くみどとは閉つた戸の意。古事記のある本には騰戸あかりどと書いてあるものもあり、そう書くと一層意味は明瞭となります。お風呂の上がり湯と言えば、お風呂から出る時かぶるきれいな湯のこと。言靈図の騰戸あかりどと言えば、アから始つて八つの父韻を経て半母音ワで終りますから、最後の行ワ行ということです。高天原から客観世界に出て行くには客体であるワ行から出て行くこととなります。騰戸くみどと言つて「閉しまつた戸」とは高天原と客観世界との間を閉とぎした戸の意味です。この戸については後章その内容が詳しく説明されます。

伊耶那岐の命かた語りひて詔のりたまひしく、「愛うつくしき我が妹なにもの命、吾わと汝かたと作なれる国、いまだ作り竟まへずあれば、速かへりませぬ」と詔のりたまひき。

伊耶那岐の命は伊耶那美の命と話をして次のように言いました。「愛する妻よ、私と貴方と協同で作った国はまだ完成してはいません。還つて来て下さいませんか。」主体と客体との協同作業で創造・確認し、それを表現することの出来た言葉の原理は、これを応用してまだ種々の文明活動を広げて行かなければなりません。今後も共に力を合せようではありませんか、という意味であります。

この主観と客観の両世界の協力という伊耶那岐の命が呼びかけた問題は、これより後の章に於て、岐美二神即ち主体と客体の交渉の決裂によつて人類文明創造上の大きなドラマが歴史上実際に展開されることとなります。人類の精神文明と物質科学文明という二大文明の創造の歴史の物語りの事であります。

ここに伊耶那美の命の答へたまはく、「悔くしきも、速とく来きませぬ。吾わは黄泉よみ戸へ喫くしつ。

伊耶那美の命は答えて言いました「残念です。貴方がお別れしてから直ぐいらっしやらかなったので私は黄泉国の食物を食べてしまいました。」高天原の言霊の原理に基づいた理路整然とした言葉の道理ではない、外国の不完全な、整理されていない文字や学問を経験してしまいました。旧約聖書にある「イブが蛇に誘惑されて禁断の知恵の木の実を食べてしまいました。」

然れども愛しき我が汝兄の命、入り来ませること恐し。かれ還りなむと。
しまらく黄泉神と論はむ。我をな視たまひずし。

しかし折角貴方がわざわざ迎えに来て下さったのですから還ることに致しましょう。その前にこの黄泉国の神とその文化について議論をして参りますから、私を見ないで下さい、と美の命は申しました。高天原に言霊布斗麻邇の精神原理があるように、黄泉国にも極めて不完全で未整理の言葉や学問があります。この客観世界の文明を発展させることが私の使命と思っておりますので、しばらくその役目の人々と詳しい話をして来ますから、待っていて下さい。まだ不完全な学問ですから中を見ないで下さい、というわけであります。

後の文の中で、伊耶那岐（主体）と伊耶那美（客体）の世界の学問の間の決定的な違いを確認し、その後は伊耶那美の命自身が黄泉大神（外国文化の中心思想）となつて物質科学文明を

推進することとなります。ですからその時代は客観世界の物質文明はまだ搖籃時代であつたから「恥かしいから見ないで下さい」と言つたわけです。

かく白して、その殿内に運び入りませるほど、いと久しく待たねたまひさ。

伊耶那美のみの命はそう言つて黄泉国へ行つたきり、久しく出て来ません。伊耶那岐ぎの命は待ち切れなくなりました。実際に客観精神の伊耶那美の命がその独自の物質科学文明を完成するには、その後数千年を要す事となります。

かた左の御髻のみづらに刺さてせる湯津爪櫛ゆつつまぐしの男柱ひとつ一箇取ひとつり闕かきて、一つ火燭ともして入り見たまふ小時こしに

湯津ゆつ爪櫛つまぐし全体いほつで五十音言靈ごじゅうおんごん図ずを指さします。音図おんずは櫛くしの齒はの形かたちをしています。古事記後章では櫛くし稲田いなだひめ姫ひめなどの名で喩たとえられます。左の御髻のみづらというのは音図おんずの向むかつて右方みぎはた。男柱ひとつ一箇ひとつとはアオウエイの事こと。主体しんたいの五母音ごぼおんです。その「一つ火ひとつ」といへば五母音ごぼおんの中なかの一つひとつであります。妻神つまがみを

恋う心ととれば感情である言靈アのことであり、まだ知らない世界への好奇心ととれば言靈オとなりませす。その一つの心をもつて、妻神が入つたまま、なかなか出て来ない黄泉国の文化をのぞき見た、というわけであります。

蛆うじたかひころちがて、

中をのぞいて見ると、伊耶那美の命の体には蛆虫うじむしがたかつて音を立てていた。蛆うじとはウの字のことで、ウ言靈である五官感覚から出た欲望の産物、万有の姿に即して作られた文字や学問のことです。それらの文化がすべて自我を主張してゴロゴロと鳴り、客観世界の文化は完成と調和には程遠い状態であつた、ということす。

頭には大雷おほいかづち居り、胸には火の雷居り、腹には黒雷くろ居り、陰には折雷さく居り、左の手には若雷わか居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷なる居り、右の足には伏雷ふし居り、併あひせて八くさの雷神成り居りませ。

黄泉国よみくにの外国の文化を学んでしまつた伊耶那美の命の心には八種類の文字の原理が染みこんでしまつていた。雷いかづちは五十神土いそかづちの意で文字を粘土板に刻んだもの、であるが、この場合は外

国の文字のことであります。前にお話しました日本の八つの山津見神の文字のことではありません。ですから岐美二神の共同の創造である言靈百神の中には入れない四方津国である外国の種々の文字の原理を八種の雷と言つて表わしたわけです。

古事記の本文にもどります。

ここに伊耶那岐の命、見畏みて逃げ還りたまふ時に、その妹伊耶那美の命、「吾に辱見せし」と言ひて、すなはち黄泉醜女を遣はして追はしめき。ここに伊耶那岐の命、黒御髪を投げ棄てたまひしかば、すなはち蒲生子をまき。こを摺ひ食む間に逃げ行でますと、なほ追ひしかば、またその右の御髻に刺させる湯津爪櫛を引き闕きて投げ棄てたまへば、すなはち笋生りき。

ここに伊耶那岐の命、見畏みて逃げ還りたまふ時に、

伊耶那岐の命は四方津国にいる妻神の体に蛆がたかっているように、その心の中にいろいろな外国の未完成の文化の文字原理がわだかまっている姿を見て、その自己主張と不調和の世界

に恐れをなし、此処は長く留まる処ではないと、自分の住家である高天原に逃げ帰って来よう
としました。

逃げ帰る、と言つても、唯逃げて来るものではありません。伊耶那岐の命は自分の心の中で物
事の処理創造に当る理想の心構え（建御雷の男の神）を確立し、その自証された精神を持つて
客観の世界へ行きました。そこで高天原の完成された精神世界とは違う客観世界の未完成・不
調和の醜い文化を見たのです。そして再び伊耶那岐の命は自らの世界へ帰ります。この行動に
よつて完成された理想の精神法則と未完成の物質文明が出会つた事となります。そこに当然主
観的精神の中に於て、客観世界のものをどう処理したら良いか、の活動が起ることとなります。
それは自証の精神が更に他証されて主観・客観共に証明される過程としての活動が展開される
こととなります。

その妹伊耶那美の命、「吾に屏見はしせつ」と言ひて、才なははらよもつしこめ黄泉醜女と
遣はして追はしめよ。

妻神伊耶那美の命は、自分の受け持っている客観世界の創造はまだ緒についたばかりの所で、
未完成であるから「見ないで下さい」と言つたのに、夫神は中を見てしまった。「恥はじをかかせ

ましたね」と言つて、黄泉醜女に命じて追いかけさせた、という意。黄泉は外国。男の言葉に對して、女は文字のことであります。夫神の心を外国の文字の原理の思想でもつて虜にしよ
うとしたことです。醜女の醜はみにくいので、未完成・不調和の原理を表わします。この物
語の時代から客観世界の科学原理の完成の現在まで、数千年もかかった事を思えば、この文章
の氣持が了解されます。

ここに伊耶那岐の命、黒御髪と投げ棄てたまひしかば、十なはら蒲子生

イヌ。

髪とは書き連ねる、の意。また髪は頭にかぶせることから心の装ひの意味を表わし、音
図の上段であるア段の音の連なりのことです。これを仏教で華鬘けまんといい、古代ギリシヤでは口
ーレル（柱の冠）で表現しました。カサタナハマヤラの八音のことを指します。

黒御髪とありますから八音の中の陰性音を意味し、濁点の付けられないマヤラナの四音を指
します。心の先天構造の章でお話しましたように、主体のアと客体のワを結ぶ八音の中で、陽
性音であるカサタハの四音は主体が客体に呼びかける律動であり、マヤラナの四陰性音は主体
の呼びかけに答える客体の応答の律動であります。伊耶那岐の命は追いかけて来る黄泉醜女に

この精神世界より見た物質世界の法則を投げ与えてやった、ということですが、
すると蒲子が生った、とあります。蒲子とは知恵の言霊の書連の意です。物質世界研究に
参考となる言霊の原理・法則ということでもあります。

こを搦ひ食む間に逃ける行でますと、なほ追ひしかば、またその右の御髻
に刺させる湯津爪櫛を引き闕きて投げ棄てたまへば、すなはち芽生ゆる。

追いかけて来た黄泉醜女である外国の文字の原理の文化思想は、よいものが落ちていて、と
言つて拾つて研究吸収しようとなりました。その隙に伊耶那岐の命は高天原に帰る道を急ぎまし
たが、更に黄泉醜女は追いかけて来ました。

そこで伊耶那岐の命は「右の御髻に刺させる湯津爪櫛」を投げ棄てました。右の御髻とは音
図の右の半母音ワウエヱのこと。音図の左の男柱のア行は主体であり、初めでありませす。そ
れに対し右の女柱のワ行は客体であり、終りです。またア行は知性の出発であり、ワ行は結論
です。ワ行を投げ棄てた、ということとは物事・現象を精神原理から見た時の結論を投げ与えた
ということですが。

事実、歴史的に見ましても、初期の物質的・客観的科学である天文学・幾何学・東洋医学等

々の学問では、アイウエオ五十音言霊学の原理をそのまま客観世界の現象に当てはめて、その法則を発見したものが多かった事です。伊耶那岐の命の投げ与えた精神原理を黄泉国で撰取・研究した成果でありましょう。現在の漢方医学にはその証拠が歴然としております。箒たかむなは筍たけのこ（竹の子）のことで、田氣の子即ち言霊から出た結論という意味です。

古事記の本文を進めます。

こを抜き食む間に、逃げ行でましまさ。また後にはかの入くさの雷神に、千五百の黄泉軍と副へて追はしめさ。ここに御佩の十拳の剣を抜き、後手に振きつつ逃げ来ませるを、なほ追ひて黄泉比良坂の坂本に到る時に、その坂本なる桃の子三つとりて持ち撃らたまひしかば、悉に逃げ返りさ。

こを抜き食む間に、逃げ行でましまさ。また後にはかの入くさの雷神に、千五百の黄泉軍と副へて追はしめさ。

黄泉醜女よもつしこめがこれを抜いて食べ、研究・撰取している間に伊耶那岐の命は逃げて行きました。

その後には先に話に出ました黄泉国の八種類の文字の原理（雷神）に千五百の軍隊を副えて追つて来ました。

八くさの雷神は前に説明しましたが、千五百の黄泉軍とは何の事でしょうか。千五百とは三千（みち）の半分を意味しますが、物事の道理（三千・みち）が三千あるとするならば、その半分の千五百は精神の要素と現象の原理であり、残りの半分の千五百は物質界研究の道理ということになります。これが黄泉国の分担する研究分野の原理・法則です。軍は五種の意であります。五数を基本とする東洋哲学の思想もこの中に入ります。五行・五大の考え方であります。これ等の主張が自らの正当性を主張して伊耶那岐の命を追いかけて来たというわけです。八くさの雷神と千五百の黄泉軍で高天原日本以外のすべての外国の文化・思想と言うことになりましょう。

【注一】 仏教天台宗に「一念三千」という言葉がある。天台の教旨であり、今・此処の一念の心の中に精神界の全てが備わっているという意。そのすべてとは基本数五から十、五十、百、千、三千等に展開される、と説く。

ここに御佩の十拳の剣を抜き、後手に振りつつ逃げ来ませると、

十拳の剣とは、前にも度々出て来ましたが十数をもつてする判断力のことです。精神的なことを述べる時に出て来る杖・剣という言葉は全て人間天与の判断力、哲学的に謂えば統覚のことです。伊耶那岐の命はその剣を「後手に振りつつ」逃げた、とあります。判断力を前手に振る、と言えば、一つの原理から「一二三四五六七八九十」と演繹的にいくつもの法則に発展・展開して行くことであります。後手に振る、とありますから、それとは反対方向にいくつもの主義・主張・法則等を「十九八七六五四三二一」と帰納的に唯一つの原理、ここでは十拳の剣の出所である高天原のアイウエオ五十音の原理、伊耶那岐の命が心中に確立している建御雷の男の神の原理に戻して行つて、それら黄泉国の主義・主張が精神音図のどの位置を占めるべきものか、を判断し、整理し、それらが人類の文明を創造する役割を決定して行く方法を確立して行く事であります。この心の操作の行程を後章で「身禊」と呼んでおります。

なほ追ひて黄泉比良坂の坂本に到る時に、

雷神と黄泉軍は尚追いかけて来ました。そして黄泉比良坂の坂本に到達した。比良とは靈頭で文字のこと。比良坂とは文字の性(坂)で文字の原理のこと。その坂本と言えば外国の文字

の性質の根本原理ということになります。伊耶那岐の命は逃げながら自らの自覚する建御雷たけみかづちの男の神の精神構造図に照らし合わせて、外国の文字の諸法則の整理・処理法について勉強しました。そして外国文字の根本原理の処理の方法を確立したところで、高天原精神界と外国の物質的、客観的研究の世界との決定的な相違点、決して交わることのない両者の境界線を明確に自覚したのでした。

その坂本なる桃の子三つととりて持ち撃らたまひしかば、悉ことごとに逃げ返り

え。

黄泉比良坂ひらさかの坂本とは、物質的・客観世界の研究が高天原精神界に近づく最終極限の線であることを伊耶那岐の命は知りました。その線は同時に高天原精神界の限界線でもあります。それは先に伊耶那岐の命が妻神伊耶那美の神を追いかけて黄泉国へ出掛けて行った「殿とのの騰戸あがりど」でもあります。(次頁の図参照)。

その境界線(坂本)の高天原側は半母音ワエヲウです。そこにある桃ももの子こ三つといえは、エヲウの三音言霊であります。桃ももとは百のことで、五十の言霊と五十の操作法、計百個の原理です。その子こといえは、百個の原理が産み出した結論三つということですが、この詳細はこの

「古事記と言霊」のお話の総結論として後程解説されますけれど、今は簡単にエヲウの三言霊と申し上げておきます。エは実践知工の結論、ヲは経験知オの結論、ウは五官感覚意識の結論です。

伊耶那岐の命は黄泉国で経験した未完成の客観世界の文化や、追いかけて来た雷神・醜女・黄泉軍等の文化・法則の内容を処理する方法を研究し、自覚完成させて、その結論である言霊エヲウの桃の子三つを持って示しました。その素晴らしい自覚内容に驚き、到底客観世界の研究方法では到達し得ない境地であることを知って悉く逃げ帰って行きました。

古事記本文に戻ります。

ここに伊耶那岐の命、桃の子に告りたまはく、「汝、吾を助けしがごと、

石の引千		命の岐	
命の美		命の岐	
黄泉比良坂	ワ 中 エ ヲ ウ	建御雷の男の神 高天原	アイエオウ
坂本		桃の子三つ	

葦原の中つ国にあらゆる現しき青人草の苦み瀬に落ちて、患惚まん時に助けてよ」とのりたまひて、意富加牟豆美の命という名を賜ひま。

伊耶那岐の命は桃の子に言いました。「お前達が今、私を助けたように、今後この高天原日本の国の住民が、困難な状況に陥つて苦しむ事があつたら助けて上げて呉れよ」と言つて、桃の子に意富加牟豆美の命という名を授けました。意富加牟豆美の神とは大いなる（意富）神（加牟）の御稜威（豆美）の実体（神）という意味です^{注一}。

【注一】梅若の狂言「桃太郎」の中で、仕手の桃太郎は自らを意富加牟豆美の命と名乗る。桃太郎とは百太郎の意で、言霊の百の原理から生れた総結論である三貴子（天照大神・月読命・須佐男の命）の長男（太郎）ということ。即ち天照大神のことを指している。

言戸度し

最後にその妹伊耶那美の命、身みづから追ひ来まじき。ここに千引の石をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石の中に置きて、おのもおのも対き立たして、事戸を度す時に、

古事記はいよいよ伊耶那岐・美二神の事戸度しの場面に入つて来ました。事戸度しを日本書紀は「絶妻の誓し」と書いてあります。夫婦の離婚のことです。現代社会では夫婦の離婚は珍しい事ではありません。ですから伊耶那岐、伊耶那美二神の離婚と言っても、神様の家庭の出来事か、ぐらいに軽く考えてはいけません。人類の文明を創造して行く上で、人間の心の主観と客観という二つの分野の決定的な違いが確認され、宣言されるという重大事件が起ることとなります。

初めに伊耶那岐の命は妻神伊耶那美の命と共同で三十二の実相子音を生みました。先天十七個、後天三十二個、計四十九個の言霊が揃いました。言ってみればこれらの言霊は大自然が人間に与えて呉れた天与の性能です。次に四十九音を神代表音文字に表わしました。言霊ンです。これで言霊五十音が全部整いました。岐・美二神の共同作業はここで終り、美の命は本来の自らの領域である客観世界に去つて行きます。

伊耶那美の命が黄泉国客観世界に去つた後に、伊耶那岐の命は自らの責任で五十音言霊の操作方法の研究をし、その結果心の中に建御雷たけみかづちの男をの神という文明創造上の理想の精神構造を確立・自覚することが出来ました。しかしこの真理は自分の心へのみ確かめられる真理（自証）であり、如何なる時、如何なる場所に於ても妥当であるか、の証明（他証）は、この真理を再び客観世界に当てはめて調べて見なければ得られません。

そこで岐の命は、去つて行つた美の命の居る客観世界研究の黄泉国に追いかけて行き、そこで不完全・不調和である客観世界の文化の内容を体験し、その不調和の姿に驚いて高天原へ逃げて来ました。逃げながら自らの持つ精神原理を投入して、外国の文化の整理・摂取の方法を研究しました。その結果、外国の客観世界の文化の内容の全てである八くさの雷神と千五百の黄泉軍よもついくさとを撃退させたのです。即ち外国文化の一切を整理する方法を確立した事になります。その整理方法の確立した結論として、主体である精神界と客体である物質界とは、その研究

方法が全く違うこと、それ故に客観的学問である物質科学文明の完成を見るまで、精神文明の粹である布斗麻邇の原理は高天原日本に於て保持・継承し、物質科学文明は四方津国である外国に於て創造発展させて行くのが歴史的に適當である、ということに気付いたのです。精神文明創造の責任者である岐の命と物質文明創造の責任者である美の命はお互いに分担する世界を異にするために、ここに離婚することとなります。

最後にその妹伊耶那美の命、身みづから追ひ来ましき。

黄泉国の言葉・文字の原理・内容である雷神と文化の全ての研究内容である千五百の黄泉軍が全部撃退させられてしまいましたので、最後に客観世界文明の責任者であり総覧者である伊耶那美の命自身が追いかけて来ました。ここで純主体と純客体両世界の責任者が真っ向から対立することになります。主体・客体の意義が大きなテーマとして取り上げられることとなります。

ここに千引の石とその黄泉比良坂に引き寄せ、その石の中に置きて、おのおのおのも対き立たして、

黄泉比良坂に千引の石を置き、その石を中にして伊耶那岐の命と伊耶那美の命はお互いに向かい合いました。黄泉国の客観的・概念的な学問・文化を、十拳の剣である言霊の原理に照らして検討し、整理して来て、その時まで主観的のみ自覚されていた言霊五十音の原理が、他の文明社会に適用して間違いない客観的の原理でもある事を確かめる事の出来た伊耶那岐の命は、黄泉比良坂に千引の石を置いて、ここまでは黄泉国の客観世界研究の領域、ここからは高天原精神原理の世界と、厳然とした一線を引いて区別した、ということでもあります。

千引の石とは、千を道と解釈しますと、字引き等の言葉に見られますように、道理を明らかに示した石、即ち五十音言霊ということになります。千を血と釈けば、伊耶那岐・美二神の共同で生んだ（血を引いた）三十二の子音言霊ということです。黄泉比良坂である外国文化の文字の原理と高天原の精神文明の原理との最も際立った違いである五十音（三十二音）の言霊を配列して、両文明の領域に劃然とした区別を確定したのでした。

伊耶那岐の命は言霊母音で表わされる主観的精神世界の生命の自覚者であります。それに対し伊耶那美の命は言霊半母音で示される客観的な現象世界の研究者であります。岐の命は生命内容を内に観じて、生命の目的を自覚する責任者であるのに対して、美の命は現象を自らの外にのみ観て、生命がどの方向に向っているか、などの自覚については全くの盲目であり、無自覚です。伊耶那美の命の努力によって現在、巨大な物質科学文明が建設されました。けれどこ

の科学文明を人類の福祉という目的にどうしたら適合させることが出来るか、の方策は、物質科学自体からは何も決定することは出来ない、という事実がよくそれを示しています。両者の住む処は言い換えますと両者の文明創造の領域は、生命活動の二大分野として決定的な相違があります。その区別する一線として千引の石が置かれたのでした。

ことごとく
事戸と度す時に、

事戸を度す、とは日本書紀に「絶妻の誓」とありますように、伊耶那岐の命と伊耶那美の命が離婚をすることです。言霊の学問から言えば、事戸は言の戸の意味で、伊耶那美の命の研究領域は黄泉比良坂のここまで、これより内側は高天原の精神原理の領域であつて、伊耶那美の命の研究対象としては手が届かない世界なんだよ、とはっきり区別し、宣言してしまつた事です。その印としてその境目に言である言霊の扉（戸）を立ててしまつたのです。その言霊とは主として三十二の子音言霊の配列です。

黄泉国の外国に於ても、五十音言霊の中の五母音については、東洋哲学に於て概念的ではあります、五行（中国）や五大（印度）などで説かれており、また八つの父韻についても易经で八卦（乾兌離震巽坎艮坤）、仏教で八正道と説明されています。けれどそれら父韻と母音と

から生れる三十二の子音となりますと、日本古来の言霊布斗麻邇の学問独特のものでありまして、高天原日本の精神の秘宝であり、いわば世界の精神界の奥の院に当るものです。その三十二の子音言霊を配列して、高天原精神界の結界むすびとしたのでした。

【注一】現在、建築工事の地鎮祭で、敷地の中央部に竹の四柱の柱を四辺形を劃するように立て、それを七五三縄で結び、祭壇を作る。これが結界である。結界の中には魔である災厄が入らぬよう、工事が無事に終るよう祈願が行われる。古事記のこの千引の石の記述の名残である。

古事記の本文に戻りましょう。

伊耶那美の命のりたまはく、「うつく愛しき我がなせ汝兄の命、かくしたまはば、汝の国の人草、一日ひとひに千頭ちかしらくび絞ひり殺さむ」とのりたまひき。ここに伊耶那岐の命、詔りたまはく、「愛しき我がなにも汝妹の命、汝然みましかしたまはば、吾あは一日に千五百の産屋うぶやを立てむ」とのりたまひき。ここを以ちて一日にかならず

千人^{ちたり}死に、一日にかならず千五百人^{ちたり}なも生まるる。

「我が汝兄の命、かくしたまはば」とは、伊耶那岐の命が千引の石を置いて、岐の命の主体的精神界と美の命の客観的物質界との間に巖然とした区別をしてしまった、からには……の意味であります。岐の命の世界は物事を総合し、創造して行く事を基調としているのに対し、美の命の客観的な研究は、物事を分析し、破壊することによって本質に到達しようとする世界です。

物事を分析・破壊するということは、その物事に付けられた名前を破壊することと同じです。物事の名を否定して、分析し、その部分に概念的な名前を付けて行くことです。ですから伊耶那美の命が「汝の国の人草、一日^{ひとひ}に千頭^{ちかしら}絞り殺さむ」と言ったのは、必ずしも高天原に住む人々を首を絞めて殺そうという意味ではなく、高天原の言霊原理に基づいて付けられた物事の名前を否定して、分割し、経験知に従って概念的な名前に変えてしまおうと宣言した事であります。

この宣言に対して、伊耶那岐の命は「あなたがそうするならば、（世の中は乱れてしまうでしょうから）私は貴方が破壊する言葉の数より多い一日に千五百の正統な言葉を生んで、この

世に流布させましょう」と言ったのでした。

高天原の言葉を破壊し、乱すということについて更に考えて見ましょう。例を挙げます。言靈ワに基づいた言葉に和があります。この和という大和言葉を平和という言葉に置きかえて見ましょう。それでも意味は変わらないように見えます。けれどこの平和という言葉からいろいろ概念的な言葉が発展して来ます。平和を何事も起らない平穩な状態とします。けれど階級闘争で言えば、資本家と労働者との間には、相互に矛盾をはらんでいます。労働者側にとっては、常に団結し、資本者側と闘って行く事の中にのみ自分の生存の権利を主張することが出来る、と考えます。そこには何事も起らない「平和」などは抑圧された罪惡としか考えられないでしょう。労働者階級にとつての眞の平和は力によつて「闘い取る」より他はないと考えられます。しかし、言靈原理に於ける言靈ワ、それに基づく和とは絶対的な和なのです。どんなに論争をしている時でも、殴り合いの喧嘩をしている時でさえ、双方の心は和なのです。強いて言えば、その論争も喧嘩も、更にお互いが仲良くなる為の論争であり、喧嘩なのです。大和言葉の和と概念的な平和という言葉との相違を御理解頂けたであらうでしょうか。

キリスト教に原罪 original sin という言葉があります。辞書には「キリスト教で、人類の祖アダムが禁断の木の実を食べたために、人間が生れながらにして負うとされている罪」と説明されています。禁断の木の実は何でしょう。生れながらにして負う罪とはどんな罪なので

しよう。それが今お話している高天原の、神即言葉、言葉即実相である言霊原理に基づいて作られた大和言葉を破壊し、禁断の木の実と言われる人間個人の経験知より作られた概念的な言葉に置き換えてしまった事から起る罪のことであります。

日本の言葉でこの罪のことを天津罪と呼びます。高天原の言霊原理の言葉の法則を乱す形而上の、精神の基本に根ざした罪です。高天原の精神原理を夫神伊耶那岐の命と協同で創造した伊耶那美の命は、その後高天原から黄泉国外国に行き、独自の客観世界研究の学問を建設するために夫神と離婚し、先ず最初に実行したのが「高天原の言葉を破壊する」事でありました。その結果、創造されたのが、現在私達の眼前に展開している物質科学文明です。この文明の中心である研究・学問を科学、即ち科（とが、罪）の学と呼ぶのには以上のような経緯があるのであります。精神文明に次いで、第二の文明である物質科学を早急に建設するためにとられた方便としての神の大ドラマということが出来ましよう。

古事記の本文を進めて行きます。

かれその伊耶那美の命に号^{なづ}けて黄泉津大神といふ。またその追^しひ及^し

をもちて、道敷の大神ともいへり。またその黄泉の坂に塞れる石は、道反の大神ともいひ、塞へます黄泉戸の大神ともいふ。かれそのいはゆる黄泉比良坂は、今、出雲の国の伊賦夜坂といふ。

かれその伊耶那美の命に号けて黄泉津大神といふ。

事戸を度して夫神伊耶那岐の命と離婚して、黄泉国外国において客観的な学問・研究、物質的・科学文明の建設の総責任を担った伊耶那美の命は、その時以来、黄泉津大神と呼ばれるようになります。「その伊耶那美の命」の「その」とは、千引の石によつて高天原の精神界とはつきり区別された客観世界の研究総覧者となつた伊耶那美の命、という意味であります。尚、その美の命に黄泉津大神と「大」の字が付けられる理由は後程解説されます。

またその追ひ及きしともちて、道敷の大神ともいへり。

十拳の剣を後手に振つて高天原へ帰ろうとする伊耶那岐の命を追いかけて来て、そのために此処までは黄泉国、ここよりは高天原と、高天原精神界の結界を自覚・完成させる結果となりました。その功績の意味で伊耶那美の命を道（道理）を敷（敷）いた大神とも呼びます。

またその黄泉の坂に塞れる石は、道反の大神ともいひ、塞へます黄泉戸の大神ともいふ。

黄泉比良坂に置かれた千引の石は道反の大神といひます。道反とは、高天原の方から見れば、ここまでは高天原、これより外は黄泉国と、どちらからもそこで道を引返すこととなります。千引の石はその巖然たる道標であります。またその石は高天原と黄泉国との間に置かれて、黄泉国より高天原へ入る交通を厳しく阻んでいきます。塞へます黄泉戸の大神と呼ぶ所以です。

事実、読者が言霊布斗麻邇の学問を学ぶ場合、言霊学の概要については読者御自身の持つ経験知によつても略理解することは可能です。けれど、言霊学を理解し、自覚し、この学問を以て社会に貢献し、人類の歴史の見通しを自らのものとしようとする時、ここに説かれている「塞へます黄泉戸の大神」が自らの心の中に巖然と立っていることを初めて意識します。そこより先の仕事には、自らの経験知の限界をはつきりと認識し、人間天与の高天原の清浄心に立返ることの必要を痛感されることとなります。

【注一】言霊五十音の麻邇の七五三繩によつて結界された高天原精神界を古来「玉垣の内津御国、磯輪上の秀真の国、磯城島の大和の国」などと呼ぶ。玉は言霊を、磯は五十を意味して

いる。

か、千のいはゆる黄泉比良坂は、今、出雲の国の伊賦夜坂といふ。

黄泉比良坂とは高天原以外の外国の文化、特に外国の文字の性質ということですから出雲の国の伊賦夜坂とは地図上の地名のことではありません。それは頭脳内に次々と雲の湧き出るように（出雲）現われ出て来る考え（アイデア）を言霊を用いることなしに表現した言葉という意味です。言霊である伊（言霊イ）の言葉（賦）がぼんやりとしか見えない夜の文明・文字の性質（坂）という意味の謎であります。

さてここで、「古事記と言霊」というお話のテーマからは少々脱線気味となるかも知れませんが、今迄お話して来ましたが黄泉比良坂に置かれました千引の石、塞へます黄泉戸の大神の文章と余りにもよく似た意味の文章がありますので、ここに紹介して置きましょう。それは旧約聖書のヨブ記三十八章に見られます。

「海の水ながれ出て、胎内より湧きいでし時、誰が戸を以て之を閉じこめたりしや、かの時われ雲をもて之が衣服となし、黒暗をもて之が襦袢となし、之に我が法度を定め、関および門を設けて、曰く、此までは来るべし、此を越ゆべからず、汝の高波ここに止まるべし」と（旧

約聖書ヨブ記三十八章八(十一)

ヨブはイエスキリスト以前のキリストと呼ばれた人で、そのヨブ記に古事記と全く同じ意味の文章が見られることは興味深いことでありましょう。詳しい穿鑿は抜きにして、今回は字句の説明だけに留めます。「海の水ながれ出て胎内より湧き出でし時……」とは黄泉国の雷神や黄泉軍を指します。伊耶那美の命の思想上の後継者である須佐男の命は「海原(ウ言靈の領域)を治らす神」であります。「雲をもて之が衣服となし、黑暗をもて之が襦袢となし」とは、雲は八つの父韻、黑暗は五母音のことです。「関および門を設けて」とは千引の石を比良坂に置いた事に通じます。「汝の高波ここに止まるべし」とは塞へます黄泉戸の大神と同様の事でありましょう。ヨブ記のこの文章と古事記の黄泉比良坂の記事は全くの同一の事件を述べていることにお気付き頂ける事と思えます。

以上のような地球上の時も処も全く違つた記述が、意味内容の同じ文章として残されているという事実は、人間の精神の根本構造の立場から見た人類歴史の考察に大きな示唆を与えて呉れるものとして、脱線的な文章を挿入して見ました。御参考になれば幸いです。

身み禊そぎ(その二)

今まで長い間続いて来ました「古事記と言霊」のお話もこの「身み禊そぎ」の章で結論に近づいた事となります。この「身み禊そぎ」という言霊の最終的な操作を経て、言霊布斗麻邇の学問の総結論であります。「三みはしら貴のう子ずみこ」の誕生となります。この言霊学の結論となります原理は、ここ二千年の間、人々の社会から隠されて来た日本民族の秘法と言うべきものでありますので、この小著の上で皆様にお伝えする機会を授かりましたことは、著者にとつて誠に光栄と思う次第です。

と大層なことを申し上げましたが、今よりお話する言霊学の結論が、二千年間秘められて来た日本の宝なのだ、と言いましても、特殊な人が特別に手にすることが出来る或る独特のものではありません。いとも平凡な生活をしている人が、平凡な何かを思う時、例えばサラリーマンが休日の朝、目を覚まし「今日は会社は休みだな。それなら今日一日どうして過そうかな」と考える時、その人の心はどんな状態がどのように動き、「こうしよう」という結論に達する

か、という心の内容とその動きを余す事なく明らかにした精神構造の学問に他なりません。

何度となくお話ししたことです。古事記の神代の巻は言靈布斗麻邇の学問の教科書です。但し普通の教科書ではありません。著者太安万侶がある意図の下に謎々の形で後世に遺した言靈学の教科書です。謎々ですから古事記をただ前前に読んだり、自らの経験知識を以て推察したのでは、全く何を言おうとしているのか見当がつかない事となります。

けれどひと度、古事記神代の巻がアイウエオ五十音言靈学の教科書である、ということに気が付き、その神話の中に出て来る神様の名前の意味を知り、その意味と読者御自身の心の内容とを比べて見る時、初めて明らかに古事記が言靈による人間の生きていく心の構造とその操作法を詳細に述べた書物なのだ、ということが理解されて来ることとなります。

お話を始める前に、前提となるような事を結論が近づいた今頃、何故殊更にお話したかと申しますと、この「身禊」の章以後に出て来ますいろいろな神様の名前は今迄に増して難解であり、自らの心を見つめて頂かないと何のことやらさっぱり分らない事になるからであります。と同時に、これから出て来る神様の名前が示す言靈の操作法の中に、言靈学を学ぶ人々にとつて最も大きな問題の解決法が秘められている、という事を強調したいからであります。それは何か。

言靈学の最も奥の院と言われる言靈三十二子音が持つ真実の姿を知るための唯一一つの方法が

述べられていることです。

前置きが長くなりました。以上の事を御留意頂き乍ら、「身褌」の章に入ることとしましう。

ここを以らて伊耶那岐の大神の詔りたまひしく、「吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の褌せむ」とのりたまひて、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして、褌を被へたまひき。かれ投け棄つる御杖に成りませる神の名は、衝き立つ船戸の神。次に投け棄つる御帯に成りませる神の名は、道の長乳齒の神。次に投け棄つる御裳に成りませる神の名は、時置師の神。次に投け棄つる御衣に成りませる神の名は、煩累の大人の神。次に投け棄つる御禪に成りませる神の名は、道俣の神。次に投け棄つる御冠に成りませる神の名は、飽咋の大人の神。

文章は「身褌」の章に入りました。身褌のことをまた褌、褌とも言いいます。身褌または褌褌

と言いますと、現在の神道信仰では、信仰によつて信者が心身を浄めるために水を浴びたり、滝に打たれたりする行だと思われています。しかし、今迄説明して来ましたように、古神道言靈学に於ては決してそういう個人の魂の清浄を求めたり、罪穢つみけがれの赦ゆるしを願つたりする小乗・自利の行ではありません。褌みそぎ褌はらひとは、言靈五十音の原理に照らして、一切の文化の所産を撰取して、それぞれを人類の福祉増進に役立つよう操作・運用して行く文明創造活動の根本となる行動のことを言います。自利でなく飽くまで利他の道徳・政治活動のことでもあります。語句を追つて説明して行きます。

ここと以りて伊耶那岐の大神の詔りたまふしく、

古事記上つ巻の文章の中では、今迄伊耶那岐の神または伊耶那岐の命と書かれ、伊耶那岐の大神と大の字が付いたのは今回が初めてであります。では何故ここで大の字が付いたのでしょうか。唯、褌みそぎ褌はらひを行う伊耶那岐の命を尊ぶというだけで大の字をつけたのではありません。古事記の著者、太安万侶の論理の緻密さがここでも想像される処であります。

先に伊耶那岐の命は妻神伊耶那美の命との協力で三十二の現象子音を生みました。次に岐の命は主体である精神の側に於て先天と後天の五十音言靈の内容を検討・整理して、主体側の真

理としての建御雷たけみかづちの男をの神という精神構造の原理を完成させました。更に伊耶那岐の命は、去つて行つた妻神伊耶那美の命を追いかけて行つて、黄泉国よもつ外国の客観的学問の文化を経験し、その自己主張・不調和・未整理の状態を眼前にして、高天原精神界に逃げ帰つて来ました。そして今や、建御雷の男の神という精神構造の原理を以て、不調和・未整理の外国の文化のそれぞれをどのように取り扱い、活用整理して、人類文明を創造したらよいか、の根本法則を確立しようという段階に進みました。

この時の伊耶那岐の命とは、単なる主体の責任者としての伊耶那岐の命ではなく、主体であると同時に客体であり、客体を包含した主体である伊耶那岐の命という立場に立つこととなります。難しい言葉で言いますと、主体と客体を包含した宇宙身の立場とも言えます注二。このように世界文明創造上の唯一の責任者の立場を伊耶那岐の大神と呼ぶのであります。

この大神という言葉について思い出しますのは、伊耶那岐の命と千引の石をはさんで離婚しました伊耶那美の命に黄泉津よもつ大神と名付けた事です。この大神は伊耶那岐の大神のそれとは意味が違います。伊耶那岐の大神の大神とは客体を含んだ主体、伊耶那美の命をも含んだ全宇宙身という意味であり、黄泉津大神の大神とは岐の命と離婚し、文字通り単独で客観世界研究の責任者となった美の命に対する単なる尊称です。

【注一】この解説には、この本の初めの章にある「天の御柱」「国の御柱」に於ける相對觀と絶對觀の説明箇所を参照のこと。

「吾はいな醜の醜めき穢なま、国に到りてありけり。かれ吾は御身の禊せむしとのりたまひて、

伊耶那岐の大神は言いました、「私は大そう醜い穢い国を見て来てしまいました。ですから私の身体の身禊をしましょう」とおっしゃいました、ということです。穢い、とは氣田無いの意、生き生きとした精神の調和が保たれている言靈五十音図の原理のない国、即ち外国とということです。

御身とは、先にお話しましたように、水を浴びたり、滝に打たれたりして心身を浄める身体という意味ではありません。伊耶那岐の命の主觀界と伊耶那美の命の客觀界とを一つにした全宇宙身と言った意味であります。「禊せむ」とは伊耶那岐の命として経験して来た客觀世界の文化を自らの言靈原理に照らして整理し、文明の創造に役立つようにしよう、という意味です。

竺紫つくしの日向ひむかの橘たちばなの小門せいもんの阿波岐原あはぎはらに到いたりまして、禊みそぎ破はらへたまひき。

文章をただの昔の物語として読めば、竺紫つくし（九州）の阿波岐原あはぎはらなる場所があったように思われる。けれど禊みそぎ破はらが純粹の精神活動であることを知れば、阿波岐原あはぎはらが実在の場所でない事は直ぐに了解されます。それは精神上の場所を示した謎なのです。

竺紫つくしとは尽つくす、の意で、心の全てを尽すこと。日向ひむかは日に向むかうの意で、生命の光に直面する、ということ。橘たちばなの小門せいもんとは、性たち

を表わす言葉の名なの音おとの意味で、言霊ことばたまのことを示します。すると竺紫つくしの日向ひむかの橘たちばなの小門せいもんで言霊五十音の全部ぜんぶという事となります。

阿波岐原あはぎはらは下図を参照下さい。伊耶那岐いよなぎの命のみことの音図である天津あまつす菅麻音図すがまおんずの四つの隅の音を五十音の代表として取り出すと、アワイヰとなり、そのうち、イヰが詰つまってギとなり、アワギの言葉が生れます。原はらは場ばを意味しますから、阿波岐原あはぎはらで五十音言霊図表ことばたまずらひということになります。としますと、随分長い名前ですが、竺紫つくしの日向ひむかの橘たちばなの小門せいもんの阿波岐原あはぎはらの全部で五十音言霊図表ことばたまずらひということになります。

阿波岐原

ワ		ア
		オ ウ エ
ヰ	ニ イ リ ミ キ シ チ ヒ	イ

ギ

伊耶那岐の大神は、この五十音言靈図表の見地に立つて、黄泉国の客観的研究の学問・文化を摂取し、調御してそれぞれに所を得しめる決定的大原理の確立の仕事（禊祓）の検討に入つたのであります^{註一}。

【注一】黄泉津国とは黄（萌）ざす泉の国と書く。物質的であれ、精神的であれ、客観世界研究の学問は全て外国に於て発生する。それは色々なものが芽を吹き出す泉の如きものである。それは際限なく分岐・発展して幾種類もの学問分野を形成して行く。しかしこの客観的研究の成果を人類の福祉目的に適うよう調整・整理する能力をこの学問自体は持っていない。そこに究極に於て精神の学である言靈の原理の登場があるわけである。

かれ投げ棄つる御杖に成りませる神の名は、衝立つ船戸の神。

投げ棄つる、とは文字通りの投げ捨てる、ということではなく、ここでは禊祓即ち種々の外国の文化を取り入れ、人類文明としてコントロールして行く為に、その判断の基準としての言靈の原理を外国の文化の上に投入することであります。御杖とは精神の拠り代である人間天との判断力のこと。仏教の禪では挂杖子と言ひ、劍と言ひ、キリスト教ではアロンの杖などと呼

びます。

それでは伊耶那岐の大神は禊祓の判断の基準として何を投入したのか、と言いますと、先に内面的に完成した建御雷の男の神といわれる精神構造図です。この禊祓のために投入した建御雷の男の神と呼ばれる言靈図のことを、衝き立つ船戸の神といいます。衝き立つ、とは齋き立てる、の謎です。船は人を運ぶもの、言葉は心を運ぶものです。伊勢神宮の御神体である八咫鏡は船形をした台の上に乗っています。そこで衝き立つ船戸の神というのは、禊祓をするために、心の中に齋き立てられた言靈五十音の原理の戸、即ち鏡ということです。

建御雷の男の神と衝き立つ船戸の神とは、精神構造としては全く同じものでありますが、その操作の段階や用いる時と場の違いによつて呼ぶ名の神名が異なつて来るのであります。さて、この衝き立つ船戸の神に続いて、道の長乳歯の神等五つの神名が出て来ます。この五神は禊祓の操作をするために規範として齋き立てた衝き立つ船戸の神という精神構造を示す音図に参照して禊祓の操作を行う前に、先づ天津菅麻音図上に於て黄泉国の文化を整理・検査する五つの検査事項を示すものと考えられます。この事を念頭において五神名の解説に入ります。

次に投げ棄つる御帯に成りませる神の名は、道の長乳齒の神。

帯は結んだり、まとめたりするもの、緒霊・尾霊の意で、物事の関連性・連続性ということであります。道の長乳齒の神も同様の意味であり、道とは物事の道理ということ、長乳齒とは子供の齒が生え揃ってそれぞれが長く連続している事の意です。外国文化を整理するため菅麻音図上に於て、その外国文化の内容の連続性・関連性について調べることであります。

【注一】衝き立つ船戸の神に続く諸神名で示される禊祓の手順を、大和石上神宮に伝わる布留の言本は「ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシクルユキツワヌソヲタハクメカウオエニサリヘテノマスアセエホレケ」と直接四十七言霊を以て示している。

次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は、時置師の神。

古事記の別の本には御裳の所を御囊と書いてあるものがあるが、ここは御裳が正しいようであります。裳は百で心の衣です。また裳とは腰より下につける衣で、褌があります。天津菅麻音図の下段はイよりキに至るイチイキシリヒニキと、イとキを除けば八つの父韻が並び

ます。以前にもお話ししましたように、八つの父韻の配列は事物の現象發生の變化のリズムを表わします。

伊耶那岐の大神の御裳である言靈図の下の段の八父韻を投入すると、時置師の神が生れた、とあります。時置師の神を時量ときはかりの神と書いてある本もあります。両方共同様の意味の言葉です。時は時間、置師おかし（量はかり）は検討し、決定することです。神はその働きと言った程の意味であります。

時とは何なのでしょうか。「桐一葉ひとば 落ちて天下の 秋を知る」という句があります。夏の季節、青々としていた桐の葉が、何時の間にか萎しおれて落葉した。「あゝ、秋が来たんだな」と思います。事物の真相（姿）の變化が時の移り変りである、という事の意味が了解出来るのではないでしょう。物事の真相の變化のリズムが時の變化です。變化する、ということがなければ、時というものは考えられません。真相の變化が時というものの内容でもあります。

人間が日々経験する色々な現象、それが自然のものでも、または人為的なものであっても、皆それぞれ特有の變化のリズムを持っています。そのリズムを言靈布斗麻邇の鏡に照らして調査・検討することを時置師ときおかし（時量ときはかり）の神と云うのであります。人間の心が住む五つの次元のそれぞれに現われて来る現象の變化のリズムを八つの父韻の配列によつて見極めること注一です。

次に各次元に適合する代表的な五十音図の時置師を挙げることにしましょう。

ウ次元	キシチニヒミイリ	天津金木音図
オ次元	キチミヒシニイリ	赤珠音図 <small>あかたま</small>
ア次元	チキリヒシニイミ	宝音図
エ次元	チキミヒリニイシ	天津太祝詞音図 <small>ふとのり</small>
イ次元	チキシヒイミリニ	天津菅麻音図 <small>すがま</small> *

*本来イ次元の父韻の並びは
不特定のため(二八九頁参照)、
ここでは主体側チキシヒ(陽性音)
客体側イミリニ(陰性音)の
並びで表記。

【注一】宇宙は種々の現象(実相)を現出する。その現象は時間・空間・次元の組合せによつて生れる。その現象を唯一つの現象として特定化するのが時処位である。だから実相には必ず時処位が具わっている。古事記には時置師の神と一つの置師おかししか書かれていないが、実際には処置師ところおかし・位置師くわいおかしの二つの置師も存在する。処置師は空間の中の場所を決定し、位置師はアオウエイという五つの段階次元の重畳の配列順を決定して行く働きである。以上合計三つの置師おかしの決定を三置みちという。道みち(道理)の語源の一つである。時間は空間の変化であり、空間は時間の内容といふことが出来る。時間のない空間はなく、空間のない時間はない。そして時間も空間もアオウエイという五つの次元の中の一つの次元の広がりについて言えることであつて、時間と空間は次元の一部であります。その時間と空間の疊たなわりが次元宇宙なのである。

次に投げ棄つる御衣に成りませる神の名は、煩累の大人の神。

煩累わづらひの大人おとなの神かみを和豆良比能わづらひの宇斯能うし神かみと書いた本もありました。意味は同じです。伊耶那岐の大神の御衣みけしとは心の衣ころものことで、五十音図を指します。煩累わづらひとは意味が不明瞭で曖昧あいまいな言葉のこと。大人おとなとは家の主人公の意。そこで煩累わづらひの大人おとなの神とは、五十音言靈図に照らして、わずらわしい曖昧な言葉を整理して、言葉の意味をはっきり確認する働き、ということとなります。

次に投げ棄つる御禪みはかまに成りませる神の名は、道俣ちまたの神。

禪はかまとは胴体から二本の足が入るよう二俣に分れている衣類のこと。道俣ちまたも街道がある一点で二方向に分れた場所のこと。物事の整理を行うには、表裏・陰陽・主客・前後・左右・上下等の分離・分岐を明らかに見定める必要があります。道俣の神とは、言靈図に照らして物事ものごとの分岐点を明らかにする働きのことです。

次に投げ棄つる御冠みかぶりに成りませる神の名は、飽咋あまくひの大人おとなの神。

冠かぶりは帽子のことで、頭にかぶるもの、五十音図で言えば一番上のア段に当たります。事物の実相はア段に立って見る時、最も明らかに見ることが出来ます。そこに現われる飽咋あくらの大人おとなの神かみ（飽咋あくらの宇斯うしの神かみと書かれた本もあります）とは、飽あは明らかかの意、咋くらは組くむ靈ひの謎めです。大人おとなは主人公の意、飽咋あくらの大人おとなの神かみ全体で、事物の実相を明らかに見て、それを言靈ことばたま（靈たま）に組んで行く働き、ということとなります。

【注一】この飽咋あくらの大人おとなの神かみまでの働きが先に示した石上神宮の布留の言本の「ヒフミヨイムナヤコトモチ」である。

以上で外国の文化・学問の上に建御雷たけみかづちの男をとこの神かみという主観内の真理の精神構造を投入して、禊みそぎ祓はらひを行う行程である衝き立つ船戸ふねどの神かみより飽咋あくらの大人おとなの神かみまでの六神むかみが示す謎々の説明をして来ました。大方の御理解は得られたものと思えます。衝き立つ船戸ふねどの神かみという禊祓みそぎはらひの鏡と、禊祓みそぎはらひの前まへに行う外国文化の整理の方法を示す五神ごかみとを投入して、さて次にどんな事が起るのか、を説くのが次に続く古事記の文章です。

ところが、そこで出て来る神様の名前の示す謎がすこぶる難解です。今迄の神様の名前はそれが現われる時処位を知っていれば大体の予測は出来る範囲のものでありますが、奥疎おくその神かみ以

下の六神の名前は、ただ漫然と考えていたのでは見当が付きません。この神名を理解し得る唯一の方法は、読者御自身が禊祓を実施する立場に立つて、その時に自らが経験する心の動きの内容を見極めて頂くより他にはない事であります。この事を頭に置いて、古事記の次の文章に入って行くことにしましょう。

次に投げ棄つる左の御手の手纏に成りませる神の名は、奥疎の神。次に奥津那芸佐毘古の神。次に奥津甲斐辨羅の神。次に投げ棄つる右の御手の手纏に成りませる神の名は、辺疎の神。次に辺津那芸佐毘古の神。次に辺津甲斐辨羅の神。

伊耶那岐の大神は、人類文明創造の大原則・大原則を確立するために、内面的真理である建御雷の男の神という精神音図を自らの心の中に判断の鏡として斎き立てました（衝立つ船戸の神）。そして高天原以外の国々で発生・発展して来る外国の文化・学問を天津菅麻音図に照らして、それ等の内容を明らかにして、禊祓がやり易くする作業が続きます。その整理作業は衝立つ船戸の神に続く五神、道の長乳齒の神、時置師の神、煩累の大人の神、道俣の神、飽咋の

大人の神という神名が示す五つの要点から判断されることが示されました。

さて、以上お話ししました衝立つ船戸の神を判断の基準となる鏡として、禊祓の実際活動が始まることとなりますが、その活動とは人間の心の中で如何なる動きとなるのか、を示すのが次に出て来る六つの神名です。並べて見ますと、左の御手の手纏たまきに成る奥疎おきさがるの神、奥津那芸佐毘古おきつなぎさびこの神、奥津甲斐辨羅おきつかひべらの神の三神と、右の御手の手纏たまきに成る辺疎へさがるの神、辺津那芸佐毘古さびこの神、辺津甲斐辨羅へつかひべらの神の三神、合計六神です。この六神の神名が心の中の動きのどんな内容を暗示しているのか、を先ず神名の文字の解釈から始め、次に実際に人間の心はそれによつてどう動くか、を説明することにししましょう。

次に投げまたまきつる左の御手の手纏たまきに成たまきりまたまきせる神の名は、

手纏とは古代、玉などで飾り、手にまたまきとつて飾りとしたもの、と辞書にあります。伊耶那岐の大神の身につけた「左の御手の手纏たまき」というのは勿論謎です。ではどんな事か。それは伊耶那岐の大神が整理と判断を行う場である自らの心の構造を示す天津菅麻音図に關しての事柄です。五十音図全体を人間と見立てますと、左の御手の手纏たまきとは、人間が両手を広げた形の左の手の飾り、音図で言えば、音図に向つて一番右の縦の一行、即ち五つの母音アオウエイの並び

ということになります。

右のように考えますと、次に出て来ます「右の御手の手纏に成りませる」の右の御手の手纏とは音図に向つて一番左の端の五つの半母音ワウエエの一行ということになります。

さて左右の御手の手纏から出て来る神の名前ですが、その冠に付いている奥・辺・奥津・辺津を除きますと、左右全く同じ名前の三組の神ということになります。そこで字句の説明でも、また実際の動きの解説にも便利のように、六神を奥、辺、奥津、辺津のついた三組の神名として取扱つて行く事にします。

奥疎の神、辺疎の神（イの一）

奥疎の奥は起、興で発端を示す積極・陽性音です。それに対し辺疎の辺は山の辺、海辺に見られるように端の方であり、物事の終局や終結の方向を示して消極・陰性音です。奥疎・辺疎の疎は古語で、離れる、へだてるの意。そこで奥疎とは物事の発端となるものを他の物からへだてる、ということになります。同様辺疎とは物事の終局となるものを他のものより遠ざけ、へだてるという事になります。これら奥疎・辺疎が実際にどんな心の動きをするか、は字句解釈の次にお話します。

奥津那芸佐毘古の神、辺津那芸佐毘古の神（その一）

奥は起で物事の発端・陽性音であつて、音図で言えば向つて右の五つの母音の側です。辺は反対に発端よりは遠ざかる物事の終結の方向で、音図で言えば向つて左側の半母音の方を意味します。奥津・辺津の津は渡すの意。

では那芸佐毘古とはどんな意味でしょうか。ちよつと見ただけではさつぱり分りませんが、兎に角字句の解釈として、詳細は実際の心の働きの説明することになります。文字をそのまま解釈しますと、那芸佐毘古とは総ての（那）業（芸）を助ける（佐）働き（毘古）となります。

奥津甲斐辨羅の神、辺津甲斐辨羅の神（その一）

奥津・辺津は已に説明しました。では甲斐辨羅とはどんな事でしょう。甲斐は現在の山梨県の古名ですが、この場合はそうではありません。甲斐は山峡などと言われる山と山との間、へだたり、の意であります。辨羅とは減らす、少なくする、の意です。そこで奥津甲斐辨羅の神の全体では、発端になるもの（奥）を渡して（津）物事のへだたり（甲斐）を少なくして行く（辨羅）働き（神）ということになります。同様辺津甲斐辨羅の神では、終結する結果と

なるもの（辺）を渡して（津）物事のへだたり（甲斐）を減らして少なくして行く（辨羅）働き（神）となります。

以上奥疎の神以下六神の神名について字句のみの解釈をして来ました。しかし、多分この六神の実際の内容について読者はしっかりした理解はなさっていない事と思えます。そこでこれ等六神の神名が示します働きの、人間の心の中での実際の活動について解説を申上げようと思えます。この實際活動の詳細が了解されずと、古事記の編者太安万侶の人間心理に対する洞察の精細さ・素晴らしさに驚嘆せざるを得ない事となります。

伊耶那岐の大神は禊祓を実行するために、自らの心の中で確認された建御雷の男の神という構造を持った音図を齎き立てました。衝立つ船戸の神であります。この音図を判断の鏡として黄泉国外国の学問・文化を整理し、人類の福祉に役立つようコントロールします。次々に創意工夫されて持ち込まれて来るそれらの学問・文化は道の長乳歯の神以下五神の名前で示される五つの点について心の中で詳細に検討され、その外国の学問・文化の真実の姿が浮き彫りにされます。浮き彫りにされ、どのように処理されて行くのか、が奥疎の神以下六神の働きます。これによって伊耶那岐の大神の主観内のみのも真理であった建御雷の男の神という真理が名実共に客観世界に適用されて誤りのない絶対的な大真理となります。そうなった真理が天津太祝詞

音図または天照大神の八咫やたの鏡と呼ばれるものです

主観内で確かめられた鏡を他に適用して行く過程をお話申上げるわけでありますので、度々同じ事を繰返して誠に恐縮なのですが、読者御自身が伊耶那岐の大神の立場に立ったつもりになって、御自身の心の中に実際にどんな経過が起るか、をお考え下さると好都合と存じます。

さて、ある一人の人間が、たとえば私自身が、自らの心の中に建御雷たけみかづちの男をの神という心の構造の音図を齎もたらき立てました。ということとは私は建御雷の男の神という鏡に従って行動するのだ、と確認した事です。そして、その前に一つの問題が提出されて来ます。整理されて、確実に人類に必要な文化として仲間入りをする事が出来るか、どうか、が決定される素材としての学問・文化です。

すると、その学問・文化の持つ特性・内容・外観等々すべてにわたって、自分本来の菅麻音図上に於て道みちの長乳歯ながちばの神（連続性）、時置師ときおかしの神（音図に於ける時処位の決定）、煩累わづらひの大人おとしの神（曖昧さの除去）、道俣ちまたの神（物の分岐点の確認）、飽昨あきふの大人おとしの神（物事の真実の姿の確認）という五つの観点からの判定が立ち所に行われます。菅麻音図上の道の長乳歯の神以下五神というコンピュータによって

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ									イ
エ									エ
ヨ									オ
ウ									ウ

予め整理・検討された外国文化の内容が、衝き立つ船戸の神という襖取用のコンピュータに送り込まれ、世界文明創造を可能にする数値として算出される、といった具合であります。

奥疎おきさかるの神・辺疎へまかるの神（その二）

そこで奥疎の神・辺疎の神の実際活動としての登場です。単なる帳簿のデータの整理でしたら、その内容が明らかになれば、それを新たに記入すれば仕事は終りとなります。けれど社会創造の活動に於てはそう簡単には行きません。何故なら整理すると言っても、その提出された学問・文化にはそれを思いつき、育て上げて来た担い手である生きた人間がいる、ということです。その担い手を完全に説得し、納得させなければ整理コントロールは出来ません。帳簿の整理とはそこが異なります。

前にも申し上げましたように、奥疎おきさかるの奥おきは陽性音で、音図でいえば向つて右、アオウエイ五母音の側です。反対に辺疎へまかるの辺へは陰性音で音図の向つて左、ワヲウエキの五半母音の側です。天津菅麻音図という心の構造に照合されその実相と内容がすっかり明らかになされた外国の学問や文化は、その内容・価値を整理の出発点である心の中の音図の母音側に整理され、集められなければなりません。その作業工程を奥疎おきさかる、即ち起おきである出発点に寄せて行く（疎さか）事と

名付けられました。

整理さるべき物事の内容・価値が整理の出発点に寄せ集められますと、同時進行的に整理する人の心の中では、その学問・文化の価値・内容から見て、当然それが人類文化の全体の何処に位置すべきかの結論も明確に決定されます。辺疎へさかるの辺即ち音図の半母音側である結末の方向にその整理の結果が寄せ集められるように決定されます。この働きを辺疎へさかるの神と呼びます。この場合、心の中では奥疎と辺疎は全く同時進行的に行われることでしょう。そうでなければ衝つ立つたつ船戸ふねどの神という鏡に従って襖ふすま被かされる材料とはなり得ません。

奥疎おくさかる・辺疎へさかるで整理する実際活動の出発点と結論の内容は決定しました。しかし、前にも申しましたようにそれで整理の完了ではありません。整理完了するまでにはあと二段階の働きが必要です。それが奥津・辺津へつの那芸なぎ佐毘古さひこと甲斐かひ辨羅べんらです。

奥津那芸佐毘古の神、辺津那芸佐毘古の神（その二）

社会の文化創造上、新しく発生した一つの学問・文化が持つ内容と価値、社会に占める位置等が心の鏡に照らされて決定されますと、次に、その新しい学問・文化の発想者・発見者に対して、こちらの判断が極めて妥当であり、真理に叶っており、発想者自身もそれで納得出来る

ような言葉が生み出されなければなりません。言葉が状況に依じて選ばれなければなりません。禊祓の行為とは言霊工の次元の現象であるのです。

極めて卑近な例を挙げてみましょう。私の友人に一人のアルコール中毒患者がいます。朝から晩まで、アルコール気が切れることがあります。若し切れたら、心の寂しさに気が狂わんばかりになるそうです。当然年も年の事とて血圧が上がります。何時計つても血圧が二〇〇を下がった事がないそうです。通院しているそのお医者さんは、決つたように血圧を計り、「お酒を止めなさい。そうしないと近い内に死んでしまうよ」と言うそうです。医学知識という鏡に照らして、医者 of 脳裏には、私の友人の健康状態の判断（現内容）と、その結末がはつきり描き出され、その現状と結末をそのまま患者に伝えていたのでしよう。

そのお医者さんの言葉は一見、正しいようにも見えます。けれど私の友人にとっては、何も言つて呉れないのと同様なのです。何故なら、私の友人自身医者の言葉通りに思い、このままでは早晚死んでしまうだろうと思つているからです。しかも現在の寂しさに負けて、酒を吞まずにはいられないのです。若し診察に際して、このお医者さんがもう一步踏み込み、患者の心の寂しさの原因を突き止め、その上で患者に少しでも納得が出来る治癒への道を示す言葉をかけてやることがあったら、そのお医者さんは私の友人にとつて救世主とも思える人となることでしょう。言霊工次元の言葉とは、そういう選らばれた言葉なのです。

そこで奥津那芸佐毘古の神・辺津那芸佐毘古の神の働きの説明です。それは外国の学問・文化の発創者が納得・了解し得る言葉が創出される過程としての働きです。奥である鏡に照らされた物事の実態が持つ内容・効能（芸）のすべて（那）を助け生かして（佐）一つの創造的な言葉に渡す（津）働き（毘古）、奥津那芸佐毘古の神とはそういう意味を示しています。

同時に、その創造の言葉を創り出す為には、鏡の前に明らかにされた落ちつくべき結論に必ず到達することを可能にする言葉でもなければなりません。その為の働きの辺津那芸佐毘古の神です。辺である結論をもたらすよう（津）その結論として落ち着く全ての（那）内容（芸）を助け決定する（佐）働きの（毘古）の言葉（神）ということです。

一つの学問や文化の持つ内容の価値をすべて生かし育て（奥津那芸佐毘古）、それを同時に確定された結論としての文明創造上の位置に確実に置きまることが可能にする言葉を選び創り出す（辺津那芸佐毘古）働きの両方を言霊工次元の言葉は必要とするのです。この条件が完全に満たされた言葉は、その時、その場に於て「至上命令」となり得る言葉なのです。^{注二}

【注一】すべての物事の持つ価値・内容を拾い上げ、それを人類文明の中に取り入れて行く古神道禊祓の道法を、仏教では阿弥陀仏の「一切衆生、攝取不捨」と言っている。

奥津甲斐辨羅の神・辺津甲斐辨羅の神（その二）

ここまで説明して来ますと、奥津・辺津の甲斐辨羅二神の働きの内容は容易に推察されることと思ひます。提起された物事の価値内容をことごとく撰取する（奥津那芸佐毘古）ことが出来る言葉、それと同時に進行しているその物事の決定された結末に確實に落着させる事が出来る（辺津那芸佐毘古）言葉の二つの言葉は、心の中で一つの言葉としてまとめ上げられます。その時、奥と辺との双方から考えられた二つの内容の言葉の間は限りなくその間隔（甲斐）は狭められ（辨羅）、最後に一つの創造の言葉となります。

この時、奥即ち発端の方に働く力を奥津甲斐辨羅の神といい、結末の方に動く働きを辺津甲斐辨羅の神と呼びます。これ等二つの働きによつて創出された文明創造の言葉は、人類社会から一つ一つ考案・発想された文化の兆しを、その内容・価値に従つて人類文明の内容として撰取し、各自所を得しめる最高の統治能力となる事が出来る輝かしい言葉なのであります。

知訶島またの名は天の忍男

以上お話しして来ました衝立船戸の神より辺津甲斐辨羅の神までの合計十二神が精神宇宙に占める区分を知訶島または天の忍男と呼びます。知訶の知は知識、訶は叱り、たしなめるの意。

黄泉国外国に於て、人間の經驗知として発想された学問知識を、人類文明創造の最高の規範（鏡）に照らして、それを整理し、その価値・人類文明に占める位置を決定して行く働きの区分、という事です。天の忍男とは人間精神の典型的構造（天）の大きいなる（忍）働き（男）という意味です。人間精神性能の中でこれ以上の大きな働きは他には存在しません。

タカマハラナヤサ（高天原成弥栄）

言靈布斗麻邇の学の総結論である人間精神の最高規範（鏡）構造を示す五十音図を天津太祝詞と呼びます。その時置師は八つの父韻チキミヒリニイシ（タカマハラナヤサ）です。褌祓が行われ、その実行者が歴史創造の言葉を発する瞬間（中今）、実行者の心の中に描かれた現象創造の手順です。その言葉が実行に移された時、現実の事態はその時置師の配列の順序に従って進展して行きます。

この章で説明しました衝立つ船戸の神以下十二神の働きは右の時置師の前半の（タカマ）の詳しい解説であることに気付きます。鏡として齋き立てた衝立つ船戸の神より飽咋の大人の神までの六神は父韻タ（チ）の内容です。タは田であり、鏡としての精神構造図です。次に出て来る奥疎の神以下の六神は、鏡の前に決定された現状（力）とその結末（マ）の双方を満足

させて整理を遂行する創造の言葉（八）を如何にして決定するか、の手順を神名の謎で小気味よく説明したものです。

建御雷たけみかづちの男をとこの神かみという音図を心の内に衝立つきたつ船戸ふなどの神かみと齋いき立てて、これを鏡として外国の学問・文化の禊みそぎ・祓はらひをする時、心の中で創造の言葉がどのように創り出されて来るか、のメカニズムが確認されました。そこで今度はその心の動きのメカニズムを阿波岐原の天津菅麻五十音図表の個々の言霊の動きで見るとどうなるか、即ち人間の最高の道徳の規範（鏡）となる言霊構造とその動きの確立という禊祓の最終段階の検討に入ります。それによつて齋いき立てた建御雷たけみかづちの男をとこの神かみなる音図構造が総結論としての天津太祝詞音図（八咫の鏡）という主観的であると同時に、客観的に適用して誤ることなき大真理として確立されます。さてそれでは主観的であると同時に客観的な真理とはどの様にして確かめられるのでしょうか。それは最終的には、その心の内容が、心の究極要素であると同時に、言葉の最小要素でもある五十音言霊、特に実相の最小単位である三十二の子音によつて構成されている構造とその動きとして、確認されることでありましょう。古事記本文を進めることにしましょう。

身 禊 (その二)

ここに詔りたまはく、「上つ瀬は瀬速し、下つ瀬は瀬弱し」と詔りたまひて、初めて中つ瀬に降り潜きて、滌ぎたまふ時に、成りませる神の名は八十福津日の神。次に大福津日の神。この二神は、かの穢き繁き国に到りたまひし時の、污垢によりて成りませる神なり。

古事記に於て「ここに詔りたまはく」と殊更に言葉を改める時は、行動の観点が変る事を意味します。伊耶那岐の大神は、自らの心の構造であります天津菅麻音図（竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原）の立場で、心の中に齋き立てた建御雷の男の神という音図が客観世界に適用して間違いないか、どうかの検討を始めました。その検討の初めは、禊祓とは人間に与えられ

た五つの性能の内のどの性能で行えばよいか、の確認です。

ここに詔りたまはく、「上つ瀨は瀨速し、下つ瀨は瀨弱し」と詔りたまひて、

伊耶那岐の大神の精神音図（イラスト）を御覧下さい。その母音の配列は縦にアオウエイと並びます。大神が言った「上つ瀨は瀨速し、下つ瀨は瀨弱し」の上つ瀨とは母音アより半母音ワに至る横の列の並びであり、下つ瀨とは母音イより半母音ウに至る並びです。瀨とは川の流れることで、生命の川と呼ばれる事もあります。では「上つ瀨は瀨速し」とはどんな意味でしょうか。母音アの宇宙から現われて来る人間の精神現象は感情です。感情は自由であり、奔放ではありませんが、ともすると激しすぎて何時もこ

天津音麻音図

ワ	←-----	上つ瀨	感情	ア
ヲ		中つ瀨	経験知	オ
ウ	←-----		欲望	ウ
エ			実践智	エ
キ	←-----	下つ瀨	意志	イ

こに身を置いて物事に対処しようとしたのでは、身の休む暇がなくなります。「上つ瀬は瀬速し」です。

では「下つ瀬は瀬弱し」とはどういう意味でしょう。下つ瀬である母音イの列は人間の意志発現の世界です。その法則が言霊原理です。人間の意志というものは、他の四つの性能ウオアエの底にあつて、その四つの性能を刺激して現象化させますけれど、意志自体が表面に出ることはありません。やる意志はあつても、意志だけでは物事に対処するのに何も為し得ません。「下つ瀬は瀬弱し」であります。そこで伊耶那岐の大神は上つ瀬でも下つ瀬でもない「中つ瀬」に入つて行きました。

初^{ハジメ}めて中^{ナカ}つ瀬^ノに降^{くだ}り潜^{かづ}きて、^そそ^そた^まま^ふ時^にに、

菅^{すが}麻^ま音^ね図^ずの上^うつ瀬^のはア段、下^{した}つ瀬^はイ段^{です}ですから、中^なつ瀬^{とは}オウエ^の三段^{とい}うことにな^ります。母音オの宇宙から經驗知、ウからは五官感覚に基づく欲望、エからは選択知（実践知）が現出して来ます。物事に対処して社会に生きて行くためには、先ずこの三つの性能に頼ることが穩当^{えんたう}です。

そこで伊耶那岐の大神はこの母音言霊オウエの三つの生命の川の流れの立場から、禊祓^{しそひ}の行

為を、心に斎き立てた建御雷の男の神という主観的真理に従って進行させたのでした。

成りませる神の名は八十禍津日の神。

さて、人間に与えられた五つの性能のうち、上つ瀬であるア段は人間の感性・感情です。この性能は自らが生活を楽しみ、生命を謳歌して行くには誠に適した性能です。けれどこれでは他人に対し、社会に対し、物事に処し、文化を創造して行くには適当ではありませぬ。しかしまた、この性能の純粹の発露は愛であり、慈悲です。分け隔てのない心です。この純粹な慈しみの心に立つと、物事の偽りいつはりのない真の姿（実相）をよく把握することが出来ます（飽咋あまぐひの大人の神）。

そこで伊耶那岐いざなぎの大神が自らの精神構造の菅麻音図の中つ瀬オウエの三段の生命活動の瀬に立って、自らの心の中に斎き立てた建御雷の男の神の音図をたよりに禊祓の法について検討する時、大神自らの立場の音図の母音の並び「アオウエイ」のうちのア段の働きの意味・内容がはっきり分つて

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ									イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

来たのでした。それを八十禍津日の神と申します。

八十禍津日の八十は数字の八十ということ。八十とは何を意味するのでしょうか。少々難解ですが説明しましょう。天津菅麻の音図五十音を上下にとると左の図が出来上ります。全部で百音図です。この百数から宇宙である五つの母音・半母音の合計二十数を引いた八十がこの八十禍津日の神の八十なのです。それは現象として現われることのない宇宙を除いたこの世の一切の現象の数を表わします。

では心の要素の全てを表わす五十音言霊を何故上下百数とするのでしょうか。哲学ではさぞ難しい説明になるのでしょうか、ここでは簡単に触れておく事に致します。この世の中の一切の出来事は、それを心の究極の要素である言霊の立場から見ますと、光明に満ちた、いとも合理的な社会なのです。しかし今の現実はともその様には思われません。合理的な事と不合理極まる事が入り交じって、一つの理論では到底見極めることが出来ない複雑怪奇なものに思われています。何故なのでしょう。それは世の中を見る人が自ら勉強した経験知によつて見て、それが世の中の実際の姿だと思ひ込んでいるから

ワ				ア
ヲ				オ
ウ				ウ
エ				エ
キ		八十現象		イ
ク				エ
ケ				ウ
コ				オ
カ				ア

です。

禊祓をする人の立場から見ますと、どちらが正しくて、どちらが誤っているか、ではなく、両方の立場を理解しなければ文明創造活動（政治）は実行出来ません。そこで言霊の立場の現象を上段に、現実の経験知による社会の見方を下段に、合計十段の言霊図をもつて表わすこととなるわけであります。

人間に与えられた純粹の言霊アの立場に立ちますと、社会の出来事の眞実の姿は以上のように八十の究極の現象としてはつきりと看取することが出来ます。眞実の姿を見極めることは、そのそれぞれをコントロールして、文明を創造して行く為には不可欠のことです。けれど「貴方の眞実の姿はこれだよ」と相手に突き付けたのでは、コントロールは出来ません。「そんなに酒ばかり呑んでいては、貴方は近い内に死んでしまうよ」と患者に言う先の例の医者態度がよくそれを示しています。相手の眞相を知ることと同時に、その人にどんな言葉をかければ良いか、は別に考えられなければなりません。

禊祓を実行するために、人間天与の五つの性能のうち何に頼るべきか、という事に関して伊耶那岐の大神のア段に対する態度が、かくて決定されたのでした。八十禍津日の神ヤソマガツヒという神名がそれを示します。ア段に立つて見ることが出来る八十の現象の眞相をそのまま相手に向って表現し伝えることは、相手をきめつけるだけで適當ではない。それは「八十禍マガ」である。しか

し、その八十の実相を禊祓の実行の土台として見定めるならば、「八十禍」は創造の光（日）の言葉の中に渡される（津）事になるであろう。禊祓を行う伊耶那岐の大神の心の構造に名付けられた天津菅麻という音図のA段の内容と働きの意義が、かくて八十禍津日の神として規定されたのでした。

次に大禍津日の神。

八十禍津日の神とは、禊祓の実行に当って言霊ア（感情）の受け持つ役割とその制限の確認であるのに対し、この大禍津日の神は言霊イのその確認であります。

言霊イとは人間の創造意志発現の宇宙です。意志という性能は人間天与の他の四つの性能、五官感覚による欲望（ウ）、経験知（オ）、感情（ア）、実践知（エ）を刺激し、発動させる原動力となるものですが、それ自体は現象となることはありません。「下つ瀬は瀬弱し」です。けれど人間の心の究極要素であるアイウエオ五十首言霊が存在する次元でもあるのです。この言霊の法則が存在しない限り、世界文明の創造のための外国文化のコントロールなど出来るわけのものではありません。と同時に、言霊原理の存在とその内容を披瀝し、説明したからと言って、諸文化のコントロールが出来るわけではありません。言霊の原理は禊祓のための大前提

・基礎法則ではありませんが、直接それを振りかざしてはならぬものです。意志は底に秘めるもので、意志のみの先走りは混乱の基となります。

そこで言霊イというものの、禊祓に於ける意義・内容の効用と規制の確認が行われます。神名で表わしますと大禍津日の神という事になります。禊祓の実行のためには、その基礎法則として大いなるもの（大）、しかしそれを前面に押し立ててはいけないもの（禍）、そう規制することによって歴史創造の光となる（津日）働き（神）という意味であります。

以上、禊祓の実践に当り、伊耶那岐の大神自身の心の構造に名付けられた天津菅麻音図上の言霊アと言霊イとの意義効用とその規制が確認されたこととなります。言霊アの純粹感情（感性）は、禊祓の対象となるものの真実の姿（実相）を見定める視点となる宇宙ではあるけれど、また言霊イの創造意志の言霊原理は禊祓の実践のための重要な基礎法則ではあるけれど、しかし、双方共その働きを直接禊祓の実行の前面に押し出すことが間違（禍）であることが確認されたのであります。

この二神は、かの穢き紫き国に到りたまひし時の、汚垢によりて成りま

せる神なり。

文章そのままの意味としては、この八十禍津日の神・大禍津日の神の二神は、伊耶那岐の命が妻神伊耶那美の命を追って、高天原以外の外国に行き、その発達途上の経験知に基づく学問・文化を体験して、その汚垢によって現われた神である、という意味です。汚垢とは気枯れの意で、真理そのものである言霊の原理が備わっていない、即ち気が枯れている学問・主張・文化ということ。

では実際にはどうということなのでしょう。妻神を追いかけて出掛けて行った黄泉国では、伊耶那岐の命は外国の色々な学問・文化に接しました。その学問・文化は私達の現在社会に見られますように、経験知によって一つの主張を否定し、それに代って自らの主張を積み上げて行く事によって築いて行く文化社会です。その基盤となる精神土壌は競争です。自らの主張の正当性を示すためには、他人より一歩でも多く速く歩かなければなりません。伊耶那岐の命は黄泉国のこの闘争という処世術が横行する社会の文化を目の当りに見て、驚いて高天原に逃げ帰って来ました。黄泉国の社会は穢き(生田無き)繁き国であったのです。

でも黄泉国外国は萌す(黄)泉の国でもあります。競争に基づいた完成されていない混乱の学問・文化ではありますが、次から次へと湧き出る如く考案されて社会に登場して来ます。

高天原の精神文明以外の第二の文明である經驗知に基づいた物質科学文明を人類のもう一つの文明として、これを摂取し、人類文明に同化して行かなければなりません。ただ「穢い」、「汚垢けがれ」とは言つてはいられません。それではどうしたらこれらの萌もぎし現われて来る外国の学問・文化をコントロールして、世界人類の生命の糧かてとして摂取して行くことが出来るか、の方法として、禊祓の法則の確立が必要となるわけでありませぬ。

その禊祓の実践の方法の確立の中で、先ず言靈アと言靈イの意義・効用の確認と、その使用・適用の規制がはつきりと決定しました。外国の学問・文化の処理に當つて、その実相を明らかにし、そののみで足れりとしてはならない（八十禍津日の神）、またその処理に當り、コントロールのための基本法則となるべき高天原の言靈原理を、外国の学問と並べて論争の具としてはならない（大禍津日の神）、という二点の決定です。それによつて伊耶那岐の大神の音図の上で言靈アと言靈イの意義が確立されます。「この二神ふたはしらはかの穢きたなき繁しき国に到りたまひし時の汚垢によりて成りませる神なり」の意味をお分り願えた事と存じます。

ここで一言復習をしておきたい事があります。それは伊耶那岐の大神の天津すがそ首麻音図と齋いっぎ立てた建御雷の男まの神と呼ばれる音図との関係です。禊祓の章以後は、この二つの音図の立場が折り交つて出て来ますので、更めてその意味を確かめておこうと思ひます。

伊耶那岐の大神は竺紫つづくしの日向ひむかの橘たちばなの小門せどの阿波岐原あはぎはら即ち伊耶那岐の大神自身の精神構造を示す天津菅麻音図すがその立場に立つて禊みそぎ祓はらひを開始しました。そして自らの心の中に、先に自らの心の内に自証みこしされている建御雷たけみかづちの男をとこの神という音図を齋いっき立てました。建御雷の男の神とは、伊耶那岐の命の所産である心の一切の要素、アイウエオ五十音言霊をどう整理構成して行つたら人間最高の精神構造を得られるか、を自らの心の内に追求して、自証的にはあるけれど結論として得られた音図です。

そこで伊耶那岐の大神は、自らの心の構造である天津菅麻音図すがその立場をふまえながら、その上に物事一切の整理のための音図である建御雷の男の神の音図を齋いっき掲かげて、その建御雷の男の神という音図が、実際に黄泉国よもつの学問・文化を整理することが出来るのか、どうかの確認の作業、即ち禊祓の実践に入つたわけです。

伊耶那岐の大神の菅麻音図すがそとは、人間が授さづかつた大自然そのままの心の音図です。その五つの母音は人間天与の五つの性能を示します。この五つの性能は、人間が生きて行く上で何が大切で、どれが大切でないかということはありません。すべて平等です。けれど外国文化の整理という事に関してはどうかでしょうか。伊耶那岐の大神は自らの心である菅麻音図についてア段の感情を振り返って、「上つ瀬は瀬速し」とその自由奔放な働きを思い、この感情作用で禊祓をしたら果してどうであろうか、と齋いっき立てた建御雷の男の神の音図上で検討し、感情という

性能は外国の学問・文化を整理する上で、基礎となる働きはあるけれど、それ直接では適當でない、という事を確認し、ア段の働きに八十禍津日の神という名を付けたのでした。同様、人間の創造意志イの禊祓に於ける働きに大禍津日の神として効用と適用制限を確認したので。八十禍津日の神も大禍津日の神も、五十音言靈の整理の途上で生れた心的現象でありますから、言靈の神である伊耶那岐の大神の子の中に入るとは当然であります。天津菅麻音図の観点に立ち建御雷の男の神の音図を検討する禊祓とは以上のようなものであります。

次にその禍を直さむとして成りませる神の名は、神直毘の神。次に大直毘の神。次に伊豆能売。

次にその禍を直さむとして成りませる神の名は、

伊耶那岐の大神は人間天与の五つの性能のうち、言靈アの感情と言靈イの創造意志の能力によつて禊祓をしたらどうであろうか、を検討し、これら二つの性能が禊祓を實行するのに適當でない事を確認しました。そこで、それなら残された人間性能である言靈オ（経験知）、言靈ウ（五官感覚に基づく欲望）と言靈エ（実践英智）の三つの性能によつてでは禊祓の實行はど

うか、を建御雷たけみかづちの男をの神の音図上で検討し、これら三つの性能の働きならばいけるぞ、という確認を得たのでした。この三つの性能は伊耶那岐いざなぎの大神の音図、天津音麻音図の中段「中つ瀬」にあります。

神直毘かむなほひの神。

言靈オウエの三つのうち、言靈オの宇宙より現出する人間の経験知の働きが建御雷たけみかづちの男をの神の音図の上で、禊祓の実行に如何に役立つか、が確かめられた働きを神直毘かむなほひの神と呼びます。

言靈オから現出して来る人間の経験知からは精神的・物質的な学問・科学が発達して来ます。黄泉国よつから種々雑多な論説・主張が産出されて来ますが、それらの主張・主義・学問・文化を全て人類の知的財産として合理的に整理・整頓して行く働きが神直毘かむなほひの神なのであります。

次に大直毘おほなほひの神。

言靈オウエのうちの言靈ウから現出する人間の性能である五官感覚による現識、それに基づく欲望性能が禊祓の際に如何なる効用を果すか、が確認された事に対して大直毘おほなほひの神と名付けられました。

人間の五官感覚に基づく欲望は果しがありません。その欲望が組織化されて社会の巨大な産業・経済にまで発展して行きます。大直毘おほなほひの神とは、それら多岐にわたる人間の欲望活動の全体を合理的にコントロールして行く働きがあることを確認した事であります。

次に伊豆能売。

伊耶那岐の大神の精神音図である天津菅麻音図の中つ瀬である言靈ウオエのうち、最後の言靈工より現出する人間性能、選択実践知が襖祓に於て如何なる働きが出来るか、の確認を伊豆能売と呼びます。

伊豆能売とは御稜威みいづの眼めの意味。御稜威とは大いなる人間創造生命活用の威力、といった意味であります。言靈工の実践英智に、外国の学問・文化を整理・コントロールして、人間生命の合目的性に添わせる働きがあることが確認され、それが齎いたづき立てられた建御雷たけみかづらの男をの神の言靈音図上ではつきり決定される時、この書の中で述べられます言靈布斗麻邇ふとまにの原理の総結論となります天津太祝詞あまつふとのりこと（音図）即ち人類文明創造の規範（鏡）である八咫やたの鏡かがみと呼ばれる精神構造図が初めて完成されることとなります。その前提として、この襖祓に於ける言靈工（実践知）の効用の確認を伊豆能売、御稜威みいづの眼め（芽）と呼ぶのであります。

伊耶那岐の大神の音図を形成します人間生命の五つの瀬（川）について、そのそれぞれが禊祓を實行する上で、適当か否か、の検討・確認が以上によつて終りました。上つ瀬の言靈アが八十禍津日の神として、下つ瀬の言靈イが大禍津日の神として両方共不適當であり、中つ瀬を形成する言靈オウエがそれぞれ神直毘の神・大直毘の神・伊豆能売として適格であることが決定しました。

次に合格となつたこれら三神が、禊祓の實踐に於てどんな内容の働きをするかの詳細が音図上で決定されます。この仕事を通して、一気に言靈布斗麻邇の原理の総結論に突入することとなります。

古事記本文にもどります。

次に水底（そこ）に漙（そ）ぎたまふ時に成りませる神の名は、底津綿津見（そこつわたつみ）の神。次に底筒（そこつつ）の男（を）の命（みこと）。中に漙（そ）ぎたまふ時に成りませる神の名は、中津綿津見（なかつわたつみ）の神。次に中筒（なかつつつ）の男（を）の命（みこと）。水の上に漙（そ）ぎたまふ時に成りませる神の名は、上津綿（うはつわた）

津見の神。次に上筒の男の命。

今までにお話ししましたように、禊祓の作業も最終段階に入って来ました。古神道言霊学という禊祓の意味を更に深く掘り下げて考えて見たいと思います。古事記神代巻が謎々の形で示す禊祓とは、現代の神社神道が行っている水浴びや滝に打たれて魂を浄化する個人救済の業ではなく、高天原日本に保有されている言霊布斗麻邇の原理による外国の思想・文化の整理の作業であることを先に説明しました。今は更にその整理作業がどんな立場から成され、どんな心の持ち様によって行われるか、を考えて見ましよう。

伊耶那岐の大神の詔りたまひしく、「吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の禊せん」とのりたまひて、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして、禊祓へたまひき。

古事記の禊祓の文章は右の様に始まっています。この時、古事記の文章の中に伊耶那岐の大神という名前が初めて出て来る事は先にお話しました。伊耶那岐の大神とは伊耶那岐の神の単なる尊称の意味ではなく、主体的世界の創造神である伊耶那岐の神が、客体的世界の主宰神である伊耶那美の神をも包含した宇宙身、世界身の立場を示すために大の字を使ったのでした。

この主体が客体をも含んだ姿を御身おほみまと申します。主体だけでなく、また勿論客体だけでもなく、主体が客体を包含した実体を御身と呼びます。

哲学的で少々難むずかしい表現となりますので、具体的に説明しましょう。

伊耶那岐の命は妻神伊耶那美の命との間に生れた五十音言靈を、自らの心の内で整理して、主観的真理として建御雷たけみかづちの男おとこの神と呼ばれる音図を完成・確認しました。その後、妻神伊耶那美の命は黄泉国の客観世界の文化を建設しようと高天原を出て行きます。夫神はこれを追いかけて行き、黄泉国外国の調和のない雑多な文化を見て、驚いて高天原に逃げ帰ります。それを追いかけて来た妻神伊耶那美の命と道引ちびきの石いしをはさんで「言戸ことどの度わたし」即ち夫婦離婚が宣言されました。伊耶那美の命は黄泉大神として、外国の客観世界の文化建設の総責任者となって高天原から決別します。

以上の経過の後で、伊耶那岐の命は伊耶那岐の大神と変身し、禊祓をすることとなります。伊耶那岐の大神とは、主観的真理の体得者である伊耶那岐の命と、妻神の仕事となった客観世界の学問・文化の現実の体験者との両方を一身の中に併せ持った神、人間ということになります。

伊耶那岐の大神とは、五十音言靈で構成されている主観世界も我が身、次々と人間の経験知によつて考案される物質的科学的客観世界も我が身、という主観・客観をひつくるめた宇宙世

界唯一の文化創造者の立場ということであります。

禊祓とは伊耶那岐の命が主観的真理である五十音言霊の原理をもって、伊耶那美の命の世界の客観的学問・文化を単に審判し、整理する、ということではなく、高天原に確立保存されている五十音言霊の原理も、次々に考案され提出されて来る外国文化も、人類文明創造上の自らの中に起つて来たもの、自らの責任として、処理して行く事であります。この事が御理解頂けますと、伊耶那岐の大神が禊祓の開始に当り、「吾は御身の禊おほみません」と宣言した事の意味が明らかになつて来るであります。

自らの中の主観的真理を以て、自らの体験としての客観的学問を整理し、しかも如何なる場合にもその正当性が確立している文明の創造法則、それが現在進行中の禊祓の行法の中で確立されようとしているのです。^{注二}

【注一】一つの主張を自らの経験知に照らして批判し、審判する、これは言霊才の経験知の世界の仕事である。これに対し、他の主張も自らの主張も、両方を理解した上で、人間英智の根本法則に従つてその両方の主張の調和の道の方向を指示する事が言霊工より現出する実践智の立場である。

さて、古事記の文章の解釈を進めることにしましょう。

次に水底に^{そそ}添きたまふ時に成りまぜる神の名は、

外国の学問・文化を撰取して、こ

れを人類文明創造の目的に添うよう

コントロールする、即ち禊祓をする

には、人間天与の五つの性能のうち、

オウエの三つの性能が適格であるこ

とが確かめられました。次に

伊耶那岐の大神のする仕事は、その

適格であることを自らの天津菅麻と

いう音図上で、言霊の動きとして、

原理・原則を確立することでありま

す。そのためには、外国の学問・文

化を体験して来た自らの御身を、建御雷の男の神の音図を鏡として禊祓することです。

← - - - -		感情	ア	感性	上つ瀬
← - - - -	水の上	悟性	オ	知性	中つ瀬
← - - - -	水の中	現識	ウ		
← - - - -	水底	理性	エ		
← - - - -		意志	イ	言霊	下つ瀬

この時伊耶那岐の大神は、水底・水の中・水の上の三地点で禊祓をします。言霊オウエの適格性の検討をするのですから、上つ瀬・中つ瀬・下つ瀬のうち、中つ瀬の水底・水の中・水の上ということになります（図参照）。

底津綿津見の神。

伊耶那岐の大神は人間天与の性能のうち、オウエの三性能が禊祓をする上で、適格であることを知りました。次にこの適格であることを自身の天津菅麻の音図上で確認する仕事に入ります。中つ瀬の底と言え、工段です。実践智です。この実践智が禊祓に於てどう働くか、の確認が仕事です。言いかえますと、禊祓に於て重要な働きをするだろうと期待される伊豆能売という人間性能を言霊音図上で確認することであります。

底津綿津見の神の底津とは、伊耶那岐の命の音図の横の生命の川の中のオウエの三段の底である工段の流れは禊祓の時には何処から流れ出ているか、母音宇宙工から流れ出るのだ、ということ。底の津

（港）の意。綿津見の

天津太祝詞
建御雷の男の神

ワ										ア
キ										イ
エ	セ	エ	ネ	レ	ハ	メ	ケ	テ	エ	
ヲ	ソ	ヨ	ノ	ロ	ホ	モ	コ	ト	オ	
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ	

綿は渡すの意、津見は流れ出て現われるの意。そこで底津綿津見の神の全部で、水底である工段実践智の働きは、襖祓に於て言靈母音工（外国の学問・文化の真実の姿）より始まり、結論工（それら学問・文化のあるべき処）に渡す働きがあることを確認した、ということであります。外国の学問・文化の整理コントロールに於て、実践智工が提出された主張を確実に摂取して、その人類文明史上のあるべき処に収め得る力のあることが工次元の流れの中で確認されたことです。

次に底筒の男の命。

底津綿津見の神が工よりエに渡す働きがあることの音図上の確認であるならば、工よりエに渡すためには如何なる経過を辿ることになるのかの確認、それが底筒の男の命であります。現時点工より結果エまで音図上一本の筒またはチャンネルの形で導かれています。その筒は実際にどうなっているのでしょうか。建御雷の男の神（天津太祝詞）の音図を御覧下さい。出発点工より終着点エの間に現象子音テケメヘレエセの八音が筒のように一筋に並んでいます。この八つの現象の経過を通じて出発から結果に導かれます。この経過の全貌を底筒の男の命と呼びます。

普通、出発点から終着点に至る経過を示す時は時置師であるイ段のチイキミシリヒニの八つの父韻を使います。父韻とは人間が物事を創造する元となる原律であり、現象となる以前の働きです。ところが、禊祓に於て言霊工の実践智が外国の学問・文化を一定の所あらしめる働きの経過は底筒の男の命に見られますように、工段のテケメヘレネエセの現象子音の八音で示されています。子音とは明らかに人間に意識出来る後天現象の最小要素のことです。

古事記にはこの底筒そことうの男おとこの命の他に、中筒の男の命、上筒の男の命と筒の男の命が三神出て来ますが、以上の事を理解しますと、禊祓に於ける行法の中のこの三筒の男の命の個所は、言霊の学問を学ぶ上で最も重要な段階の一つであることが自覚されて来ます。では何か。それは後天現象の最小単位である三十二の子音を知る、という課題であります。

以前にもお話しましたが、人間の心を構成する言霊五十音のうち、アイウエオの五母音については概念的ではありませんが、中国やインドの哲学で五行・五大と呼ばれて説明がされています。また八つの父韻についても、易经で八卦と言ひ、その他八正道とか、ドイツ古代哲学で Funke (火花) 等と呼ばれ、その存在が示されています。またその消息を遠くを見るようにではありますが、窺い知ることが出来ます。けれど後天現象の最小要素であります三十二個の子音については、今取上げています古事記(日本書紀)以外には古今東西如何なる宗教書、哲学

書にもその実相に触れたものは全くないのであります。三十二個の言靈子音を知る、ということとは人間の心の学問の中で最も深奥の、とっておきの奥義というべきものです。三箇の男の命の段階はこの奥義の自覚の段階なのであります。

先に古事記は「子生み」の章で、子音創生を大事忍男おほことおしをの神・言靈夕より大宜都比売おほげつひめの神・言靈コまでの三十二神名として謎の形で説いております。それは人間の思い（一念）が言葉として一瞬の内に精神宇宙を駆け廻り、発想より始つてその了解に至るまでの順序を三十二の子音言靈で以て示したものでした。その三十二の子音を指し示したのは三十二の神名であり、神名はいわば概念であり、謎であり、指月の指に当るものであります。その神名をいくら考えても、それが指し示す子音実相に近づくことは出来てもそれそのものに辿り着く事は不可能なです。

日本語は心と言葉の最小要素である言靈の組合わせによつて出来ています。私達が日常日本語を話す瞬間、またはその日本語を耳にする瞬間、その言葉はそれを構成している五十音言靈のそれぞれによつて真の姿（実相）が指し示され、裏付けられています。けれど私達は普通その様な言靈の存在も、またその言靈が示す実相も意識し理解することがなく過しています。その普段には知ることもなく、理解することもない三十二の実相子音言靈を、褻祓の立場に立つて、人類文明創造の行為を実行する時、その人の発する言葉を裏付けている実相子音が、実行

者の心の内に、まさに心に焼き付く如く明らかに自覚・了解されるのです。現在お話し申し上げている底筒そこつつの男おとこの命である言靈工の実践智の活用に当つては、その実行者の側に、テケメヘレネエセの八つの子音の眞の姿がはつきりと印画される如く汲み取れる事となるのです。

そしてまた、禊祓の実行者の発する言葉が、以上のように物事の実相を構成している実相子音に裏付けられているからこそ、その言葉は整理コントロールされる外国の学問・文化にとつて主観・客観両面に共に真実であり、誤ることのない至上命令となる事が出来ず。

三柱の筒の男の命の段階は、子生みの章で神名として謎の形で示された三十二の実相子音が、初めて生きた人間の生きた心の要素として人間に意識・自覚される心の行法の過程という事が出来ましょう。筒つつの男おとこの命いのちが神かみでなく命いのちと表現されているのは、この子音の自覚が観念や概念としてではなく、実相として生きた人間の自覚としてのみ可能であるからであります。

伊耶那岐・美二神の子生みによつて生れた言靈五十音を、主観である伊耶那岐の命が整理して出来た理想の音図に建御雷たけみかづちの男おとこの神と名付けました。建御雷たけみかづちの神かみでなく、建御雷たけみかづちの男おとこの神と男の字が付けられた理由は、その神名によつて示される理想の音図の眞理性が、飽くまで主観の中でのみ確認されたものであることを示したものでした。底筒そこつつの男おとこの命の男も同様であります。一瞬の内に現われては消える光ひかり（靈ひかり驅かり）である現象子音は、主観であると同時に客観である事実そのものであります。その実相は飽くまで主観の側に於てのみ知り得る事でありま

すので、筒つつの男おとこと男おとこの字が付けられているわけでありませう。この場合男おとこは主観、女めは客観を表わします。

以上、褌ふんどしにおける筒つつの男おとこの命いのちの意味について、言霊ことば子音この自覚こぼしという観点からのお話をし
て参りました。私達わたくしが日常にちじょうの社会生活しゃかいせいごうを営いむ上で、物事ものごとの真実まことの姿すがた、実相じつさうを見ることの大切たいせつさと同時に、その実相じつさうそのままの言語げんごを持つ事ことの仕合わせしあわせを心の底そこから知ることが出来るのがこの三筒みつつつの男おとこの命いのちの段階たがひであります。

中に漉そそきたまふそそに成なりませなる神かみの名なは、中津綿津見なかつわたつみの神かみ。

「中に漉そそきたまふ」の中なかとは、中なかつ津つ瀨せであるオウ工おうこうの内うちの中なか、即ち言霊ことばウうの五官ごくわん感覚くわかくの現識げんしき、それに基づいた欲望よぼうのことであります。この天あま与よの性能せいのうが褌ふんどしに於おて如何いかなる働はたらきが出来できるか、が岐まぎの命いのちの天津あまのつ菅すげ麻あさ音ね図ず上で検討けんこうが始めはじめられ、出発しゅつぱつ点てんのウうから終着しゅじやく点てんのウうまで、物事ものごとの整理せいりコ
ントロールが着実ちゃくじつに実行じっぎんされることが確証かくしやうされました。この確証かくしやうを中津綿津見なかつわたつみの神かみと呼びます。
中津綿津見なかつわたつみの神かみとは、中なかつであるウ段うだんの始めはじめのウうという港みなとから（中津なかつ）、それを終着しゅじやくのウうなる港みなとに渡わたして（綿津わたつ）、結果けつこを現あらわす（見み）働はたらき、という意味いみであります。それは先に説明せつめいしま
した大直毘おほなおひの神かみの働はたらきの岐まぎの命いのちの天津あまのつ菅すげ麻あさ音ね図ず上での確認かくしんといいうことが出来できます。

次に中筒の男の命。

中津綿津見の神が、人間の欲望性能言靈ウが禊祓の際に果す役割を音図上に確認した事であるのに対して、次の中筒の男の命はその働きが発点ウから終着点ウに向つて、一本の筒の如く、一つのチャンネルのような経過を経ることの確認です。その経過はウ・ツクムフルヌユス・ウの八つの現象子音で表わされます。(前図参照)

また禊祓の実行の上で、この欲望性能の生産活動をコントロールする言葉を発する時、その実行者の心の内に、現象子音である八つのそれぞれの実相がはつきりと印画される如く了解されます。子音ツクムフルヌユスが自覚されます。

水の上に蒞きたまふ時に成りませる神の名は、上津綿津見の神。

水底の言靈工、水の中の言靈ウが出ましたので、残るのは水の上の言靈オの働きの禊祓上の確認です。岐の命の天津菅麻音図上で、言靈オより発現する人間の経験知という性能が、外国の学問・文化を摂取して、これを人類文明を創造して行く上で、如何なる地位を与えればよいか、を決定する働きが可能である、ということを確認した事であります。外国の学問・文化の

実相を出発点オとし、それが摂取されておさまる終着点をヲとする時、オよりヲにもたらず働
きが備わっていることを確認したのでした。言霊オの出発点が上津であり、それを終着点言
ヲに渡して（編津）成立させる（見）働き（神）という意味です。

次に上筒の男の命。

襖袂を実行・可能にする言葉は、出発点オより終着点ヲまで、一定の筒のような、チャンネ
ルのような一連の現象の経過を通る形を備えています。その一連の経過の確定が上筒の男の命
と呼ばれます。実際には、オ・トコモホロノヨソ・ヲの現象を経ることになります。

そして襖袂実行の言葉を発する時、その実行者の心底に八つの子音、トコモホロノヨソの
相がはっきりと自覚されます。

以上、底筒の男・中筒の男・上筒の男の三筒の男の命の確認によつて、言霊子音、テケメヘ
レネエセ、ツクムフルヌユス、トコモホロノヨソの三次元の子音の自覚が可能となりました。
この時、読者の中には、言霊子音は三十二個であるから、ア段のタカマハラナヤサの八音の自
覚はどうなるのか、と訝る方もいらつしやるかも知れません。その事について説明しておき
ましよう。

禊祓とは、純主観の伊耶那岐の命と純客観の伊耶那美の命が一体となった伊耶那岐の大神の仕事であることは前に説明しました。主観と客観が一つになったただ一つの宇宙身、伊耶那岐の大神の御身おほみの中の主観的精神原理によって、矢張り御身の中の建設途上の外国の学問・文化を、伊耶那岐の大神が自らの体からだ（宇宙身）を清めるといふ形で整理コントロールすることです。この時、次々と湧き出て来る外国の学問・文化を自らの内に起きる事実として、全てを受け入れ、慈いつくしみと感謝の心を以てそれぞれの処を得しめるよう努力すること、これが禊祓です。「これは良い、これは悪い」の単なる批判ではなく、全てを生かそうとする心です。

禊祓の実行の時、外国の学問・文化に対する土台となる心、そこに言霊ア段の「アよりワに渡す八つの子音、タカマハラナヤサの認識・自覚が得られるのであります」注二。

【注一】この所の消息を大和石上神宮に伝わる布留ふるの言本こともとは「ウオエニサリヘテノマスアセエホレケ」と言霊を以て示している。「ウオエニサリヘテ」とは上中底の三箇の男の命の事。その実行をアセ（アの瀬）で行え、の意である。（二九〇頁「禊祓三例」の表参照）

【注二】仏説般若心経の中に「三世諸仏も、般若波羅密多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提さんぼだいを得たまえり」とある。般若波羅密多とは言霊アの自覚（慈しみ）の境地より湧き出る智慧のこと。三藐三菩提みやくとはウオエの三箇つの男の命をという人間最高の智慧の存在を暗示した

仏語である。

古事記の本文に戻りましょう。

この三柱の綿津見の神は、阿曇の連葦が祖神と齋く神なり。かれ阿曇の連葦は、その綿津見の神の子宇都志日金折の命の子孫なり。その底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命三柱の神は、墨の江の三前の大神なり。

この三柱の綿津見の神は、阿曇の連葦が祖神と齋く神なり。

綿津見とは出発点より終着点に渡して現われる（見）という意味。阿曇とは明らかに続いて現われるの意で、綿津見と阿曇は此処では略同義の言葉です。この古事記の一節から、阿曇の連の一族は後世、外国の学問・文化の受入れとそれによつて輸入される言葉を、言葉の原理に則つて実相を表わす大和言葉に直す役目についていた人達であることが推測されます。太古に於ては、人または一族の名前とは、それが従事していた官職・使命を表わしていました。

小八阿曇の連華は、その綿津見の神の子、宇都志日金拆の命の子孫なり。

底津・中津・上津の三綿津見の神とは、それぞれ言靈工・ウ・オの三性能が禊祓に於て、外国の文化を処あらしめる創造の言葉の働きを確認することです。ですから、その神の子とは単なる神様の子というのではなく、その働きの応用・適用と言った意味です。宇都志日金拆の命の宇都志は現、即ち現実の、の意。日は言靈、金拆の金は神名、拆は咲かせるの意。宇都志日金拆の命の全部で現実に言靈によつて大和言葉を作り、世の中に流布する役目の人、ということになります。それ故、その人達の子孫である阿曇の連の官職名が推測される事にもなります。注二。

【注一】宇都志日金拆の命の事を竹内古文献には萬言文造主の命と呼んでいる。

その底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命三柱の神は墨の江の三前の大神なり。

墨の江の墨は統見・総見・澄見等の意、江は智恵のこと。三前とは、言靈学の、言い換えると古事記神話の総結論である三貴子が誕生する為の前提となる、の意。

底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命の三神は、言靈学の総結論、人類知性の最高の規範（鏡）であります三貴子（天照大神・月読命・建速須佐男命）が誕生する前提となる神である、ということです^{注一}。

【注一】日本書紀の千引の石の章に「時に伊弉諾尊乃ち其の杖を投ちて曰く、此還雷来な。是を岐神と謂う。此の本の名をば来名戸の祖神と曰う」とある。岐神は古事記では衝立船戸の神と呼ぶ。その本の名は来名戸の祖神である。来名戸とは「ここより来るな」の意と同時に、九十七の戸の意味もある。九十七の数は「墨の江の三前」即ち底筒の男・中筒の男・上筒の男の三神、言靈百神のうちの三つ手前（前提）の九十七の意味である。高天原の主観的真理と黄泉国の客観的真理探究の二つの世界の間の結界（千引の石）とは筒の男三神が明らかにする言靈三十二の子音の自覚であることを示している。

みはしらのうずみこ
三 貴 子

古事記上つ巻（神代巻）のお話が「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神（言靈ウ）、……」に始まり、九十七番目の神である底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命の所まで進んで来ました。後は言靈学の総結論である天照大神、月読の命、建速須佐の男の命の誕生を残すだけになりました。三貴子と呼ばれる三神を加えますと、ここに初めより数えて丁度百の神様が出て来る事になります。

この百の神様の名前が、人間の心を構成している要素である五十個の言靈と、その運用法五十計百の原理（道）を示していますので、初めの天の御中主の神より百番目の建速須佐の男の命までを言靈百神と呼んでいます。現在の神社神道はこの事を人間社会の道徳の鏡となる百の道の表徴として鏡餅を御神前に飾っています。

総結論となる三貴子誕生の前提となる筒の男三神まで、話は五十個の言靈の創生とその

運用法の確認という一連の話を進めて来たわけですが、何分にも仕事に微に入り細に渉って来ましたので、読者の皆様が九十七番目の神までの話を一連の事柄として頭の中で整理し切っていらつしやるであろうか、という懸念が残ります。そこで、初めから今迄の話を項目毎にまとめて、簡単なお復習まらいをしておく事にしましょう。

「天地の初発の時」

古事記の上かみつまき巻の初めの言葉である「天地の初発の時」とは、現代科学が研究対象としている様な、私達の眼前に展開している広大な宇宙や、星雲・天の川・太陽・星・地球・月と言つたものがどのようにして出来て来たか、という問題ではなく、私達自身が自らの心を内に省り見て、そこに広がっている心の宇宙、その宇宙の中に私達の心が動き始める、その心の働きの初まりはじ、の事を言っているのだ、という事が説明されました。心の中の初めの動きの事の説明ですから、その心の始まる瞬間こそ私達が生きている今・此処であり、古神道で中今なかいまと呼びました。古事記は眼前にある外界の宇宙を説くのではなく、飽くまで私達の心の宇宙、その構造と動きの内容を説いているのであります。

「先天の構造」

心の動きの第一の段階は、心が現象として現われる以前の、心の先天構造の発現です。古事記で「天津神諸の命」と呼ばれるこの先天構造は十七個の天名と名付けられた言霊で構成されています。その十七個は母音、半母音、父韻、親音の別があります。共に決して現象として現われることはなく、観想と思惟によつてのみ把握される領域のものです。

「子音創生」

第二の段階は伊耶那岐・美二神の意志の発動によつて、先天構造が活動を開始して、真名（真奈）と呼ばれる後天子音三十二個の創生です。子音とは後天である目に見える現象の最小要素のことです。そして先天十七個と後天三十二個の言霊が火の迦具土の神言霊と呼ばれる神代表音文字で書き表わされ、粘土板の上に刻み込まれました。全部で五十個の言霊が確認されました。人間の精神生命を構成するのはこの五十個の言霊であり、それより多くも少なくもありません。

「迦具土の神の検討・整理」

第三の段階は、迦具土の神として書き表わされた人間の心と言葉の究極要素である言靈ことばたま麻あ邇にがどのように人間の心を形造っているか、の検討・整理が行なわれました。金山かなやま毘古まびこの神より和久わくむすび産巢日うすひの神までの操作がこの段階です。これによって言靈によって構成される人間精神の構造の初歩的内容が略認りやくにんされました。心即言葉であり、心即言靈であり、更に言葉即神であり、神即人である高天原の内容が大体確立した事になります。

「建御雷たけみかづちの男をの神の確立」

第四の段階は、人間の心の構成要素として確認された言靈五十音がどんな組織を持ち、どの様に動き働くのか、それ故、五十音を人はどの様に運用・活用したらよいのか、の検討と確認の段階です。石拆いはさくの神よりくちみづは閼美津羽くちみづはの神までの操作がこれに当ります。この検討によって人類文明創造上の理想の精神構造である建御雷たけみかづちの男をの神という音図が伊耶那岐いざなぎの命の精神内容のみの真理として確立されたのでした。

「黄泉国よもつに於ける伊耶那岐・美二神の交渉と離婚」

第五の段階は、人間の主観内のみでの真理である建御雷の男の神なる音図が、人類文明創造上

の如何なる場合に適用しても通用する主観と客観双方の真理であることを検討する為の前提として、外国の文化創造の目的で黄泉国に去つて行つた美の命を、夫神岐の命が追いかけて行き、黄泉国の文化に接した後、岐の命が高天原に逃げ帰つて来るまでの段階です。その結果、純精神真理と客観世界の真理との間に越すべからざる結界のある事を確認して、岐・美二神の言戸度し（離婚）となりました。

「禊祓」

伊耶那岐の命は、黄泉国で経験して来た外国の学問・文化を心に留めながら、自ら客観世界を包含した主観である唯一世界身である伊耶那岐の大神という立場に立ち、自らの内容を示す天津菅麻の上に主観内真理として確立された建御雷の男の神なる音図を衝立船戸の神と齋き立てて、御身の内容としての外国の学問・文化の禊祓を実行する過程、これが第六の段階です。衝立船戸の神以下上筒の男の命までがその操作であります。この操作によつて外国の学問・文化を摂取して、それぞれに人類文明創造上の処を得しめる事が出来る人間精神の最高の規範（鏡）の内容が、精密な五十音言霊の配列として確認された事になります。

以上、古事記上巻の「天地の初発の時、……」より上筒の男の命まで、言靈学の結論となる
三貴子の誕生の前提と内容の解明まで、言靈学の観点からの人間の心の操作を段階的に復
習して来ました。これよりいよいよ三貴子誕生の結論に入ります。

ここに左の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、天照らす大御神。
次に右の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、月読の命。次に御鼻
を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、建速須佐の男の命。

人類文明を創造して行く上での外国の学問・文化の理想的処理法として、底津・中津・上津
の三綿津見の神と、底・中・上の三筒の男の命との内容を確認して、言靈エウオに即した人類
文明創造の最高規範（鏡）が出現することとなります。古事記の文章には左の目・鼻・右の目
と書かれています。これは音図を人の顔に見立てた時の母音の位置を示したものです。（著
者太安万侶の茶目氣躍如たる処です）では誰の音図か、と言えば勿論伊耶那岐の神の天津菅麻
です（図参照）。

菅麻音図は母音がアオウエイと並んでいます。そのうち両側のアとイを除いた中つ瀬のオウ

工を人の顔の目と鼻に見立てますと、図のようになります。この中で、左の目に当る言霊工の実践智の究極の完成体として、五十言霊麻邇を運用・操作することによって人類文明を創造して行く最高の規範（鏡）が出現します。天照大御神あまてらすおほみかみの誕生です。その精神構造を五十言霊を以て表わしたものが天津太祝詞あまつひまのり（音図）と言い、その中心となる内容はエ・テケメヘレネエセ・エです。その内容を器物として表徴したものを八咫やたの鏡と呼んでいます。

ア	オ	ウ	エ	イ
	右の目 夜の食国	鼻 海原	左の目 高天原	

伊耶那岐の大神の右の目に当るのは言霊オ、人間の経験知・悟性です。袂祓によってこの人間天与の経験知の性能を活用して、人類の精神的学問・文化を整理・コントロールして行く最高の精神構造が確立・確認されました。月読つくよみの命の誕生です。その精神構造の内容を言霊麻邇で表わしますと、オ・トコモホロノヨソ・ヲとなります。

顔の鼻に当るのは言霊ウ、人間の五感覚、またそれに基づく欲望です。袂祓の操作によってこの欲望性能を活用し、その欲望性能から生れて来る人類の産業・経済活動を整理コントロールして、人類社会に物質的繁栄をもたらす最高の精神構造を確立・確認することが出来ました。

建速須佐の男の命の誕生です。その精神内容を言霊麻邇を以て表わしますと、ウ・ツクムフル
又ユス・ウとなります。

言霊エオウから発する人間の基本の性能によつてそれぞれの文化の分野をコントロールする
精神の鏡として誕生しました天照大御神・月読の命・建速須佐の男の命の三神を三貴子と
呼びます。言霊布斗麻邇の学問の総結論です。前にもお話ししましたが、古事記冒頭の天御中主
の神より建速須佐の男の命まで丁度百個の神名が出て来ます。最初より五十番目の神までが心
の宇宙の構成要素である言霊五十音を表わし、五十一番目より百番目の建速須佐の男の命まで
の五十神が、言霊五十音を操作して人間理想の行動規範（鏡）を作るまでの言霊操作法五十を
表わします。合計百の道が神道の鏡餅の実体です^{注二}。この百個の学問の行程は、同時に五母音、
四半母音、八父韻、（親音）から三十二の現象子音を読者御自身の心の中で確認自覚して行く
道であることも前にお話ししました。

【注一】最初の五十神、五十音言霊を祭る宮を伊勢神宮（^{さくくしろいすずのみや}拆削五十鈴宮）といい、五十の操
作法を祭る宮が大和の石^{いそのかみ}上神宮である。石上神宮に太古より伝わる「^{ふる}布留の言本^{こともと}」日文四十
七文字は言霊四十七音を重複することなく用いて、五十音麻邇の操作法を教えている。

ふたごのしま
兩児島またの名は天之兩屋

以上八十禍津日の神より建速須佐の男の命までの十四神が心の宇宙に占める区分を兩児島または天之兩屋と言います。兩児または兩屋と兩の字があるのは、この言靈百神の誕生の最終段階において、上段の五十音言靈図と下段の五十の操作法の二つの段（兩屋）が完備され、古神道の百の道の原理が完成されたからであります。この兩児島で、先に古事記が「島生み」の項で示した島の全部の宇宙の位置と説明とを終えたことになりました。

この時伊耶那岐の命大く敏はして詔りたまひしく、「吾は子を生み生みて、生みの終に、三柱の貴子を得たり」と詔りたまひて、すなはちその御頸珠の玉の緒ももゆりに取りゆらかして、天照らす大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天の原を知らせ」と、言依さして賜ひき。かれその御頸珠の名を、御倉板拳の神といふ。次に月読の命に詔りたまはく、「汝が命は夜の食国を知らせ」と、言依さしたまひき。次に建速須佐の男の命

に詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と、言依さしたまひき。

禊祓の行が終り、主観内でのみ観ぜられた真理である建御雷の男の神の五十音言靈図が、名実共に主観・客観双方に適用して誤ることのない天津太祝詞といわれる音図として確立・認識が完成しましたので、禊祓の際の宇宙身、御身おほみまとしての伊耶那岐の大神から、ここでは以前の伊耶那岐の命に戻ります。そして「私は人間天与の原始の性能である天津菅麻すがその言靈の神として、大事忍男の神以下種々の言靈原理に関する神々を生んで来て、とうとう言靈原理の結論である三柱の貴子うづみこ、天照あまてらす大御神・月読つくよみの命・建速須佐たけはやすさの男の命を生むことが出来た」と大層喜びました。

この事を古事記の神話としてではなく、言靈原理の発見・研究の歴史という実際の問題として考えて見ましよう。日本人の遠い祖先が、何時頃の時代であつたか、初めて「人間には心がある。心とは何だろう」ということに関心を持ち、更に「心と言葉との関係は」の問題を考え、心の真理を求めめる大勢の同志との協力の下に、幾百年、幾千年という長い年月の研究の末、終に心の先天構造から後天現象の要素、その構造と動きの様相を明らかにし、結論として言靈工オウの性能による人類文明創造のための最高規範（三二貴子みはしらのおうずみこ）を発見し得た時の我々の祖先

の喜びが如何に大きかったか。古事記の文章は簡單明瞭にそれを教えて呉れます。

更にもう一つ見方を変えて考えて見ましょう。古事記は初めの天の御中主の神より九十七番目の筒の男の命まで、言霊原理の結論である天照らす大御神・月読の命・建速須佐の男の命誕生に至る経緯いきまじを詳しく紹介して来ました。その経過はまた一人の人間が言霊麻邇の原理をマスターし、自覚に至る方法をも明示しています。現代に生きる人が、古事記によつて言霊学を学び、五十音言霊とその操作法を本解説に従つて自らの心の中に見つめ、自らの中に言霊原理を築いて行くならば、必ずやその人は三貴みはしら子の精神構造を理解・自覚することが出来るであります。と同時にその人は、現代社会の一員として、また遠い昔、日本と世界歴史創造の経緯を組織した私達祖先の靈知り達と同様の靈知りの人として、この大転換期にある世界人類の命運を背負つて立つ人となることでありましょう。

言霊原理を表わす言霊百神の道(百道)はすべて整いました。伊耶那岐の命の子生みの仕事は確かに終わりました。ではこれで言霊神である伊耶那岐の命の話も終るのかな、と思うとそうではありません。子を生み終えた末に、伊耶那岐の命は三貴みはしら子に文明創造上の明らかかな三権分立と、その運用のための驚くべき精巧な方策を用意するのです。私達日本人の祖先は、言

靈原理の発見と、その原理の運用による人類歴史の創造に関して、人間生命全般の視野と、人類の長い歴史の究極の目的とを洞察して巧妙な手段を適用したのです。それは今から説明申し上げようとすると天照らす大神・月読の命・建速須佐の男の命に対する三権分立の処置であり、更に言靈の原理を三柱の神のうちの唯一人にしか与えなかつた、という事であります。

三権分立

すなはちその御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照大神に賜

ひて詔りたまはく、「汝が命は高天原と知らせし」と、言休さして賜ひま。

かゝその御頸珠の名を、御倉板拳の神といふ。

伊耶那岐の命は、言靈工オウの性能に即した最終的結論に基づいて、天照らす大御神・月読の命・建速須佐の男の命の三柱の神に、人類文明創造上の三つの領域をそれぞれ分担主宰する責任体制をはつきりと定めたのでした。天照らす大御神には高天原を、月読の命には夜の食国を、建速須佐の男の命には海原を知らせという命令です。この事を古事記三貴子の三権分立と呼んでいます。

高天原とは言靈麻邇で境界され、言靈原理の幸倍う純粹の大和言葉に表現されるところの人

間精神の中枢領域のことです。そして「その御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照らす大御神に賜ひて……」とありますように、高天原を治らす手段・自覚として五十音言靈の自覚を天照らす大御神にだけ授けたのでした。御頸珠の頸とは組む靈の謎です。靈とは言靈のこと。それを組んで大和言葉を作ります。「御頸珠の玉の緒」とありますから、五十音言靈を珠と見て、それを糸でつなげ、ロザリオにしたもので、三種の神器のうちの八坂の勾珠に当ります。

「その御頸珠の名を、御倉板拳の神という」とは、御倉板拳とは御厨の棚の意で、天照らす大御神が知食す精神の食物を並べておく台所の棚という謎であり、五十音言靈図の事を指します。

さて、伊耶那岐の大神は、前段の禊祓に於て三柱の貴子の中心となる精神内容を、それぞれエ・テケメヘレネエセ・エ、オ・トコモホロノヨソ・ヲ、ウ・ツクムフルヌス・ウの三箇の男の神として言靈麻邇によって確認しています。ですから伊耶那岐の命は天照らす大御神に言靈原理を表わす御頸珠を与えて高天原を治めよ、と命令した事は了解出来ます。けれど同様に言靈をもってその中心内容を確認した月読の命、建速須佐の男の命に言靈原理を与えることがなかった、という事をどう解釈したらよいのでしょうか。

次に月読の命に詔りたまはく、「汝が命は夜の食国と知らせ」と言依り
したまひき。

月読の命には「夜の食国を自らの統治の領分として治めよ」と命令しました、の意。月読の命の实体は言靈麻邇でオ・トコモホロノヨソ・ヲと確認されています。ですから、月読の命に天照らす大御神同様言靈原理が与えられるならば、月読の命の实体とその表現である言葉は表裏一体のものとなるわけです。実相即言葉の原理が通用します。ところが月読の命には言靈原理が与えられませんでした。その結果はどうなるでしょうか。月読の命という名前の由来がそこから出て来ます。月読の月は附属するの意。誰に附属するか、というと、高天原の言靈原理に附属して、それを読む、即ち説明するの意となります。または太陽に譬えられる天照らす大御神の光を受けて照る月の如く、实体である言靈麻邇をうすばんやりと映し出す領域とも表現出来ます。

言靈麻邇を使わずにその实体を表現・説明するために、経験知に基づく概念とか、表徴、比喩等が用いられることとなります。人間の経験知による概念・比喩・表徴等に基づく物事の判断・説明は、一面一面が歪んだ多面鏡の像のごとく、どんなに詳しく写し出そうとしても、物事の実体そのものを捉えることが出来ない、という宿命を負うこととなります。しかしこの言

靈才より現出する働きも人間に与えられた性能の一つとしてその領域が定められたのでした。

次に建速須佐の男の命に詔りたまはく、「汝の命は海原を知れ」と、

言依さしたまひき。

建速須佐の男の命とは、竹(建)がすさまじい(須佐)速さで伸びて行くような心(男)の人、の意に解釈出来ます。言靈ウから現出する現象である人間の欲望は、これでよいという事のないすさまじいものです。この人間の五官感覚に基づく欲望性能はやがて産業・経済を発展させることとなります。海原とは言靈ウの名の領域、即ち物を生産する世界を意味するでしょう。

また須佐の男の須佐とは主(須)である天照らす大御神を佐ける、と読むことが出来ます。須佐の男の命が主宰する産業・経済がやがて大きな発展を遂げた暁、主である天照らす大御神の高天原の五十音麻邇の精神原理と共に、車の左右の両輪の一つとなって人類の福祉に貢献する事が出来る分野でもあるわけです。

建速須佐の男の命の働きの実体はウ・ツクムフルヌス・ウと確認されています。けれどもこの命にも言靈原理は授けられませんでした。その結果、この命の海原の領域が用いたものは数

の原理でありました。

以上で、古事記神話が告げる言靈百神の謎解きのお話を終了することといたします。御熱読有難う御座いました。最後に私達の祖先が言靈原理を發見し、みはしらのうずみこ三貴子に与えた三権分立の制度が、人類の実際の歴史の中でどの様に移り變つて行つたか、をお話ししましょう。

人間の精神内における三貴子みはしらのうずみこの三権分立が定められてから長い年月が経ち、人類の歴史の幾多の変遷の後、その精神的三分担は、地球上の三領域の分担として現われて来ます。

天照大御神は高天原、心としては日本人の精神の中枢部に潜在意識として、場所としては日本皇室の賢所に天皇家の秘密となつて保存・伝承され、やがて来るべき第三文明時代建設の成否の鍵としての活用の出番を待つ事となりました。月読の命は自らの言靈才の分野に言靈アの分野を結びつけ、その概念・比喩・表徴の手段を用いて人類の宗教・哲学・芸術の文化を作り上げて行きます。その活躍地域は主として東洋であります。須佐の男の命は自らの言靈ウの性能に、言靈才の経験知を客観世界に向けて取り入れ、自然科学と産業・経済を發展させました。その活動地域は最近まで西洋でありました。以上、みはしらのうずみこ三貴子の精神的三権分立は、歴史の進行と共に地球上の三区分（日本・東洋・西洋）として發展しました。

言靈原理は天照大御神にのみ与えられました。その結果、大御神は自らの高天原は勿論、月

読の命の宗教・哲学・芸術の分野と、須佐の男の命の自然科学・産業・経済の分野の状況とを
全て、麻邇の相に於て把握・統轄し、世界文明創造の神として日本の高天原に君臨しています。
言霊原理は言霊工に於てのみ運用する事が出来るものだからです。

後日譚

古事記神代卷の最初に現われる天の御中主の神より三貴子、天照大御神・月読命・須佐男の命の誕生とその三権分立までで、人間の心の構造である言靈五十個とその操作法五十、計百個の原理を示している所謂言靈百神の謎釈きは全て終りました。現在神社神道が御神前に供える上下二段の鏡餅（百道）に関する内容とその理解は全て完成した事になります。ところが古事記の最後の章「身褌」には三権分立の記事の後に数行須佐男の命の反逆の事件が付け加えられています。そこで、この神話の謎釈きの話を「古事記と言靈」の後日譚としてお話することになります。先ず古事記の文章を載せませす。

かれおのも、おのもよさし賜へる命のまにま知らしめす中に、速須佐男の命、依さしたまへる国を知らさずて、八拳須心前に至るまで、啼きいさちまき。その泣く状は、青山は枯山なす泣き枯らし河海は悉に泣き乾しき。

ここと以ちて悪ぶる神の音なひ、狭蠅なす皆満ち、萬の物の妖惑に発り
き。かれ伊耶那岐の大御神、速須佐男の命に詔りたまはく、「何とかも汝
は言依させる国を治らさずて、哭きいさらる」と詔りたまへば、答へ白さ
く、「僕は此の国根の堅洲国に罷らむとおもうがからに哭く」とまをした
まひき。ここに伊耶那岐の大御神、大く愈らして詔りたまはく、「然らば、
汝はこの国にはな住まりそ」と詔りたまひて、すなはち神逐ひに逐ひたま
ひき。かれ伊耶那岐の大神は、淡路の多賀にまします。

字句を追つて解釈を進めて行く事にしましょう。

かれおのも、おのもよさし賜へる命のまにま知りしの中は、

日本人の祖先の長年月の研究と努力の末に、言靈布斗麻邇の原理が、天照大御神・月読命・
速須佐男の命の三貴子の誕生と、その人間精神界における三権分立として確立されました。
天照大御神の高天原とは、言靈麻邇によつて結界された清浄無垢な精神の中枢世界、月読命の

夜の食国をすくにとは麻邇の原理を使わずにその消息を概念・比喩・象徴等を以て表現し説明する領域、速須佐男の命の海原うなばらとは、高天原の生命調和の精神に則った物質生産とその分配の仕事の世界であります。この三者は精神の三位一体をなし、天照大御神が正位、月読命は右の座、速須佐男の命は左の座に位して、高天原日本に於て三位協力して長い年月の間、平和な精神文明時代を作り上げて行つたのでした。

速須佐男の命、依てしたまへる国を知りてすて、八拳須心前に至るまで、

啼え、いさしえ。

三 貴子みはしらのうずみこの三位一体の協力による精神文明時代は邇々芸王朝・彦穗々出見王朝と長い年月が経過しました。そして時代は鵜草葺不合王朝うがやふきあはずの時代に入ります。ここに至つて、その時まで高天原の調和の精神の下で物質世界の生産・分配の仕事に従事していた速須佐男の命の心の中に、高天原の精神とは全く異なつた心が湧き起つて来たのでした。「姉君天照大御神の言霊麻邇の原理は、人間の心の原理法則としては完全無欠のものです。けれど私が分担を命ぜられた海原の物質世界を研究するためには、麻邇の法則とは全く別個の原理と方法があるように思えて仕方がない。私はどんな事をしてでもこの領域の真理を究めたい。」と思つたのです。そし

て高天原の三位一体の自らの分担の仕事には見向きもしなくなったのでした。

「八拳須心前に至るまで、啼きいさちき」とある八拳須の須（鬚）とは靈氣の謎です。靈は言霊、その氣ですから父韻を指します。八拳はこの場合八つの父韻を示します。心前に至るまで、とは自らの心に満足するまで、の意。啼きいさちき、とは八父韻は古事記前文にあります鳴き沢ぐ神でありますので、その八つの父韻の配列をどうしたらよいか、声に出して探つて見た、の意です。

高天原精神界の基本の心構えは父韻でチキミヒリニイシ（タカマハラナヤサ）と示されます。この心構えは一切のものを撰取してこれに処を得しめる精神です。ところが、速須佐男の命は「物質とは何か」を探究するためには、この調和の心構えでは適当でない事に気付いたのです。物事を操作して出発点より結論に導く手順を示す八つの父韻の配列を、高天原従来の配列の心構えとは全く違った配列を求めて、新しい研究手法を探つて、タカマハラナヤサの配列を目茶苦茶にする行いを始めたのです。

その泣く状は、青山は枯山なす泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。こ
こを以らて悪する神の音なり、狭蜷なす皆満ち、萬の物の妖悉に発しき。

高天原は一切のものを撰取してそれぞれに処を得しめる大調和の精神の世界です。そこにすべての前提条件を廃除して、唯現象を自らの経験知に従つて破壊分析して、その性質を探る法則は何であろうと、速須佐男命の活動（泣く状）は猛烈を極めたのでした。「青山は枯山なす泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき」速須佐男命の研究願望は破壊を慾（ほしい）ままに、高天原に從來にない異物をもたらす事となりました。この速須佐男命の求める物事を処理する手法を弱肉強食の世相を表わす天津金木音図のA段、アカサタナハマヤラワの配列から悪（わる）ぶる神と呼びます。この悪ぶる手法が高天原の此処・彼処に起り、それは丁度五月の蠅の群れる（狭蠅）如く、高天原に種々の調和を乱す事が起りました。

かれ伊耶那岐の大御神、速須佐男の命に詔りたまはく、「何とかも汝は
言依させる国を治らせずて、哭きいさるしと詔りたまへば、答えて白さ
く、「僕は此の国根の聖洲国に罷らんとおもふがからに哭く」とまおした
まひき。

そこで伊耶那岐の大御神は速須佐男の命に質（た）しました。「お前は分担を命令された高天原の生産の仕事（ウの名の原）をおろそかにして、何故滅茶苦茶な手法を探つて騒ぐのだ」と。速

須佐男の命は答えました。「私自身、物とは何かを研究する破壊の手法は、調和世界の高天原で行うべきでない事は知っています。ですから、高天原を去って行った母親、伊耶那美の命の根の堅洲国に行き度いものと、泣いているのです」と。根の堅洲国とは音の片洲国の意。音は言葉。言葉を分ける主観と客観の片方である客観世界の言葉が静まっている（洲）の国。即ち黄泉外国のことである。

ここに伊耶那岐の天御神、大く忿らして詔りたまはく、「然らば、汝は

この国にはな住まいせし」と詔りたまひて、すなはち神速に逐ひたまひま。

「忿らして」とは親神伊耶那岐の命が命令をきかない息子速須佐男の命の所業を「怒って」とも解釈し得るし、また「五神らして」と解釈して、五神であるアウエイ五母音の次元界層のそれぞれの相違が起す現実の歴史の推移より判断して、と解釈することも出来ます。親神は「お前が志す物質世界探究の仕事は此処高天原で行うべきことではない。汝は外国へ行け」と言つて、速須佐男の命を高天原より追放したのでした。

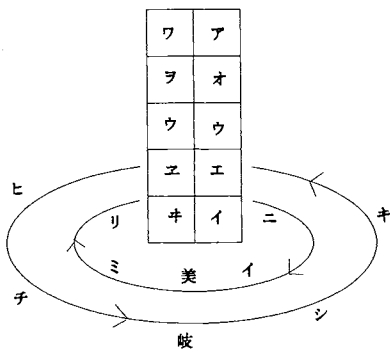
ここに速須佐男の命と呼ばれる初期の科学研究集団が日本より外国に向け出発して行ったのでした。今より約五千年以前のことです。

かれ伊耶那岐の大神は、淡路の多賀にまします。

かくて、言靈布斗麻邇の研究集団伊耶那岐の大神は自らの全ての仕事をやり終えて、淡路の多賀にお住いになられています。淡路とは主体アと客体ワを結ぶ道、双方を箍たが（多賀）のように締めて結ぶ働きである八父韻の原動力として活動しています、の意（図参照）。

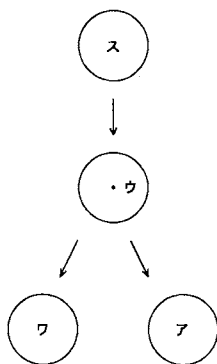
古事記のこの所の消息を日本書紀は次の如く伝えていきます。

「是の後に伊弉諾尊、神功既に竟まへたまひて、靈運当遷かむあがりましんんとす、是を以て幽宮を淡路の洲に構つくり、寂然長しずかたく隠れまじき。亦曰く、伊弉諾尊功既に至りぬ。徳亦大いなり。是に天に登りまして、報告かへりごとしたまふ。仍すなはち日の少宮わかみやに留とどまり宅すみましぬ。」神功かんごととは言靈麻邇百神を生んだ仕事のこと。淡路あわじの洲すとは吾あと我わの間の交流によって生れて来る言靈百神の原理を生み、その証明と自覚とを全て成し終えて、それが言靈ス（洲・皇・静・巢す）の姿に落ち着いた心であります。その心は言靈原理出発の心であり、また原理完成後の心でもありま



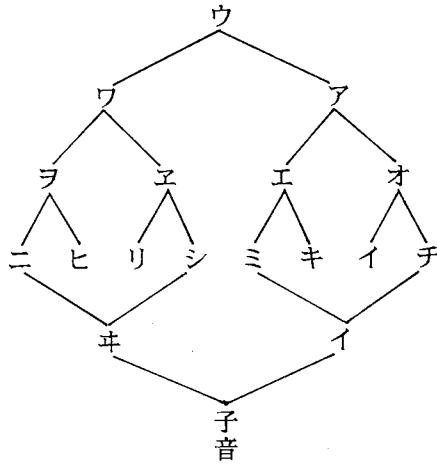
す（図参照）。日の少宮とはアオウエイ五母音宇宙のこと。全ての現象はここより出て、ここに帰って消える。日の湧く宮でもあります。伊弉諾尊はこの五母音宇宙の中に永遠に留まり宅んでいらつしやるのです。

古事記は速須佐男の命の反逆と高天原からの追放を語るこの一節を、次に続く天照大御神と速須佐男の命の「警約」によって更に詳しく説明しています。その上で黄泉国に物質文明創造のために出発して行く速須佐男の命の基本精神の構成を「穀物の種」なる短い挿入文によって呪示する章へと続くこととなります。（おわり）

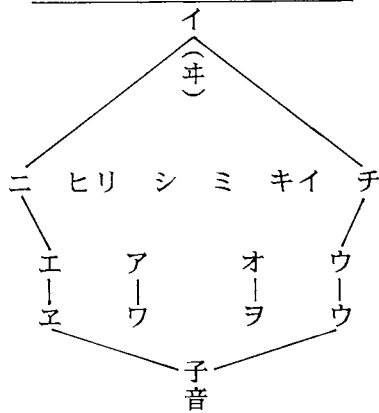


先天図

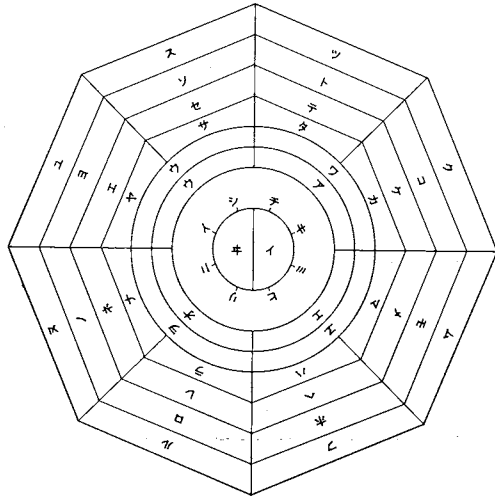
古 事 記



日 本 書 紀



八咫鏡 (言靈圖)



ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

言靈ウ

天津金木音図

ワ	ラ	ヤ	ナ	サ	ハ	マ	タ	カ	ア
キ	リ	イ	ニ	シ	ヒ	ミ	チ	キ	イ
ヲ	ロ	ヨ	ノ	ソ	ホ	モ	ト	コ	オ
ウ	ル	ユ	ヌ	ス	フ	ム	ツ	ク	ウ
エ	レ	エ	ネ	セ	ヘ	メ	テ	ケ	エ

言靈オ

赤玉音図

キ	ミ	イ	ニ	シ	ヒ	リ	キ	チ	イ
エ	メ	エ	ネ	セ	ヘ	レ	ケ	テ	エ
ワ	マ	ヤ	ナ	サ	ハ	ラ	カ	タ	ア
ヲ	モ	ヨ	ノ	ソ	ホ	ロ	コ	ト	オ
ウ	ム	ユ	ヌ	ス	フ	ル	ク	ツ	ウ

言靈ア

宝音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
エ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ	ソ	ヨ	ノ	ロ	ホ	モ	コ	ト	オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ

言靈エ

天津太祝詞音図

ワ									ア
ヲ									オ
ウ									ウ
エ									エ
キ	八 父 韻								イ

言靈イ

天津菅麻音図

禊祓三例

古事記神名禊祓	布留之言本（日文）	天津太祝詞
伊耶那岐の大神 衝き立つ船戸の神 道の長乳齒の神 時量師の神 煩累の大人の神 道俣の神 飽昨の大人の神	ヒフ ミヨイム ナヤコトモチ	タ
奥疎の神 奥津那芸佐毘古の神 奥津甲斐弁羅の神 辺疎の神 辺津那芸佐毘古の神 辺津甲斐弁羅の神	ロラ ネシキル ユキツワヌ	カ マ
八十禍津日の神 大禍津日の神	ソヲ タ ハク メ	ハラ
神直日の神 大直日の神 伊豆能売	カ ウオエニ サリ ヘテ	ナ
底津綿津見の神 底筒の男の命 中津綿津見の神 中筒の男の命 上津綿津見の神 上筒の男の命 天照大神 月読の命 建速須佐男の命	ノ マスアセエホレケ	ヤ サ

歷
史
編

歴史とは

唯今から日本と世界の歴史について話を進めることとするが、そもそも歴史とは何なのであるか。

歴史は過去についての記述である。そうは言っても過去に起ったその日の出来事を唯羅列して行けば歴史が出来るというものではない。一人の人物の歴史にしても、唯その人の毎日の行為を羅列しても何の意味もない。行為には意図・目的がある。社会・国家・世界との関わりがある。その歴史の記述には歴史を書く人の判断が必要である。更に考えて見よう。人の見たこと聞いたことやった事等々すべての経験は頭脳に記憶として印画される。表面の記憶が忘れ去られると潜在意識に保存される。その人の記憶の総量は血筋として子孫に受継がれる。かくて現在に生きる一人の人間の頭脳には人類始つて以来の出来ごとがすべて印画されている事となる。

又こうも言える。過去は既に過ぎ去つたことで存在してはいない。将来は未だ来ないもので、これも実在するものではない。有るのは唯一瞬一瞬の今だけである。この今を古神道で中今なかいま(続日本紀)という。人が何かをしようとする場合、この中今の中に観念的な記憶としてあるものの中

から行為に必要なものを想起して、それを止揚し参考にし、再編成・再構築して一つの行為を創造して行く。どの記憶を取り出して、どの様に構成して行くかはその人の判断で決まる。歴史を書くにも同様記述者の判断が加わる。歴史が書く人の判断の基礎となる人生観の影響を受けることを否定することは出来ない。そこに問題がある。

人間の性能は言霊ウオアエイ五段階の次元に発現する。歴史を書く人が上述の五段階のうちの言霊ウ・オ二段階の自覚しか持っていない場合、当然歴史は言霊ウ・オの次元即ち人間の欲望と経験の二段階のみの見地より書かれることとなる。そして言霊ア・エ・イの三段階即ち芸術・宗教・道徳・言霊そのものという立場は無視されてしまう。一人間を描写するのに欲望と知識の見地からのみして、感情・道徳・意志の判断を無視するならばその人物描写は極めて偏頗なものになってしまふであらう。歴史の記述も同様である。戦前の歴史を又戦後のそれをも極めて偏頗なものたらしめている原因はすべて其処にある。言霊ウ・オ・ア・エ即ち人間の現識も経験知も感情も道徳智もそれぞれすべて人間の全人格即ち言霊イである生命意志に統轄されているものとしての現識であり、経験知であり感情であり道徳智である筈である。一つ乃至二つの性能の独走の判断に基づく歴史は真実の歴史ではない。

言霊五十音による人間生命の全構造が明らかにされた現在、日本のそして世界の真実の歴史を提示することが初めて可能となった。

万葉の時代を理解するためには万葉人の心に帰らなければならぬ。日本と世界の歴史を誤りなく伝えるためには人間の生命構造の全局の見地に立つことが必要である。この意味から人間生命の全体の学である言霊の原理に則った日本と世界の歴史の大略を提示することとしよう。

歴史の黎明（言霊原理の発見）

人類の歴史の始まりは何時であるか。諸説がある。しかし究極的には歴史の始まりは言葉と数と文字の発生の時であるということが出来る。言葉がなければ人間の文化はなく、又それを保持・伝達・継承することもできない。言葉は文明の母（いろは）であり、数は文明の父（かぞ）である。

人類は大昔何時の頃からか自分の中なる心の存在に気付き、その心の内容を把握し表現するいろいろな方法を考案し始めた。言葉や図形や符号等である。その考案・研究の中で心と言葉との関連の問題はその中心課題であった。その研究には長い長い年数を要したことであろう。この時が人類の精神文明の揺籃時代ということが出来る。何時しか心と言葉の研究が一ヶ所に集まり研究・討議が行われるようになった。古事記・日本書紀が形而上的に高天原と呼んでいることからして多分地球上の高原地帯——チベット・パミール・アフガニスタン辺りであったろうか。遂にその研究者集団は人間の心の構造とその構成要素並びにその運用法を余す所なく解明することに成功した。その時期は現在より約八千年乃至一万年以前と推定される。スメール文明より以

前のことである。

解明された精神原理によれば、精神の究極構成要素先天十七・後天三十二・文字化一合計五十であり、これにアオウエイ五十音をそれぞれあてはめて言霊と呼んだ。五十の言霊の運用操作法五十総合計百箇の原理である。又その五十音言霊とその操作によって人間が持つ五つの性能の典型的な規範が定められた。言霊イに則した構造を表わす天津菅麻音図、言霊エの操作法として天津太祝詞音図、言霊アの心の持ち方として宝音図、言霊オの操作法として赤珠音図、言霊ウの操作法として天津金木音図である。

又社会を運営して行く上での協力して行くべき三つの異なる分野がはっきり示された。三権分立である。そのことを古事記は次の如く示している。(古事記と言霊参照)

この時伊耶那岐の命大く歎ばして詔りたまひしく、「吾は子を生み生みて、生みの終に、三柱の貴子を得たり」と詔りたまひて、すなはちその御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天の原を知らせ」と、言依さし賜ひき。かれその御頸珠の名を、御倉板拳の神といふ。次に月読の命に詔りたまはく、「汝が命は夜の食国を知らせ」と、言依さしたまひき。次に建速須佐の男の命に詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と、言依さしたまひき。

以上が古事記神代の巻に於ける三柱の貴子である天照大御神・月読命・建速須佐男命の三権分立の宣言であるが、この世界の経営における精神原理としての三権分立は以後の人類歴史を決定して行く重要な因子として働くこととなる。ここで高天原とは言霊布斗麻邇の原理である言霊の幸倍さいばいの国のことであり、夜の食国おすくにとは天照大御神の保持する言霊の光のない夜の国の思想の基もとの学問、即ち宗教・哲学・芸術の分野のことであり、海原うみはらとは言霊ウの名なの領域（はら）である産業・経済・科学の分野のことである。それぞれの分野を言霊で示せば天照大御神は言霊イ・エ、月読命は言霊ア・オ、建速須佐男命は言霊ウ・オの領域である。そして以上の言霊原理の発見者である聖（ひしり）の集団の代表者の名前を古事記で伊耶那岐大神と呼ぶのである。

文明社会創造への出発（天孫降臨）

時が来て高天原の靈知りの集団の中から選ばれたものが、言靈五十音の原理をもって理想社会を創る為に地球上の適当な平地に向つて出発することとなつた。理想社会とは、生命の究極構造の原理に則つて物や事の名前を定め、その名前そのまゝの真相が明らかに生かされる様な世の中ということである。この社会創造の責任を負つた人物を邇邇芸命（にぎのみこと）という。第二次的の更に第二次の靈を即ち第三次的な芸を操作する人の意である。実相即名である言靈は第一次的である。その言靈を組み合せることによつて命名された事物の名前は第二次的である。その事物の名そのままを活かされて矛盾のない社会の創造即ち政治とは第三次的な芸術というわけである。又この代表者の創造のための平地への出発を記・紀は天孫降臨という。

天孫降臨の時を記した古事記の文を掲げよう。「天照大御神高木の神の命もちて……ここにその招をぎし八尺やさかの勾まが穂たま、鏡、また草薙くさなぎの劍、……賜ひて詔りたまはくは『これの鏡は、もはら我が御魂として、吾が御前を拝うぐがごと、齋いきまつれ。』……とのりたまひき。」

これを天孫降臨に際しての天照大御神の神勅という。その意味は人類文明創造の任に当る最高

の責任者は勾璉・劍・鏡の三種の神器に象徴される言靈布斗麻邇の原理を自覚し奉戴して行うべし、という命令である。

蟹は甲羅に似せて穴を掘るといふ。人類は人間本具の性能に基づいて文明を創造して行く。その性能の及ぶ範囲以外に出ることはなく、範囲を縮減することもない。それ故先に述べた伊耶那岐大神の三權分立の統治の宣言とこの天孫降臨の天照大御神の命令とは共に人間生命本具の究極構造であるアイウエオ五十音言靈の原理に根ざした基本活動法則であるが故に、以後の人類文明創造の歴史を貫く大動脈となり眼目となる。天孫降臨以来今日に到るまで、また今日より人類がその種を保持する限り永遠に、人類の歴史はこの二つの宣言を枢軸として展開して行くこととなるのである。

さて三種の神器で表徴される五十音言靈の原理を体得・保持して文明の創造のために地球上の適地目指して天降った人間の集団が最後に行き着いた所は何処であったか。「ここに麋肉の韓国を笠沙之前に求ぎ通りて詔りたまはく、此地は朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。かれ此地ぞ甚と吉き地と詔りたまひて、底津石根に宮柱太しり、高天原に氷椽高しりてましましき。」(古事記)とあるからには、西の方より朝鮮半島を経てこの日本の地に落ちついたものと見るのが妥当であろう。この国を靈の本(日本)と呼ぶ語源である。

ここに今まで言霊の原理を勉強して頂いた方には蛇足と思われるであろうが、念の為に附加えることがある。古事記・日本書紀の記事を掲げたり日本の国名を霊の本などと言うと、敗戦以後の日本の歴史観からのみ考える人々には正に戦前の民族主義の亡霊が甦つて来た様に感じられるかも知れない。しかしながら一度眼を人間とはそも如何なるものかの問題に向け、今・此処に活動している自分自身の心の構造を直視して、言霊五十音布斗麻邇の原理を理解するならば、これから説く原著の日本並びに世界の歴史が狭隘な民族主義的観点からでなく、純然たる人間精神科学の最奥の原理・法則に則った真実の歴史書であることを了解するであろう。

日本の歴史 (一)

所謂天孫降臨は約八千年以前の出来事と推定される。この時より世界の政治文化の歴史は日本を中心に展開されることとなる。政治という言葉を使うと現代人は直ちに現代の如き武力・経済力をバックとした権力の政治のみを想起されるであろう。然し天孫降臨後のそれは全く様相を異にしたものであった。言葉の原理による道理と人類愛、言い換えれば英智と愛による道徳の政治の時代であった。神聖にして真実なる宗教的道義の政治とでも言つたら理解し易いかも知れない。かくて言霊の原理の体得者である靈知りの集団の日本への降臨以来神倭朝一代神武天皇に到る約五千年と推定される期間大道の政治が続くこととなる。この間古文献には邇々芸王朝・彦火火出見王朝・鵜草葺不合王朝等の経綸が入替り続いた事が記されている。それぞれの王朝は十数代或いは数十代の天皇が皇位に即いた。(それら王朝の代々の天皇名とそれぞれの統治の記録については竹内文献その他の古文書に詳しく記されている。そのうち竹内文献の紹介書である昭和三十九年出版の山根キク著「世界の正史」を参照されたい)各王朝の責任者を天津日嗣天皇あまつひつぎすめらみかこと言ふ。天津日嗣とは人間が人間であるべき究極の真理である言霊の原理の自覚を受け継いでいるといふ

意味である。天皇とはこの真理を保持して世界中の人々の言葉を統一する人の意である。それだけに靈知りであった。ここ三千年程に於ける権力政治の渦中にあつたり、統合の象徴といった飾ものの天皇のことではなかつた。古代の歴史書としては竹内古文書の他に大伴・物部等の古文書、その他富士宮下古文書・大友の上記・安部古文書等がある。

天皇の仕事の第一はあらゆる事態に処して言靈の原理に則つて事物に名をつけることである。又その名の示す事物の内容と対処の方法（それらを文化という）を広く世界に拡めることであつた。伝達の速度は現代より遅かつたかも知れぬ。しかし着実にその文化は世界に広められた。正に「世界は一の言なりき」の時代である。古文獻によれば各王朝の天皇は即位後長い年月をかけて世界各地を巡幸されている。又逆に世界の各地から靈の本の真理の徳と文化を求めて人々が日本に來朝した事である。代々の天皇の即位式には世界中の王達が参列した。歴代天皇の御靈を祭つた廟を皇祖皇太神宮と呼んだ。外国の王が死ぬとその遺骸は靈の本に運ばれて葬られた。その廟を別祖太神宮と言う。現今の伊勢神宮の内・外宮の古代に於ける形式である。

邇邇芸王朝とは先に示した如く第一義である言靈から数えて第三次的な人類の社会文明創造の政治を布いた初めの王朝であり、第二番目の彦火火出見王朝とは彦即ち靈子である言靈の原理に則つてその成果（火即ち穗）が華やかに咲き揃つた（出見）王朝の意である。この時代に於て大道の道德政治は隆盛の時代を迎えたことが分る。かくて天孫降臨以來世界には長い間精神文明の

華が咲いていた時代が続いていたのである。この初めの人類の精神文明の期間を第一文明時代といふ。

次に興つた鵜草葺不合王朝も引続き精神文明が全世界に行き渡つた時代であつた。中国に於てはこの精神原理を白法と呼び、それによる政治を結繩の政と称する如く、理想の政治を制いたと神話化される三皇・五帝もこの時代の人々である。(三皇五帝とは、中国の夏時代よりも古い伝説的な聖人たちのこと。三皇とは燧人氏・伏羲氏・神農氏の三聖人をさす。また五帝とは黄帝・帝顓頊・帝嚳・堯・舜のこと)これらの人物が単に伝説的のみでなく明らかな実在者であつた事の証拠を示す為に次の文を引用しよう。

周易繫辭上傳に「是の故に天神物を生じて、聖人之に則り、天地変化して、聖人之に效ひ、天象を垂れ吉凶を見て、聖人之に象り、河・図を出し、洛・書を出して、聖人之に則る。」とある。又その註に「河は黄河、洛は洛水。古昔伏羲は黄河より出でたる神馬の文に則り八卦を画し、禹は洛水を治めて神亀を獲、その背文に因りて洪範を作れりとの伝説あるを謂ふ。然れども此の真否は今之を詳にする能はず」とある。しかるに上述の河図・洛書と謂はれる易の洪範が単なる神馬の文とか亀の背文の如き呪物ではなく、日本語の語源原理である言靈布斗麻邇の原理によつてその実態が明示された今日に於ては、河図・洛書に則つて政治を制いたと言われる伏羲・禹の如き人物も実在し、それらの結繩の政の時代も実在したことが肯ける事であろう。然らば古昔実在

したものが何故後代神話化と同時に架空のものとなってしまうのか、その間の事情については後段詳しく触れることとなる。日本・中国ばかりでなく印度・ギリシヤ・北欧等の神話の中の太古の理想世界の記述は右と同様現に存在した事実なのであって、決して架空の理想像的なものではない事は、一度言霊原理の内容に踏み入った人々には成程と肯首されるものなのである。

鵝草葺不合王朝の時代は右の如く人類の第一文明である精神文化の華咲く時代であったが、同時にその王朝の名が示す如く人類の第二の文明といふべき物質文化の芽が出て来る萌^もしの時代でもあった。鵝草^{うがや}とは人間の現識・欲望である言霊ウの神屋^{かみ}即ち所謂科学の構造・内容が未だ完成されていない（葺^う不合）時代という意味である。この時代は三権分立に於ける天照大御神の精神原理による第一文明の完成時代であると同時に、やがて到来するであろう人類の第二文明であり、三権分立における月読命・建速須佐男命の系統の文化の萌^もの見た時代でもあった。次の章に於てこれらの文化発生について外国（日本以外の国）の状況並びに日本と外国との交渉の経緯について説明しよう。鵝草葺不合王朝の終りは今より約三千年以前のことである。

外国の歴史 (一)

伊耶那岐大神の三権分立の宣言によつて天照大御神は高天原を治めることになった。その精神分野は現象を見る主体側の精神の究極構造である五十音言霊の世界であり、その實際の地は言霊の幸倍^{さちば}う国日本であり、この原理に則る道徳・政治の実行は邇々芸・彦火火出見・鵜草葺不合の三王朝の期間に充分に完成された。三権のうちの残りの月読命・建速須佐男命の活躍は如何になつたであろうか。須佐男命は海原を治めることである。人間の現識に則る世界・分野である。現象の客体側の内容の究明がその仕事である。今でいう物質科学・産業経済の分野である。この仕事は現識である言霊^{ことだま}に則つて事物を破壊・分析することから始まる。それ故に精神文明の完成された高天原日本で行うわけには行かず、古事記に於ける天照大御神と須佐男命の確執の経緯に示される如く須佐男命は高天原からの「神逐^{かみやち}ひ」の形式で母神伊耶那美神がいます四方津国へ出掛けて行つた。須佐男命とは謂わば科学の研究集団といえる。この集団が成功し目的を達する為にはこれより現代まで永い数千年の年月を要するのであり、その長年月の活動が人類の歴史に複雑な様相を呈せしめることとなる。次に三権の残りの一つは月読命が知らず夜の食国の分野である。

晝の光である天照大御神の言霊の自覚がなく、それ故夜のうすばんやりとした呪示表徴を事とする概念理論の分野の仕事である。哲学・宗教・芸術の世界である。故にこの仕事も高天原日本でない外国を舞台として進められるべき事となる。この二つの分野の仕事の推進を基として外国の歴史を見ることにしよう。

日本を出発した須佐男命の集団は朝鮮半島に渡り、建国した。檀君国だんくんこくと呼ばれる。次いで中国東北部・北部に進み、続いて印度にまで達した。中国東北部に建てた国は商又は殷と称せられる。殷いんは西域から入って来た異民族によって滅ぼされた。その国の名が周である。(契丹古伝)

中国の古代科学である鍊丹還金術や本草学・漢方医学等は須佐男命集団又はその後裔が興したものであり、言霊布斗麻邇の原理を客観世界の研究(科学)に応用しようと試みた所のものである。時代が下って周の後に興った秦の始皇帝BC二二一年はこの鍊丹還金術を奨励し、その研究者である方士を重用したと伝えられる。始皇帝が「不老長寿の薬」を求めんと臣の徐福を日本に派遣したことは有名な伝説である。「不老長寿の薬」とは精神的な宝である言霊布斗麻邇の原理を指すこととは言うまでもない。言霊原理こそ人類の種が存する限り永劫に保持される人間精神の構造そのものであるからである。現在徐福の墓は和歌山県新宮市にある。

月読命集団の仕事は精神的探究の中からその中枢である言霊の原理だけを除いた他一切の研究である。言霊の代りに概念・数・象形文字・呪文等を用いた研究である。月読命集団は中国の易

の基本である河図・洛書を伝え、印度に於ける古代宗教の基礎を築いた。更に広く世界に展開してギリシャ・北欧等の神話を編んだのもこの集団の仕事である。これらの仕事は古代天皇の世界巡幸に付き従ったり、又使命を帯びて日本を出発して行った人々の事蹟であつた。

更に鵜草葺不合王朝の中期を過ぎると高天原日本の伝統の真理を求めて世界各地から日本の皇室目指して賢人・学者が所謂留学生として来朝するようになった。その留学生の中に伏羲・神農・モーゼ・老子・孔子・釈迦更に続いてイエスキリスト・マホメット等の名が竹内文献には記されている。古代の日本の皇室はそれらの留学生に言霊布斗麻邇の原理を伝授し、同時に将来の人類文明創造の経綸におけるそれぞれの使命・役割を定め担当させたのであつた。

歴史創造の方針の転換

鵜草葺不合王朝の後半に到り人類の第一文明である精神文化は隆盛を極めた。同時に外国に於ける月読命・須佐男命の仕事も漸く活発となり、成果を挙げ始めて来た。第一の精神文明による国家の樹立は確かに成功した。半面第二の文明である物質文明の創造は漸く始つたばかりである。物質の研究は人間の欲望を土台とし、破壊分析を手段として発達する。謂わばその研究の精神基盤は競争であり闘争である。精神文明をそのまま存続させ、その恩恵として鼓腹撃壤する精神的満足の世の中に於ては物質探究の完成はどれ程の長年月を要するか測り知れない。そこで人類文明を更に揺ぎなきものにする物質的繁栄を人類に速やかにもたらす為に、高天原日本に於て文明経営の方針の大転換が決定されたのであった。

右の大転換された方針の大略を左に記す。

一、第一文明である精神文明の基本である言霊布斗麻邇の原理を物質探究が一応の完成を見るまで或る期間高天原日本に於て隠没させ、人類の頭在意識から忘却させてしまうこと。

二、この精神原理の隠没によって当然招来される精神荒廃時代に於ける民衆の假りの精神的支柱

となるべき宗教を世界各地に興こすこと。又それによる精神修養は将来第一の精神文明が甦るべき時の人類の心の準備としても有効である。

三、右の精神荒廢の暗黒時代に起るであろう各民族間の闘争を培養土として物質的研究を興隆させ、それによる経済と武器を手段とした権力を以て世界の再統一を図る世界経営の責任者を決定すること。

以上の大方針に従って日本並びに外国に於て次々と現実的施策が実行に移されて行つた。それは鶴草葺不合王朝の終りから、次に興る神倭王朝の初めにかけて約三千年程以前の出来事である。これより人類は本格的に物質探究の第二文明時代に入るのである。

外国の歴史 (二)

先に述べた如く鵜草葺不合王朝後半より外国の賢者・学者の来朝が盛んになった。竹内文献によれば次の如くである。

伏 義	葺不合王朝五十八代	御中主幸玉天皇の御宇
モ一ゼ	同	六十九代 神足 <small>かんとるわけとよすま</small> 別豊鋤天皇の御宇
釈迦	同	七十代 神心傳物部建天皇の御宇
老子	神倭朝	一代 神武天皇の御宇
孔子	同	三代 安寧天皇の御宇

日本の皇室は来朝した人々を受け入れ、その人その民族に適した表現を以て言霊布斗麻邇の原理の教育を行い、習得した後はそれぞれの故国に帰り哲学・宗教の形式で各民衆を指導し、来べき数千年の暗黒時代における精神的支柱の役割を果すよう使命を授けたのであった。更に各宗

教・哲学の祖としての彼等の死後二百年乃至五百年を経てそれらの聖書・經文等が編纂されているが、その編纂の計画には必ず日本から派遣された靈知りの指導があつた事が伝えられている。これらの仕事は言霊原理をそのまま説くことなく、その代りに呪示・表徴・概念・数字・哲学を以てする月読命の働きであるが、唯モーゼに授けた使命はその他の人々とは違つたものがあつた。それは外国に於ける須佐男命の働きの中核として働く使命の伝達であつた。

モーゼの来朝は葺不合王朝六十九代神足別豊鋤天皇の時代のことである。神足別という天皇の贈名は神のタル（足・十、トーラ、十誠）を頒ち与えたという意味であり、豊鋤とは十四（豊）の先天言霊を持つ布斗麻邇の原理を以てする人類の歴史を推進させた（鋤）という呪示である。天皇は布斗麻邇の十の原理をへブライ語のトーラとして授け、その律法の運用によつてその民族を統率し、国家を樹立して、その民族が中核となつてヨーロッパ民族乃至世界の人々を動かし、爾來三千年にわたつて須佐男命の使命である物質科学文明の開発、並びにそれによつて得た經濟・武器による権力によつて世界の再統一を図る使命・職務を授与・命令したのであつた。日本民族が天孫民族といわれるのに対し、イスラエル民族が神選民族と呼ばれる所以はこの命令授与によるのである。モーゼは教えられた布斗麻邇の原理に則り旧約聖書の五書（ペンタ・トーチ）を作り、精神構造の根本義を示すと共に民族の行くべき将来と使命を決定したのであつた。

モーゼの日本来朝は彼がシナイ山に四十日四十夜籠つたと聖書に記されている時のことと考え

られる。彼が授けられたイスラエルの三種の神宝（アロンの杖、黄金のmana壺、十誠石）は日本民族の三種の神器（劍・勾璘・鏡）と同意味のものである。この三種の神宝は契約の箱に収められエルサレムの神殿に祭られていたが、ソロモンの時には已になかったと聖書に記されている。それ以前に日本に返還されたのである。

モーゼの十誠を表十誠と裏十誠があると竹内文献は伝えている。表十誠とは旧約聖書にある「殺す勿れ、姦淫する勿れ……」の十箇条の道德律であるが、裏十誠とは言霊布斗麻邇の原理の内の言霊ウを中心にした精神構造である八父韻の並べ方即ちアカサタナハマヤラワの十音である。

このアカサタナハマヤラワの十音の真義と操作法がモーゼに与えられた事によって爾来三千年の世界の歴史の大綱が大きく決定づけられることとなる。このことを説明しよう。初めアカサタナハマヤラワの十音配列は伊耶那岐大神の禊祓の行法の中で三貴子の内の須佐男命の自覚内容として確立され、天津金木音図として高天原の五十音言霊構造の一つの内容として得られたものであった。その主体である言霊ウが他の四つの母音と協調して行く時高天原世界の円満な運営となる。所が人類の物質文明の速やかな発達を実現する為に、須佐男命は高天原の言霊法則の制約を受け、ない外国に進発して行った。これを言霊的表現を用いればウオアエイ五母音の協調体制である高天原の理想社会から言霊ウのみが離脱し独走を開始したことである。世界における須佐男命

の使命である言靈ウの独走の現象の実行者としての任務にモーゼが就くこととなったのである。世界の生存競争時代の開始であり、アカサタナハマヤラワの操作法はこの生存競争に絶対不敗の戦術なのである。このことを更に詳しく述べよう。著者の師故小笠原孝次氏の「第三文明への通路」を引用する。

全世界は須佐男命が本格的に活動する舞台となる。神足別豊鋤天皇とモーゼとの契約、すなわち所謂神の「旧約」によって須佐男命の事業を世界に実現する選ばれた責任者がユダヤ民族である。故に神選民族というのである。須佐之男命のヘブライ名をエホバ（ヤーエ）という。初めエホバは人間の樂園エデンを創設した愛と英知なる神であった。高天原にあっては天照大御神も須佐之男命も共に完成された生命の布斗麻邇の内容であつて、別々に分離されたものではないのである。然るに或る頃からこのエホバの神格に変化が起つた。愛と英知なる神ではなくなつて、聖書に示される如く戦の神、妬みの神、仇を報ずる神となつた。この事はギリシヤ神話に於ける太古の平和な神々タイタン神族が滅亡して、同じく戦の神、嫉妬の神であるオリンパス山のゼウス（ツォイス、ヂュピター）の世になつたことと同一の消息である。……

エホバはシナルの地に築かれた都市国家を破壊し、言語を乱して相通することなからしめ、民を地に逸散させてバベルの混乱を生ぜしめた。その部下のガブリエル、ラファエル、ミカエル、

ウリエルと共に五大天使の一人であるルシファーを悪魔（サタン）として地に降して、人間を背後からそそのかして罪を行わしめた。

高天原の組織から一人抜け出した荒振る神であり、「畔（あ）放ち溝埋め、瀕播（しきま）き、申刺し」（大祓祝詞）等の天津罪を犯した神、すなわちキリスト教でいう原罪の神である須佐之男命の暴挙を実際に行う者が神エホバ（ヤーエ）である。それは「出雲八重（やえ）垣」の神であり、八重（やえ）言代主神である。何故にエホバの神格が斯の如く変貌したのか、聖書を神の経綸の書としてひもとく者は必ずこの疑問に直面しなければならぬが、本来善なるべき神が何故に魔神の所業を事とするようになったか。

高天原の経綸である皇運は進展して、鵜草葺不合朝末期より世界人類の歴史は第二文明の科学建設時代に入った。科学は元來事物を破壊分析する方法によって究めて行く学問であると共に、これを促進させるためには特別の方便を設けることが必要である。その方便とはすなわち生存競争である。科学は生存競争、弱肉強食の社会を基盤として発達する。

然し生存競争は完成された高天原、すなわちエデンの園に於ける人類社会の有り方、営み方ではなく、人間生命の本来の意志に反する悪であって、人類の背後にあってその生存競争を教唆する者は神ではなくして魔神である。須佐之男命が高天原から神逐かひやひに追われた事の一つの理由は、彼が高天原から一人抜け出して、母神の伊耶那美神の国である黄泉（四方津）醜女（しこめ）の

国に赴いて魔神となったことにある。その須佐之男命の応作がエホバである。キリスト教だけの世界の事として言うならば、そのエホバが歴史の或る時期からこの魔神に変化したわけである。エホバがその天使ルシファーを悪魔に仕立てて地に降したと言う事は、エホバ自身が魔神として人間界に君臨したと言う事と選ぶ所がない。

斯くして全世界は漸次高天原日本の教庁からの愛と英知による指導から離れて、荒振る神、罪を科せられた神、天津罪を犯した神、すなわち須佐之男命と、戦の神、妬みの神、仇を報ずる神、人間に原罪を犯さしめた神すなわちエホバ、ゼウスが支配する地獄・餓鬼・畜生・修羅の巷に變貌して行つた。世界を指導する者の神格の変化は直ちに現実の歴史の変化である。竹内文献によれば遠い太古から例とされていた天皇の世界巡幸も、世界五色人王達の来朝も葺不合朝末期にはその跡を絶つた。

千(ち——道) 早振る神代は精神文明の時代であつた。人間の精神原理である布斗麻邇の展開としての道義のみが世界の權威であつた時代である。この人間社会、娑婆世界は劫初から浅ましい生存競争のるつぽであつたわけではない。それは歴史的には僅々三千年或いは四千年このかた、世界の指導経綸者である天皇の宏謨すめらみことこうぼによつて方便として特殊に仕組まれて、人為的に現出した社会相である。

この生存競争の社会に生存するためにはその競争相手に勝たねばならぬ。この時何が闘争に手

取り早く勝利をもたらすかと言ふと、信仰や道徳などではなくて、簡潔に言えばあらゆる意味に於ける科学の優秀性である。……近代産業に於ても科学と経営上に優秀な技術を持った企業のみが経済社会に生き残る。……

高天原の道義政治時代が世界に於て一応終了した時、新しい世界経綸の方針と計画に参与する思想の構造としての人間の基本理念に名付けられた称名が須佐之男でありエホバである。その理念の実行者がモーゼであり、イスラエル民族であり、そのための教えが旧約聖書の半面であり、シオンプロトコールである。それは元来善なる神が三千年間の暫時の方便として悪魔の仮面を被った姿である。神劇の仮装舞踏会に悪魔に扮装して登場した者がユダヤ民族なのである。……

ユダヤ民族が高天原の天孫民族と並んで、光栄ある神選民族である所以は此処まで掘り下げて究めなければその真意義を明らかにし得ない。モーゼのイスラエル建国の企図の奥には期々の如き遠大深刻な目的が藏されてあつた。そのモーゼに三種の神器の使用を許可し、これと相図つて三千年の計画を実行せしめたのが葦不合朝の神足別豊鋤天皇であられたのである。(「第三文明への通路」 p 35 ~ p 40)

長く師の文章を引用したが、それはモーゼのイスラエル国家の建設とそれ以後のヨーロッパ諸民族の経営更に爾来三千年の世界の弱肉強食の権力による歴史の原因をよく説明して余す所がないことによる。竹内文献によればモーゼは日本の皇族である大室姫命(ローマ姫)を妻とし、そ

の子ロミュラスが生れ、彼は「狼に育てられた」と伝説されるローマ帝国の創始者であると記されている。更に文献はモーゼの再度の日本来朝と能登宝達山に薨じた事を伝えている。聖書の「今日までその墓を知る人なし」（申命記）の記事はそのことを裏書している。

かくして世界は須佐男命・大国主命・エホバが主宰経営する弱肉強食の生存競争の時代に入った。この時以後は各民族・各国家の歴史が伝える如く国家・民族間の葛藤連続の時代が続く。世界の歴史書はこの時以後の記録には詳しい。そしてその時以前の世界の道義政治時代の記録は地球の表面から抹殺又は時の来るまで隠没されたのである。「焚書」とは秦の始皇帝のみの業でなく世界各地に行われたことである。

歴史書に詳しいそれぞれの国の権力闘争の経緯についてはさて置き、それら各民族の栄枯盛衰の底流をなし原動力であったユダヤ民族のその後の動行に注目しよう。モーゼのその民を率いてのエジプト脱出、それに次ぐイスラエル建国後その国家の繁栄が続いた。ダビデ・ソロモンの時繁栄はその頂点に達する。ダビデ時代にその民族の三種の神宝は日本に返還された。この事件は次に続くユダヤ民族の行動と密接な関連がある。その国家はイスラエルとユダヤ両国に分裂し、遂に両国は滅亡する。そしてその民族は世界の全地に逸散することとなった。先にエホバはバベルの混乱によって人々の言葉を乱し全地の表に散らした。そして今や彼自身の民族の国を奪って世

界に散らす。それは彼等を散らし他の諸民族の中に入らせ、人類の背後に立たせることによりエホバの究極の目的を速やかに達成させる為である。

ユダヤ即ちヘブライ民族は彼等の指導者である預言者の黙示に従つて東と西に民族移動を開始する。旧約イザヤ更にダニエル書に「この故になんじら東にてエホバをあがめ海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名みなをあがむべし。われら地の極はたより歌をきけり。いわく栄光は正しきものに帰すと。」(イザヤ書24章15節)「彼は海の間において美うらなしき聖山に天幕の宮殿をしつらはん。……その時汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起あがらん。……」(ダニエル書11章45節)と見られる如く、その預言に従つたユダヤの十二氏族のうちの宗教的部族レビの一団は東に向い、所謂シルクロードを経て極東に姿を現わし、中国やその東北部に入り、それぞれの民衆の内部に入り込んで勢力を張つた。中国東北部の股を滅ぼした周以後秦・漢等は西方から入つて来た異民族の国家である。

更にそのユダヤ人達は海を渡り最後の民族移動をして日本に渡来して漸次帰化した。そして次第に日本の政治の中心に深く関係を持つようになった。今までの歴史書はかくの如く中国大陸又は朝鮮よりの渡来帰化人を朝鮮人又は中国人と記しているが、実は彼等は古来からの東洋の住民ではなく、西方から渡つて来た異民族系の人々である。

かくの如く「海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん……」と預言された渡来の

ユダヤ人の目的は何であるのか。民族移動の最終目的地を日本と定め艱難辛苦して渡来して来る彼等の目的は何であるのか。

この目的を明らかにする為にはユダヤ十二部族のレビ族以外の十一部族の行動と併せ注目しなければならぬ。レビ族の東進に対して他の部族は滅亡の祖国を離れて西進を開始する。国土を失った彼等はヨーロッパの各国・各地の民衆の中に入り、その経済的地位を確立し、然も彼等ユダヤ人としての団結を損なう事なく、その上政治の裏にて社会・国家の生存競争を指導して行つた。優秀な知力と豊かな財力は彼等の武器となつた。爾来約三千年間生存競争の中から必然的に育つた物質科学文明とそれを手段とする武力と権力を以て世界を統一し、西進の末に彼等の神エホバ即ち大國主命即ち須佐男命の魂の故郷である日本——そこに先に東進した仲間レビ族の子孫が待つてゐる日本に彼らの大きな成果を引提げて帰つて来る事、それが神に選ばれたユダヤ民族の使命なのであり、日本を目指して東進・西進して来る彼等の目的である。ユダヤ民族にこの使命を与えたのは直接には神足別豊鋤天皇であり、その命令の主眼は古事記にある伊邪那岐大神の須佐男命に示した「汝が命は海原うみはらを知らせ」の命令である。海原とは先に説明した如くウの名の原（領域）のことであり、現識に基いた物質文明の分野である。

以上の如き人類の三千年の歴史を呪示した神話を二つ挙げておこう。一つは毎年行われる七月七日の七夕たなばたの行事である。陰曆七月七日の夜、天の川の東西にある牽牛と織女の二星が年に一度

会々のを祭る。これは高天原から神逐いに外国に出奔した須佐男命が三千年にわたる辛苦の末、その成果である物質文明全部を携えて再び姉神である天照大御神の存す高天原に帰還報告することを預言呪示した行事である。織女とは空間五母音と時間八（十）父韻とを経緯に文明の歴史という布を織り創造して行く経綸者としての天照大御神を示し、牽牛とは現識である言靈ウが静まる一般大衆衆生を牽いて物質世界をリードする須佐男命を表わしている。七月七日とは七七四十九で、易经に「大衍の数五十、その用四十有九」と示されているアイウエオ言靈五十音の原理運用の法則を呪示する。

その二は出雲風土記に見られる次の文である。「今者国引訖詔而意宇杜爾御杖衝立而意惠登詔故云意宇。」国を引くのは古事記大國主命の系譜に見える八束水臣津野命。国引きとは須佐男命・大國主命の応作エホバ神の事業の実行者であるユダヤ民族が物質文明を手段とした武力・権力を以て世界を統一する任務を呪示する。その国引きの手段は言靈オとウ。即ち経験知と現識・欲望の森（分野）の判断原理（御杖）によっている。そして国引きである世界統一を終えた時、意恵と言った。それは終えと言靈オエとを掛けている。権力による世界統一を終えた後は、欲望世界の経験知である言靈オは高天原の主宰天照大御神の持つ言靈エと合体して、神逐い以前の言靈原理による道義の政治の世界を再び顕現しなければならぬのである。すなわち西進し

たユグヤ民族は科学文明の成果を携えて先に東進した自分の仲間が待つている高天原日本に到達する。モーゼ以後三千年の世界の歴史の大綱はこれに盡きるといつて決して過言ではない。

読者は以上の神話引用の説明を読んで、歴史書が歴史の実際の現象を書かず余りに抽象的叙述に過ぎると思われるかも知れない。然しながら読者が一度言霊学の大要を理解し、人間生命の全性能であるアオウエイ五母音の働きとその次元的相違を明確にした上で、その眼を以て過去三千年にわたる人類の歴史、その中に於ける特筆すべき歴史事件、又それらの底を一貫している大きな歴史の筋道を洞察されるならば、今・此処に生きている自分自身の中に息づいている全人類の魂としての歴史を成程と了解されるであらう。

日本の歴史 (二)

先に述べた如く東進したユダヤ部族の先鋒は鵜草葺不合朝の末期には続々と日本に到達した。彼らはその経済的才能を以て国家の各機関に入り込み、更に日本の皇室とも深い関係を持つようになった。それまでの日本は言霊布斗麻邇の原理に基づく道義政治の時代であったが、世界が生存競争の時代に入った今、日本に於いて布斗麻邇の運用を続けることは今後の世界の物質文明促進の目的に妨げとなる。又葺不合王朝の末期に日本全土に大地震が起りその文化の大破壊があった(竹内文献) 為もあって、日本の政治の宏謨に大改革が行われた。その現われが神倭王朝の誕生である。この王朝の出現を契期として日本は神代から現代へ、王道政治から権力政治へ、神皇時代より人皇時代へと変貌する。その大綱に則つて即位した初めの天皇が神倭伊波礼毘古命即ち神武天皇であった。

神倭王朝の統治の目的は次の如く要約することが出来る。

一、神代に於ける政治の原器である言霊五十音布斗麻邇の原理を或る時まで日本民族の意識の

表面から隠没させること。

二、将来人類の第二の文明である物質科学の完成の時、再び要請される第一文明である言霊原理が民族の意識に甦るためのよすがとなる諸施設を予め用意しておくこと。

三、原理の隠没により当然招来されるであろう権力政治時代の生存競争・人心の混乱の事態に対処する假の手段としての諸信仰の樹立・輸入。

四、日本古来の文字を廃し、物心両文化共外国よりの移入によって民族の需要を賄うこと。

道義政治の基礎である言霊原理を隠没させた實際の実行者は神倭朝十代崇神天皇であった。がそれより以前帰化したユダヤ人の血が神倭朝の皇室に入った事が推察される。神武天皇の皇后は帰化人だとも言われる。この様に神倭朝の発足の経緯には種々の謎があり未だ明確ではないが、唯はつきりしていることはこの王朝の発足を契期として日本皇室の精神・国是の大綱に大変革が起ったことである。この謎を解明しようと神霊憑依の形で先鞭をつけたのが近代に於ける民間宗教の天理・大本の教祖であった。

高山の真の柱は唐人やこれがそもそも神の立腹。(天理教々祖お筆先)

大千世界一度にひらく梅の花、梅でひらいて松でおさめる神国の代になるぞ。今の世は獣の世

であるぞ（大本教々祖お筆元）

高山の眞の柱とは天皇のことであり、その天皇が実は古代からの日本人ではなく外から入つて来た外国人であり、そのことがそもそも日本古来の神々の気に入らぬ事だ、というお告げである。この天理教々祖のお告げは天照大御神の神靈として出て来る。次の大本教祖の御告は国常立命の神靈憑依による。国常立命とは言靈エであり、梅でひらいて松でおさめる」とは前著「言靈」で書いたウ／＼で表わされる言靈の造化三神の構造を示したものであり、神武以後現代まで人類は人間が人間たるべき精神の構造の原理を失つた弱肉強食の獣の魂の世の中であり、近い内に言靈の原理が甦り、人間は神聖をとりもどして世界は神の国になるといってお告げである。以上のお筆先によつても神倭王朝樹立に際して日本の皇室の人脈・靈脈並びに国是の大変革があつた事が了解される。

日本書紀崇神天皇の章に「是より先に、天照大神・倭の^{やまとの}大国魂^{おほくにたま}、二^{ふた}の神を^{すめらみこと}天皇の^{みあらか}大殿の内^{みやうら}に並^{いは}祭^{まつ}る。然^{しか}してその神の^み勢^{いきほひ}を畏^{おそ}りて、共に住^すみたまふに安^{やす}からず。故^{ゆゑ}、天照大神を以^{もつ}ては、豊^{とよ}歙^{しやく}入^{いり}姫^{ひめ}命^{のみこと}に託^つけまつりて、倭^{やまと}の^{かまみ}笠縫^{かさぬい}邑^{むら}に祭^{まつ}る。仍^よりて磯^し堅^{かた}城^きの神籬^{ひもろぎ}を立^たつ。……」と記されてゐる。この事件を同床共殿の廃止という。日本書紀天孫降臨の章に「吾^{わが}が^こ児^こ、この宝鏡^{たからかがみ}を視^みまさむこと、當^{まさ}に吾^{わが}を視^みるがごとくすべし。与^{とも}に床^{ゆか}を同^{おな}じくし殿^{との}を共^{とも}にして、齋^{いは}鏡^{かがみ}とすべし」とい

う天照大御神の命令がある。崇神天皇までは天照大御神である三種の神器の一つ八咫鏡は天皇と同床共殿であつた。即ち天皇は言霊五十音布斗麻邇の原理の体得者であつた。その鏡を天皇の手許から離して神として祭つたということは、言霊の原理を政治の基本とする古代よりの大方針を廃止したことを示している。爾来道義政治創造の原器であつた五十音言霊原理は次第に日本民族の表面意識から忘却され、唯信仰の対象である天照大御神として礼拝されるのみとなつた。先著「言霊」に説明された如く「五作^{いっさ}」（斎）の神より、おろがむ（拝む）神になつた。と同時に五十音言霊の体得者として道義政治の直接実行者であり責任者であつた日本天皇は、この時より日本民族の宗家としての即ち天照大御神の血統を継いでいるというだけの信仰の対象としての天皇となつたのである。同床共殿廃止の方針は神倭朝初代神武天皇の時に計画され、六百年後の十代崇神天皇によって実行された。この同じ意味の治績によって両天皇共「初国^{はつくに}知らしし」天皇^{すめらみこと}という贈^{わくりな}名^ながつけられている。

言霊原理の隠没の施策と共に、その隠没の期間当然起るべき世界の人々の精神の荒廃に対処し、更に人類の第二の文明である物質科学の完成の時人類の意識に甦る第一文明の言霊原理を理解し易くする為の準備の施策も着実に実行されて行つた。

先づは先に記した孔子・老子・釈迦の来朝による儒・仏教の創始に続いてイエス・キリストの来朝によるキリスト教の創設である。イエスの来朝は十一代垂仁天皇の御宇である。イエスは先

輩モーゼと同じく日本皇室より神道を学び、故国に帰つてその教を「山上の垂訓」の形で民衆を教化した。イエスに与えられた命令は以後二千年の将来甦るであろう古代さながらの愛と英智の道義世界を迎える為の世界民衆の心の準備を説く事であつた。「主の道を直くせよ」の叫びである。「悔い改めよ、天国は近づけり」の教である。神足別豊鋤天皇からモーゼに与えられたヘブライ民族の団結と世界各民族の背後に立つて全世界を権力によつて統一せよという命令がキリスト教に於て「旧約」と称せられるのに対し、垂仁天皇よりイエスに課した人類愛精神の普及の使命をキリスト教で「新約」という。この旧約と新約が完成される時が言霊原理復活の条件となるといふことが出来る。

ここで参考のために附記すべきことがある。世界の大宗教である仏教とキリスト教はその教理が全く異つてゐる様に思われている。しかしこの著に於て示している如く両宗教を創始した原型である言霊布斗麻邇の原理より見る時、それら両教の教理が同一の構造であることである。イエスの弟子であるペテロやパウロは實在の人間イエスを理想化し、神の子としてのキリストを信じ、それを自己に於て証明することによつて愛と智の人間の本性を悟り眞の自我を確立する方便の教を確立した。これがペテロの樹てたカソリックの教理である。山上の垂訓はイエス自身の教であるが、イエスを神の子イエス・キリストとして信仰することはカソリックの方便としての教である。仏教も同様であり、法華教・維摩經・般若經等に於てその宗教々理を説くと同時に、

無量寿經・阿彌陀經に於て阿彌陀如來の極樂淨土を方便として示すことによつて信仰と自証を求めたのである。日本の天皇の言靈原理による人類歴史の創造という立場より見る時、一見異なる様に見られる世界の宗教も同一目的の下類似的の構造を持つてゐることが明瞭となるのであり、そのことから人類の歴史創造の淵源を窺うことが出来るであらう。

生きている人間の精神構造である言靈五十音布斗麻邇の原理は隠没され、その代りに伊勢神宮に天照大御神として祭られることとなつたが、時來り將來原理の人間意識への甦りの時に備えて神宮の本殿の建築構造は五十音言靈図特に天津太祝詞音図を象る形に設計されている。「一心の靈台、諸神變通の本基」（神道五部書）といわれる本殿中央の忌柱、水木（千木・道木）・鏗木（数招）の形や数、階段の段数等五十音図の象形である。更に後世二十年毎に神宮本殿の建替をする遷宮の制度を設けることによりその構造の意義を失ふことのないよう計画されたのである。又伊勢に内宮と外宮がある。内宮は日本の神である天照大御神を祭り、外宮は外国の神を祭る。豊受大神宮である。祭神豊受毘売神とは御食津神であり食物の神といわれる。いうまでもなく天照大御神の聞しめす食事のことである。須佐男命は精神の真髓である姉神天照大御神の許を離れ、物質研究の旅に出て、その成果を携えて姉神の住む高天原日本に参上つて来る。その物質探究の諸成果こそ天照大御神の食事である。伊勢の内外宮の存在は織女・牽牛の七夕の祭りと同様の意

義を持っている。(伊勢皇大神宮の言霊学的構造については先著「コトタマ学入門」参照のこと)
言霊原理開顕に備えての施策はその他いろいろある。先づ宮中の儀式のほとんどは言霊学的表徴としての意義がある。たとえば立太子の儀式の中に「壺切りの儀」があるが、これは葺不合朝までは皇太子として立つには布斗麻邇の原理を体得している人でなければならなかったが、原理隠没後はそれを表徴して五十音の真奈の素焼板の入った壺を開けて中身を確認する儀式として残したものであった。奈良時代古事記・日本書紀の選上が行われた。記紀の神代巻は歴史ではない。神名や過去の天皇名を引用して言霊五十音による人間精神構造を神話の形によって呪示したものである。後世人が一度言霊の存在に気付き、各神名の呪示を基礎として自我の精神内部を観察する時、明らかに五十音言霊の実体に近づくことが出来る様に編纂されたものである。この書前編を読まれば明らかに了解されるはずである。

言霊原理隠没時代の社会の精神荒廃に備えて、それまで宮中の儀式であったものを民間に移した神社神道の創設や、外国よりの仏教・儒教等の宗教の傳來の促進、外国芸術の輸入等種々の方策がとられた。これらは皆月読命の活動である。

葺不合朝末期以来来朝帰化するユダヤ人の数は次第に増大し、日本社会の各分野に重きをなして行った。特に産業・経済の才にすぐれ、日本の経済の実権を掌握して行った。これは現代まで続いている。この状勢に鑑み允恭天皇の御代日本人の姓別の調査が行われ、神別・皇別・蕃別の

三姓に別けたと伝えられる。秦・波多野・呉羽・服部等はその当時の蕃別姓であった。帰化ユダヤ人は元十二部族のうちの祭祀を司るレビ族の流れであったから信仰に厚く、彼等の神の故郷である日本の神宮と皇室に忠誠であった。伊勢神宮の建築に協力し、下つては奈良平城・京都平安の都の建設は彼等の力に依る所が大きかった。現在見るが如く奈良・京都の升目の通つた町並みの設計は彼等の旧都エルサレムを原型としてこれを写したものである。

彼等のある者は朝廷の中に入り、又は日本有数の氏族と婚姻によつて結ばれて行つた。東の漢の直駒は推古朝の大臣となつた。又彼等の末は着実に日本の經濟を掌握し、浪花・近江・甲斐等の商人として栄えたのである。

日本と帰化ユダヤ人との關係に於て特筆すべきは聖徳太子の治績である。日本神道の奥義を知り、更に儒仏の知識に精通していた太子は帰化ユダヤ人の由来を承知した上で種々の施策を行つた。京都太秦（うづまさ）に彼等の活動の根拠地として広隆寺を建てた。太秦は漢音でダージと読み、東ローマ帝国のことである。その寺内に十二の井戸があつたという。その井戸の石に伊浚井の文字が見られ、現存は三箇である。伊浚井はイスラエルであり、十二の井戸は十二部族を表わしている。更に寺内に酒公なる人を祭つた大酒神社があつた。大酒は太辟の転化であり、それはダビデの漢音名である。

仏教では正法千年像法千年末法千年と言われる。日本に於ては神武天皇より崇神天皇までの六

百年が正法時代ということが出来よう。言霊原理の政治の香りがまだ濃く残っていた時代である。同床共殿制度の廃止以後現代までの二千年が像法末法時代であった。第二の物質文明を推進するべき方便としての生存競争の時代の精神荒廃にそなえて最小限の慰安が必要であり、先に述べた如く神道の創設や儒教・仏教の輸入、下つてはキリスト教の導入もそのためであった。それら宗教の導師の中には修行の行程に於て言霊布斗麻邇の原理の存在に気付いた人達も二、三に留まらなかつた。例えば柿本人麻呂・菅原道真・役小角・弘法・伝教・日蓮等はその最たる者である。それらの人々が遺した書物を見れば、彼等が歴史に於ける天皇の経綸とその創造の原理の存在を自覚していた事を明らかに読みとることが出来る。真理の存在を知つていて、然も明らかに説くことがなかつた。説いてはならぬ時代であることを知つていたからである。像法末法の時代にはかくの如き仏教の所謂菩薩が活躍した。但し麻邇に精通しそれを説く仏陀は生れなかつた。仏陀は存在してはならない時代だったのである。

右の事の例証として日蓮の三沢鈔を左に挙げておく。

「我に付きたりしものどもに、真の事を言はざりけると思いて、佐渡の国より弟子共に内々申す法門あり。此は仏より後、迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙樂・伝教・義親等の大論師、大人師は知りて而もその心の中に秘めさせ給ひて、口より

外に出し給わず、其の故は仏制して言ふ、我滅後末法に入らずば此大法言ふべからずとありし故なり。日蓮は其使にはあらねども其時刻にあたる上、存外に此法門をさとりぬれば、聖人の出でさせ給ふまで、先づ序分にあらあら申すなり。而るに此の法門出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門は、皆日出でて後の光、巧匠の後に拙なきを知るなるべし。此時には正像の寺堂の仏像僧等の靈驗は皆消え失せて、但此の大法のみ一閻浮提に流布すべしと見えて候。」

外国の歴史 (三)

イスラエル・ユダヤ両国家滅亡後東に進んで彼等の師モーゼの魂の故郷日本に向つた信仰的なレビの一族とは反対に、他の部族は西に向つて民族移動を開始した。東漸のユダヤがアベルの末なら西に向つたユダヤ人はカインの末だということが出来る。西漸した部族は先づヨーロッパに入り、諸民族の背後に立つて生存競争を助長し、その社会の中で漸次第二文明である科学の研究を推進して行つた。先に高天原日本から出發して行つた須佐男命・月読命の活動の下に、産声を上げた東洋古代の科学である東洋医学・本草学・煉丹還金術等は初め東漸のユダヤに受けつがれ次第に發達し、更にシルクロードを通じてアラビヤ人に伝わりアルケミーとなつた。近代科学の嚆矢であつた。中世より近世にかけて物理学・化学・天文学・植物学の物質科学並びに諸人文科学は次第に進歩の速度を早めて行つたのである。

かくしてここ二・三千年の人類の歴史は、戦乱の連続であり、戦争の合間に人々は束の間の平和を憩うというのが実状となつた。古代中国に於ける堯・舜の治政下の鼓腹擊壤なる形容語は完全なユートピア的物語となつた。各民族の神話が伝える王道樂土の時代がこの地球上に永続して

いたという事実を人々は忘却してしまつたのである。

人間とは何か、の究極構造の自覚であるアイウエオ五十音霊の立場から見る時、世界を貫く第一義の歴史は神であり仏陀である覺者・聖（むじり）としての天（すめらみこと）皇が計画し転輸する文明創造の歴史であり、哲学的に言えば言葉の言葉であるロゴス発展の歴史である。それが或る時を境として経綸創造の第一義としての歴史の表面に虚（むな）しい泡沫（うたかた）の如き第二義的な苦悩にみちた葛藤の歴史の相が現われ、人々は遂にその葛藤の因果宿業の關係のみが歴史であると錯覚してしまつたのである。

栄枯盛衰のこの時代各国の王達は富国と同時に強兵に狂奔した。強い軍隊を持つ事は国家の存立に欠く事の出来ない条件であつた。強兵のために優秀な武器が必要である。成可く大規模な生産設備が必要となる。大国となるには産業の興隆と軍備の拡張は必須の条件となる。かくて数千年にわたる須佐男命の意図である生存競争場裡に第二の物質文明を創造する活動は着実に成果を挙げ、ヨーロッパに於けるルネッサンス並びに産業革命を経て、物質科学の華が咲く時代を迎えるのである。特に第一次・第二次の世界大戦を契期として物質科学の研究はその極点に達した。世界文化の物質科学的変貌は目をみはるものがある。戦争が物質科学研究を促進さす為の必要悪だという主張がこの時程真実性を持つ時代は他にあつたであらうか。

二十世紀

十九世紀の終りに近く科学の目が初めて物質の最小単位である原子の中に向けられた。原子物理学の誕生であった。今世紀に入り原子物理学の進歩は目覚ましく、「物」とは何であるかの研究が進展し、原子核内エネルギーの解放である原子爆弾の日本への投下が行われ第二次世界大戦は終った。ニュートン物理学から量子物理学へ、原子核内の探究は飛躍的發展を遂げた。二十世紀前半は原子物理学の時代であった。今世紀後半は宇宙物理学の擡頭となり、人類の宇宙時代が始った。生物学の分野にも新しい光が差した。生命の生物学的解明は急速に進みつゝある。分子構造の研究は自然の中では存在しない幾多の便利で安価な「代用品」の大量生産に成功している。所謂「ハイテク」の開発は人間社会の生活を一変させ、今まで歴史的に例を見ない産業革命が日々刻々進展しつゝある。

須佐男命即ちエホバの意図である物質文明創造の進展は右の如くであるが、そのもう一つの意図である大国主命の「国引き」の仕事即ち権力による世界統一の業はどうなっているであろうか。西漸のユダヤ民族は夫々ヨーロッパに根を張りその知力と経済力とを以て各民族・各国家の中核

に入り徐々に力をつけ、中世を経て産業革命やヨーロッパの植民地主義に乗つていよいよその影の権力を振り始めた。彼等には国家はない。領土も持たぬ。しかし各民族の中に入って数千年の間彼等はユダヤ人独特の信仰と教育を捨てず団結を失わず、その特性である学知力と経済力を以てその住む所の国家政治に隠然たる影響力を常に保持した。その活動の中心はイタリアよりドイツ・ベルギー・オランダ・フランス等次々に移り、第二次大戦終了前後には英国がその根拠地であつた。彼等が活動の基地を置く国は必ず繁栄した。世界の中心があたかもそこにあるかの如き活況を呈するのである。そしてその国の経済は彼等の藁箒中のものとなつた。その繁栄した国家・民族の経済力・権力を自由に操ることによつて彼等は世界の経済全体の掌握を意図するのである。

第二次世界大戦を契期としてユダヤは根拠地をアメリカ合衆国に移した。ニューヨークのウォール街を中心とした世界経済の操作は一段と進み、その手足である各種国際企業はますますその実力をふくれ上らせる。数千年の中華思想を以て任ずる中国も、石油の産出を武器に勢力を張ろうとしたアラブの民族主義も、その他大戦以後続々と独立を果した各民族国家の国粹思想も、次々と彼等の経済的圧力によつて懐柔されて行つた。彼等はその勢力を駆つて「国引き」の最後の目標であるロシア・ソビエト連邦に対する包圍網を刻々としめつけていった。資本主義・民主主義・自由主義なる言葉は彼等の思想的武器である。この思想の武器と膨大な経済力を以てする彼等の国引きの事業の完成は目睫の間に迫つてゐる。『そして近年の世界の共産体制の全面的崩壊となつ

たのである。』

かくて葺不合王朝の神足別豊鋤天皇がモーゼに下した命令——第二文明である物質世界の解明と経済と権力による世界の統一の業は二つながら完成まで今一步の所に來たのである。

現在の世界

三千年の昔東漸のユダヤ部族は日本に到着し、その経済運営の才を生かして日本に根を下し、人種的に全く日本民族と同化して常に国家の枢密と關係を持った。第二次大戦以後日本が敗戦の惨状から立上り世界が奇蹟と呼ぶ経済復興を遂げたのも彼等の後裔の力である。日本はアメリカに次ぐ世界第二の経済大国にのし上った。

一方西漸のユダヤは三千年にわたる世界放浪の間に、各国の各民族の背後に立ち乍ら彼等の経済力・知的実力を以て各国の実権を牛耳り、今やその活動の根拠地をアメリカ合衆国に置き、表面の手足として各種の国際企業を持ち、その上各国のマスコミ界の内部に強い影響力を行使することによって国際思想の操縦を行い、経済的・思想的に世界統一の事業を着々と進めつゝある。更にその成果をひっさげて彼等の先祖であり預言者であつたモーゼの魂の故郷日本に向つて太平洋を渡る準備を大規模にそして慎重に備えつつある。その目的地日本には已に三千年前に渡来しその地に定着している東漸のユダヤの末裔が待っている。東漸と西漸のユダヤが「東にてエホバをあげ海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名をあげむべし」(イザヤ書)「彼は海の間

おいて美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん”(ダニエル書)と予言者に約束されたこの日本に於て再会する日は極めて近い。この事は、最近の日本とアメリカとの關係を考えれば成程と肯首されるであろう。両国が幾多の經濟摩擦を起しながらそれらを徐々に乗り越え、産業・經濟や學問研究の分野に共同合併の体制を着々と備えつゝ、あることである。日米のパートナーシップが完成するならば、その國際的影響力が如何に強大になるか計り知れぬものがある。

右に見た如く葦不合朝六十九代神足別豐鋤天皇がユダヤの王モーゼに下した命令——物質的の二文明の創造とそれによる全世界の權力的統一の事業は二つながら完成に近づきつゝある。しかしながらその完成が近づけば近づく程人類の生命に係わる重大な問題が起つて来る。元來科學的探究とは思考の主体を捨象し客体を抽象することによつて成立するものであり、それ自体人間生命に対する合目的性を持つてはいない。科學が如何に發達しようと、人生を如何に生きるかに答える力はない。その事が人類の今後の生命維持に重大危機をもたらす事となつた。

その一つは科學技術が高度に發達した結果、人間の生命に深く係わる部分に科學のメスが加えられ、その技術の使用如何によつては人間が人間の種以外に變る可能性さえ出て來た事である。コンピュータの發達は人間の能力の相当部分を代行し得るまでになつた為に、ともすればそれが全く人間自体にとつて代ることが出来るが如く思われ勝ちとなる。その管理如何では人間が機械に追いつかされこき使われる事にもなりかねなくなつた。生化學の研究メスが生命の遺伝子の

内部に入った結果、その研究の成果は生命の種スペシーを自由に變換させ得るまでになり、新生児の男女性別の生み分けも可能となり、その技術独走は人間の人間ならざる人間への転換という恐怖の現象さえ予想される事態にまで到達した。その他科学技術の発達もたらず人間生活の便利さの裏にひそむ異常な危険性は枚挙に遑がない程である。以上の予想される科学技術の独走の危険に対する決定的な精神的コントロールの方針はまだ確立されてはいないのである。

先に述べた如く国家民族の間の戦争は人類第二の文明である科学と産業の発達のための方便として、神エホバが人類の背後からけしかけられる仕組の現われである。その戦争に対して人道主義の見地から戦争反対を称えることは、仏・儒・耶等の信仰の発生した理由からしても当然であり正当な主張ではあるが、その戦争の背後にある神の仕組や人類歴史の全趨勢を知ることなき反戦論は片面の真理であるに過ぎない。人道主義のみでは戦争を無くすことは出来ない。かくて宗教的又は観念的な人道主義と生存競争とが常に並存していることが二千年の世の有り方であった。須佐男命と月読命との並存、対立する社会であったのである。かくて現在の世界は正像末と釈迦が教えたその末法の世のどん詰まりまで来てしまったのである。

新世界の夜明け

日の出が近づく程夜は暗いという。心理学的に言えば人間の表面意識が破綻しようとする時、その意識の奥に於ける全人格統一の力は最も強く働くという。心理学は更に言う。この時意識の底に動く統一の力の趨勢や内容を汲取り表面意識に取り入れようとする努力を人間が怠るならば、終にその人間の全人格の破壊が起ると。

約三千年以前葺不合朝神足別豊鋤天皇がモーゼに下した命令——人類の第二の文明である物質科学の確立とそれによる世界の権力統一の事業は完成目睫の間に迫った。と同時にこの三千年の間の精神基調であった生存競争・権謀術数の考え方だけでは人類全体の生命存続を必ずしも確保し得ない事態をも招来した。心理学的に見ても今や人類精神転換の時である。人類の生命が危険に晒された現在、その魂の底から生き続けようと奔出するエネルギーの正体をつきとめ、表面意識の中に組入れることが生きるための必須の条件である。魂の底から湧き上って来るものとは何か。勿論それは人類の第二文明創造の地盤となる弱肉強食の生存競争社会を醸成するために故意に隠没された人類の第一精神文明の原理言霊布斗麻邇である。三千年間人類の潜在意識の底深く

眠っていた人間精神の究極原理を呼び醒まし、自覚し、それと今や完成に近づきつゝある第二の物質文明とを車の両輪とすることによつて第一と第二の文明の総合である第三文明の建設を目指して出発すべき時が来たことである。

幾度も述べる如く戦争とは人類の第二物質文明創造促進のため方便として惹起されたものである。人類の文明の流れは武装強化論とか反戦和平論とかの対立を遙かに超越したもつと大きな問題である。戦争は計画された人類社会の宿業であるから、その宿業のよつて来たる根源を明らかにし、戦争の意義を全面的に肯定し、その上で人類はもはや方便としての戦争を必要としない時期に来ていることを確認するならば、戦争は自然に地上からなくなるのである。その意識変革のためには、神足別豊鋤天皇がモーゼに命令した世界史創造の経綸の根本原理である五十音言霊の原理の復活再認識が必須の条件である。天津日嗣天皇あまつひつぎすぢみことの世界史創造の根本原理がなければ歴史の大きな流れの中の戦争の意義の肯定は出来ず、戦争の肯定なくして戦争の終息はない。

人類の第一精神文明の復活を靈的に観取して世の先駆となつたのは天理・黒住等の教派神道教祖であつた。日本の古代に精神文明の華が咲いていた民族の輝やかしい時代が実在した事を民衆に教伝した。時代が明治に入りその精神を受継いだのが大本教であつた。先に述べた「梅で開いて松でおさめる神国の代……」なる出口なおのお筆先の呪文は見事に言霊の原理を表現している

ものである。この様な靈的先驅の雰囲気の中で實際に言靈の原理の存在を知り研究に着手した方は明治天皇であつた。天皇の御製の中に敷島の道とか言の葉の誠の道ことという言葉が幾多見られるが、これらの言葉は現在世間で言われる如き唯単なる和歌の道のことではなく、言靈の原理を指したものである。先著「言靈」に詳しく説明した事であるが、古代に於ては三十一文字の和歌の道は叙景叙情的に歌いながらその中に言靈の原理を巧みに折り込むことによつて布斗麻邇の修練を積む修業法であつたのである。萬葉集・古今集までの和歌にはその様な歌が随所に発見されるのである。昭憲皇太后が一条家よりお興入れの際に、そのお道具の中に言の葉の誠の道に関する奥義書が入つており、天皇は皇后と共に布斗麻邇の存在に気付かれたと伝えられている。その他宮中の賢所に言靈布斗麻邇の原理に関する決定的な呪物があるとも聞いている。お二方の言靈学の勉強のお相手を務めたのが山腰弘道氏なる皇后付の書道家であつた。氏は著者の言靈学の師小笠原孝次氏の師であつた山腰明将氏の父親である。山腰明将氏の遺稿には古事記神代卷の神名の一つ一つに言靈五十音が夫々結び合わされている。この結びつけは一人二人の研究だけでは到底不能な言靈原理の眞髓であるので、宮中賢所に収められていた奥義書は多分これであろうと推察されるのである。時が下つて第二次大戦以後著者の師小笠原孝次氏の努力によつてそれまでは極めて哲学的・概念的であつた言靈学が、今・此処に生きる生なまの人間の動いてゐる心の学問として、自己を反省して行くならば誰もその奥義に到達し得る精神の科学の体系にまとめ上げられたの

であつた。志ある者ならば誰しも古代の日本民族があつたその儘の姿で人類の第一文明の中核であつた精神原理を自覚することが可能となつた。アイウエオ五十音言霊布斗麻邇の原理は不死鳥の如く現代に甦つたのである。

大本教に富士の仕組・鳴門の仕組という話が伝わっている。天孫降臨の邇々芸尊に御后が二人いた。二人姉妹で姉を石長比売いはながひめといい、妹を木之花佐久夜比売このはなさくやといった。姉神は石いわ(五十葉)の神即ち言霊五十音の神であり、長い間鳴門なるとに隠れて時を待っている。鳴門とは音声おとこゑが鳴る門のことで人間の口腔を呪示している。妹神は木之花即ち花が咲く如く華やかな神であり、産業経済の花咲く物質文明を表徴している。ユダヤ民族が物質文明創造の為に世界を放浪しその輝やかしい成果を引提げて「東のしじまなる聖なる山」富士山の麓に神の幕屋を建てんと日本に集つて来る「出雲風土記の所謂『国引き』」の仕事しごとを富士の仕組という。この姉妹二神が各自完全に仕事を遂行してこの日本で再び出合う時が第一と第二の文明の総合である人類の恒久平和の第三文明時代の始りを意味している。

歴史創造の心

古事記神代卷は度々言う如く歴史書ではなく神話の形式をとつた言霊原理の参考書である。そのうち天之御中主神より建速須佐男命までの言霊百神は言霊五十音とその操作法五十を表わし、その後の神話は言霊原理の応用問題である。

古事記の天照大御神と須佐男命との「誓約」の章は先に述べた七夕の祭の織女と牽牛の出合いの出来事の内容を更に詳しく説いている。三千年乃至五千年の間人類の第二文明の創造と権力を以てする世界統一に従事した須佐男命の後裔であるユダヤ民族が、その魂の故郷である高天原日本にその成果を携えて報告する為に参上して来る。この須佐男命を迎えて天照大御神は装いを整えて対面する。天照大御神が身につける八尺の勾璉の五百津の御統の珠とは精神の究極原理である言霊布斗麻邇であり、須佐男命が身に装う十拳劍とは事物の構造変化色相を判断する科学原理である。誓約とは相手が持っている原理をお互いに受けて開いて検討し合うことを意味する。この原理の照合の結果、高天原の天照大御神は精神原理である布斗麻邇の立場から弟神の客観世界の科学の原理法則が真理であることを確認・証明し、現実界の須佐男命は科学の立場から姉神

の言霊原理が真理であることを認識し証明することとなる。これが「誓約」の実際である。古事記はこの誓約の結果五男神三姫神の誕生の話を伝える。五男神とはアオウエイの五である宇宙実在のすべてであり、三姫神とは天地人・正反合の三を基本とする科学原理である。

唯一の生命現象は、これを精神の側から探究しようとする科学原理である。天照大御神の精神文明と須佐男命の科学文明とが照合されて、お互いにそれが真理であることを証明され得るのはここに根拠がある。とは言えこの照合と相互証明が可能となる為には、その精神原理も物質原理も共に究め盡された結論でなければならぬ。研究途上の予想・假説又は信仰上の基本要素などは物の用に立つ事ではない。精神原理は八千年以前已に言霊布斗麻邇の原理として発見・活用され今日着々と昔あつた如く復元自覚されつつある。そして今や物質科学も漸くにして完成されようとしている。有史以来初めて精神と物質の原理の照合がここに可能となるのである。人類が新しい時代に入る第一歩の仕事はこの照合でなければならぬ。

以上の如き天照大御神と須佐男命との出会い・照合に際して、舞上り来る須佐男命をこの高天原日本に迎え、両原理の照合の会議を主催し、両文明を総合止揚して人類の第三文明の創造に向う主体は飽くまで精神文明である布斗麻邇の側の仕事である。即ち言霊五十音布斗麻邇の原理を伝統として保持し、その原理に則つて制定された大和言葉を使う天孫民族であるわが日本人の責

務なのである。それ故に天孫民族としての日本人の現在為すべき第一の仕事は五十音言霊原理の勉強と自覚体得であらう。言霊布斗麻邇の原理の奥義の理論的解明は急速に進んでおり、人類歴史の当面の諸問題の解釈と対処の方法を決定するに事欠く事はない。それ故世界の将来を危惧しその運命の転換に責任を感じる志ある人ならば誰でもその原理の修得と体現が可能である。唯一の条件は日本語を話せる事のみである。日本語のみがその原理を具現した言葉だからである。そしてこの原理の体得者の地球上での再現が諸宗教で待望される仏陀の下生・キリストの再臨の真意味なのである。

度々言うことであるが、世界の各地でてんでばらばらに営まれる人々の行為の合計がそのまゝ、世界の歴史であるのではない。天津日嗣^{あまつひつぎすめらみこと}天皇の文明創造の経綸即ち人間を人間たらしめている言葉^{コゴス}の限りなき発展が人類の歴史である。それ故に天津日嗣である人間^{スライシ}という種の究極精神原理である布斗麻邇の自覚に立つ時、言い換えるならば人間精神の実在体であるアオウエイ五母音の重畳する構造を確認し、その実在より発現する諸実相の色相変化の原律である八父韻の認識を完成する言霊イの創造親神の立場に立ち、言霊アである大慈悲の心より人類の歴史を見る時、我とは人類であり、人類の歴史とは私の歴史に他ならず、それ故に世界の歴史の流れの中で過去にあり現在に起りつゝある歴史現象のすべては、永遠の生命を享け継ぐ我自らが「そうあれ」又「かくあ

れ”と決定し創造し来たものであることが明らかに了解されるのである。それ故にこそ又世界人類のすべての声を自己の生命全体で聞き、これに新しい生命の息吹を与えて言霊原理に則り、かくあれ”と決定し宣言しその如く実現することが可能である。宣言は当為であり宗教に於ける基本要本などではないからである。以上の如き世界歴史経綸の大慈大悲の心を天津日嗣の大御心と呼ぶのである。

将来の展望

言靈布斗麻邇の原理に則って人類の将来を展望しよう。勿論人間の歴史は朝が来れば明るくなるといった所謂自然現象ではない。人間の営みとはそうあらんとする努力の営みである。これより述べる歴史の将来も一つに人類の今後に責任を感じた志ある人々が言靈原理を勉強し自覚して、自己の魂の中に又社会に向って言靈原理の燈火を高くかゝげる事に懸っている事である。

ここ二十年間に於ける日本の産業・経済の発展は目をみはらせるものがあり、日本の各企業は急速に巨大化し、世界に対する影響力は日増しに強大となりつつある。それにつれて各国間の経済摩擦も問題となつてゐる。しかし種々の障害を乗り越えて日本の企業は更に発展して行く事は間違いない。その過程でアメリカ並びにその他の国との協力・合併その他海外工場建設等々によつて各企業は次々と国際企業化するであらう。特にアメリカ産業との提携は目覚ましいものがある。そしてそう遠くない将来世界の大企業の大部分はその企業の本社を日本に移して来る。本社は日本、支店・工場はアメリカその他世界の各地に置く体制が出来上つて来るであらう。この様

な将来の展望は次に述べる人類歴史の底流を形成するユグヤ民族の動きに依るのである。

先に述べた如くユグヤ十二部族の中の東漸のレビの団は中国の周以後の国家を建て、その一部は商業に秀でた華僑となった。又その先鋒は日本に帰化し、爾来日本の産業経済の中核となり、今日の日本の経済繁栄をもたらしたのである。日本人としての彼等の表面意識からはその事實はすっかり忘れ去られてしまっている。けれど彼等の魂の奥底の記憶を呼び覚ますならば彼等の行動の明瞭な理由が浮び上る筈である。何の理由で十二部族のうちの一部族のみが早くから日本へ来たのか。それは他の十一部族が西漸し、その途上に於て人類の第二文明建設の中核となり、最後に彼等の祖モーゼの魂の故国である日本に到達しようとするその兄弟を迎える準備をする為である。以下先師小笠原孝次氏著「第三文明への通路」を引用しながら展望を進めて行くこととする。

その用意とは昔パレスタインで見失はれたエホバ（の神殿）が鎮座する本地が日本であることを知らしめ、その兄弟を招くために必要な歴史と原理の研究と、魂の修練と、実際の設備を整えておくことである。全世界から高天原日本に帰来する須佐男命月読命とその子等を迎える役目は、神代からの高天原民族としての日本人と、上古からの帰化日本人とが協同して行う為事である。こうした意味で現在の日本財閥の上には現実の企業経営を更に一步超越した世界的・人類的な使命が存在している。その使命を自覚して歴史的な大活動を開始しなければならぬ時が来た。

やがて使命の上に取り上った日本の経済人達の先導によって全世界の支配を握る所謂ユグヤである経済力と権力の悉くがこの高天原日本に集結される。今日まで三千年間世界の支配権を掌握するために何故彼等が敢えて世界中の憎しみを背負いながら嘗々辛苦して来たか、それは彼等の神の祭壇に彼等が掌握した全世界の実権を捧げる為に他ならない。……”

“西漸のユグヤの（中核）は今米国まで到着している。太平洋を渡れば此処が彼等の本地日本である。……米国の企業は悉くその経営の本拠・本店を日本に移転する。日本の経済界はもともとユグヤ民族が開発経営して来たところであつて、これにその旧き同胞が合体するのである。アメリカは依然としてそのまゝ、活発な工場であり農場であればよい。こうした姿が世界の権力がその獲たもの、持てるものの悉くをみづからの神に供えた形の一つである。”

世界の権力である須佐男命、大国主命、エホバ神即ちユグヤ民族が高天原の天照大御神の前に、その経済力・武力のすべてを捧献するのである。この事を古事記は「国譲り」と謂う。又この国譲りを説得することを「言趣け」と呼んでいる。（この言趣けの際の経緯・手段は詳しく古事記「山幸と海幸」に呪示されているが、ここでは省略する。）国譲りと言つてもその実権を放棄してしまふわけではない。伊耶那岐大神の神命「汝が命は海原を知らせ」は未来永劫不変のものであり、須佐男命・大国主命は何処までも現実界の統治者である。唯ここ暗黒の三千年間は須佐男命が単独で人間の他の精神能力を差置いて独走して来た。これを神道で天津罪といい、キリスト教で原

罪と呼んで来た。エホバが自身の方便として用いて来たその原罪を払拭して、生命の自己目的の自覚された高天原精神界の天照大御神の英智の光に攝取され、合一し、表裏一体となって協力して行くことが国譲りなのである。産業・経済・学術界を主宰する須佐男命、芸術・宗教・哲学の責任を負う月読命並びに言霊原理の法則に基づいて道徳・政治の統治神である天照大御神の三者一体となつての人類文明創造が人類社会の理想のあり方なのである。

日本皇室の将来について

ここで一言日本の皇室のあり方並びにその将来について述べよう。先に書いた如く外国に於ける霸道権力闘争時代の開始に呼応して、日本に於て言靈布斗麻邇の原理の使用を停止し霸道政治の社会を推進する宏謨を決定されたのは神倭王朝一代神武天皇であり、その宏謨を実際に政治の面で実行に移したのは十代崇神天皇であった。言靈原理の形而下的象徴である三種の神器、特に天照大御神を表わす八咫鏡を天皇座右より伊勢神宮に移し神として祀ったのである。同床共殿制度の廃止であった。爾来日本の天皇は言靈原理の自覚者であり理想政治の責任者たるの地位を放棄して伊勢神宮の神主であり日本民族の宗家という国民信仰の対象者の地位に下ったのである。古事記・日本書紀にある「天壤無窮の神勅」は宗家としての資格の血統の上での証明となった。それより二千年間皇室は形而下的器物である三種の神器の護持者としてその皇統を持続して来たのである。

昭和二十年日本は太平洋戦争に敗北し、翌二十一年一月昭和天皇は自ら三種の神器の神勅を「単なる神話に過ぎぬ」として否定され宣言されたのであった。即ち三種の神器と日本天皇とは直接

関係はなくなつたのである。そして新しい憲法によつて天皇は「国民統合の象徴」なる政治の一機関以外の何ものでもないものとなつた。この事實は長い日本民族の歴史の上に如何なる意義を持つたこととなるのであろうか。

先づ第一に神武天皇以来百二十四代続いて来た神倭王朝は前昭和天皇に至つて終焉を告げた事である。仏教的表現を用いるならば邇々芸王朝より葦不合王朝までの期間は言靈布斗麻邇の原理が實際に政治の面で運用されていたのであり正法の時代といふことが出来る。神武天皇特に十代崇神天皇より昭和天皇までは原理の運用は廃止され、原理は唯伊勢神宮の神として祀られ、拝む対象としてのみの信仰存在であつたから、この期間は像法の時代であつた。昭和二十一年一月の昭和天皇の神勅否定の宣言はこの信仰の対象としての三種の神器の意義も消滅させたのである。以来四十数年は布斗麻邇の原理なく原理の表徴物に対する信仰伝承も消え失せた正に末法時代の到来となつた。それ故に日本伝統の天皇という意味に於てこの四十数年は天皇空位時代といふことが出来る。これが第二の意義である。「綸言汗の如し」（漢書劉向伝）天皇の宣言は一度発したら訂正がきかない。日本の天皇の存在は消滅したのである。日本人の心の中で天皇なる存在は宙に浮いてしまつてゐる。昔の天皇制に帰そうとすることは到底不可能事に属する。

以上の三種の神器に関する神勅の否定による神倭王朝の終焉とそれに続く天皇の空位時代の事實は、唯そのことのみを見るならば天孫民族としての資格を日本人が喪失した事を意味するとも

言えるかも知れぬ。しかしながら天壤無窮萬世一系といわれる天津日嗣即ち人間が人間であるべき究極的精神原理言靈布斗麻邇の見地に立つて更に広い視野から考えて見よう。裕仁天皇自身の宣言による三種の神器の神勅の否定とは、その宣言が天皇自身の自覚・無自覚に関係なく、二千年間伊勢神宮にそして宮中賢所に保存護持する形式で守られて来た言靈布斗麻邇の原理の天皇家独専の伝統が崩れ、広く民間に解放されたことを意味している。伊勢神宮に神として又宮中賢所に天皇家の秘宝として隠匿されて来た言靈原理は昭和二十一年の否定宣言以来皇室の秘密ではなくなり、逆にわれわれ民間人が志さえあれば自由にその人類の宝の山にわけ入って自覚奉持することが可能となったのである。日本皇室の秘宝の全世界への公開・開放である。この意味からするならば昭和天皇が人類文明創造の長い歴史の上で果された役目は誠に重大なそして劃期的なことであったということが出来る。爾来言靈原理の民間に於ける研究は長足の進歩を遂げることが可能となった。言靈原理に関して今や秘密はなく、全く人間の使用する日常の言葉によって表現・説明することが出来るようになった。この原理の開顕によって人類の第一文明に関しては三千年以前への回帰が成功したのである。原理は全人類の宝となった。日本人の心の底に澱おちの如く不透明さを残す日本の天皇制の問題は右の如き観点から見直さぬ限りすつきりとした解決の道はない。どんなに日本の政府が今後努力しようとして四十数年以前の天皇制の再登場は決してあり得ない。それ故今後将来に於て名実共に備った天皇の出現があるとすれば、それは天照大御神の神勅で

明示された如く人間が人間である為の究極の原器アイウエオ五十音言靈布斗麻邇の原理を理解体得して全人類のすべての言葉を聞きこ召めし、その各々に所あらしめる能力を持つ天津日嗣天皇あまつひつひすめらみかじでなければならぬであろう。それは天孫民族たる日本人の使命の責任者であると同時に、「世界は一の言ことばなりき」で示される如く地球上の全民族の民主的集合体の道徳的・政治的中枢存在となるものであろう。

然らば現日本の皇室の将来は如何になるであろうか。過去二千年の間日本の宗家として皇室の祖先が布斗麻邇の原理の秘蔵の任に当り連綿とその責務を全うして来られ、しかも近代に於て言靈の原理の存在を初めに感得され勉強されたのが明治天皇であられた事を思う時、三千年以前の如く「靈知り」であり覚者であり天津日嗣として再び世界の上に立たれる人は現皇室の中から、又はその子孫の中から出現される事を願うのが日本人としての民族感情であろう。しかし少くとも現在の皇室の中にその出現のきざしを見ることは出来ない。将来は果してどうであろうか。

若し皇室の中から「覚者」「靈知り」「天皇が出現しない場合は日本人の中から、又は日本語を話す人の中から出現し天皇すめらみこととなろうとも一向に構わぬ事ではある。日本の古代の歴史の中にはその如き皇位継承者を数多く見ることが出来るのである。靈知り達の中より互選されそれが全世界から承認されるならば、又立派な資格者といえるであろう。

世界の各宗教が予言している救世主即ち言靈布斗麻邇の自覚による世界政治の経綸者の出現は

左程遠い将来のことではない。現世界の歴史の齒車は究極の轉換点に向つて刻々と速度を増し、多くの人がそれと知らぬ内に画期的狀況が日本に又世界の表面に展開する事となるのである。

第三文明時代に入るための三つの会議

古事記神代卷には言霊原理の解明に関する百神の他に種々の神話の形の物語が書かれている。これ等の物語は人類の歴史の中で繰返されるであろう典型的な出来事を人間の究極の精神要素である言霊の見地から解説した所のいわば言霊原理の応用問題である。恒久不変の原理による典型的事象の記述であるからそれらは又何時の時代にも「予言」として当てはまる事となる。この意味で古事記に述べられる重要な三つの出来事即ち「岩戸開き」「誓約」並びに「国譲り」の物語が今後の人類の歴史の上に如何に実現するかを、これ又先師の著述を引用して説くこととする。人類の過去三千年の暗黒から目覚め新文明時代を創造するためには、必ずこの三つの物語で呪示予言された為事を達成しなければならぬからである。

「人類はこれから全世界を挙げて三つの会議を開催しなければならない。その会議は従来行われて来た経済や政治についての協議や国際会議や、或は部分的な学術会議等に比してその規模に於ても意義内容に於ても全く類を見ない画期的な有史以来の会議である。

第一の会議は世界宗教会議である。現在世界に行われているすべての古来の大宗教である仏教、

キリスト教、波羅門教、回教、儒教、道教等から、或は古今の哲学の諸派から碩学が選ばれて代表として参集する。会議の席上で各教、各学派の奥義が余すところなく呈示紹介される。この時高天原日本からは神道の実態である布斗麻邇の学者がその原理を披露し、布斗麻邇と世界各哲学宗教の玄義とが対照され審議される。此処で世界の哲学宗教の道理が正しかった事が簡潔明白な布斗麻邇の原理の上から証明され、同時に布斗麻邇こそ世界の哲学宗教の精鍊され尽した最高の道理であることが普ねく世界に証明されるのである。この会議を神道で「天の岩戸開き」と言ふ。岩戸前に於ける八百萬神の神集ひの神庭会議と言ふ。

第二の会議は布斗麻邇と科学の照合会議である。この会議には全世界の物理学者、生物学者、宗教家が参集して、前期第一の会議で開頭確立された人類精神文明の原理布斗麻邇が呈示されて、これと理論物理学及び生物学が対照され、検討審議される。この結果心の世界と物の世界とは学問的取扱ひの上ではつきり二つに区別され、中途のどっちつかずのあやふやなものなくなり、而もその区別された各々の原理内容が相等しい事、すなわち物と心とは二つであつて、而も理の上で一如であることが証明される。一万年昔完成された第一の精神文明の原理と、今日完成されんとしつある第二の科学文明の原理とは、斯の如くにして区別され、綜合されて、以てそのジューゼとしての物心不二体の第三文明の原理として新しく誕生するのである。この第二の会議が前述の「天の誓約」すなわち七夕祭である。

第三の会議は世界政治經濟會議である。この會議は現実の全世界の国家民族の指導者、責任者の悉くが参集する。これに對して全世界の宗教者、哲學者、科學者が出席して、第二の會議で決定された第一の精神文明と第二の科學文明が綜合された新しい第三文明の指導原理が呈示される。悠久一万年に亘る全人類の努力によつて完成された此の最高の道理の前に、その時まで世界の支配に當つていた霸道的權力者が、その權力の独走横行が全人類に眞の福祉をもたらす所以でない事を知り、人類は過去五千年間の方便であり惰性であつた生存競争を停止する。ここに人類が遂にみづから完成することを得た第三文明原理を、爾後永久に世界の指導原理として奉戴し、これに則つて世界憲章が樹立され、國際法が制定され、及び各国家民族の国内法が編纂される。この第三の會議を神道で「國讓り」と言う。(「第三文明への通路」 p 87 ~ p 90)

著者略歴

島田正路 しまだまさみち

- 1925年 東京銀座生まれ
1963年 故小笠原孝次氏に師事し言霊学を学ぶ
1987年 「言霊」著出版（絶版）
文中の「言霊」参照部分は 他既刊書参照
1988年 「言霊の会」創立、毎月会報発行
1995年 「古事記と言霊」著出版
1999年 「コトタマ学入門」著出版
2007年 「コトタマ学会報集成書 上巻・下巻」著出版
2009年 12月28日没。享年84歳

古事記と言霊

— 言霊原理より見た日本と世界の歴史とその将来 —

- 1995年5月25日 第一版発行
2001年2月15日 第二版発行
2008年6月10日 第三版発行
2013年9月15日 第四版発行
2020年3月1日 第五版発行

著者 島田正路

発行所 言霊の会

〒145-0062 東京都大田区北千束1-14-14

電話 03-3723-1105

振替 00120-3-653594 言霊の会

HP <http://futomani.sakura.ne.jp/>

印刷所 昇美印刷株式会社

Copyright©1995 Masamichi Shimada

落丁・乱丁はお取替えいたします。

定価 2,000円